

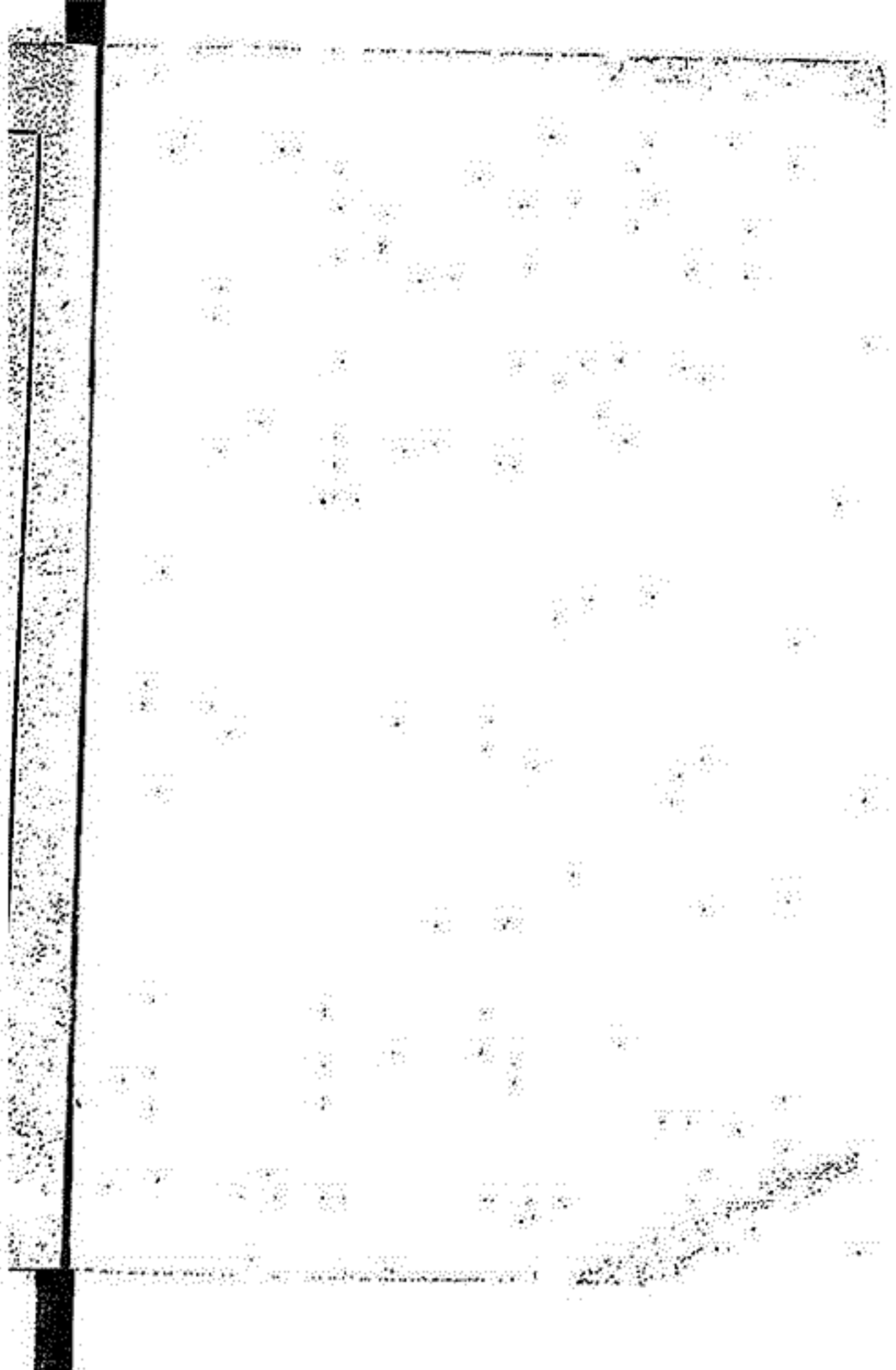
特 61
163

日本正教會翻譯

我
在
伊
呂
斯
新
約

一千九百二年 東京 正教本會藏版





新約目録

マトスィに因る聖福音	第一頁
マルコに因る聖福音	第八十七頁
ルカに因る聖福音	第四百十一頁
イオアンに因る聖福音	第二百三十三頁
聖使徒行實	第三百七頁
イテユフの書	第三百九十九頁
ペトルの前書	第四百九頁
ペトルの後書	第四百十九頁
イオアンの第一書	第四百二十七頁
イオアンの第二書	第四百三十七頁
イオアンの第三書	第四百三十九頁

イウダの書	第四百四十一頁
ロマ人に送る書	第四百四十五頁
コリントフ人に送る前書	第四百八十三頁
コリントフ人に送る後書	第五百二十一頁
ガラタヤ人に送る書	第五百四十七頁
エズラス人に送る書	第五百六十一頁
テロビ人に送る書	第五百七十五頁
コロサイ人に送る書	第五百八十五頁
エサロニカ人に送る前書	第五百九十五頁
エサロニカ人に送る後書	第六百三頁
テモスイに送る前書	第六百九頁
テモスイに送る後書	第六百十九頁
エトに送る書	第六百二十七頁

フリマンに送る書	第六百三十三頁
エッレイン人に送る書	第六百三十七頁
神學者イオアンの黙示録	第六百六十五頁

目 録

マトスイヨシ因の聖福音

第一卷 一 大ワドの王アサ

子、イイススハリストスの族譜。ニ
 アウラアムは
 イサアクを生み、イサアクは
 イブラハムを生み、イブ
 ラハムはイサマールに因りて
 フタレス及びザラを生み、
 フタレスはエスロムを生み、
 エスロムはアミンナダブを生
 み、アミンナダブはナソソ
 ンに因りて、ナソソンはラハ
 フに因りて、ラハフはイマ
 セイを生み、イマセイはダ
 ワド王を生み、ダワド王
 はウリヤの妻に因りて、ウ
 リヤの妻はアサを生み、ア
 サはイササルトを生み、イ
 ササルトはイサラムを生
 み、イサラムはオシヤを生
 み、オシヤはイサアムを生
 み、イサアムはアハズを生
 み、アハズはエセキヤを生
 み、エセキヤはマカシヤを
 生み、マカシヤはアモン
 を生み、アモンはイサシヤ
 を生み、イサシヤはイサア
 キムを生み、イサアキムは
 ア

マトスイ福音 第一章 自一至一

ワロンに徙うつさるゝ前まへ、イエホニヤ及びおよ其兄弟そのけいていを生うみ、一二ソワロンに徙うつされし後のち、イエホニヤはサラスイリを生うみ、サラスイリはソロソワリを生うみ、一三ソロソワリはアワウドを生うみ、アワウドはエリアキムを生うみ、エリアキムはアゾルを生うみ、一四アゾルはサドクを生うみ、サドクはアヒムを生うみ、アヒムはエリウドを生うみ、一五エリウドはエレンアザルを生うみ、エレンアザルはマトソンを生うみ、マトソンはイアコフを生うみ、一六イアコフはイオシブを生うめり、即すなはちマリヤの夫をうなり、マリヤより、ハリストスと稱よふるイイススは生うれたり、一七是この如ごとく世よを歴よるこゝ、アウラアムよりダウドに至いたるまで十四代、ダウドよりワロンに徙うつさるゝに至いたるまで亦また十四代、ワロンに徙うつされしよりハリストスに至いたるまで又また十四代なり。一八イイススハリストスの生うまるとき左ひだりの如ごとく、其母はマリヤイオシブに聘へいせられて、未いまだ婚こんせざる先に、聖せい神しんに由よりて孕はらめるとき見みれたり。一九其夫をうイオシブは義人ぎじんにして、之これを願ねがはせんと欲ほつせず、私ひそかに彼かれを離はなさんことを望のぞめり。二〇然しかれども此この事ことを思おもへる時とき、親しんと主しゅの使つかひ夢ゆめに彼かれに現あらはれて曰いへり、ダウドの子こイオシブよ、爾なんぢの妻つまマリヤを納いるゝことを懼おそるゝ勿なかれ、蓋な其内そのうちに孕はらまれし者は

聖神に由るなり、^{二二} 彼は子を生まん、爾其名をイイススと名づけん、彼其民を其罪より救はん、とすればなり。^{二三} 凡そ此の事の成りしは、主が預言者を以て言ひし所に應ふを致す、曰く、^{二四} 親よ、童女孕みて子を生まん、其名はエムマヌイルと稱へられん、譯すれば神我等と偕にするなり。^{二五} イオナセフ寮より起きて、主の使の彼に命ぜし如く行ひ、其妻を納れたり。^{二六} 惟未だ室を同じくせざるに、其家子を生むに逾べり、則其名をイイススと名づけたり。

第三章 イイススは、イロド王の時、イウテヤのワフレエムに生れしに、親よ、博士數人東よりイエルサリムに來りて曰く、^一 生れたるイウテヤ人の王は何處に在るか、蓋われらそのほしひがし、我等其星を東に見たれば、彼を拜せん爲に來れり。^二 イロド王之を聞きて心騒げり、イエルサリム舉りて亦然り。^三 乃凡の司祭長と民間の學士とを集めて、彼等に問へり、^四 ハリストスは何處に生るべきか。^五 彼等曰へり、イウテヤのワフレエムに於てす、蓋預言者に因りて斯く録されたり、云く、^六 イウタの地ワフレエムよ、爾はイウタの諸郡の中に於て、聊も小しとせず、蓋爾より我が民イスライを牧せんとする君は出でん。

是に於てイロド密に博士を召し、群に星の現れし時を問ひ、彼等をウフレエムに遣して曰へり、往きて細に嬰兒の事を探れ、之に遇はば、我に告げよ、我も往きて彼を拜せん爲なり。彼等王に聞きて往けり、魂と尋て東に見たる星は彼等に先だちて行き、遂に嬰兒の在る所に至りて其上に止れり。彼等星を見て竝に蹲へざりき。乃に家に入りて、嬰兒の其母マリアと偕に在るを見、俯伏して彼を拜し、其寶盒を啓きて之に禮物を獻じたり。卽ち黄金、乳香、没薬なり。既にして夢の中に、イロドに返る可からずとの默示を得て、他の途より其水地に歸れり。彼等の歸りし後、主の使夢にイオシフに現れて曰く、起きて、嬰兒と其母とを攜へて、エサメトに奔り、彼處に在りて、我が爾に告ぐるを待て、蓋イロドは嬰兒を索めて、之を殺さんと謀る。彼起きて、夜間、嬰兒と其母とを攜へて、エサメトに往き、彼處に在りて、イロドの死するに至れり。是れ主が預言者を以て言ひし所に應ふを致す、云く、我晋が子を召してエサメトより出せりと。當時イロドは己が博士に欺かれたるを見て、大に怒り、人を遣して、嘗て詳に博士に問ひし時を按り、ウフレエム及び其四の境の内なる二歳以下の嬰兒

を盡く殺せり。一七〇。是に於て預言者イエレミヤの言ひし事應へり云く、一八テマに悲
み哭き甚しく號ぶ聲は聞ゆ、ラヒリは其子の爲に哭きて慰むるを欲せず子の無きが
故なりと。一九。イロドの死せし後、祝ふ主の使エヤベトに於て夢にイオシフに現れて
二〇。曰く、起きて、嬰兒と其母とを抱へて、イズライリの地に往け、蓋嬰兒の生命を索む
る者は死せり。二一。彼起きて、嬰兒と其母とを抱へて、イズライリの地に來れり。二二。惟
アルヘライが其父イロドに繼ぎて、イウテヤに王たりと聞きて、彼處に往くことを懼
れ、乃夢の中に默示を得て、ガリレヤの境に往き、二三。ナザレトと名づくる邑に來りて、
此に居りたり、諸預言者を以て、彼はナソレイと稱へられん、言はれし事に應ふを致
す。

第三章 一彼の日投洗イオアン來り、イウテヤの野に於て教を宣へて 二曰く、悔改せ
よ、蓋天国は近づけり。三此の人は、乃預言者イサイヤの言ひし者なり、曰く、野に呼ぶ者
の聲ありて云ふ、主の道を備へ、其徑を直くせよと。四イオアンは駱駝の毛衣を衣服に
皮の帯を束れ、蝮蟲と野蜜とを其食とせり。五當時イエルサリムと、全イウテヤと、イオ

ルダンの四方を出でて、彼に就き、己の罪を認めて、イオアルダンに於て彼より洗禮を受けたり。イオアンは云ひ及び、汝が父の多く其洗を受けん爲に来るを見、之に謂へり、汝の類も誰か爾等に將來の怒を避くることを示したる、然らば悔改に合ふ果を結べ。自ら意ひて、我等の父はアウラアムなりと云ふ勿れ、蓋我爾等に謂く、神は此の石よりアウラアムの爲に子を興すを能す、一、既に斧も樹の根に置かる、凡そ善き果を結ばざる樹は斫られて、火に投げられん、二、我水を以て爾等に洗を授けて、悔改せしむ、然れども、私の後に來る者は更に我より強し、我其罪を掃ぐるに堪へず、彼は聖神及び火を以て爾等に洗を授けん、三、其箕は其手に在り、彼は其禾場を淨めて、其麥を倉に斂め、糠を滅ねざる火に燬かん、一、厥時、イオアスがリヤよりイオアルダンに來り、イオアンの就きて、之より洗を受けんと欲す。二、イオアンの彼を止めて曰く、我爾より洗を受くべきに、爾我に就くか。一、イオアス答へて、彼に謂へり、今姑く許せ、吾我等は是くの如く凡の義を盡すべし。是に於て之を許せり。一、イオアス洗を受けて、直に水より上れるに、視よ、天彼の爲に開け、神の神鶴の如く降りて、其上に臨む

を見たり、一七かつてん 且天より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子、我が喜べる者なり。

第四章

一七の時

當時 イイスマス神に導かれて野に適けり、惡魔に試みられんことをするなり。二

既に齋せしこと四十日四十夜にして、遂に飢ゑたり。試みる者彼に就きて曰へり、爾

若し神の子ならば、此の石に命じて餅を爲らしめよ。彼答へて曰へり、録せるあり、人

は惟餅のみを以て生くべきに非ず、乃凡そ神の口より出づる言を以てす。其時惡

魔は彼を擲へて、聖なる城に至り、彼を殿の頂に立たしめて、言ふ、爾若し神の子なら

ば、自ら下に投ぜよ、蓋録せるあり、爾の爲に其天使に命せん、彼等其手にて爾を抱へて、

爾の足を石に踏かさらしめんこと。七 イイスマス之に謂へり、亦録せるあり、主爾の神を試

みる勿れ。惡魔復彼を抱へて、最高き山に至り、世界の萬國と其榮華とを示して、

彼に謂ふ、爾若し俯伏して我を拜せば、悉く此を爾に與へん。一〇 其時 イイスマス之に謂

ふ、サマナ我より退け、蓋録せるあり、主爾の神を拜せよ、獨彼のみに事へよ。一一 是に

於て惡魔彼を離る、視よ、天使等就きて、彼に奉事せり。一二 イイスマスはイオアシが囚は

れたりと聞き、ガリレヤに去れり、一三 ナザレトを離れて、ザスロン及び子スリム

境の内なる海濱のカヘルナウムに來りて、此に居りたり、
預言者イサイヤを以て
言はれしことに應ふを致す、曰く、
一五
ザスロンの地、子スリムの地、海濱の路にイサ
ダンの外に在る異邦のガリレヤ、
一六
幽暗に坐する民は大なる光を見、死の地及び
に坐する者に光は輝けり。是よりイイスス始めて教を宣べて曰へり、悔改せよ、
一七
蓋し天國は近づけり。一八
ガリレヤの海邊を行く時、彼は兄弟二人、即ちシモン稱じて
ペトルと曰ふ者及び其兄弟アンドレイが、網を海に施せるを見たり、蓋し彼等は漁者な
りき。一九
乃ち彼等に語ふ、我に従へ、我爾等を人を漁する者と爲さん。二〇
彼等直に網
を遺して、之に従へり。二一
彼處より往きて、別に兄弟二人、即ちセラテイの子イアコフ、
及び其兄弟イオアンが、父セラテイと併に舟に在りて、網を補へるを見て、之を召せり。
二二
彼等直に舟と父とを遺して、之に従へり。二三
イイスス徧くガリレヤを巡りて、其
諸會堂に於て教を傳へ、天國の福音を宣べ、民間の諸の病、諸の疾を醫せり。二四
彼の聲名徧くシリヤに揚れり、人凡の患へる者、種種の疾及び痛楚を負へる者、冤鬼に憑
らるる者、癩癩の者、瘰癧の者を擡へて、彼に就きたるに、彼之を醫せり。二五
時にガリレ

ヤ、デカホリ、イエルサリム、イウテヤ、イオルダンの外より衆くの民彼に従へり。
第三十章 一 イイスス群衆を見て、山に登り、既に坐せしに、其門徒彼に就けり。二 彼口
 を啓きて、之を教へて曰へり、三 神の貧しき者は福なり、天國は彼等の有なればなり。四
 泣く者は福なり、彼等慰を得ん、五 温柔なる者は福なり、彼等地を嗣がん
 六 すすればなり。七 義に飢ゑ渴く者は福なり、彼等飽くを得ん、八 清き者は福なり、彼等神を見ん、九
 者は福なり、彼等矜恤を得ん、十 心は清き者は福なり、彼等神を見ん、十一 義
 すればなり。十二 和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられん、十三 義
 の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。十四 人我の爲に爾等を
 詭り窘逐し、爾等の事を誇りて、諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり、十五 喜び樂め
 六 天には爾等の貧多ければなり、七 貧乏人は是くの如く、爾等より先なり、八 預言者を窘逐せ
 九 一三 爾等は地の鹽なり、若し鹽其味を失はば、何を以て其鹹に復さん、後復用ある
 所なく、惟外に棄てられて、人に踐まれんのみ。十四 爾等は世の光なり、山の上に建てる
 邑は隠るゝ能はず。十五 人燈を燃して、之を斗の下に置かず、乃燈臺の上に置く、然らば

凡そ家に在る者に照る。一六か 是くの如く爾等の光は人人の前に照るべし。彼等が爾等の善き行を見て、天に在す爾等の父を讃祭せん爲なり。一七われは預言者を遣はし、爲に來れり。我が來れるは之を毀つに非ず。乃之を成さん爲なり。一八蓋我誠に爾等に語ぐ。天地の廢するに至るまでは、律法の一點一毫も廢せずして、盡く成らん。一九ゆゑに此の至さ小き誠の一を毀ち、且是くの如く人に教へん者は、天國に於て至さ小き者と稱へられん。惟之を行ひ、且教へん者は、天國に於て大なる者と稱へられん。二〇蓋我爾等に語ぐ。若し爾等の義は、學士及びろりセイ等の義に勝らずば、爾等天國に入るを得ず。二一爾等古の人に言へるあるを聞けり。殺す勿れ、殺す者は審判に干らん。然れども我爾等に語ぐ。凡そ故なくして、其兄弟を怒る者は、審判に干らん。其兄弟に惡拙よき曰ふ者は、公會に干らん。狂妄よき曰ふ者は、火の地獄に干らん。二二故に爾若し禮物を祭壇に擲へ、至り彼處に於て、爾が兄弟の爾と疎あるを憶ひ起さば、二三爾の禮物を祭壇の前に置き、往きて、先づ爾の兄弟と和ぎ、後來りて、爾の禮物を獻ぜよ。二四爾を訟ふる者と、偕に檢途に在る時、急に之と和げ、恐らくは訟ふる者、爾を競

判官に付し、裁判官爾を下吏に付して、爾等に投せられん。二六我賊に爾に語ぐ、爾等蓋だに償はずば、彼より出づるを得ず。二七爾等古の人に言へるあるを聞けり、淫する勿れ。二八然れども我爾等に語ぐ、凡そ慾を懐きて婦を見る者ば、心の中已に之と淫せしなり。二九若し爾の右の目爾を罪に誘は、抉りて之を棄てよ、蓋爾が百體の一を失ふば、全身地獄に投ぜらるゝより勝れり。三〇若し爾の右の手爾を罪に誘は、断ちて之を棄てよ、蓋爾が百體の一を失ふば、全身地獄に投ぜらるゝより勝れり。三一又言へるあり、若し人其妻を出さば、之に離書を與ふべし。三二然れども我爾等に語ぐ、淫の故に非ずして、其妻を出だす者ば、之に姦淫を行はしむるなり、出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。三三又爾等古の人に言へるあるを聞けり、爾等に背く勿れ、乃爾の誓を主の前に守れ。三四然れども我爾等に語ぐ、一切誓ふ勿れ、天を指して誓ふ勿れ、是れ神の寶座なればなり。三五地を指して誓ふ勿れ、是れ其足の発なればなり、エルサリムを指して誓ふ勿れ、是れ大王の城なればなり。三六爾の首を指して誓ふ勿れ、爾の髪に白く或は黒くする能はざればなり。三七爾等の言は、是是否否たる

べし此に過ぐる者は悪よりするなり。三八爾等言へるあるを開けり目を以て目を償ひ齒を以て齒を償へ。三九然れども我爾等に詣ぐ惡に敵する勿れ乃人爾の右の頬を批たば他の頬をも之に向げよ。四〇爾を訟へて爾の裏衣を取らん欲する者は外服をも取ることを聽せ。四一人爾を強ひて借に一里を行かじめば之を借に三里を行け。四二爾に求むる者には與へ爾に借らん欲する者を卻くる勿れ。四三爾等自へるあるを開けり爾の隣を愛し爾の敵を憎め。四四然れども我爾等に詣ぐ爾等の敵を愛し爾等を祖ふ者を祝福し爾等を憎む者に善を爲し爾等を虚け爾等を撃逐する者の爲に結れ。四五天に在す爾等の父の子を爲らん爲なり蓋彼は其日を惡しき者と善き者の上に照し爾を義なる者と不義なる者の上に降らす。四六爾等若し爾等を愛せば何の賞かあらん税吏も是くの如き事を行ふに非ずや。四七爾等若し爾等の兄弟にのみ安を問はば何の過ぎたることをか爲さん異邦人も是くの如く行ふに非ずや。四八故に爾等純全なることを爾等の天の父の純全なるが如く爲れ。

爾等

爾等憐みて人に見られん爲に施濟を其前に爲す勿れ然らずば天に在す

爾等の父より賞を獲ざらん。故に施濟を爲す時は偽善者が人より榮を得ん爲に會
 堂及び街衢に於て爲すが如く己の前に旗を吹く勿れ我誠に爾等に語ぐ彼等は已に
 其賞を受く。爾施濟を爲す時爾が左の手に爾が右の手の爲す所を知らしむる勿れ、
 爾の施濟の隠ならん爲なり然らば隠なるを鑿みる爾の父は願に爾に報いん。爾
 禱る時偽善者の如くする勿れ彼等は人に見られん爲に會堂及び街衢の隅に立ちて
 禱るを好む我誠に爾等に語ぐ彼等は已に其賞を受く。爾禱る時爾の室に入り戸を
 閉ぢて隠なる處に在す爾の父に語れ然らば隠なるを鑿みる父は願に爾に報いん。又
 禱る時異邦人の如く贅語を曰ふ勿れ蓋彼等は言の多きを以て聽かれんと思ふ。八
 彼等に效ふ勿れ蓋爾等の父は爾等が願はざる先に爾等の需むる所を知る。九故に爾
 等はくの如く語れ天に在す我等の父は願はくは爾の名は聖させられ。一〇爾の國は
 來り爾の旨は天に行はるゝが如く地にも行はれん。一一我が日用の糧を今日我等に
 與へ給へ、一二我等に債ある者を我等免すが如く我等の債を免し給へ、一三我等を誘
 に導かず猶我等を凶惡より救ひ給へ蓋國の權能と光榮は爾に世世に歸す、一四

一四 蓋若し爾等人に其過を免さば、爾等の天の父は爾等にも免さん。一五 若し人に其過を免さずば、爾等の父も爾等に過を免さざらん。一六 又爾等齋する時、爲善者の如く、是はしき容を爲す勿れ、蓋彼等は、其齋の人に顯れん爲に、顔色を損ふ、我誠に爾等に語く、彼等は已に其賞を受く。一七 爾齋する時、首に膏ぬり、面を洗へ、一八 爾の齋の人に顯れずして、隠なる處に在す、爾の父に顯れん爲なり、然らば、隠なるを鑿みる、爾の父は、爾に報いん。一九 爾等の爲に財と地に積む勿れ、此處には、蠹と銹と損ひ、此處には、盗穿ちて竊む。二〇 乃、爾等の爲に財を天に積め、彼處には、蠹も銹も損はず、彼處には、盗穿ちて竊まず。二一 蓋、爾等の財の在る所には、爾等の心も在らん。二二 身の燈は、目なり、故に若し、爾の目淨からば、爾の全身明ならん、二三 若し、爾の目悪しからば、爾の全身暗からん、故に若し、爾の中の光は、暗たらば、則暗は如何にぞや。二四 人は二人の主に事ふる能はず、蓋或は此を惡み、彼を愛し、或は此を重んじ、彼を輕んぜん、爾等は、辨さ財に兼れ事ふる能はず。二五 故に我爾等に語く、爾等の生命の爲に、何を食ひ、何を飲み、爾等の身體の爲に、何を衣ん、と慮る勿れ、生命は糧より大にして、身體は衣より大なるに

非ずや。二六に天空の鳥を觀ふ、彼等は稼かず、糞に積ます、而して爾等の天の
父は之を養ふ、爾等は彼等より甚貴きに非ずや。二七に爾等の中誰か慮りて、其身の長
一尺だに延ぶるを得ん。二八に衣の爲にも何ぞ慮る、試に野の百合の如何にか長する
を觀ふ、勞かず、紡がず、二九に然れども我爾等に甜ぐ、ソロモンも其榮華の極に於て、其衣
縵此の花の一に及ばざりき。三〇に今日在り、明日爐に投げらる、野の草にも、神は斯く
衣すれば、況や爾等とや、小信の者よ。三一に慮りて、我等何を食ひ、或は何を飲み、或は
何と衣ん、云ふ勿れ。三二に盜此れ皆異邦人の求むる所なり、爾等の天の父は此等の者
の皆爾等に必要なるを知る。三三に爾等先づ神の國と其義とを求め、然らば此等の者
皆爾等に加はらん。三四に故に明日の事を慮る勿れ、盜明日は自ら己の事を慮らん、一
日の心勞は一日の爲に足れり。

第三十章 人を議する勿れ、議せられざらん爲なり。三三に盜爾等何の議を以てか、人を議
せば、亦是くの如く議せられん、何の最を以てか、人に量らば、是くの如く爾等にも量ら
れん。三三に爾等兄弟の目に物屑の在るを觀て、己の目に梁木の在るを覺はざる、或は

己の目に梁木の在るに、如何ぞ爾の兄弟に告げて、我に物屑を爾の目より出たすを
 せよ。曰はん、爾等者よ、先づ梁木を己の目より出せ。其時如何に兄弟の目より物屑を
 出すべきを見ん。聖物を犬に與ふる勿れ。爾等の眞珠を豚の前に投ぐる勿れ。恐らく
 は彼等其足にて之を踐み、且轉じて爾等を噉まん。求めよ、然らば爾等に與へられん。
 尋れよ、然らば遇はん。門を叩けよ、然らば爾等の爲に啓かれん。蓋凡そ求むる者は得
 尋ぬる者は遇ひ門を叩く者には啓かれん。爾等の中孰か其子餅を求めんに、之に石
 を與ふる者あらん、一。又魚を求めんに、之に蛇を與ふる者あらん。二。然らば爾等惡
 しき者なるに、尙善き賜を其子に與ふるを知る況や。天に在す爾等の父は、之に求むる
 者に善き物を與へざらんや。三。故に凡の事人の爾等に行はんを欲する者は、爾等も
 是くの如く之を人に行へ。盜律法と預言者と、卽是なり。一。聖き門より入れ、盜沈淪
 に導く門は闊く、其路は寬くして之に入る者多し、一。惟生命に導く門は窄く、其路は
 細くして之を得る者少し。一。隨みて偽の預言者を防げ、彼等は羊の衣にて爾等に來
 れども、内は殘き狼なり、一。爾等其果に由りて彼等を踐らん。豈荆棘より葡萄を摘み

或は羨望より無花果を採らんや。一七か 是くの如く凡そ善き樹は善き果を結び、悪しき
 樹は悪しき果を結ぶ。一八 善き樹は悪しき果を結ぶ能はず、又悪しき樹は善き果を結
 ぶ能はず。一九 凡そ善き果を結ぶざる樹は、斫られて火に投げらる。二〇 故に爾等其果
 に由りて彼等を識らん。二一 凡そ我に主よ、主よ、謂ふ者は、必しも天國に入るに非ず、
 惟天に在す我が父の旨を行ふ者は入らん。二二 彼の日多くの者我に謂はん、主よ、主よ、
 我等爾の名に由りて預言し、爾の名に由りて冤鬼を逐ひ、爾の名に由りて多くの異能
 を行ひしに非ずや。二三 其時我彼等に告げて曰はん、我曾て爾等を識らざりき、不法
 を作す者我を離れよ。二四 故に凡そ我が此の言を聞きて之を行ふ者は、我之を磐の
 上に其家を建てたる智き人に譬へん。二五 雨降り河溢れ風吹きて其家を撞ちたれど
 も倒れざりき、磐の上に基けたればなり。二六 凡そ我が此の言を聞きて之を行はざる
 者は、沙の上に其家を建てたる愚なる人に譬へられん。二七 雨降り河溢れ風吹きて其
 家を衝きたれば倒れたり、且其倒は大なりき。二八 今イスラエル此等の言を聞きし時、民其
 剛を奇させり。二九 盜彼等を敬へしこと、楯ある者の若し、騎士及びフリセイ等の如き

に非ず。

第二節

彼山を下りしに、衆くの民彼に隨へり。二 視よ、癩病の者來りて、彼を拜して

曰へり、主よ、爾若し認まば、我を潔むるを能す。三 イイスス手を伸べて、之に觸れて曰へ

り、我認む潔まれ、其癩病直に潔まれり。四 イイスス之に俯み、懐みて人に告ぐる勿れ、

乃往きて、己を司祭に示せ、且モイセイの命せし禮物を獻じて、彼等に證を爲せ。五 イイ

ススカハルナリムに入りし時、百夫長彼に就きて、求めて曰へり、主よ、我の僕癩瘋に

て家に臥し、苦むこと甚し。六 イイスス彼に俯み、我往きて之を醫さん。八 百夫長對へて

曰へり、主よ、爾が我が會に入るは、我當らず、惟一言を出せ、然らば我が僕愈むん。蓋我

人の權に屬すれども、我が下に兵卒ありて、我此に往けと云へば、往き、彼に來れと云へ

ば、來り、我が僕に是を行へと云へば、行ふ。一〇 イイスス之を聞きて、奇き爲し、從ふ者に

爾へり、我誠に爾等に斯ぐ、イスラエリの中にも、我是くの如き倍を見ざりき。一一 我又

爾等に語ぐ、衆くの者來より、四より來りて、アウラム、イザラク、イブコフと、倍に天國

に席坐し、一二して、國の諸子は、外の幽暗に逐はれん、彼處には、哀哭と切齒とあらん。

一三 イイスス又百夫長に謂へり、往け、爾の信ぜし如く、爾に成るべし。斯の時、其僕愈々たり。一四 イイススベトルの家に來りて、其岳母の熱を病みて臥せるを見たり、一五 其手に觸れたれば、熱即退けり、婦起きて彼等に供事せり。一六 日暮るゝに及びて、冤鬼に恐らるゝ多くの者を彼に搦へ來れるあり、彼を以て惡鬼を逐ひ出し、亦病ある者を悉く醫せり。一七 預言者イサイヤを以て言はれし事に應ふを致す云く、彼は我等の恙を任ひ、病を預ひたりと。一八 イイスス群衆の己を環れるを見て、門徒に彼の岸に往かんことを命ぜり。一九 時に一の學士彼に就きて曰へり、師よ、爾何處に往くとも、我爾に従はん。二〇 イイスス之に謂ふ、狐には穴あり、天空の鳥には巢あり、惟人の子には首を統する處なし。二一 又一の門徒彼に謂へり、主よ、我に先づ往きて我が父を葬るを容せ。二三 然れどもイイスス之に謂へり、我に従へ、死者に其死者を葬るを任せよ。二四 彼が舟に登りし時、其門徒彼に従へり。二五 視よ、大なる颶風海に作りて、舟浪に散はるゝに至れり、彼適寢れたり。二六 門徒就きて彼を醒まして曰へり、主よ、我等を救へ、殆ど亡ぶ。二七 彼は之に謂ふ、小信の者よ、何ぞ怯るゝ、即起きて、風と海とを禁めれば、大に穩

になれり。二七人々奇として曰へり此れ何人ぞ風も海も彼に順ふ。二八彼の卑なるゲ
 レゲツンの地に至りし時魔鬼に憑らるゝ者二人募より出で、彼を迎ふ甚猛し人の
 敢て其路を過ぐるなきに至れり。二九視よ、彼等跪びて曰へり神の子イエスよ、我等
 さ爾さ何ぞ與らん時未だ至らざる先に爾我等を苦めん爲に此に來りしか。三〇此よ
 り遠に豕の大なる群は牧はれだり。三一魔鬼彼に求めて曰へり若し我等を逐ひ出さ
 ば豕の群に入るを容せ。三二彼は之に謂へり、往け、魔鬼出で、豕の群に入りしに、視よ、
 豕の群悉く山坡より海に逸けて、水に溺れたり。三三牧ふ者奔りて邑に入り、此等の
 事と魔鬼に憑らるゝ者の事を告げたるに、三四視よ、邑舉りて出で、イエスを迎
 へ、彼を見て、其境を離れんことを請へり。

四章

一彼舟に登り、濟りて己の邑に來れり。二視よ、癩癩を患ひて牀に臥せる者を
 彼に昇き來れる者あり、イエス彼等の信を見て、癩癩の者に謂へり、子よ、心を安んぜ
 よ、爾の罪は爾に赦さる。三時に或學士等己の衷に謂へり、彼は驚す言を言ふ。四イエス
 ス其意を見て曰へり、爾等何ぞ心の中に憑しきことを憚ふ、蓋爾の罪赦さる言

ひ、或は起きて行けと言ふは、孰か易き、然れども爾等が人の子の地に在りて罪を赦す権あることを知らん爲、是に於て癩癩の者に謂ふ、起きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。七、彼即起きて、牀を取りて、其家に往けり。八、民之を見て奇を爲し、是くの如き権を人に賜ひし神を讚榮せり。九、イエス、彼處より往きて、税関に坐する一人、マトス、イと名づくる者を見て、之に謂ふ、我に従へ、彼起ちて従へり。一〇、イエス、家に席坐せし時、觀よ、多くの税吏及び罪人來りて、彼及び其門徒と偕に席坐せり。一一、フリセイ等之を見て、其門徒に謂へり、爾等の師は何ぞ税吏及び罪人と偕に食飲する。一二、イエス、之を聞き、彼等に謂へり、康強なる者は醫師を需めず、乃病を預ふ者は之を需む、一三、爾等往きて、我矜恤を欲して、祭祀を欲せずと云ふ事の意如何を學べ、蓋我が來りしは、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して悔改せしめん爲なり。一四、當時イオアブンの門徒彼に就きて曰く、我等さるり、セイ等は多く齋するに、爾の門徒が齋せざるは何ぞや。一五、イエス、彼等に謂へり、始繼の答は、新娶者の尙之と偕に在る時、豈哀しむを得んや、然れども新娶者の彼等より取らるゝ日、至らん、其時に齋せん。一六、あたらしき布片

を用て舊き衣を補ふ者あらず、蓋補ひし片は衣を壞りて其縫更に甚しからん。
 又新しき酒を舊き革甕に盛らす、然らすば甕敗れて酒漏れ、甕も亡びん、乃新しき酒
 を新しき甕に盛る、然らば甕の者存す。一八 イイスス 彼等に此を聞れる時、或來りて
 彼を拜して曰く、我が女今死せり、求む爾來りて之に手を按せよ、彼必生きん。一九 イ
 イスス 起ちて之に従へり、其門徒も備にせり。二〇 親よ、十二年血漏を患ふる婦後より
 就きて彼の衣の裾に捫れり、二一 蓋己の裏に聞へり、我惟其衣にのみ捫らば、愈ゆる
 を得ん。二二 イイスス 身を轉じて彼を見て曰へり、女よ、心を安んぜよ、爾の信は爾を
 救へり、是の時より婦愈ゆるを得たり。二三 イイスス 卒の家に來り、笛を吹く者三、嗚
 る民さを見て、二四 彼等に聞へり、退け、蓋女は死せしに非ず、乃寢ぬるなり、人人彼を
 へり。二五 民の出されし後、彼入りて、其手を執りしに、女起きたり。二六 此の事の聲聞
 く、其地に傳はれり。二七 イイススの彼處より往く時、二人の習者彼に従ひて、呼びて曰
 へり、ゲリドの子、イイススよ、我等を憐れ。二八 彼家に入りしに、習者彼に就けり、イイス
 ス之に謂ふ、我之を成すことを能す、信するか、彼答曰く、主よ、然り。二九 是に於て、其目

に觸れて曰へり爾等の信の如く爾等に成るべし。其目即啓きたり。イエス殿しく彼等を戒めて曰へり慎みて人に知らしむる勿れ。然れども彼等出でて其名を運く其地に掲げたり。彼等の出づる時、痲瘋にして冤鬼に憑らるゝ人をイスラエルの中に未だ是くの如き事あらざりき。然れどもフリセイ等曰へり彼は冤鬼の魁に憑りて冤鬼を逐ひ出す。イエス徧く邑と村とを巡りて、其諸會堂に於て教を傳へ天國の福音を宣へ民間の諸の痲瘋の疾を醫せり。彼群衆を見て之を憫みたり、其牧者なき羊の如く、癒れ且散りたるが故なり。是に於て其門徒に謂ふ、稽は多く、工は少し。故に稽主に、工を其稽所に遣さんことを求めよ。

一 イエス其十二門徒を召して、彼等に汚鬼を制する權を與へたり、之を逐ひ出し、又諸の痲瘋の疾を醫さん爲なり。十二使徒の名左の如し、第一にはシモン名づけてペトルと云ふ者及び其兄弟アンドレイ、セワテイの子イアコフ及び其兄弟イホアン、フロップ及びバルフロメイ、ヌマ及び税吏マトス、イアルスイの子イアコフ

及びレヌイ稱してテイミ云ふ者、^四シモン「カナニト」及びイウダ「イスカリヤト」
 即彼を賣りし者なり、^五イイスス此の十二徒を遣し之に戒めて曰へり、異邦の途に
 往く勿れ、サマリヤの邑に入る勿れ、^六寧ろイスラエルの家の亡びし羊に往け。セウ
 時宜べて曰へ天國は近づけり。病者を醫し、癩者を潔め、死者を起し、冤鬼を逐ひ出
 せ、^七彼なくして受けたり、^八費なくして與へよ。金をも銀をも銅をも、^九爾等の帯に貯ふる
 勿れ、^{一〇}行旅をも二の衣をも履をも杖をも執る勿れ、^{一一}蓋勞する者の其糧を得るは宜
 しきなり。^{一二}何の邑或は村に入るときも、^{一三}其中に孰か可なる者たるを尋れ、^{一四}彼處に留り
 て出づるに至れ。^{一五}家に入るときは、^{一六}其安を問ひて、^{一七}此の家に平安と云へ。^{一八}若し其家
 之に當らば、^{一九}爾等の平安は之に歸まん、^{二〇}若し當らば、^{二一}爾等の平安は爾等に歸らん。^{二二}
 若し爾等を扱はず、^{二三}爾等の言を聴かざる者あらば、^{二四}其家或は其邑を出づる時、^{二五}爾等の足
 の塵を拂へ。^{二六}我誠に爾等に語ぐ、^{二七}密判の日に於て、^{二八}ソドム及びゴモラの地は、^{二九}斯の邑
 より忍び易からん。^{三〇}視よ、^{三一}我が爾等を遣すは、^{三二}羊を狼の中に入るゝが如し、^{三三}故に智き
 こゝ蛇の如く、^{三四}粘なきこゝ、^{三五}鶴の如くふれ。^{三六}隨みて、^{三七}人人に意を用ぬ、^{三八}盜彼等は、^{三九}爾等

を其公會に解し、其會當に續うたん。一八且爾等は我が爲の故に諸侯諸王の前に曳かれん、彼等と異邦民とに賤を爲さん爲なり。一九爾等を解さん時如何に或は何を言ふべきを慮る勿れ、其時言ふべきこと爾等に與へられんことすればなり。二〇盜爾等言はんとするに非ず、乃爾等の父の神は爾等の裏に言はん。二一兄弟は兄弟を父は子を死に付し、子は親を攻め、且之を殺さん。二三爾等我が名の爲に衆人に憎まれん、惟終に至るまで忍ぶ者は救はれん。二四爾等を此の邑に送逐する時は、他の邑に奔れ、盜我賊に爾等に詣ぐ、爾等が未だイスラエリの諸邑を巡り盡さざるに、人の子來らん。二五門徒は其師の上に在らず、僕は其主の上に在らず。二六門徒は其師の如く、僕は其主の如くなりて足れり、若し家主を呼びてマエルセルルと云ひしならば、況や其家人をや。二七故に彼等を懼るゝ勿れ、盜覆はれて露れざる者なく、隠れて知られざる者なし。二八我が暗の中に爾等に言ふ事を、爾等光の中に述べよ、耳を附けて聴く事を、屋の上に傳へよ。二九身を殺して靈を殺す能はざる者を懼るゝ勿れ、身と地獄に滅すことを能する者を懼れよ。三〇の雀は一錢にて售らるゝに、非ずや、若し爾等の父の

旨なくば其一も地に限りざらん。三〇爾等に於ては首の髮も密敷へられたり。三二故に懼るゝ勿れ爾等は多くの宿より費し。三三然らば凡そ我を人の前に認めん者は我も亦彼を天に在す我が父の前に認めん。三四我を人の前に認めん者は我も亦彼を天に在す我が父の前に認めん。三五我和平を地に投ぜん爲に來れり。三六我勿れ我が來れるは和平に非ず、乃刃を投ぜん爲なり。三七我勿れ我が來れるは、人を其父と女を其母と婦を其姑と分たん爲なり。三八人の家人は其敵と爲らん。三九父或は母を受すこと我に過ぐる者は我に宜しからず。四十我に過ぐる者は我に宜しからず。四一我に過ぐる者は我に宜しからず。四二我に過ぐる者は我に宜しからず。四三我に過ぐる者は我に宜しからず。四四我に過ぐる者は我に宜しからず。四五我に過ぐる者は我に宜しからず。四六我に過ぐる者は我に宜しからず。四七我に過ぐる者は我に宜しからず。四八我に過ぐる者は我に宜しからず。四九我に過ぐる者は我に宜しからず。五〇我に過ぐる者は我に宜しからず。五一我に過ぐる者は我に宜しからず。五二我に過ぐる者は我に宜しからず。五三我に過ぐる者は我に宜しからず。五四我に過ぐる者は我に宜しからず。五五我に過ぐる者は我に宜しからず。五六我に過ぐる者は我に宜しからず。五七我に過ぐる者は我に宜しからず。五八我に過ぐる者は我に宜しからず。五九我に過ぐる者は我に宜しからず。六〇我に過ぐる者は我に宜しからず。六一我に過ぐる者は我に宜しからず。六二我に過ぐる者は我に宜しからず。六三我に過ぐる者は我に宜しからず。六四我に過ぐる者は我に宜しからず。六五我に過ぐる者は我に宜しからず。六六我に過ぐる者は我に宜しからず。六七我に過ぐる者は我に宜しからず。六八我に過ぐる者は我に宜しからず。六九我に過ぐる者は我に宜しからず。七〇我に過ぐる者は我に宜しからず。七一我に過ぐる者は我に宜しからず。七二我に過ぐる者は我に宜しからず。七三我に過ぐる者は我に宜しからず。七四我に過ぐる者は我に宜しからず。七五我に過ぐる者は我に宜しからず。七六我に過ぐる者は我に宜しからず。七七我に過ぐる者は我に宜しからず。七八我に過ぐる者は我に宜しからず。七九我に過ぐる者は我に宜しからず。八〇我に過ぐる者は我に宜しからず。八一我に過ぐる者は我に宜しからず。八二我に過ぐる者は我に宜しからず。八三我に過ぐる者は我に宜しからず。八四我に過ぐる者は我に宜しからず。八五我に過ぐる者は我に宜しからず。八六我に過ぐる者は我に宜しからず。八七我に過ぐる者は我に宜しからず。八八我に過ぐる者は我に宜しからず。八九我に過ぐる者は我に宜しからず。九〇我に過ぐる者は我に宜しからず。九一我に過ぐる者は我に宜しからず。九二我に過ぐる者は我に宜しからず。九三我に過ぐる者は我に宜しからず。九四我に過ぐる者は我に宜しからず。九五我に過ぐる者は我に宜しからず。九六我に過ぐる者は我に宜しからず。九七我に過ぐる者は我に宜しからず。九八我に過ぐる者は我に宜しからず。九九我に過ぐる者は我に宜しからず。一〇〇我に過ぐる者は我に宜しからず。

我誠に爾等に語ぐ其言を失はざらん。

第 四 章

一 イイスス十二門徒に命じ擧りて、彼處より移り、其諸邑に教を傳へ、道を

宣べたり。二 イオアン 獄に在りてハリストスの行ふ所を聞き、其門徒の二人を遣して、

三 彼に問へり來るべき者は爾なるか、抑我等佗の者を俟つべきか。 イイスス 彼等に

答へて曰へり、往きて、聞く所見る所をイオアンに告げよ、即 替者は明き、跛者は歩

み、痲者は潔まり、聾者は聴き、死者は起き、貧者は福音す。凡そ我の爲に惑はざる者は

福音なり。七 彼等が去りし後、イイスス イオアンの事を擧げて、民に問へり、爾等何を觀ん

さして野に出でしか、風に動かさる、葦か、抑 何を觀んさして出でしか、柔き衣を

衣たる人か、視よ、柔き衣を衣る者は、王の宮に在り。然らば何を觀んさして出でしか、

預言者か、然り、我爾等に語ぐ、彼は預言者よりも大なり。一〇 蓋彼は夫の録して、視よ、我

我が使を爾の面前に遣し、爾に先だちて爾の道を備へしめん、と曰はれたる者なり。二

一 我誠に爾等に語ぐ、婦の生みし者の中、授洗イオアンより大なる者は起らざりき、然

れども天國に於て至る小き者は彼より大なり。二三 授洗イオアンの日より今に至る

まで、天國は力を以て得らる而して、力を用ゐる者は之を奪ふ。二四 蓋悉くの預言者

さ律法とは預言してイオアンまでに終れり。一四 且若し爾等承けんことを欲せば彼は來るべきイリヤなり。一五 耳ありて聽くを得る者は聽くべし。一六 抑我斯の世を誰に譬へんか、是れ童子、街に坐して、其侶に呼びて、一七 我等は爾等に笛を吹きたれども、爾等踊らざりき、爾等に悲の歌を謡ひたれども、爾等哭かざりきと云ふ者に似たり。一八 一ハけたし 盜イオアン來りて、食はず、飲まず、人は言ふ、彼魔鬼に憑らるる。一九 人の子來りて、食ひ飲む、又言ふ、是れ食を嗜み酒を好む者、税吏及び罪人の友なりと、惟答智の子は答智の義を明にせり。二〇 其時イイス、殊に多く異能の行はれし、節邑の悔改せざるに因りて之を責めて曰へり。二一 禍なる哉、爾等ホラシ、禍なる哉、爾等ワフサイナ、爾等の中に行はれし異能は若し、及びシドンに行はれしならば、彼等は早く麻を衣灰を擧りて悔改せしならん。二三 故に我爾等に詣ぐ、密判の日に於て、及びシドンは爾等より忍び易からん。二四 天にまで擧げられしカメルナザムよ、爾も地獄にまで落されん、盜爾の中に行はれし異能は若し、ソドムに行はれしならば、彼尙存して今日に至りしならん。二五 故に我爾等に詣ぐ、密判の日に於て、ソドムの地は爾より

忍び易からん。二五そのとき 其時イイスス語を續きて曰へり父天地の主よ我爾を讃祭す爾此等智者及び達者に際して之を赤子に願しに因る。二六父よ然り盜是くの如きは爾の旨の察せし所なり。二七萬物は我が父より我に授けられたり父の外に子を識る者なく子及び子が願さん欲する者の外に父を識る者なし。二八凡そ勞苦する者及び重を任ふ者は我に來れ我爾等を安んぜしめん。二九我が腕を負ひて我に學べ我は心溫柔にして謙遜なればなり爾等は其靈に安息を獲ん。三〇我が腕は易く我が任は輕し。

當時イイスス安息日に禾田を過ぎ行けるに彼の門徒飢ゑて穂を摘みて食へり。二一 爾等を見て彼に即へり視よ爾の門徒は安息日に行ふべからざることを行ふ。二二 彼曰へり爾等は、ゲラドが己及び其從者の飢ゑし時行ひし事、即如何にして彼は神の家に入りて己も從者も食ふべからず、惟司祭等のみ食ふべき供前の餅を食ひしを讀まさりしか。二三 抑爾等は司祭等が安息日に於て殿の内に安息日を犯すとも罪なきことを律法に讀まさりしか。二四 然れども我爾等に語ぐ此には殿

より大なる者あり。若し爾等は我矜恤を欲して祭祀を欲せずと云ふことこの意如何
を知りしならば、羊なき者を耶せざりしならん。蓋人の子は亦安息日の主なり。
乃 彼處を離れて、彼等の會堂に入れり。一〇 視よ、茲に一手の枯へたる人あり、彼等
イススを耶せん爲に之に問ひて曰へり、安息日に醫を施すは宜しきか。二 彼曰へり、
爾等の中孰か一の羊有りて、若し此れ安息日に坑に陥らば、之を援けて上げざらんか、
一二 人は羊より貴きこと幾何ぞ故に安息日に善を行ふは宜しきなり。一三 是に於て
其人に謂ふ、爾の手を伸べよ、彼伸ぶれば、即 癒 になりしこと他の手の如し。一四 乃
セイ等出で、如何にしてイススを滅さんか相謀れり。一五 イイスス之を知りて、彼
處を離れたり、衆くの民彼に従へり、彼悉く之を醫し。一六 且之に己を顯す勿らんこ
さを戒めたり。一七 預言者イサイヤを以て言はれし事に應ふを致す云く、一八 視よ、我
が選びし我の僕、我が愛の悦ぶ所の我の至愛の者、我は我が神を後に賦せん、彼は諸民
に審判を示さん。一九 彼は争はず、就ばず、人其聲を衝に聞かさらん。二〇 傷める草を折
らす、燃れる麻を熄さすして、審判に勝を得しむるに至らん。二一 諸民彼の名を頼まん

二二七 時に冤鬼に憑らるゝ醫にして瘡なる者を彼に攜へ來れるあり、彼之を醫し、醫にして瘡なる者は言ひ且見るを得たり。二二八 衆民騒きて曰へり、此れゲマドの子ハリストスなるに非ずや。二二九 然れどもフリセイ等之を聞きて曰へり、彼が冤鬼を逐ひ出すは、冤鬼の魅ヲエルセウルに藉るに外ならず。二三〇 イイスス其意を知りて、彼等に謂へり、凡の國自ら分れ争はゞ荒墟となり、凡の色取は家自ら分れ争はゞ立たざらん。二三一 若しサタナにしてサタナを逐ひ出さば、彼自ら分れ争ふなり、然らば其國如何にして立たん。二三二 若し我ヲエルセウルに藉りて冤鬼を逐ひ出さば、爾等の跡子は誰に藉りて之を逐ひ出すか、故に彼等は爾等の密判者と爲らん。二三三 然れども若し我神の神に藉りて冤鬼を逐ひ出さば、則神の國果てて爾等に臨みしなり。二三四 或は人如何にして強き者の家に入りて、其器を劫すを得るか、豈先づ強き者を縛りて、然る後其家を劫すべきに非ずや。二三五 我と借にせざる者は我に敵し、我と借に聚めざる者は散らすなり。二三六 故に我爾等に語ぐ、凡の罪と褻瀆とは人人に赦されん、然れども神に對する褻瀆は人人に赦されざらん。二三七 人の手に敵して言を出さば、其人赦されん、然れど

も聖神に敵して言を出さば其人今世にも來世にも救されざらん。或は樹を善し
とし其果をも善しさせよ或は樹を惡しとし其果をも惡しさせよ蓋樹は其果に由り
て識らる。蠅の類よ爾等惡しき者にして何ぞ善きことを言ふを得ん蓋心に充つ
る者は口に言ふなり。善き人は善き寶庫より善き者を出し惡しき人は惡しき寶
庫より惡しき者を出す。我爾等に語ぐ凡そ人の言ふ所の虚しき言は審判の日に
於て之が答を爲さん。蓋爾は己の言に由りて義させられ亦己の言に由りて罪
に定められん。其時或る學士及び弟子等曰へり師よ我等爾よりする休徴を
觀ん欲す。彼答へて曰へり惡惡の世は休徴を求む而して預言者イオナの休徴
の外之に休徴は與へられざらん。蓋イオナが三日三夜鯨の腹に在りし如く人
の子も三日三夜地の心に在らん。ニ子マヤの人は審判の時に斯の世と共に起ち
て之を罪せん蓋彼等はイオナの傳教に由りて悔改せり觀よ此にはイオナより大な
る者あり。南方の女王は審判の時に斯の世と共に起ちて之を罪せん蓋彼は地の
極よりソロモンの智慧を聽かん爲に來り觀よ此にはソロモンより大なる者あり。

三 汚鬼人より出で、後水なき地を巡り安息を求むれども得ず。其時曰く、我曾て出でし我が家に歸らん。既に來りて、其家の虚しくして、掃き且飾りたるを見。乃往きて、己よりも悪しき他の七鬼を揃へ來り、借に入りて彼處に居るなり。是に於て其人の爲に、後の患は先より更に甚し、斯の悪しき世にも亦是くの如くならん。

イイススが尙民に語れる時、彼の母及び兄弟外に立ちて、彼と言はんを欲せり。或彼に謂へり、視よ、爾の母及び爾の兄弟外に立ちて、爾と言はんを欲す。彼は言ひし者に答へて曰へり、孰か我が母たり、孰か我が兄弟たる。乃手を伸べて、其門徒を指して曰へり、是れ我が母なり、我が兄弟なり。盜凡そ天に在す我が父の旨を行はん者は、彼即我が兄弟なり、姉妹なり、母なり。

四 當日イイスス家を出で、海濱に坐せり。衆くの民彼の許に集りたれば、彼舟に登りて坐するに至れり、民皆岸に立てり。乃多く譬を以て彼等に語りて曰へり、視よ、種を播く者出で、種を播きたり。播く時、路の旁に遺ちし者あり、鳥來りて之を啄めり。土の薄き磽地に遺ちし者あり、土の深からざるに因りて、直に萌へ出

でしが、日の出で、後委み根なきに因りて橋れたり。練の中に遣らし者あり、練起きて之を蔽へり。八、沃壤に遣らし者あり、實を結びしこ。或は百倍、或は六十倍、或は三十倍なり。九、耳ありて聴くを得る者は聴くべし。一〇、門徒彼に就きて曰へり、附何の故に譬を以て彼等に詔るか。一一、彼答へて曰へり、附等には天國の典義を知るこ。與へられたれども、彼等には與へられざりし故なり。一二、盜有てる者は、之に與へて餘あらしめ、有たざる者は、其有てる物も之より奪はれん。一三、我が譬を以て彼等に詔るは、彼等が視て見ず、聴きて聞かず、又悟らざる故なり。一四、斯く彼等に於てイサイヤの預言應へり云く、附等耳にて聴けども、悟らず、目にて視れども、見ざらん。一五、蓋此の民の心は頑になれり、耳は聴くに懈く、目は自ら閉ぢたり、恐らくは目にて見、耳にて聞き、心に悟り轉じて、我が譬を譬さん。一六、然れども、附等の目は見、附等の耳は聞くが故に、蓋我誠にも附等に詔る多くの預言者と義人とは、附等が見る所を見んき欲して見ざりき、附等が聞く所を聞かんき欲して聞かさりき。一七、故に附等種を播く者の譬の義を聴け。一八、凡そ天國の音を聞きて悟らざる者には、凶惡者來りて、其心

に播かれたる者を奪ふ、此れ路の旁に播かれたる者なり。二〇 磯地に播かれたる者は、
此れ言を聽きて、直に喜びて受くれども、二一 已に根なきが故に、暫時のみ、言の爲に、
難或は窘速に遇は、直に墮く。二三 棘の中に播かれたる者は、此れ言を聽けども、斯の
世の慮、貨財の惑、其言を散ひて、實を結ばず。二四 沃壤に播かれたる者は、此れ言
を聽きて、倍り、實を結ぶこと、或は百倍、或は六十倍、或は三十倍に至る者なり。二五 又
皆を散けて、彼等に謂へり、天國は人の其田に、美種を播きたるが如し。二六 人人の寢ぬ
る時、其敵米り、夢の中に種を播きて去れり。二七 苗秀で、實るに及び、種も亦見れたり。
二八 家主の諸僕米りて之に謂へり、主よ、爾は美種を爾の田に播きたるに非ずや、然ら
ば何に由りて種あるか、二九 彼は之に謂へり、敵人之を爲せり。諸僕彼に謂へり、然らば
爾は我等が往きて、之を抜かんことを欲するか、三〇 彼曰へり、否、恐らくは爾等種を拔
く時、之と共に、夢をも抜かん。三一 二の者共に、長するを容して、收穫に至れ、收穫の時、我
別る者に謂はん、先づ種を集め、之を束れて、焚かん爲に備へ、而して、夢を我が倉に、
敷めよ。三二 又譬を設けて、彼等に謂へり、天國は芥種、人取りて、其田に播きたる者の如し、

三三 是れ萬の種の中に最も小き者なれども、長するに及びては、悉くの野菜より大にして樹を爲り、天空の鳥來りて、其枝に棲むに至る。又罽を彼等に誦りて曰へり、天國は酔の如し、罽之を取りて、三斗の麴の中に納れしに、悉く發酵するに至れり。此れ皆イイスス罽を以て、民に誦れり、罽に非ずしては、彼等に誦らざりき、預言者を以て言はれし事に應ふを致す云く、我が口を啓きて、罽を言ひ、前世以來隠れたること、を述べん。其時イイスス民を散じて、家に入れり、其門徒彼に就きて曰く、晴ふ田の稗の罽を我等に解け。彼は之に答へて曰へり、美穂を播く者は、人の子なり、田は世界なり、美穂は天國の子、稗は凶惡者の子なり。之を播きたる敵は、惡魔なり、收穫は世の終末なり、刈る者は、天使等なり。故に稗を集めて、火に焚くが如く、此の世の終末にも、是くの如くならん。人の子は、其天使等を遣して、其國より凡の穢惡と不法を行ふ者を集めて、之を火の爐に投ぜん、彼處に哀哭さ切齒さあらん。時に義人等は、其父の國に於て、日の如く輝かん。耳ありて聽くを得る者は、聽くべし。又天國は、田に穢れたる寶の如し、人之を見出したれば、秘し喜びて、往き盡く其所

有あるをいてまりて、斯この田たを買かふ。 又また天國てんこくは美うき眞珠しんじゆを求もとむる商賈あきうの如ごとし。 彼かれ一ひとの値ち貴たかき眞珠しんじゆを見出みだしたれば、往ゆきて盡つくく其その所有しよいうを齎ひききて、之これを買かへり。 又また天國てんこくは海うみに施ほして種しゆ種くの魚うをを集あつむる網あみの如ごとし。 既すでに盈みちたれば、之これを岸きしに曳ひき上げ、坐まして齎よき者ものを擲なりて、器うつはに入れ、惡あしき者ものを外そとに棄すてたり。 世よの終はつ末まはつにも是かの如ごとくならん、天使てんし筭ら出いで、惡あく者しやを義ぎ者しやの中うちより分わかちて、之これを火ひの爐ろに投なげん、彼かれ處こには哀あ哭きと切は齒かみとあらん。 五二 イイスス彼かれ等らに謂いふ、此これ皆みな爾なんぢ等ら悟さとりし、彼かれ等ら曰いく、主しゆよ、然しかり。 五三 彼かれは之これに謂いへり、故ゆゑに凡およそ天國てんこくを學まなびたる學士がくしは、其その寶庫たからくらより新あたらしき物ものと舊ふるき物ものとを出いだす家主かしゆの如ごとし。 五四 イイスス此これ等らの譬たとへを竟はりて、彼かれ處こを去されり。 五五 己おのれ故土ふるさとに來きたりて、會堂くわいどうに於おいて彼かれ等らを教をしへたるに、彼かれ等ら寄きするに至いたり、曰いく、斯この人ひと何なにより斯かる智ち慧ゑと異能いのちとを得えたる。 五五 彼かれは木工もくこうの子こなるに非あらずや、其母そのははマリヤマリヤと名なづけらるゝに非あらずや、其兄弟そのきやうだいはイアコフイアコフ、イオシイイオシイ、シモンシモン、イウダイウダなるに非あらずや。 五六 其姉妹そのしまいは皆みな我等われ等らの間に在あるに非あらずや、然しからば此等これら皆みな斯この人ひと何なにより得えたるか。 五七 遂つひに彼かれの爲ために惑まどへり。 イイスス彼等かれらに謂いへり、預言者よげんしやは其故土そのふるさと及び其家そのいへの外ほかに於おいては算たづねられざるなし。 五八

ハすなはちかれら 乃 彼等の信ぜざるに由りて彼處に多くの異能を行はざりき。

第四節

一當時分封の君イロド、イイススの聲名を聞きて、其侍臣に謂へり此れ

授洗イオアンなり、彼死より復活せり故に彼に由りて異能は行はる。蓋イロドは

其兄 弟スルプの妻イロデアの故に困りてイオアンを執へ之を縛りて獄に入れ

たり。蓋 イオアン彼に謂へり宿此の婦を納るは宜しからず。且之を殺さん

と欲したれども民を懼れたり其之を預言者と爲し故なり。適 イロドの誕生日

に値り、イロデアの女席上に舞ひてイロドの喜を獲たり。故に彼誓ひて其求むる

所に隨ひて之を與へんことを約せり。女母の囑に困りて曰へり授洗イオアンの

首を盤に盛りて此に我に與へよ。王憂ひたれども醫の爲又共に席坐する者の爲の

故に之を與へんことを命ぜり。一乃 人を遣してイオアンを獄に斬り、二其首を

盤に盛り攜へ來りて女に與へたれば女之を其母に攜へたり。三彼の門徒來りて其

屍を取りて之を葬り且往きてイイススに告げたり。一三 イイスス聞きて舟に乗り

彼處を離れて獨野の處に往けり民之を聞きて賒邑より歩みて彼に従へり。一四 イイ

スス出で、群衆を見て、之を憫み、其病める者を醫せり。一五
に就きて曰へり、此は野の處にして、時已に晚し、民を去らしめよ。彼等が諸村に往きて、
己の爲に食を市はん爲なり。一六
然れども、イエス、彼等に謂へり、其往くを要せず。爾
等之に食を與へよ。一七
彼等曰く、我等には、此に惟五の餅と二の魚とあるのみ。一八
彼
曰へり、之を此に我に搥へ來れ。一九
乃、民に命じて、草の上に坐せしめ、五の餅と二の
魚とを取りて、天を仰ぎて祝禱し、餅を擘きて、之を門徒に與へ、門徒民に與へたり。二〇
皆食ひて飽き、其餘りたる屑を拾ひて、十二の籃に盈てたり。二一
食ひし者は、婦と幼童
との外、約五千人なりき。二三
イエス直に其門徒を促して、舟に登らしめ、自ら民を去
らしむる間に、己に先だちて、彼の岸に往かしめたり。二四
民を去らしめて、後彼は獨處
に於て祈禱せん爲に、山に登り、既に暮れて、獨彼處に在りき。二五
時に、舟海の中に在り
て、浪に揺られたり、風の逆ひし故なり。二六
夜四更の時、イエス海を履みて、彼等に往
けり。二七
門徒其海を履むを見て、驚きて曰へり、是れ怪物なり、乃、懼に由りて呼べり。
然れども、イエス直に彼等に語りて曰へり、心を安んぜよ、是れ我なり、懼るゝ勿

れ。二八 **ペトル** 彼に答へて曰へり、主よ、若し是れ爾ならば、我に水を履みて爾に至らんことを命ぜよ。二九 彼曰へり、米れ、**ペトル** 舟を下り、水を履みて、**イエス**の許に往けり。三〇 然れども風の烈しきを見て懼れ、弱れんとして呼びて曰へり、主よ、我を救へ。三一 **イエス**直に手を伸べて之を援けて曰く、小信の者よ、何ぞ疑ひたる。三二 共に舟に登るに逾びて、風息みたり。三三 舟に在る者就きて彼を拜して曰へり、爾は誠まことに神の子なり。三四 既に濟りて、**ゲニサレト**の地に來れり。三五 其處の人人彼を識りたれば、過く其近傍に人を遣して、病ある者を悉く攜へ來らしめ、三六 唯彼の衣の裾に觸らんことを求めたり、之に觸りし者は愈ゆるを得たり。

第二十章

一 其時

イエエルサリムより來れる學士及びガリセイ等、**イエス**に就きて

曰く、爾の門徒は何ぞ古人の傳を犯す、**盜餅**を食ふ時、其手をあらはざるなり。彼答へて曰へり、爾等も何ぞ爾等の傳の爲に神の誠を犯す、**盜**、**神**、誣めて曰へり、父母を敬へ、又曰へり、父或は母を敬る者は死すべしと、然れども爾等曰く、人若し父或は母に對ひて、爾が我より得べき者は、禮物と爲れりと云はば、其父或は母を敬はずとも可

なりき、斯く爾等は其傳を以て神の誠を廢せり。偽善者よ、イサイヤは爾等の事を善く預言して云へり、人の民は口にて我に近づき、唇にて我を敬へども其心は遠く我に離る、彼等は人の誠を教さ爲して汝へて、徒に我を辱む。是に於て衆を召して彼等に訓へり、聽きて悟れ、口に入る者は人を汚さず、乃口より出づる者は斯れ人を汚すなり。一時に門徒彼に就きて曰へり、ソリセイ等が斯の言を聞きて惑ひしを爾知れるか、一三 彼答へて曰へり、凡そ我が天の父の植ふさりし植物は、其根絶されん。一四 姑く彼等を會ひ、彼等は譬にして、譬を導く者なり、若し譬にして、譬を導かば、二人ながら坑に陥らん。一五 ベトル對へて彼に訓へり、爾等斯の譬を我等に解け。一六 イスス曰へり、爾等も未だ悟らざるか。一七 豈凡そ口に入る者は腹を運りて外に遺てらるゝを知らざるか。一八 然れども口より出づる者は心より出づ、斯れ人を汚すなり。一九 蓋し心より出づる者は、惡念、凶殺、姦淫、邪淫、盜竊、妄言、褻瀆なり。二〇 此等は人を汚す、然れども盥はざる手を以て食ふは、人を汚さざるなり。二一 イスス彼處を離れて、ガリ及びシドンの地に往けり。二二 視よ、ハナアンの婦、其腹より出で、彼に呼び

て曰へり、主ダワドの子よ、我を憐れ、我が女冤鬼に憑らるゝこと甚し。二三 然れども彼
 一音も之に答へざりき。其門徒就きて、彼に踏ひて曰へり、之を去らしめよ。蓋我等の後
 より呼ぶ。二四 彼答へて曰へり、我は惟イスラエリの家の亡びし羊にのみ遣されたり。
 二五 婦近づきて彼を拜して曰へり、主よ、我を助けよ。二六 彼答へて曰へり、見曹の餅を
 取りて、狗に投ぐるは宜しからず。二七 婦曰へり、主よ、然り、但狗も亦其主の食卓より遺
 つる屑を食ふ。二八 其時、イエス答へて、彼に謂へり、嗚呼、婦よ、爾の信は大なり。爾が望
 む如く、爾に成るべし。其女斯の時より愈々たり。二九 イエス、彼處を去りて、ガリラヤ
 の海濱に來り、山に登りて坐せり。三〇 衆くの民は、跛者、瘖者、瘖者、殘缺者、及び他の多く
 の者を伴ひ來りて、イエスの足下に置きたれば、彼之を醫せり。三一 民は瘖者の言ひ、
 殘缺者の飽になり、跛者の歩み、瘖者の見るを見て、之を奇として、イスラエリの神を讚
 榮せり。三二 イエス、其門徒を召して、彼等に謂へり、我斯の民を憫む。蓋已に三日、我と
 併に在りて、食ふ物なし、我彼等を飢ゑて去らしむるを欲せず、恐らくは途中に憊れん。
 三三 門徒彼に謂ふ、我等野に在りて、斯く多くの民を飽かしむるに足る餅を何處より

得んや、^{三〇} イイスス彼等に餅を分ち給ふ。爾等に餅幾何かある。彼等曰へり、七及び些須の小き魚。^{三一} 是に於て民に命じて地に坐せしめ、^{三二} 七の餅と魚とを取りて感謝し之を喰きて、門徒に與へ、門徒民に與へたり。^{三三} 皆食ひて飽き、其餘りたる屑を拾ひて、七の籃に盈てたり。^{三四} 食ひし者は婦と幼童との外、四千人なりき。^{三五} 既に民を去らしめて、彼舟に登り、マゲダラの艦に至れり。

第二十三章 一、^一 フリセイ及びサドケイ等就きて、彼を試みて、天よりする休徴を彼等に示さんことを請へり。^二 彼答へて曰へり、暮には爾等言ふ晴天ならん、天紅なればなり。^三 朝には言ふ、今日風雨ならん、天紅にして、明ければなりと、偽善者よ、爾等天の面を別つを知りて、時の休徴を究むる能はざるか。^四 惡惡の世は休徴を求む而して預言者イオナの休徴の外、之に休徴は與へられざらん、遂に彼等を離れて去れり。^五 門徒彼の岸に濟りて、餅を取ることを忘れたり。^六 イイスス彼等に餅を分ち給ふ。爾等に餅幾何かある。彼等曰へり、七及び些須の小き魚。^七 是に於て民に命じて地に坐せしめ、^八 七の餅と魚とを取りて感謝し之を喰きて、門徒に與へ、門徒民に與へたり。^九 皆食ひて飽き、其餘りたる屑を拾ひて、七の籃に盈てたり。^{一〇} 食ひし者は婦と幼童との外、四千人なりき。^{一一} 既に民を去らしめて、彼舟に登り、マゲダラの艦に至れり。

竊に贖する。九 爾等未だ悟らざるか、又五の餅を五千人に分ちて、幾籃を拾ひしか、二〇
七の餅を四千人に分ちて、幾籃を拾ひしかを記憶せざるか、一 我が爾等にフリセイ
及びカドクイ等の餅を防げと言ひしは、爾等何ぞ餅の事に非ずと悟らざる。二 是に
於て彼等其言ひしは、餅の餅に非ず、乃フリセイ及びカドクイ等の教を防ぐべきこ
さなるを悟れり。三 イイススはフリブのケサリヤの地に來りて、其門徒に問ひて曰
へり、人人我人の子を言ひて誰さか爲す。四 彼等曰へり、或人は投洗イオブンさ爲し、
他の者はイリヤさ爲し、又他の者はイエレミヤ若くは預言者の一人を爲す。五 イイ
ス彼等に爾等爾等は我を言ひて誰さか爲す、一六 シモンペトル對へて曰へり、爾は
ハリストス、活ける神の子なり。一七 イイスス答へて彼に爾へり、イオナの子シモンよ、
爾は、鯛なり、蓋血肉は之を爾に示し、に非ず、乃天に在す我の父なり。一八 我も亦
爾に語く、爾はペトルなり、我此の磐の上に、我の教會を建てん、而して地獄の門は之に
勝たざらん。一九 我、爾に天國の鑰を與へん、爾が地に縛る者は、天にも縛られ、爾が
地に縛る者は、天にも縛かれん。二〇 其時、イイスス其門徒に戒めて、己がハリストスな

るを人に告ぐること勿らしめたり。二二〇 是れよりイエス始めて其門徒に己がイエ
ルサリムに往き長老司祭長學士等より多く苦を受け且殺されて第三日に復活すべ
きことを示せり。二三 べトル彼を援きて諫めて曰へり主よ自ら憐れ此の事爾に及ぶ
べからず。二三 彼は顧みてべトルに謂へりサメナ我より退け爾は我の爲に礙なり蓋
爾は神の事を念はず乃人の事を念ふ。二四 時にイエス其門徒に謂へり人若し我に
從はんさ欲せば己を捨て其十字架を背ひて我に従へ。二五 盜己の生命を救はんさ
欲する者は之を賣はん我の爲に己の生命を賣はん者は之を得ん。二六 人若し全世界
を獲とも己の靈を損はば何の益かあらん抑人何を與へて其靈の價と爲さんや。
二七 盜人の子は其父の光榮を以て其天使等と偕に來らん其時各人に其行に依りて
報いん。二八 我誠に爾等に語ぐ此に立てる者の中には未だ死を嘗めずして人の子が
其國に來るを見んとする者あり。

二九 六日を越えてイエスはべトルイアコフ及び其兄弟イオアンを攜
へ獨彼等を率ゐて高き山に登り彼等の前にて容を變へたり其面は日の如く輝き

其衣は光の如く皎くなれり。 視よ、モイセイ及びイリヤ現れて、彼と與に語れり。 時に
 に、トルイイスに語へり、主よ、我等此に居るは善し、爾若し欲せば、我等此に三の處
 を建て、一は爾の爲、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん。 彼が尙言ふ時、觀よ、
 光れる雲は彼等を盜ひ、且雲より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子、我が喜べる者なり、
 彼に聽け。 門徒聞きて俯伏し、懼るゝこと甚し。 七、イイス就きて、彼等に觸れて曰へ
 り、起きよ、懼るゝ勿れ。 彼等其目を舉げて、獨イイスの外に誰をも見ざりき。 山を
 下る時、イイス、彼等に戒めて曰へり、人の子が未だ死より復活せざる先には、見たる
 事を人に告ぐる勿れ。 一〇、門徒彼に問ひて曰へり、然らば、學士等がイリヤ先に來るべ
 しと云ふは何ぞや。 二、イイス答へて曰へり、然り、イリヤ先に來りて萬事を整ふべ
 し。 一三、惟我爾等に語ぐ、イリヤ既に來り、而して人彼を識らざりき、乃欲する所に隨
 ひて彼を待へり、是くの如く人の子も、彼等より苦を受けん。 一四、是に於て門徒は、其授
 洗イオアンの事を彼等に言ひしを悟れり。 一五、既に民の處に至りしに、或人彼に就き
 て跪きて、一、曰へり、主よ、我が子を憐め、彼癩癩を患ひて苦むこと甚し、蓋、風火に倒

れ亦また壓おさ水みづに倒たふる、一六わ我われ之これを搗たへて、爾なんぢの門徒もんごに就つきたれども、彼等かれら醫いすこと能あたはざりき。一七 イイスス答こたへて曰いへり、噫あ信しんなき悖もごれる世よや、我われ何時いつまでか爾等なんぢらと借借りに在あらん、何時いつまでか爾等なんぢらを忍しのばん、彼かれを此こに我われに搗たへ來きたれ。一八 イイスス冤鬼まごを禁いめたれば、冤鬼まご出いで、其その子こ斯この時ときより愈いわたり。一九その其その時とき門徒もんご私ひそかにイイススに就つきて曰いへり、我等われらが之これを逐おひ出いす能あたはざりしは何なにの故ゆゑぞ。二〇 イイスス彼等かれらに爾いへり、爾等なんぢら借借りなき故ゆゑなり、蓋けだし我われ誠まことに爾等なんぢらに節つぐ、爾等なんぢらに若もし芥種からしねの如ごとき信しんあらば、此この山やまに、此こより彼かれへ移うつれさ言いふさも、移うつらん、又また爾等なんぢらに一いつも能あたはざるこそなからん。二一こ此このの類たぐひに至いたりては、斯かたさ齋さいに由よらざれば出いでざるなり。二三ガリレヤリヤに在ある時とき、イイスス彼等かれらに爾いへり、人ひとの子こは、人ひとの手てに付つされん。二四か彼かれを殺ころさん、而しかうして第三日だいさんじつに彼かれ復活かくわつせん、彼等かれら甚はなはだ哀あはれり。二五カハルナウムナムに來きたりし時とき、殿税でんぜいを集あつむる者もの、ペトルペトルに就つきて曰いへり、爾等なんぢらの師しは、殿税でんぜいを納なむるか。二六彼曰かれいく、然しかり、家いへに入りし時とき、イイスス先まんじて彼かれに爾いへり、シモンシモン、爾なんぢ如何いかに葱おふか、地ちの踏し王わうは、貧み若じやくくは、税ぜいを誰たれより取とるか、己そのの子こよりか、抑お外ほかの者ものよりか。二七ペトルトル曰いく、外ほかの者ものよりす。イイスス彼かれに爾いへり、然しからば、子こは與あらず。二八

然れども我等が彼等を惑さしめん爲に、爾海に往きて、釣を垂れ、初に上る魚を取りて、其口を啓かば、「スタタル」を得ん之を取りて、我ら爾等の爲に彼等に與へよ。

第二八節 當時門徒イエスに就きて曰へり、天國に於ては孰か大なる。一 イイス

ス、幼兒を召して、彼等の中に立て、曰へり、我誠に爾等に語ぐ、爾等若し轉じて幼兒の如くならずば、天國に入るを得ず。故に此の幼兒の如く自ら謙らん者は、是れ天國に於て大なる者なり。又我が名に因りて、是くの如き幼兒の一人を接けん者は、我を接くるなり。然れども我を信する此の小子の一人を即ち誘はん者は、寧ろ石を其頭に懸けられて、海の深處に沈められん。世は誘惑に由りて、騙なる哉、盜誘惑は米らざる可からず、但誘惑を來す人は、騙なる哉。若し爾の手或は爾の足、爾を即ち誘はちて之を棄てよ、爾の爲には、跛或は殘缺にして、生命に入るは、爾の手足の足ありて、永遠の火に投ぜらるゝより勝れり。又若し爾の目、爾を即ち誘はちて、棄てよ、爾の爲には、一の目ありて、生命に入るは、爾の目ありて、火の地獄に投ぜらるゝより勝れり。一〇 慎みて、此の小子の一人をも懸んする勿れ、蓋我爾等に語ぐ、彼等の天使等は

天に於て常に我が天の父の顔を覲る。一一人の子は亡びし者を尋ねて救はん爲に來れり。二三爾等如何に愚ふか、人若し百匹の羊あらんに其一迷はり、九十九を山に遺し往きて迷へる者を尋ねざるか。一三若し之を獲ば、我賊に爾等に語ぐ、彼が其羊の爲に喜ぶこと迷はざりし九十九の者より勝れり。一四斯く此の小子の一人の亡ぶるは、爾等が天の父の旨に非ず。一五若し爾の兄弟爾に罪を得ば、往きて、爾と彼と獨處る時に之を諫めよ、若し爾に聽かば、爾の兄弟を獲たるなり。一六若し聽かずば、一人或は二人を伴ひ、往きて、二三證者の口を以て、凡の言を定むるを致せ。一七若し彼等に聽かずば、教會に告げよ、若し教會にも聽かずば、爾の爲には異邦人と稅吏との如くなるべし。一八我賊に爾等に語ぐ、凡そ爾等が地に縛る者は、天にも縛られ、爾等が地に釋く者は、天にも釋かれん。一九又賊に爾等に語ぐ、若し爾等の中二人地に於て心を合せて、凡の事を求めば、何を求むるに論なく、天に在す我が父より彼等に賜はらん。二〇蓋三人或は三人の我が名に因りて集る處には、我も其中に在るなり。二一其時、ト、彼に就きて曰へり、主よ、我が兄弟、我に罪を得ば、幾次之に免すべきか、七次迄か。二三、イ、イ、ス

彼に謂ふ、我爾に七次迄と言はず、乃七十次の七倍迄。是の故に天國は、其諸僕と會
 計せんと欲せし君王に似たり。二、會計を始めし時、一千万金の債ある者を彼に曳
 來れるあり。三、其債ふこと能はざるに因りて、主は彼の身と、其妻子と、其悉くの所有
 物を賣ぎて償はんことを命ぜり。四、其僕俯伏して彼を拜して曰へり、主よ、我を寛
 せよ、我、盡く爾に償はん。五、其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。六、其僕
 出で、一人の同僚の己に銀一百の債ある者に遇ひて、之を執へ、喉を扼めて曰へり、爾
 が負ふ所を我に償へ。七、其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰へり、我を寛うせよ、我
 盡く爾に償はん。八、然れども、彼肯はず、乃往きて、其債を償ふに至るまで、之を獄に
 下せり。九、他の同僚之を見て、甚憂ひ來りて有りし所を悉く主に告げたり。一〇、其時
 主は彼を召して曰く、恐しき僕よ、爾我に求めしに因りて、我其債を、悉く爾に免せり。
 一一、我が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非ずや。一二、主乃怒りて、其
 悉くの債を償ふに至るまで、彼を獄吏に付せり。一三、若し爾等、各其心より己の兄弟
 に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く、爾等に行はん。

第二十章

イイスス此等の言を寛りて、ガリレヤを出で、イオルダンの外よりイサ
 テヤの境に來れり。二多くの民彼に従ひしに、彼は彼處に於て彼等を醫せり。三
 イ等就きて彼を試みて曰へり、人何の故を論ぜず、其妻を出すは宜しきか。四
 曰へり、爾等元始に人を造りし者は、之を男女に造れりと言まさりしか。五
 又曰へり、是の故に人は其父母を離れ、其妻に著きて、二の者一體と爲らん。六然らば
 彼等は既に二人に非ず、乃一體なり、故に辨の親せし者は、人之を分つ可からず。七
 彼等曰く、然らばモイセイが離婚を與へて、之を出すを命ぜしは何ぞや。八
 彼は之に謂ふ、モイセイは爾等の殘忍なるに因りて、爾等に妻を出すを容せり、然れども元始には斯く
 あらざりき。九我爾等に謂く、淫の故に非ずして、其妻を出し、他に娶る者は、
 姦淫を行ふなり、出されたる婦を娶る者も、姦淫を行ふなり。一〇
 其門徒彼に謂ふ、若し人の其妻に於ける本分は、是くの如くば、
 娶妻らざらん。二彼曰へり、此の言は、人皆納るゝに非ず、
 乃賦へられたる者ののみ。三蓋母の胎より生れつきたる
 獨者あり、又人より聞せられたる獨者あり、又天國の爲に自ら
 聞せし獨者あり、之を納るゝことを能する者は納るべし。一三

幼児をイイスマに攜へ來りて、彼等に其手を按せて購らんことを求むる者ありしに、
門徒之を戒めたり。一四然れどもイイスマ曰へり、幼児を容して、我に就くを禁する毋
れ蓋天國は是くの如き者に屬す。一五乃彼等に手を按せて彼處を去れり。一六
或人彼に就きて曰へり、善なる師よ、我永遠の生命を得ん爲に、何の善き事を爲すべき
か。一七彼は之に謂へり、爾は何ぞ我と善し稱ふる獨神より外に善なる者なし、爾若し
生命に入らんを欲せば、誠を守れ。一八彼曰く、何の誠ぞ。イイスマ曰へり、殺す毋れ淫す
る毋れ、竊む毋れ、妄證する毋れ、一九爾の父母を敬へ、又爾の隣を愛すること己の如く
せよ。二〇少き者彼に謂ふ、我幼より皆之を守れり、尙足らざる者は何ぞや。二一
イイスマ之に謂へり、爾完全ならんを欲せば、往きて、爾の所有を售りて、貧者に施せ、然ら
ば財を天に有たん、且來りて我に従へ。二三少き者此の言を聞きて憂ひて去れり、大なる
資産を有てる故なり。二四イイスマ其門徒に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、富める者は
天國に入るこそ難し。二五又爾等に語ぐ、駱駝が針の孔を穿るは、富める者は、神の國に
入るより易し。二六門徒之を聞きて、甚驚きて曰へり、然らば誰か能く救はれん。二六

イイスス目を注ぎて、彼等に問へり、此れ人には能せざる所なり、惟神には能せざる所なし。二七そのとき 其時ペトル答へて彼に問へり、視よ、我等一切を捨て、爾に従へり、然らば我等何を得んか。二八 イイスス彼等に問へり、我誠に爾等に詔ぐ、爾等我に従へる者は復生の時、人の子が其光榮の位に坐するに及びて、亦十二の位に坐して、イメライリの十二支派を審判せん。二九 凡そ我が名の爲に家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は子、或は田疇を舍つる者は、百倍を受け、且永遠の生命を嗣がん。三〇 惟多く先なる者は後になり、後なる者は先にならん。

蓋天國は其葡萄園に工人を傭はん爲に、朝早く出でたる家主の如し。工人と一日に銀一枚を約して、後等を其葡萄園に遣せり。第三時の頃出で、別に市に空しく立てる者を見て、之に問へり、爾等も我が葡萄園に往け、我至當の者を爾等に與へん、彼等往けり。又第六時及び第九時の頃に出で、是くの如く行へり。第十一時の頃出で、別に空しく立てる者に遇ひて、之に問ふ、爾等何ぞ終日此に空しく立てる。彼等曰く、我等を傭ふ者なかりし故なり。彼は之に問ふ、爾等も我が葡萄

園に往け、然らば至當の者を受けん。一 怒に及びて葡萄園の主其家宰に謂ふ、工人を呼びて、其値を給せよ。後なる者より始めて先なる者に及べ。第十一時の頃の者來りて、各銀一枚を受けたり。一 二の者來りて意へらく是より多く受くるならん。然れども彼等も各銀一枚を受けたり。二 之を受けて家主を怨みて、三 曰へり、此の後なる者は一時のみ勞きしに、爾は彼等を終日の苦勞と暑さを忍びたる我等と等しくせり。一 三 彼其一人に答へて曰へり、友よ、我爾に羨ならざることを爲さず、爾は我と銀一枚を約せしに非ずや、一 四 爾の物を取りて往け、我此の後なる者にも爾と等しく與へんと欲す。一 五 或は我の物を以て、我が欲する如く行ふは宜しからずや、抑我が善きに因りて、爾の目悪しきか。一 六 是くの如く後なる者は先に、先なる者は後に、ならん。蓋召されたる者は多けれども、選ばれたる者は少し。一 七 一 イイスス イエルサリムに上る時、途中十二門徒を招きて、之に謂へり、一 八 視よ、我等 イエルサリムに上る人の子は、司祭、諸長及び學士等に付されん。彼等之を死に定め、一 九 之を異邦人に付して、辱め、鞭ち、十字架に釘せしめん。而して、彼第三日に復活せん。二〇 時にセラサイの子

の母、其子と偕に彼に就きて拜して求むる所あり。二一 彼は之に俯へり、爾何を欲するか。曰く、我が此の二人の子が爾の國に於て、一は爾の右に、一は爾の左に坐せんことを許せ。二三 イイセス答へて曰へり、爾等求むる所を知らず、爾等我が飲まんことを欲むことを能するか。我が受くる洗を受くることを能するか。彼等曰く、能す。二三 彼は之に俯ふ、爾等は我が爵を飲み、我が受くる洗を受けん、然れども我が右及び我が左に坐することは、我が與ふべきに非ず、乃我が父より備へられたる者に與へられん。二四 十門徒之を聞きて、二人の兄弟を慍れり。二五 イイセス彼等を召して曰へり、猶民の王侯其民を主り、大人等其上に權を執るは、爾等の知る所なり。二六 惟爾等の中には斯くある可からず、乃爾等の中に大ならんことを欲する者は、爾等の役者と爲る可し。二七 爾等の中に首たらんことを欲する者は、爾等の僕と爲るべし。二八 蓋人の子の來りしは、人を役ばん爲に非ず、乃人に役ばれ、且己の生命を與へて、衆くの者の贖を爲さん爲なり。二九 彼等イエリホンを出づる時、衆くの民彼に従へり。三〇 視よ、道の傍に坐せる二人の啓者、イイセスの過ぐるを聞きて、呼びて曰へり、主、ダワードの子よ、我等を憐め。三一 民彼

等を禁めて黙さしむれども、彼等愈呼びて曰へり、主、ダワードの子よ、我等を憐れ。三三
イイスス止りて、彼等呼びて曰へり、我が爾等に何を爲さんことを欲するか。三三
等曰く、主よ、我等の目の啓かれんことを。三四 イイスス憐みて、彼等の目に觸れたれば、
目直に見るを得て、彼等イイススに従へり。

三三 一 イエルサリムに近づき、橄欖山に廻り、ダワードの子よ、我等に來りし時、イイス
ス二人の門徒を遣して、二之に謂へり、爾等の前なる村に往け、直に繋ぎたる牝驢、及
び之を轡に在る小驢に、返はん、之を解きて、我に牽き來れ。三三 若し爾等を語る者あら
ば、主之を需むと言へ、然らば直に之を遣さん。三四 此れ皆成りしは、預言者を以て言はれ
し事に應ふを致す曰く、五 シオンの女に告げて云へ、親よ、爾の王は溫柔にして、牝驢
及び重任を負ふ者の子なる小驢に乘りて、爾に隨む。門徒往きてイイススの命
ぜし如く行ひ、牝驢及び小驢を牽き來りて、己の衣を其上に置き、彼其上に乗れ
り。ハ衆くの民は己の衣を途に布き、他の者は樹の枝を伐りて途に布けり。九 且前に行
き後に従ふ民は呼びて曰へり、ダワードの子に「オサンナ」、主の名に因りて來る者は祝

福せらるる至高きに「オサンナ」。一〇 彼がイエルサリムに入りし時、城擧りて騒ちて曰へり、此れ誰ぞや。二一 民曰へり、此れイエイス、ガリレヤのナザレトの預言者なり。二三 イイス、神の殿に入りて、其中に貿易する者を悉く逐ひ出し、免錢する者の案と偽を竊ぐ者の椅を倒して、二四 彼等に謂へり、我が家は祈禱の家と稱へられん、と録されたるに、爾等之を盜賊の巢窟と爲せり。二五 醫者及び跛者殿に於て彼に就きたれば、彼之を醫せり。二六 司祭、隊長と學士等とは、其行ひし奇蹟を見、又童子等が殿に呼びて、ダワドの子に「オサンナ」と云ふを見て、憤りて、二七 彼に謂へり、爾此の輩の言ふ所を聞くか。イエイス、彼等に謂ふ、然り、爾等未だ爾は嬰兒と哺乳兒との口より讚美を備へたりと云へるを、讀まざりしか。二八 遂に彼等を離れて、城の外に出で、ワスニヤに至りて、彼處に宿れり。二九 朝に及びて、城に返る時、飢ゑたり。三〇 道の旁に一の無花果樹の在るを見て、之に近づきしに、一も得る所なし、惟葉あるのみ、乃之に謂ふ、今より後、永く果を結ばざれ、無花果樹、立に枯れたり。三一 門徒之を見て、奇として曰へり、無花果樹、何ぞ立に枯れたる。三二 イイス、答へて、彼等に謂へり、我誠に爾等に謂く、爾等若し信あ

りて疑はずば唯無花果樹に於ける事を行はんのみならず乃此の山に移りて海に投
ぜよと云ふとも亦成らん。二三 且凡そ祈禱の時信じて求むる所は悉く之を得ん。二三
彼が殿に來りて教ふる時司祭諸長と民の長老等と彼に就きて曰へり爾何の權を以
て是を行ふか誰か爾に此の權を與へたる。二四 イイスス答へて彼等に謂へり我も亦
一言爾等に問はん若し之を我に語れば我も何の權を以て是を行ふを爾等に語らん。
二五 イオアンの洗禮は奚よりせしか天よりか抑人よりか。彼等竊に議して曰へり若
し天よりと云はば爾等何ぞ彼を信ぜざりしと云はん。二六 若し人よりと云はば我等
民を畏る蓋皆イオアンを以て預言者とするなり。二七 遂にイイススに答へて曰へり
知らず。彼も亦之に謂へり我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げざらん。二八 然れ
ども爾等如何に意ふか或人に二子の子あり其第一の者に就きて曰へり子よ往きて
今日我が葡萄園に工作せよ。二九 彼答へて曰へり我欲せず然れども後悔いて往けり。
三〇 又第二の者に就きて是くの如く言ひしに彼答へて曰へり主よ我往く而して往
かざりき。三一 二人の中孰か父の旨を行ひたる。曰く第一の者なり。イイスス彼等に謂

ふ、我族に爾等に誦ぐ、稅吏と娼妓とは爾等に先だちて神の國に往く。三三 蓋イオア
ン義の道を以て爾等に来りしに、爾等彼を信ぜざりき、然れども稅吏と娼妓とは彼を
信ぜり、爾等は之を見たる後も、仍悔いず、又彼を信ぜず。三三 爾等復一の譬を聽け、家
主あり葡萄園を樹る、之に籬を環らし、其中に酒樽を擲り、塔を建て、之を園丁に託して、
他方に往けり。三三 果期近づきたれば、彼は其果を收めん爲に、諸僕を園丁に遣し、
三三 園丁は其僕を執へて、政者を打ち、或者を殺し、或者を石にて撃てり。三三 復他の僕
を先より多く遣し、之にも是くの如く行へり。三三 遂に己の子を彼等に遣して曰
へり、我が子に愧ぢんま。三三 然れども園丁子を見て相誦りて曰へり、此れ鬪子なり、往
きて彼を殺して、其鬪樂を取らん。三三 乃彼を執へて、葡萄園の外に曳き出して殺せ
り。三三 然らば葡萄園の主來らん時、何をか此の園丁に行はん。三三 彼等曰く、此の惡し
き者を情なく滅し、葡萄園を以て他の園丁、即時に及びて、彼に果を收めん者に託せ
ん。三三 イスス彼等に誦ふ、爾等は聖書に、工師が棄てたる石は、屋隅の首石と爲れり、
此れ主の成す所にして、我等の目に奇異なりとす、云ふ未だ嘗て讀まざりしか。

故に我爾等に誦く神の國は爾等より奪はれて、其果を結ぶ民に與へられん。且此の石の上に倒るゝ者は壞られ、此の石の其上に墜つる者は碎かれん。司祭長はさろ、セイ等と彼の譬を聞きて、其彼等を指して言ふを悟り、彼を執へんを謀りたれども、民を懼れたり、蓋民は彼を以て預言者とせり。

三三三三

一 イイスス又譬を以て彼等に誦りて曰へり。二 天國は其子の爲に婚

筵を設けたる君王の如し。三 彼其諸僕を遣して召されし者を婚筵に招きたれども、彼

等來るを欲せざりき。又他の僕を遣して曰へり、召されし者に告げて云へ、視よ、我已に筵を具へ、我が牛と肥れたる畜さ己に宰りて、一切備はれり、婚筵に來れ。然れども、彼等は顧みずして、或者は其田に、或者は其貿易に往けり、餘の者は彼の諸僕を執へ、辱しめて之を殺せり。王之を聞きて怒り、其軍を遣して彼の兇人を滅し、彼等の邑を燬けり。時に彼其諸僕に謂ふ、婚筵備はりたれども、召されし者は堪へず、故に爾等通衢に往きて、遇はん者を悉く、婚筵に招け。一 其僕途に出で、凡そ遇ひたる者を、悉きと善きとを問はず、之を集めたれば、婚筵に席坐する者滿ちたり。二 王は席坐する

者を觀ん爲に入りて、彼處に一人の婚禮の服を衣さる者あるを見て、二三之に謂ふ友
よ、爾何ぞ婚禮の服を衣すして此に入りたる彼默然たり。一三其時王は役者に謂へり、
彼の手足を縛りて、彼を取りて、外の殿暗に投ぜよ、彼處に哀哭さ切齒さあらん。一四蓋
召されたる者は多けれども、選ばれたる者は少し。一五其時よりセイ等往きて、如何に
して彼を其首に因りて留せんと謀れり。一六遂に己の門徒をイロドの黨と偕に彼に
遣して曰く、師よ、我等は爾が眞なる者にして眞に神の道を教へ何人にも偏らざるな
し、知る盜用は税を以て人を取らず。一七故に我等に語げよ、爾如何に意ふか、税をケサリ
に納むるは宜しや否や。一八イエス其惡意を知りて曰へり、偽善者よ、何ぞ我を試み
る。一九税金を我に示せ。彼等銀一枚を掲へ來れるに、二〇彼曰く、斯れ誰の像と號なる
か。二一曰く、ケサリの。是に於て彼等に謂ふ、然らばケサリの物をケサリに納め、神の物
を神に納めよ。二三彼等之を聞きて奇と爲し、彼を離れて去れり。二四是の日、カドケイ
等、即復活なしと言ふ者、彼に就きて問ひて、二五曰く、師よ、セイセイ云へり、人子なく
して死せば、其兄弟其妻を娶りて、兄弟の嗣を興すべしと。二六我等の中に兄弟七人あ

りしが、第一の者娶りて死し子なきが故に其妻を弟に遺せり。 二六其二三其七に至るまで皆然り。 二七其後妻も亦死せり。 二八然らば復活には此の婦は七人の中誰の妻と爲らんか蓋皆之を娶れり。 二九 イイスス彼等に答へて曰へり爾等は聖書をも神の能をも知らずして迷へり。 三〇復活には娶らず嫁がす乃神の使等の如く天に在るなり。 三一死者の復活に付きては神が爾等に語つて、 三二我はアウラムの神イサアクの神イアコフの神なりと言ひしことを爾等未だ讀まざりしか神は死者の神に非ず、乃生者の神なり。 三三民聞きて其訓を奇せり。 三四 三リセイ等は彼がサドケイ等に言なからしめたりと聞きて相集れり。 三五其中なる一人の律法師彼を試みて問ひて曰へり、 三六師よ律法の中に何の誠が大なる。 三七 イイスス之に謂へり爾心を盡し、心を盡し、意を盡して、主爾の神を愛せよ、 三八此れ誠の第一にして大なる者なり。 三九第二は是に同じき者、即爾の鄰を愛すること己の如くせよ。 四〇 新の二の誠には悉くの律法と預言者と聚れり。 四一 三リセイ等の集りし時イイスス之に問ひて曰へり爾等ハリストスの事を如何に意ふか彼は誰の子なるか。 曰くダマドの子な

り。四三 彼曰く然らば如何ぞダワドは聖神に由りて彼を主と稱ふる云く、四四 主我が主に謂へり爾我が右に坐して我が爾の敵を爾の足の発と爲すに迄れさ。四五 然らばダワド彼を主と稱ふれば如何ぞ彼は其子たる。四六 一人も之に言を答ふる能はず是の日より敢て復彼に問ふ者なかりき。

四三 四四 四五 四六

一 當時イイスス民及び其門徒に語りて曰へり。二 モイセイの位に學

士及びフリセイ等は坐せり。故に彼等が凡そ爾等に守らんことを命ずる者は守りて之を行へ然れども彼等の行に效ふ勿れ蓋彼等は言ひて行はず。彼等は重く且負ひ難き任を纏りて人の用に負はすれども己は一の指を以てすら之を動かすを欲せず。凡そ彼等が行ふ所は人に見られん爲に行ふ其佩經を闕くし其衣の裾を大にす。又筵には上座、會堂には首座、街衢には閑安、人人よりは夫子夫子と稱へらるゝを好む。然れども爾等は夫子と稱へらるゝ勿れ蓋爾等の師は一、即ハリストスなり爾等は皆兄弟なり。亦地に在る者を父と稱ふる勿れ蓋爾等の父は一、即天に在る者なり。一〇 亦導師と稱へらるゝ勿れ蓋爾等の導師は一、即ハリストスなり。

爾等の中に大なる者は爾等の役者となるべし。一三 蓋自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。一四 爾なる故爾等偽善なる學士及びフリセイ等は、蓋爾等は天國を人の前に閉ぢて、自ら入らず入らんと欲する者にも入るを許さず。一五 爾なる故爾等偽善なる學士及びフリセイ等は、蓋爾等は彼の家を呑み伴りて長き所を爲す、是に由りて更に重き定罪を受けん。一六 爾なる故爾等偽善なる學士及びフリセイ等は、蓋爾等は一人をも教に遣ましめん爲に、海陸を巡り、既に遣めば彼を爾等に倍したる地獄の子と爲す。一七 爾なる故爾等偽善なる學士及びフリセイ等は、蓋爾等は云ふ、人若し殿を指して誓はば、事なし殿の金を指して誓はば、償ふべしと。一八 爾にして誓なる者は、孰か大なる金か、抑金を聖ならしむる殿か。一九 又云ふ、人若し祭壇を指して誓はば、事なし其上の禮物を指して誓はば、償ふべしと。二〇 爾にして誓なる者は、孰か大なる禮物か、抑禮物を聖ならしむる祭壇か。二一 故に祭壇を指して誓ふ者は、祭壇及び凡そ其上に在る者を指して誓ふなり。二二 又殿を指して誓ふ者は、殿及び其中に居る者を指して誓ふなり。二三 又天を指して誓ふ者は、神の寶座及び其上に坐する者を指

して醫ふなり。二二二禍なる哉爾等偽善なる學士及びフリセイ等よ、盜爾等は薄荷尚香馬岸の十分の一を納めて、律法の尤重き義と仁と信とを遺てたり、此れ行ふ可きなり彼も亦遺つ可からず。二二四醫なる嚮導者よ、爾等は岐を遠して、駱駝を呑む者なり。二二五禍なる哉爾等偽善なる學士及びフリセイ等よ、盜爾等は杯と皿との外を深むれども其内には食糞と不義と充てり。二二六醫なるフリセイよ、先づ杯と皿との内を深めよ、其外も深くならん爲なり。二二七禍なる哉爾等偽善なる學士及びフリセイ等よ、盜爾等は白く塗りたる壁に似たり、外は美しく見ゆれども、内は骸骨と諸の汚穢と充てり。二二八是くの如く爾等も外は人人に義なる者に見ゆれども、内は偽善と不法と充てり。二二九禍なる哉爾等偽善なる學士及びフリセイ等よ、盜爾等は預言者の壁を建て、義者の墓を飾り、二三〇且云ふ、我等若し我が先祖の日に在りしならば、彼等が預言者の血を流すことに與せざりしならん。二三一是くの如く爾等は自ら己が預言者を殺し、者の子たるを證す。二三二爾等先祖の墓を充たせ。二三三蛇蝎の類よ、爾等安ぞ地獄の定即を遣れん。二三四故に視よ、我爾等に預言者と智者と學士とを遣す而して、爾等は其中或者

と殺し、又は十字架に釘し、或者を甬等の會堂に纏ち、又は邑より邑に逐はん、三五凡そ地上に流されし義人の血發なるアツリの血より、甬等が殿を築き、祭壇との間に殺し、三六ラヒヤの子ザハリヤの血に至るまで、皆甬等に歸せん爲なり。三六我誠甬等に語ぐ、此等皆斯の代に歸せん。三七イエエルサリムよ、イエエルサリムよ、預言者を殺し、甬に遣されし者を石にて撃つ者よ、我幾次か、母鷄が其雛を翼の下に集むる如く、甬の弟子を集め、三八我欲したれども、甬等は欲せざりき。三八親よ、甬等の家は遠しくして、甬等に遣さる。三九蓋、我甬等に語ぐ、今より後、主の名に因りて來る者は、祝福せらるる云ふに至るまで、甬等我を見ざらん。

三三 三四 三五

一 イイスス出で、殿より往けるに、其門徒彼に就きて、殿の遺構を觀さんさせり。三三イイスス彼等に語へり、甬等、三四蓋、此等の者を見るか、我誠甬等に語ぐ、此には一の石も石の上に遺らずして、皆圮されん。三五彼が橄欖山に坐せる時、門徒私に彼に就きて曰へり、請ふ、我等に告げよ、何の時に此の事あらん、又甬の降臨と世の終末との兆は如何なるか。三六イイスス彼等に答へて曰へり、慎みて人に惑はさるゝ勿れ。

蓋多くの者は我が名を冒して來り、我はハリストスなりと云ひて多くの者を惑はさん。又爾等、戦の風聲を聞かん、慎みて懼る、勿れ蓋此れ皆有るべし、惟此れ尙末期には非ず。蓋民は民を攻め、國は國を攻めん、饑饉、疫病、地震、處處に在らん。此れ皆苦難の始なり。其時人爾等を艱苦に付し、爾等を殺し、爾等我が名の爲に萬民に憎まれん。一、其時多くの者は賤き相付し、相憎まん。二、又多くの偽預言者起りて、多くの者を惑はさん。三、不法の増すに因りて、多くの者の愛は冷にならん。四、終に至るまで忍ぶ者は救はれん。五、又此の天國の福音は徧く天下に傳へられん、萬民に證を爲さん爲なり、然る後末期至らん。六、故に爾等預言者ダニイルを以て言はれたる荒廢の憎むべき物の聖處に立つを見れば、讀む者悟るべし。七、其時イウテヤに在る者は山に遁るべし。八、虛の上に在る者は、其家より物を取らん爲に下るべからず、一八、田に在る者は其衣を取らん爲に、歸るべからず。一九、當日には妊める者と乳を哺まする者と禍なる哉。二〇、爾等の遁ぐるここの冬或は安息日に在らざらん爲に祈れ。二一、蓋其時大なる患難あらん、世界の始より今に至るまで未だ此くの如きは

あらざりき、後のちも亦またあらざらん。三三 若もし其その日ひ滅めぜられずば、凡おほその肉にく身しんの救すくはるもの者ものな
 からん、然しかれども選えらばれたる者ものの爲ために其その日ひ滅めぜられん。三三 其その時とき若もし人ひと爾なんぢら等に告つげて、
 親おやよ、ハリストス此こゝに在あり、或あるは彼かに在あり、云いはば、信しんする勿なれ。三四 彼かれハリスト及び
 偽いつはり預よ言げん者しや起おこりて、大おほいなる奇き徴ちゆうと奇き蹟せきとを施ほこし、若もし能よくば、選えらばれたる者ものをも惑まどは
 すに至いたらん。三五 親おやよ、我われ預よめ爾なんぢら等に言いへり。三六 故ゆゑに若もし爾なんぢら等に告つげて、親おやよ、後かれ野
 に在あり、云いふ者ものあらば、出いづる勿なれ、親おやよ、彼かれは密みつ室しつに在あり、云いふ者ものあらば、信しんする勿なれ。
 三七 蓋おほ電でんの東あづまより發はつして西にしにまで閃ひらくが如ごとく、人ひとの子この來きたるも亦また是しかくの如ごとくなら
 ん。三八 蓋おほ屍しかばねの在ある所ところには、鷲じゆ集あつらん。三九 其その日ひの患うれ難なんの後のち、忽たちち日は、其その光ひかりを
 施ほこさず、星ほしは天てんより隕おちち、天てん勢せいは震ふるひ助たすかん。四〇 其その時とき人ひとの子この記しるしは、天てんに現あらはれん、其その時とき
 地上ちじやうの諸しよ族ぞくは哭なき、哀あはしみ人ひとの子こが機けん能のうと大おほいなる光くわう榮えいとを以もつて、天てんの雲くもに乘のりて來きたるを
 見みん。三一 彼かれは其その天てん使し等らを大おほいなる聲こゑの響うひと與ともに遣つかはせ、彼かれら其その選えらばれたる者ものを四し風ふうよ
 り集ありて、天てんの此この極はてより彼かの極はてに至いたらん。三二 無む花はな果くだ樹じゆの華はなを擧あげ、其その枝えだ已すでに柔はろにし
 て葉は萌もせば、爾なんぢら等らの近ちかきを知る。三三 是こゝの如ごとく、爾なんぢら等ら凡おほそ此こゝ等らの事ことを見みば、時ときの近ちかく

して門に在るを知れ。三四我誠に爾等に語ぐ、此の代未だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。三五天地は廢せん然れども我が言は廢せざらん。三六其日其時は之を知る者なし、天の使等も知らず、惟我が父のみ之を知る。三七然れどもノイの日の如く、人の子の來るも亦是くの如くならん。三八洪水の先の時、ノイの方舟に入る日まで、人人食ひ飲み、娶り嫁きて、三九洪水の來りて、盡く彼等を滅すに至るまで、知らざりし如く、人の子の來るも亦是くの如くならん。四〇其時二人田に在らんに、一人は取られ、一人は遺さる。四一又たり、二の婦人を旋かんに、一人は取られ、一人は遺さる。四二故に徹醒せよ、爾等の主の何の時に來るを知らざればなり。四三若し家主盜賊の何の更に來るを知らば、徹醒して、其家を穿つを許さざらん、是れ爾等の知る所なり。四四是の故に爾等も己を備へよ、蓋爾等が意はざる時に、人の子來らん。四五孰か忠にして、智なる僕、其主が隣僕の上に立て、時に隨ひて、彼等に糧を與へしむる者たる。四六主の來る時、彼が斯く行ふを見れば、其僕、罵なり。四七我誠に爾等に語ぐ、彼を立て、其一切の所有を嘗らしめん。四八然れども若し其惡しき僕、心の中に我が主の來るは、迎がらん、と曰ひて。四九

其同條を打ち、酒徒と僂に食飲せば、乃俟たざる日、知らざる時に其僕の主來りて、彼を斷ち、彼を偽善者と同じき分に處せん、彼處に哀哭と切齒とあらん。

第三十四節

厥時天國は燈を執りて、出で、新娶者を迎ふる十人の處女の如く

ならん。其中五人は智く、五人は愚なり。愚なる者は其燈を執りて、己さ僂に油を取らざりき。智き者は其燈と僂に其器に油を取れり。新娶者の迎はるに依りて、皆假寐して眠れり。中夜呼ぶ聲ありて曰く、視よ、新娶者來る、出で、彼を迎へよ。其時處女皆起きて、其燈を整へたり。愚なる者は智き者に謂へり、爾等の油を分けて我等に與へよ、蓋我等の燈は熄ゆ。智き者答へて曰く、恐らくは我等と爾等とに足らざらん、窺る者に往きて、己の爲に買へ。一〇 彼等往きて買ふ時、新娶者來り、僂を爲し、若彼さ僂に婚筵に入りて門閉されたり。一 後其餘の處女も來りて曰ふ、主よ、主よ、我等の爲に啓け。二三 彼答へて曰へり、我誠に爾等に語ぐ、我爾等を識らずき。故に徹醒せよ、蓋爾等は何の日何の時に、人の子の來らんことを知らず。一四 蓋彼は他の地に往かんとして、其僕を召し、彼等に其所有を託したる人の如し。一五 一人には銀

五千一人には二千一人には一千、各其才能に應じて、之を與へて直に超ち行けり。一、
五千を受けし者は往きて、之を用ゐて、他に五千を獲たり。一七に五千を受けし者も亦
他に二千を獲たり。一八、一千を受けし者は往きて、之を地に埋めて、其主の銀を藏せ
り。一九、久しくして後、此の諸侯の主歸りて、彼等と會計せり。二〇、五千を受けし者は他
に五千を擲へて、就きて曰く、主よ、爾五千を我に託せり、視よ、我之を以て他に五千を獲
たり。二一、其主後に爾へり、善い故善にして忠なる僕よ、爾は寡き者に於て忠なり、我爾
に多くの者を督らしめん、爾が主の歡樂に入れ。二三、二千を受けし者も亦就きて曰へ
り、主よ、爾二千を我に託せり、視よ、我之を以て他に二千を獲たり。二三、其主後に爾へり、
善い故善にして忠なる僕よ、爾は寡き者に於て忠なり、我爾に多くの者を督らしめん、
爾が主の歡樂に入れ。二四、一千を受けし者も亦就きて曰へり、主よ、我爾が嚴酷なる人
にして、掃かざりし處に獲り、散らさざりし處に聚むるを知れり。二五、是を以て我懼れ
て、往きて、爾の銀を地に藏せり、視よ、爾の物は、爾之を有てり。二六、主後に答へて曰へり、
惡しくして怖れる僕よ、爾は我が掃かざりし處に獲り、散らさざりし處に聚むるを知

れり、^{二七}故に我が銀を貿易者に託すべかりしなり、然らば我來りて本銀と利とを受
けしならん。^{二八}故に彼より一千を取りて、十千を有てる者に與へよ。^{二九}蓋凡そ有
てる者には與へて、餘あらしめ、有たざる者よりは其有てる物も奪はれん。^{三〇}無益な
る僕を外の幽暗に投ぜよ、彼處に哀哭と切齒とあらん。昔ひ擧りて呼べり、耳ありて聽
くを得る者は聽くべし。^{三一}人の子は其光榮を以て、諸の聖なる天使と偕に來らん、時
其光榮の寶座に坐し、^{三二}萬民彼の前に集り、而して彼は、牧者の綿羊を山羊より別つ
が如く、彼等を相別ちて、^{三三}綿羊を其右に、山羊を其左に置かん。^{三四}其時王は右に在
る者に酬はん、我が父に祝福せられし者よ、來りて、創世以來爾等の爲に備へられたる
國を嗣つげ。^{三五}蓋我が飢ゑし時、爾等我に食はせ、我が渴きし時、我に飲ませ、我が旅せし
時、我を宿らせ、^{三六}我が裸なりし時、我に衣せ、我が病みし時、我を顧み、我が獄に在りし
時、我に來れり。^{三七}時に義人等彼に答へて曰はん、主よ、我等何時爾の飢うるを見て、食
はせ、或は渴くを見て、飲ませしか。^{三八}何時爾の旅するを見て、宿らせ、或は裸なるを見
て、衣せしか。^{三九}何時爾の病み、或は獄に在るを見て、爾に來りしか。^{四〇}王彼等に答へ

て曰はん、我誠に爾等に誦ぐ、爾等が之を我が此の至き小き兄弟の一人に行ひしは、即
我に行ひしなり。 其時又左に在る者に誦はん、誦はれし者よ、我を離れて、惡魔及び
其使等の爲に備へられたる永遠の火に往け。 蓋我が飢ゑし時、爾等我に食はせず、
我が渴きし時、我に飲ませず、 我が旅せし時、我を宿らせず、我が裸なりし時、我に衣
せず、我が病み又は獄に在りし時、我を顧みざりき。 時に彼等も答へて曰はん、主よ、
我等何時爾の飢ゑ、或は渴き、或は旅し、或は裸なる、或は病み、或は獄に在るを見て、爾に
事へざりしか。 其時彼等に答へて曰はん、我誠に爾等に誦ぐ、爾等が之を此の至き
小き者の一人に行はざりしは、即 我に行はざりしなりき。 此等の者は永遠の苦
に往き、我人等は永遠の生命に往かん。

第二十六章

一 イイスス 悉く此等の言を免へて、其門徒に誦へり、 爾等知る、二
日の後は逾越節なり、人の子は十字架に釘せらるゝ爲に付されん。 其時司祭諸長と
學士等と民の長老等とは、カイアスと名づくる司祭長の中庭に集り、 陰計を用ひて
イイススを執へて、之を殺さんと謀れり。 惟曰へり、節期に於てすべからず、恐らくは

民の中に亂は起らん。 イイススワ、ニヤに於て、猶者シモンの家に在りし時、
婦人^{をん}がたひた^ににほひ^{あら}ら^もち玉の盒を搦へ、彼の席坐に就きて、其首に沃げり。 門徒之
を見て、^みて^いき^まは^りて曰へり、此の糜費を爲すは何の爲ぞ、蓋此の香膏は多くの價に賣りて
貧しき者に施すを得しならん。 一〇 イイスス之を知りて、彼等に謂へり、何ぞ婦人を擻す、
彼は我が爲に善き功を爲せり。 蓋貧しき者は常に爾等と偕にす、我は常に爾等と
偕にするにあらず。 一一 彼は此の香膏を我が體に沃ぎて、我を葬に備へたり。 一二 我誠
に爾等に語ぐ、全世界の中、凡そ此の福音の傳へられん處には、此の婦人の爲し、事も速
べられて、其記念と爲らん。 一三 其時十二の一、イワタ、イイスカリヤト、と名づくる者、司祭
諸長に往きて、 一四 曰へり、爾等我に幾何を與へんと欲するか、我彼を爾等に付さん、彼
等は之に銀三十を約せり。 一五 其時より彼を付さん爲に好き機を窺へり。 一六 除酵節
の首の日、門徒、イイススに就きて曰へり、我等が何處に爾の爲に、逾越節筵を備へんこ
とを欲するか。 一七 彼曰へり、城に往き、某に至りて曰へ、師言ふ、我が時近し、我門徒と偕
に爾の家に、逾越節筵を行はんと。 一八 門徒、イイススの命ぜし如く、行ひて、逾越節筵を

備へたり。二〇 暮に及びて、彼十二門徒と借に席坐せり。二一 食する時彼曰へり、我誠に
爾等に語ぐ、爾等の中の一人は我を賣らん。二二 彼等大に憂ひて、各彼に謂へり、主よ、
是れ我に非ずや。二三 答へて曰へり、我と借に手を盂に著けし者は、此の人我を賣らん。
二四 人の子は逝く之を指して録されしが如し、惟人の子を賣る者は禍なる哉、斯の人
生れざりしならば、彼の爲に善かりしならん。二五 彼を賣るイサダも問ひて曰へり、夫
子、是れ我に非ずや。曰く、爾言へり。二六 彼等が食する時、イエス餅を取り、祝願して、之
を擘き、門徒に與へて曰へり、取りて食へ、是れ我の體なり。二七 又爵を取り、感謝して、彼
等に與へて曰へり、皆之を飲め。二八 蓋是れ我の新約の血、衆くの人の爲に流さるゝ者、
罪の赦を得るを致す。二九 我爾等に語ぐ、今より後、我復此の葡萄の實より飲まずして、
我が父の國に於て、爾等と借に新しき者を飲む日に至らん。三〇 既に飲ひて、橄欖山に
往けり。三一 其時イエス、彼等に謂ふ、爾等皆今夜我の爲に眠かん、蓋録せるあり、我牧
者を撃たん、而して群の羊は散らん。三二 我が復活の後、我爾等に先だちてガリレヤ
に往かん。三三 彼に答へて曰へり、皆爾の爲に眠くとも、我は永く眠かざらん。三

四 イイスス彼に謂へり、我誠に爾に語ぐ、今夜鷄の鳴かざる先に、爾三次我を諒まん。
五 ベトル彼に謂ふ、我爾と借に死すとも、爾を諒まさらん、門徒皆亦是くの如く言へり。
三六 そのとき、其時イイスス、彼等と借に、ゲフシマニナと名づくる處に來りて、門徒に謂ふ、爾等
此に坐して、我が彼處に往きて所るを待て。 三七 すなはち、乃、ベトル及びセサテイの二人の子
を擡へて、墓を備せり。 三八 のとき、時にイイスス、彼等に謂ふ、我が靈憂ひて死に近づけり、
爾等此に在りて、我と借に徹醒せよ。 三九 すなはち、乃、少しく離れて俯伏して祈りて曰へり、我
が父よ、若し能すべくば、願はくは此の時、我を過ぎん、然れども、我が欲する如くなら
ずして、爾の欲する如くなるべし。 四〇 のとき、遂に門徒に來りて、其寢ぬるを見て、ベトルに謂
ふ、爾等斯く一時も我と借に徹醒する能はざりしか。 四一 のとき、徹醒せよ、祈禱せよ、誘惑に入
らざらん爲なり、神は勇めども、肉體は弱し。 四二 のとき、再、往きて復祈りて曰へり、我が父よ、
若し此の時、我之を飲まずして、我を過ぐる能はずば、爾の旨成るべし。 四三 のとき、來りて、復彼
等の寢ぬるを見る、其目偷みたればなり。 四四 のとき、彼等を離れて復往き同じき言を言ひて、
三次祈れり。 四五 のとき、其時門徒に來りて、之に謂ふ、爾等偷寢れて休むか、祝よ、時は近づけり、

人の子は罪人の手に付さる。四六 起きよ、行かん、視よ、我を付す者は近づけり。四七 彼が
尙言ふ時、視よ、十二の一なるイツグは來り、劍と棒とを持てる多くの民、司祭、諸長及び
民の長老等より遣されし者は、彼と偕にせり。四八 イイヌスを付す者、彼等に號を與へ
て曰へり、我が接吻せん者は、即斯の人なり、彼を執へよ。四九 直にイイヌスに就きて
曰へり、夫子、殿へよ、乃彼に接吻せり。五〇 イイヌス之に俯へり、友よ、胡爲れぞ來れる。其
時、彼等就きて、手をイイヌスに措きて、之を執へたり。五一 視よ、イイヌスと偕に在りし
一人、手を伸べ、其劍を抜きて、司祭長の僕を撃ちて、其耳を削げり。五二 イイヌス彼に俯
ふ、爾の劍を其處に歸せ、蓋凡そ劍を執る者は、劍にて亡びん。五三 或は爾は、我今我が父
に求めて、彼をして我に十二軍餘の天使を遣さしむること能はずと、意ふか。五四 然ら
ば、聖書に、斯くあるべしと、言へること如何ぞ、應はん。五五 其時、イイヌス民に俯へり、爾
等は盜賊に向ふ如く、劍と棒とを持ちて、我を捕へん爲に出でたり、我日日殿の中に歸
へて、爾等と偕に坐せしに、爾等我を執へざりき。五六 此れ皆成りしは、諸預言者の書に
應ふを致す。其時、門徒皆彼を遺て、奔れり。五七 イイヌスを執へたる者、彼を曳きて、司

祭長 カイアスの許に至れり、彼處には學士及び長老等已に集れり。五八
 彼に隨ひて、司祭長の 中庭に至り、其處を觀ん爲に内に入りて、下吏等と偕に坐せり。
 五九 司祭諸長、長老等及び全公會は、イイヌスを死に致さん爲に彼に對する交證を
 求めたれども、六〇 得ざりき、多くの交證者就きたれども、得ざりき。終に二の交證者就
 きて曰く、六一 斯の人昔へり、我は神の殿を毀ち、三日にして之を建つるを能す。六二
 司祭長起ちて、彼に謂へり、爾答ふる所なきか、彼等が爾に對して證する所如何。六三
 イヌス默然たり。司祭長彼に謂へり、我活ける神を以て爾に證はしむ、我等に告げよ、爾
 は神の子ハリストスなるか。六四 イヌス之に謂ふ、爾言へり、且我爾等に謂ぐ、此より
 後、爾等は人の子が大能の右に坐し、天の雲に乘りて來るを見ん。六五 其時司祭長、己
 の衣を裂きて曰へり、彼は神を潰せり、何ぞ復證者を求めん、親よ、今爾等は其神を潰す
 を聞けり。六六 爾等如何に激ふか、彼等答へて曰へり、死に當る。六七 是に於て、彼等其面
 に唾し、彼を撃ち、或者は其頬を批ちて曰へり、六八 ハリストスよ、我等に預言せよ、爾を
 撃ちし者は誰ぞ。六九 時にマトル外に中庭に坐せるに、一人の婢彼に就きて曰く、爾も

ガリレヤのイエスマスに在りき。七〇しか。然れども彼は衆の前に諱みて曰へり、我爾が言ふ所を識らす。七一彼が門を出づる時他の婢彼を見て、彼處に在る者に謂ふ、此の人もイエスマスナソレイミに在りき。七二彼復諱みて、曰へり、我其人を識らす。七三少頃ありて、彼處に立てる者近づきて、ペトルに謂へり、誠に爾も其黨の一人なり、蓋爾の言語も爾を顯す。七四其時彼は詛ひ且醫へり、我其人を識らすと。七五忽、鷓鴣けり。七六ペトルはイエスマスの彼に、鷓鴣の鳴かざる先に、爾三次我を諱まん、云ひし言を憶ひ起して、外に出で、痛く哭けり。

第二十七章 一平旦に及びて、司祭諸長と民の長老等と皆相會して、イエスマスの事を議せり、之を死に致さん爲なり。二乃之を縛りて、曳きて、方伯ポンテイピラトに解せり。三時に彼を賣りしイウダは其定罪せられたるを見て、悔いて、銀三十を司祭諸長と長老等とに返して、曰へり、我率なき血を付して、罪を犯せり。彼等曰へり、我等何ぞ與らん、自ら願ひよ。四彼銀を殿に擲ちて出で、往きて自ら緘れたり。五司祭諸長銀を取りて曰へり、之を殿の庫に納るゝは宜しからず、是れ血の價なればなり。六乃相議し

て、此を以て陶人の田を買ひ、資旅を療る地と爲せり。故に其田は今日に至るまで、血の田と稱へらる。是に於て預言者イエレミヤを以て言はれしこと應へり曰く、彼等銀三十乃、値を附けられし者、即イメライリの諸子、が値を附けし者の價を取りて、之を陶人の田の爲に與へたり、主の我に示ししが如しき。一、イイスス方伯の前に立ちしに、方伯彼に問ひて曰へり、爾はイウテヤ人の王なるか。イイスス之に謂へり、爾言ふ。二、司祭諸長と長老等と彼を訟へしに、一も答へざりき。三、時にピラト彼に謂ふ、爾に對して證すること斯く多きを、爾聞かざるか。四、彼其一言にも答へざりき、方伯甚奇むに至れり。五、節期には、方伯が民に一人の囚、其欲する所の者を釋す例ありき。六、其時ラウラと名づくる著しき囚ありしが、民の集りし時ピラト之に謂へり、二人の中、我が誰をか、爾等に釋さんことを欲する、ラウラか、抑、ハリストスと稱ふるイイススか。七、盜娼に因りて彼を解し、を知れり。八、方伯が密判座に坐せる時、其妻人を遣して、之に謂へり、爾此の殺人に何事をも爲す勿れ、盜我今日夢の中に彼の爲に多く苦めりき。九、然るに司祭諸長と長老等とは、民に咬めて、ラウ

ウヲを釋し、イイヌスを滅さんこさを乞はしめたり。二二方伯彼等に問ひて曰へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんこさを欲する。彼等曰へり、ウヲウヲを。二三ピラト曰く、然らば我はハリストスと稱ふるイイヌスに何を爲さんか。皆彼に解ふ十字架に釘せらるべし。二四方伯曰へり、彼は何の惡を行ひしか。然れども彼等愈號びて曰へり、十字架に釘せらるべし。二五ピラトは何事も益なく、惟亂の滋起るを見て、水を取り、民の前に手を盥ひて曰へり、我此の殺人の血に對して罪なし、爾等自ら顧みよ。二六民皆對へて曰へり、其血は我等及び我等の子孫に歸すべし。二七其時ウヲウヲを彼等に釋し、イイヌスを鞭ちて、十字架に釘せん爲に付せり。二八時に方伯の兵卒イイヌスを曳きて、公廨に入れ、全營を彼の許に集め、二九其衣を褫きて、絳き袍を衣せ、三〇棘の莖を纏みて、其首に冠らせ、葱を其右の手に持たせ、彼の前に跪きて、彼に戯れて曰へり、イウアヤ人の王、陵べよ。三一又彼に唾し、葱を取りて、其首を撃てり。三二既に戯れ畢りて、其袍を褫ぎ、故の衣を衣せ、十字架に釘せん爲に彼を曳き往けり。三三出づる時、キリヤヤの人シモンと名づくる者に遇ひ、之を強ひて、其十字架を負はしめたり。三三

引と云ふ處降すれば、三十四 餓の處に來りて、三十五 醋に醋を和へて、彼に飲ましめたるに、之を嘗めて、飲むことを欲せざりき。三十六 彼を十字架に釘せし者は、鬨を取りて、其衣を分ち、三十七 而して坐して、彼處に彼を守れり。三十八 又其脚を番せる標を、其首の上に置けり。曰く、是れ乃イイスス、イサテヤ人の王と。三十九 其時二人の盜賊は、彼と併に十字架に釘せられたり、一人は其右、一人は其左なり。四十 過ぐる者彼を睨り、首を揺かして曰へり、四十一 殿を毀ちて、三日に之を起つる者よ、己を救へ、若し爾神の子ならば、十字架より下れ。四十二 同じく司祭、諸長も、學士、長老、より、四十三 せイ等と併に嘲りて曰へり、四十四 他人を救ひて、己を救ふ能はず、若し彼イスマイリの王ならば、今十字架より下るべし、然らば我等彼を信せん。四十五 神を恃めり、若し神彼を悦ば、今彼を拯ふべし、蓋彼は、我神の子なりと云へり。四十六 彼と併に十字架に釘せられたる盜賊も、亦彼を誦れり。四十七 第六時より、四十八 晦冥は、全地を蔽ひて、第九時に至れり。四十九 第九時の頃、イイスス大聲に呼びて曰へり、五十 「イリ、イリ、ラマ、サワスニ」、即我が神よ、我が神よ、何ぞ我を遺てたる。五十一 彼處に立てる者の中、或人之を聞き、曰へり、彼は、イリヤを呼ぶなり。五十二 其中の一人直に走り、薄紙

を取^とりて、蹄^すを盈^あたし、羂^あに束^つれて、彼^{かれ}に飲^のましめたり。四九よ 餘^あの者^{もの}曰^いへり、姑^しく舍^おけ、イリ
ナ來^{きた}りて、彼^{かれ}を救^{すく}ふや、香^いやを觀^みん。五〇 イイスス復^{また}大聲^{おほこゑ}に呼^よびて、氣^{いき}絶^たわたり。五一あ 殿^{でん}よ、
殿^{でん}の樓^{きう}は、上^うより下^{した}に至^{いた}るまで裂^さけて、二^{ふた}さなり、地^ち震^{ふる}ひ、磐^{いは}裂^さけ、五二あ 墓^{はか}啓^{ひら}けて、寢^いれたる
聖^{せい}人の身^みは、多^{おほ}く復^た活^{くわつ}し、五三あ 彼の復^た活^{くわつ}の後^{のち}、墓^{はか}より出^いで、聖^{せい}なる城^{まち}に入^いり、多^{おほ}くの者^{もの}に
現^あれたり。五四あ 百^{ひゃく}夫^ふ長^{ちやう}及^{およ}び之^{これ}を借^かに、イイススを守^{まも}れる者^{もの}は、地^ち震^{ふる}さ有^ありし事^{こと}を見^み
て、甚^{はなは}しく懼^{おそ}れて曰^いへり、此^これ誠^{まこと}に嗣^{かろ}の子^こなり。五五あ 彼^{かれ}處^{ところ}に亦^{また}多^{おほ}くの婦^{をんな}ありて、遙^{はるか}に望^{のぞ}め
り、是^これガリレヤよりイイススに従^{したが}ひて、彼^{かれ}に事^{つか}へたる者^{もの}なり。五六あ 其中^{そのうち}にマリヤ「マ
ダリナ」、イアコフ及^{およ}びイオシヤの母^はマリヤ、又^{また}セファイの子^この母^はありき。五七あ 日^ひ暮^くる、
に及^{およ}びて、アリマスヤの富^とめる人^{ひと}名^なはイオシフ、自^{みづか}ら亦^{また}イイススに學^{まな}びし者^{もの}は來^{きた}れ
り。五八あ 彼^{かれ}ピラトに就^つきて、イイススの屍^{しかはね}を求^{もと}めれば、ピラト屍^{しかはね}を與^{あた}へんことを命^{めい}
ぜり。五九あ イオシフ屍^{しかはね}を取^とりて、之^{これ}を潔^{きよ}き布^{ぬの}に裹^つみ、六〇あ 之^{これ}を縊^いは、
縊^いはる墓^{はか}に置^おき、大^{おほ}なる石^{いし}を墓^{はか}の門^{もん}に輓^{まろ}して去^されり。六一あ マリヤ「マダリナ」
と他^たのマリヤと彼^{かれ}處^{ところ}に在^ありて、墓^{はか}に對^{むか}ひて坐^ざせり。六二あ 明日^{あした}、即^{すなは}ち備^ひ節^{せつ}日^{じつ}の翌^{よく}日^{じつ}、司^し祭^{さい}諸^{しよ}長^{ちやう}さ
スリセイ

答さピラトの許に集りて問へり。主よ、我答懐ひ起すに彼の惑はす者倫生ける時、我三日の後に復活せんと言へり。是の故に命じて、三日に至るまで、墓を固めしめよ。恐らくは其門徒夜來りて、彼を竊み、民に向ひて、彼は死より復活せりと言はん。然らば後の惑は先より更に甚しからん。ピラト彼等に問へり、爾等に番兵あり往きて、爾等の意に任せて、之を固めよ。彼等往きて石に封印し、番兵をして墓を固めしめたり。

第三十章

安息日過ぎて七日の首の日の黎明に、マリヤ「マカゲリナ」と他のマ

リヤミ墓を覗ん爲に來れり。視よ、地大に震へり、蓋主の使天より降り、就きて墓の門より石を移して、其上に坐せり。其容は、能の如く、其衣は白きこと雪の如し。守る者は、彼を懼れ、職きて、死せし者の如くなれり。天使緒に對ひて曰へり、爾等懼るゝ勿れ、我爾等が十字架に釘せられしイイヌスを尋ぬるを知る。彼は此に在らず、蓋其言ひし如く、復活せり、來りて、主の置かれし處を觀よ。且速に往きて、其門徒に告げて、曰へ、彼死より復活せり、爾等に先だちてガリレヤに往く、爾等彼處に於て彼を見ん、

視よ、我爾等に言へり。八 婚急きて、姦を離れ、懼れ且大に喜びて、其門徒に報ぜん爲に趨り往けり。九 彼等が門徒に報ぜん爲に往ける時、視よ、イエスス之に遇ひて曰へり、段べよ、彼等就きて、其足を抱きて、彼を拜せり。一〇 イエスス之に謝ふ、懼るゝ勿れ、往きて、我が兄弟に報じて、ガリレヤに往かしめよ、彼等彼處に於て我を見ん。一二 婦の往く時、視よ、番兵の中の或者城に入りて、有りし事を以て、悉く司祭諸長に告げたり。一三 彼等は長老等と與に集り、相議して、多くの銀を兵卒に給へて 一四 曰へり、爾等云へ、我等が寝れたる時、其門徒夜來りて、彼を竊めり。一五 若し此の事方伯に聞わば、我等彼に勤めて爾等に謔なからしめん。一六 彼等銀を取りて、效へられし如く行ひたり、是に於て斯の言は、イエサヤ人の中に傳はりて、今日に至れり。一七 十一の門徒ガリレヤに往きて、イエススの彼等に命ぜし山に至り、一七 彼を見て拜せり、然れども猶疑へる者ありき。一八 イエスス就きて、彼等に語つて曰へり、天に在り地に在る一切の權は我に與へられたり、一九 故に爾等往きて萬民に效を傳へて、彼等に父子と聖神との名に因りて洗を授け、二〇 彼等を效へて、我が一切爾等に命ぜしことを守らしめよ、凡そ、我恒に爾

マトスイ福音 第二十八章

等々らら備こもにして世よの終末をはりまで在あるなり「アミン」。

マルコに因る聖福音

第二十章

一 神の子イエススハリストスの福音の始なり。二 諸預言者に録されしが如し云く、視よ、我我が使を爾の面前に遣し、爾に先だちて、爾の道を備へしめん。三 野に呼ぶ者の聲ありて云ふ、主の道を備へ、其徑を直くせよ。四 イオアン野に在りて洗を授け、罪の赦の爲に悔改の洗禮を傳へたり。五 イウテヤの全地及びイエルサリムの人々出で、彼に就き己の罪を認めて、皆イオアルダン河に於て彼より洗を受けたり。六 イオアンは駱駝の毛衣を衣、腰に皮の帯を束ね、蝮蟲と野蜜を食へり。七 彼宣べて曰へり、我の後に更に我より強き者は来る、我は風みて、其履の帯を解くにも堪へず。八 我は水を以て爾等に洗を授けたり、彼は聖神を以て爾等に洗を授けん。九 彼の日に當り、イイスカガリヤのナザレトより來りて、イオアルダンに於てイオアンより洗を受けたり。一〇 直に水より上る時、天開け、聖神の如く其上に降るを見たり。一一 又天より聲ありて云へり、爾は我の至愛の子、我が喜べる者なり。一二 聖神直に彼を引き、野に適か

しむ。一三 彼は彼の野に在ること四十日、サマナに試みられ、野獸と共に居り、天使は彼に奉事せり。一四 イオアンのの四はれし後、イエスがガリレヤに來り、神の國の福音を傳へて、一五 曰へり、期は満ち、神の國は近づけり、悔改して福音を信ぜよ。一六 ガリレヤの海邊を行く時、彼はシモン及び其兄弟アンドレイが網を海に施せるを見たり、蓋彼等は漁者なりき。一七 イエスが彼等に謂へり、我に従へ、我爾等を人を漁する者たらしめん。一八 彼等直に其網を遺して、之に従へり。一九 此より少しく進みて、セウタイの子イアコフと其兄弟イオアンと、亦舟に在りて、網を補へるを見て、二〇 直に彼等を召したり、彼等も父セウタイを併人と併に舟に遺して、之に従へり。二一 カヘルナウムに來れる後、安息日に返ひて、彼會堂に入りて、教を宣べたり。二三 人々其訓を奇させり、蓋彼等を教ふるこそ、概ある者の如し、學士等の如きに非ず。二四 彼等の會堂に汚鬼を患ふる人あり、呼びて、二五 曰へり、唉、ナザレトのイエスよ、我等と爾と何ぞ與らん、爾は我等を滅さん爲に來りしか、我爾が誰なるを知る、乃神の聖なる者なり。二六 イエスが彼を禁めて曰へり、口を緘ちて、之より出でよ。二七 汚鬼は其人を拘擥させ、大なる聲を以

て叫びて、之より出でたり。二七人皆駭きて、相問ひて曰へり、此れ何ぞ此れ如何なる新しき教ぞ、蓋彼機を以て汚鬼にも命じて、亦彼に順ふ。二八其聲名忽カリレヤの四方に播まれり。二九直に會堂より出で、イアコフ、イオアンと偕に、シモン及びアンドレイの家に来れり。三〇シモンの岳母熱を病みて臥したるに、或人直に之をイイススに告ぐ。三一彼就きて、其手を執りて、之を起したれば、熱忽退きて、婦彼等に供奉せり。三二暮に及びて、日の入る時、凡そ病を負ひ、冤鬼に憑らるゝ者を彼に昇き來れるあり。三三邑舉りて門に集れり。三四彼は種種の病に苦める多くの者を醫し、多くの冤鬼を逐ひ出し、且冤鬼に其ハリストスたるを識ることを許さざりき。三五朝未だ夜の明けざる前に、彼起きて、出で、野の處に適き、彼處に於て祈禱せり。三六シモン及び之と偕に在りし者、其跡を追ひ、三七既に遇ひて、彼に謂ふ、皆爾を尋ぬ。三八彼は之に謂ふ、我等近傍の村と邑とに往くべし、我が彼處にも教を宣べん爲なり、蓋我は是が爲に來れり。三九乃全カリレヤに、彼等の會堂に於て、教を宣べ、且冤鬼を逐ひ出せり。四〇病人の者來りて、彼に求め、彼の前に跪きて曰く、爾若し望まば、我を潔むるを能す。四一

イスス側みて手を伸べ彼に觸れて曰く我認む潔まれ。言ひ畢れば癩病直に癒れ其人潔まれり。イスス殿しく彼を戒めて直に去らしめ、又彼に罰ふ慎みて何事をも人に語ぐる勿れ、乃往きて己を司祭に示せ且田の潔まりし爲に、モイセイの命せし物を獻じて、彼等に證を爲せ。然れども其人出で、後多く宣べて其事を播揚し、イススは是より顯に城に入るを得ずして外なる野の處に居るに至れり、四方より彼に來れり。

數日を越えて彼復カヘルナウムに入れり彼が家に在ること聞いたれば、

直に多くの人集りて門の傍にも身を容るゝ處なきに至れり彼は之に教を宣べたり。癩癩の者を遣へて彼に來れるあり、四人之を昇けり、人の衆きに因りて彼に近づくを得ずして、其在る處の屋蓋を啓き之に穴して癩癩の者の臥したる牀を繰り下せり。イスス彼等の信を見て癩癩の者に罰ふ、子よ爾の罪は爾に赦さる。此に或學士等の坐せるあり、心の中に議して曰く、セシ人の何ぞ斯く野浪を言ふ、獨神より外に誰か罪を赦すを得ん。ハイスス其神を以て、直に彼等が斯く己の裏に議するを知

りて、彼等に謂へり、爾等何ぞ心の中に斯く議する、癩癩の者に爾の脚敷さるると言ひ、
 或は起きて爾の牀を取りて行けと言ふは孰か易き。一〇しか。然れども爾等が人の子の地
 に在りて脚を敷す權あることを知らん爲、癩癩の者に向ひて曰く、二爾に謂ふ起
 きて、爾の牀を取りて爾の家に行け。二三彼直に起き牀を取りて、衆の前に於て出でた
 り、衆駭きて、神を讚祭し、我等未だ嘗て斯くの如きことを見ざりきと云ふを致せり。一
 三
 イイスス復海邊に出でしに、民皆彼に就き、彼之を教へたり。一四過ぐる時、彼はアル
 フイの子レワイが税關に坐せるを見て、之に謂ふ、我に従へ、彼起ちて従へり。一五
 イイススがレワイの家いへに席坐せし時、多くの税吏及び罪人も亦彼かれ其門徒そのらんとと偕ともに席坐せ
 り、蓋此等の者多く有り、而して彼に従へり。一六
 一七
 イイスス之これを聞きて、彼等に謂ふ、康強なる者は醫師を需めず、乃病やまひを負ふ者は
 之を需む、我が來りしは、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して悔改せしめん爲なり。
 一八
 イオアンイオアンとマリセイ等らの門徒は驚せり、來りて彼に謂ふ、イオアンとマリセイ

筭との門徒は齎するに、爾の門徒が齎せざるは何ぞや。一九 イイスス彼等に謂へり、婚筭の客は新娶者の尙彼等と借に在る時豈齎するを得んや、新娶者の彼等と借に在る時は齎するを得ず。二〇しか、然れども新娶者の彼等より取らるゝ日至らん其日には齎せん。二一あた、新しき布片を用て舊き衣を補ふ者あらず、然らずば新しき者は舊きを壞りて、其縫更に甚しからん。二二またあた、又新しき酒を舊き革甕に盛る者あらず、然らずば新しき酒は甕を敗りて、酒漏れ溢も亡びん、乃新しき酒は新しき甕に盛るべし。二三イイスス日、イイスス禾田を過ぎ行けることあり、彼の門徒行く時穂を摘めり。二四スリゼイ筭彼に謂へり、觀よ、何ぞ彼等は安息日に行ふべからざることを行ふ。二五かれ、これに謂へり、爾等は、ダワードが乏しくして、己及び其從者の飢ふし時に行ひし事、二六すなはち如何にして彼は司祭長アマアフルの時に、神の家に入りて司祭等の外何人も食ふべからざる供前の餅を食ひ、且之を從者に與へしを、未だ嘗て觀まさりしか。二七またかれに謂へり、安息日は人の爲に設けられたり、人は安息日の爲に非ず。二八ゆゑ、故に人の子は亦安息日の主なり。

第三卷

彼又會堂に入りしに彼處に一手の枯へたる人あり。人人彼を叩せん

爲に安息日に於て斯の人を醫すや否やを窺へり。彼は手の枯へたる人に俯ふ中に

立てよ。又彼等に俯ふ安息日には善を行ひ或は惡を行ふ生命を救ひ或は之を滅す

孰か宜しき彼等默然たり。イエス怒を含みて彼等を圍視し其心の頑なるを憂

ひて斯の人に謂ふ爾の手を伸べよ。之を伸ぶれば其手は健になりしこも他の手の如

し。乃りセイ容出でて直にイロドの黨と共に如何にして彼を滅さん謀れり。セ

イス門徒と偕に出でて海濱に往けり衆くの民はガリレヤより又イウテヤ、ハイ

ルサリム、イドメヤ及びイオアルダンの外より彼に従ひ又タルシドンとの邊に居る

者は其行ひしこもを聞きて甚多く彼に來れり。彼は民の衆きに因りて其門徒に己

が爲に小舟を備へんこもを命ぜり人の彼に過らざらん爲なり。一〇彼は多くの者

を醫しに因りて凡そ疾ある者は彼に捫らん爲に擁し過るに至れり。二又汚鬼は

彼を見し時其前に俯伏して呼びて曰へり爾は神の子なり。惟彼は之に己を顯す

勿らんこもを嚴しく戒めたり。遂に山に登りて自ら欲する所の者を召したれば

來りて彼に就けり。一四 乃十二人を立てたり、彼等が己と偕に居り、又之を遣して、教
を傳へしめ、一五 且權を以て病を醫し、冤鬼を逐ひ出さしめん爲なり。一六 乃シモン、
之をバトルミ名づけたり、一七 ピラテイの子イアコフ、及び其兄弟イサアン、彼等をワ
アチルゲス譯すれば、雷の子と名づけたり、一八 アンドレイ、スリブ、サルフロメイ、マト
スイ、アマ、アルスイの子イアコフ、ステイ、シモン「カナニト」、一九 及びイウダ「イスカリ
オト」、即彼を賣りし者なり。二〇 彼等家に入りしに、民復集り、彼等餅を食ふ、遠なきに
至れり。二一 彼の親屬は聞きて、彼を取らん爲に出でたり、蓋彼は狂へりと言へり。二三
又イエルサリムより下れる學士等は、彼はエルセウルに遷られ、冤鬼の魅に藉りて、
冤鬼を逐ひ出すと云へり。二三 彼は之を召して、譬を以て之に語へり、サタナ如何ぞサ
タナを逐ひ出すを得ん。二四 若し國自ら分れ争はば、其國立つ能はず、二五 若し家分れ
争はば、其家立つ能はず。二六 若しサタナ自ら攻めて、分れ争はば、立つ能はず、即其終
至れるなり。二七 人強き者の家に入りて、其器を劫す能はず、必先づ強き者を縛りて、
然る後其家を劫さん。二八 我誠に爾等に語く、凡の罪と褻瀆と、人之を以て瀆さば、人の

諸子に教されん、二九し、然れども聖神を激さん者は世世に教されず、乃永遠の定罪に干らん。三〇斯く言へるは人人が彼は汚鬼に憑らるる言ひし故なり。三一彼の母及び兄弟來りて、外に立ち人を遣して、彼を呼べり。三二時に民彼を環りて坐せり、或彼に問へり、彼よ、爾の母及び爾の兄弟外に在りて、爾を環ぬ。三三彼は之に答へて曰へり、孰か我が母或は我が兄弟たる。三四乃環り坐せる者を圍視して曰く、是れ我が母及び我が兄弟なり、三五盜賊の旨を行はん者は、其人即我が兄弟我が姉妹及び母なり。

第四章 復海濱に於て教へ始めしに、衆くの民彼の許に集りたれば、彼舟に登りて、海に坐し、民皆海に沿ひて陸に在りき。乃多く言を以て彼等を教へたり、其教に於て、彼等に問へり、之を總け、糧を播く者は播かん爲に出でたり。播く時路の旁に遺ちし者あり、鳥來りて、之を啄めり。土の薄き磯地に遺ちし者あり、土の深からざるに因りて、直に萌へ出でしが、日の出で、後萎み根なきに因りて、枯れたり。棘の中に遺ちし者あり、棘起きて、之を蔽ひたれば、實を結ばざりき。沃壤に遺ちし者あり、乃發し、長ずる實を結びて、或は三十倍或は六十倍或は百倍を爲れり。又曰へり、耳ありて

聴くを得る者は聴くべし。一〇民の散じて後、彼を環れる者は十二徒と借に彼に譬の
 事を聞へり。一二彼は之に謂へり、爾等には神の國の奥義を知ること與へられたれど
 も、彼の外の者には凡て譬を用ゆる。一三爾等は視て視れども見ず、聴きて聴けども
 悟らず、恐らくは轉じて其脚の敎されん。一四又彼等に謂ふ、爾等斯の譬を悟らざるか、
 然らば如何にして凡ての譬を識らん。一五播く者は言を播くなり。一六路の旁に遺ち
 たる者は、此れ播かる言を聴きし後、直にサタナ來りて、彼等の心に播かれたる言を
 奪ふ。一七礫地に播かれたる者は、同じく是れ言を聴きて、直に喜びて受くれども、一七
 己に根なきが故に、暫時のみ、後言の爲に艱難、或は窘逐に遇はり、直に跟く。一八棘の中
 に播かれたる者は、是れ言を聴けども、一九斯の世の慮、貨財の惑、其他の慾は
 入りて、言を蔽ひて、實を結ばしめず。二〇沃壤に播かれたる者は、是れ言を聴きて、之を
 受け、實を結ぶこと、或は三十倍、或は六十倍、或は百倍なり。二二又彼等に謂へり、燈を取
 り來るは、燈之を斗の下、或は牀の下に置かん爲なるか、之を燈臺の上に置かん爲に非
 ずや。二三隠れて顯れざる者なく、蔽して露ならざる者なし。二四耳ありて聴くを得る

者は聴くべし。二四又彼等に謂へり、聴く所を愼め、爾等何の量を以てか人に量らば、是くの如く爾等にも量られん、且爾等聴く者に加へられん。二五蓋有てる者は、之に與へられ有たざる者は、其有てる物も、之より奪はれん。二六又曰へり、神の國は人種を地に投するが如し、二七夜に盡に寢れ興き、種の如何に發し長するを知らず。二八蓋地は自ら始に苗次に種を生じ、次に種の中に穀を盈たす。二九實の熟するに及びて、直に鎌を遣す、獲る時至りたればなり。三〇又曰へり、我等神の國を何に比へんか、抑何の譬を以て之を譬へんか。三一此れ芥種の如し、其地に播かるゝ時は、地上の悉くの種より小しき雖、三二播かれたる後は、萌ば出で、悉くの野菜より大になり、巨なる枝を出じ、天空の鳥其陰に棲むを得べきに至る。三三イイスス斯くの如き多くの譬を以て、彼等が聽くを得る所に循ひて、教を宣べたり。三四譬に非ずしては、彼等に語らざりき、獨處の時、悉く之を其門徒に解けり。三五其日の暮に及びて、彼等に謂ふ、我等彼の岸に濟るべし。三六彼等民を去らしめて、彼を猶舟に在るまゝ取りて往けり、他の舟も亦彼と借に在りき。三七颶風大に起り、浪舟に打ち入りて、殆ど滿つるに至れり。三八時に彼は舟

尾に在りて、杖して寝れたり。彼を醒まして曰く、師よ、我等が亡ぶるを甯願みざるか。二
彼起きて、風を禁め、海に謂へり、黙せ、靖まれ、風、即息みて、大に穩になれり。四〇又彼
等に謂へり、甯等何爲れぞ、是くの如く、怯るゝ、何ぞ信なき。四一彼等大に懼れて互に謂
へり、此れ何人ぞ、風も海も亦彼に順ふ。

四二 一途に海の彼の岸なるガダラの地に至れり。二彼が舟を離れし時、汚鬼を患
ふる人、墓より出で、直に彼を迎へたり。三此の人、墓を住處と爲せり、鐵索を以て、す
も、何人も彼を繋ぐ能はざりき。四蓋、彼は、罽絺、棺と鐵索とに繋がれたれども、鐵索を
断ち、棺を毀り、人彼を制するを得ざりき。五夜も晝も、恒に山と墓とに在りて、號び、又
其身を石に打てり。六彼遙に、イエスを、見て、趨り、附きて、之を拜し、七大なる聲を以て
呼びて曰へり、至上なる神の子、イエスよ、我と甯と何ぞ與らん、神に因りて甯に求む、
我を苦むる勿れ。八け、蓋、イエス、之に謂へり、汚鬼、斯の人より出でよ。九又之に問へり、
甯の名は何ぞ。答へて曰へり、我の名は大隊、我等多き故なり。一〇すなはち、しり、かれら、此の
地の外に、逐はざらん、ことを求めたり。一一彼處に、山の側に、豕の大なる群、牧はれたれ

一三 究鬼皆彼に求めて曰へり、我等を豕に遣して、其中に入らしめよ。一四 イイスス
 直に之を許せり、汚鬼出で、豕に入りしに、群は山坂より海に逸げ、約二千匹ありて海
 に溺れたり。一五 豕を牧ふ者奔りて、邑及び諸村に告げたれば、人人有りしことを觀ん
 爲に出で、一六 イイススに來りて、先に究鬼を患ひ、大隊に憑られたる者が、衣を着、心慥
 にして坐せるを見て、懼れたり。一七 見し者は究鬼を患ひたる者に有りし事の如何及
 び豕の事を彼等に語けたれば、一八 彼等はイイススに其境を離れんことを請へり。一
 九 彼が舟に登れる時、究鬼に憑られたる者彼と偕にせんことを求めたり。二〇 イイス
 ス許さずして、之に謂ふ、爾の家に爾の親屬に歸りて、彼等に主が如何なる事を爾に行
 ひ及び如何に爾を憐みしを告げよ。二一 彼往きて、テカボリに於てイイススが彼に如
 何なる事を行ひしを宣べたれば、人皆之を奇とせり。二二 イイスス舟に乘りて復彼の
 岸に濟りし時、衆くの民は彼に集り、彼は海濱に在りき。二三 親よ、會堂の宰の一人、ハイア
 イルと名づくる者來り、彼を見て、其足下に俯伏し、二四 一切に彼に求めて曰く、我が女死
 せん、とす、踏ふ來りて、之に手を按せ、之をして愈むて、生くるを得しめよ。二五 イイスス

之と備に往けり、時に衆くの民従ひて彼に擁し返れり。 二五
 或婦十二年血漏を患ひ、二
 多くの醫師に因りて多く苦み、其所有を盡く費したれども、明も益なくして、益悪し
 くなれり。 二七
 イイススの事を聞きて、民の中に後より來りて、彼の衣に捫れり。 二八
 曰へり、我第其衣に捫らば、愈ゆるを得ん。 二九
 直に其血の源涸れて、婦其身に病の愈
 されしを覺けたり。 三〇
 イイスス 忽ち自ら能の己より出でたるを覺け、民の中に顧み
 て曰へり、誰か我が衣に捫りたる。 三一
 門徒彼に謂へり、爾は民が爾に擁し返るを見る
 に誰か我に捫りたるを云ふか。 三二
 然れども、彼は圍視して之を行ひし者を見んと欲
 せり。 三三
 婦 己に成りしことを知り、懼れ慄きて來りて彼の前に俯伏し、悉く實を以
 て彼に語けたり。 三四
 彼は之に謂へり、女よ、爾の信は爾を救へり、安然として往き、爾の
 病より健になれ。 三五
 彼が尙音ふ時、會堂の宰の家より人來りて曰く、爾の女已に死せ
 り、何ぞ復師を煩はす。 三六
 イイスス 語ぐる所の音を聞きて、直に會堂の宰に謂ふ、懼る
 る勿れ、惟信せよ。 三七
 乃ハトル、イアコフ及びイアコフの兄弟イオアンの外誰にも
 己に従ふを許さず、 三八
 會堂の宰の家に來りて、人人の號咷、其哭きて大に叫ぶを見、

三九 既に入りて、彼等に謂ふ何ぞ咄ぎ且泣く、小女は死せしに非ず、乃寝ぬるなり。四
 〇 人人彼を晒へり。彼衆を出して、小女の父母に彼に従へる者となす。小女の臥せ
 る處に入り、一 小女の手を執りて、之に謂ふ「タリス、クミ」譯すれば、女よ、爾に言ふ起
 きよ。二 女直に起き、且歩めり、蓋其年は十二なり、見し者大に駭けり。三 一 イイス
 殿しく彼等に之を人に知らしめんことを禁じ、又女に食を與へんことを命ぜり。
四 一 イイス 彼處を出で、己の故郷に至れり、其門徒彼に従へり。二 安息日に
 及びて、彼會堂に於て、教を宣べしに、衆くの聽ける者奇として曰へり、斯の人何より斯
 を得たるか、彼に賦へられし智慧は、誰れ何ぞ、是くの如き異能は如何にして、其手に由
 りて行はるるか、三 彼は木工にして、マリヤの子、イアコフ、イオシヤ、イウダ、シモン、の兄
 弟なるに非ずや、其姉妹は此に我等の間に在るに非ずや、乃彼の爲に感へり。四 一 イイス
 ス 彼等に謂へり、預言者は其故郷、其親屬、其家の外に於て、尊ばれざるなし。五 乃彼處
 に於ては何の異能をも行ふを得ざりき、唯數人の病者に手を按せて、之を醫せり。六 且
 彼等の不信を怪めり。次ぎて四周の諸村を巡りて、教を宣べたり。七 又十二徒を召して、

彼等かれらを二人ふたりづゝ遣つかはし彼等かれらに汚鬼せきを制せいする權けんを與あたへたり。又彼等かれらに旅たびの爲ために、二にの杖つゑの外ほか蓋がせをも權かてをも帶おびに貯たくはふる銅どうをも、一切いっさい執とる勿ならんことを命めいじ、惟ただ屢らうを着つくるのみにして、二ふたつの衣ころもを衣きること勿ならしめたり。一〇又彼等かれらに謂いへり何處どこに於おても人ひとの家いえに入いらば、彼處かそこに留とどりて、出いづるに至いたれ。一一若もし爾等なんぢらを接うけず、爾等なんぢらに認まかざる者ものあらば、彼處かそこを出いづる時とき、爾等なんぢらが足あしの下したの塵ちりを拂はらへ、彼等かれらに對たいする證しやうを爲なさん爲たなり、我われ誠まことに爾等なんぢらに留とどむ審判しんはんの日ひに於おいて、ソドムソドム及びゴモラゴモラは斯この邑まちより忍しのび易やすからん。一二彼等かれら出いでて、悔改くわいかいの教を宣のたまへ。一三且かつ多くの魔鬼まきを逐おひ出いたし、多くの病やめる者ものに油あぶらを傳つけて、之これを醫いせり。一四イロド王わうイイススの事ことを聞ききて、蓋けだし其名そのなは揭あげられり、曰いへり、此これ授洗じゆせんイオアンイオアンが死しより復活ふくわつせしなり、故ゆゑに彼かれに由よりて異能いのうは行おこな。一五他たの者ものは是これイリヤイリヤなりと曰いひ、又他またの者ものは是これ預言者よげんしや、或あるひは諸預言者しよよげんしやのひのこり、若もし者ものなりと曰いへり。一六惟ただイロドイロド聞ききて曰いへり、是これ我が首くびを斬きりしイオアンイオアンなり、彼かれは死しより復活ふくわつせり。一七蓋けだし此このイロドイロドは人ひとを遣つかはして、イオアンイオアンを執とへて、之これを獄ひこやに繋つなげり、其その兄弟きやうだスルスルアの妻つまイロデアイロデアの爲ための故ゆゑなり、其その之これを娶めとりたればなり。一八蓋けだしイオアンイオアンはイロドイロドに謂いへ

り、爾兄弟の妻を娶るは宜しからずと。一九 イロテアダ彼を怨みて殺さんと欲したれども能はざりき。二〇 蓋イロドはイオアンの義にして聖なる人たるを知りて彼を畏れ及び彼を護り彼に聞きて多くの事を行ひ且欣びて彼に聞けり。二一 適好き機會の日は至れり即イロド其誕生日に於て諸大臣千夫長及びガリレヤの尊者の爲に筵を設けたり。二二 イロテアダの女入りて舞ひイロド及び共に席坐する者の喜を獲たり。王女に謂へり爾が欲する所を我に求めよ我爾に與へん。二三 又彼に誓へり凡そ爾が我に求むる所は我が國の半に至ると雖爾に與へん。二四 女出でて其母に謂へり何をか求むべき。彼曰へり授洗イオアンの首。二五 女直に急ぎ入りて王に求めて曰へり我爾が授洗イオアンの首を今盤に盛りて我に與へんことを欲す。二六 王憂ひたれども誓の爲又共に席坐する者の爲の故に之を拒むを欲せざりき。二七 王直に一卒を遣して其首を擧へんことを命ぜり。二八 彼往きて之を獄に斬り其首を盤に盛り擧へて之を女に與へ女之を其母に與へたり。二九 其門徒之を聞きて來り其屍を取りて墓に藏めたり。三〇 使徒等イイススの許に集りて凡そ行ひし事致へし事を彼

に告げたり。 彼は之に謂へり、爾等獨野の處に往きて、暫く休め、盍來る者去る者多くありて、彼等食ふ適だになかりき。 乃舟に乘りて、彼等獨野の處に往けり。 民其往くを見て、多くの者彼等を識りたれば、路の邑より徒歩にて共に趨り、其往く所に先だちて彼の許に集れり。 イイスス出でて、群衆を見て、之を憫みたり、其牧者なき羊の如き故なり、乃多く之を教へたり。 時已に晚くなりて、其門徒彼に就きて曰く、此は野の處にして、時已に晚し、衆を去らしめよ、彼等が四周の鄉村に往きて、己の爲に餅を市はん爲なり、蓋彼等に食ふべき物なし。 彼答へて曰へり、爾等之に食を與へよ。 彼に謂ふ、我等往きて、銀二百を以て餅を市ひ、之に與へて食はしめんか。 彼曰く、爾等に餅幾何かある、往きて觀よ。 彼等知り得て曰く、五の餅及び二の魚。 彼は之に命じて、衆人を青草の上に區區に坐せしめたり。 乃百人或は五十人づゝ、列列に席坐せり。 彼は五の餅と二の魚とを取りて、天を仰ぎて祝禱し、餅を擘き、其門徒に與へて、衆の前に陳れしめ、又二の魚をも衆に分てり。 皆食ひて飽きたり。 餘りたる屑と残りたる魚とを拾ひて、十二の筐に盈てたり。 餅を食ひし者

は約五千人なりき。四八 イイス直に其門徒を促して、舟に登らしめ、自ら民を去らしむる間に、己に先だちて彼の岸なるカフサイゲに往かしめたり。四九 民を去らしめて後、彼新羅せん爲に山に登れり。五〇 暮に及びて、舟は海の中に在り、彼は獨陸に在りて、
四八 彼等が舟を漕ぐに苦めるを見たり、風の彼等に逆ふ故なり。夜四更の頃、彼海を履みて、彼等に近づき、而して彼等を過ぎんと欲せり。四九 彼等は其海を履むを見て、是れ怪物なりと意ひて呼べり。五〇 蓋皆彼を見て惶れたり。彼直に之と語り、而して之に謂ふ心を安んぜよ、是れ我なり、懼るゝ勿れ。五一 乃舟に登りて、彼等に就きたれば、風息みたり。彼等中心に極めて甚しく駭き且奇めり。五二 蓋餅の奇蹟を悟らざりき、其心の頑なりし故なり。五三 既に濟り、ゲンニサレトの地に至りて、岸に泊り。五四 舟より出でし時、人人直に彼を識りたれば、五五 徧く近傍の地を馳せ廻りて、病ある者を牀に載せ、彼の在る所を開きて、彼處に昇き至れり。五六 凡そ彼の入りし所、或は村、或は邑、或は郷は、人其市に病者を置き、唯彼の衣の褌にだに頼らんこきを求めたり、彼に頼りし者は愈ゆるを得たり。

第四章

一 イエルサリムより來りし、**フリセイ**等と**或學士**等と彼の許に集れり。二 彼の門徒の中の或者が深からざる手、**即**齒はざる手を以て餅を食ふを見て之を告めたり。三 **鹽**、**フリセイ**等及び悉くの**イサテヤ**人は、古人の傳を執りて其手を深く鹽はされば食はず、市より歸りて自ら洗はされば亦食はず、此の外又多くの事あり、彼等を受けて之を守れり、**即**杯、瓶、銅器及び牀を洗ふが若し。是に於て**フリセイ**等と**學士**等と彼に問ふ、爾の門徒は何ぞ古人の傳に遵はずして鹽はざる手を以て餅を食ふ。六 彼答へて之に謂へり、**イサイヤ**は爾等偽善者の事を善く預言せり、**録**されしが、**如し**云く、**斯**の民は口にて我を敬へども其心は遠く我に離る、**彼**等は人の誠を敬ふ爲して敬へて、徒に我を辱む。八 **鹽**、**爾**等神の誠を棄て、人の傳を執れり、**即**瓶、杯を洗ひ、其他多く是くの如きことを行ふ。九 又彼等に謂へり、**爾**等己の傳を守らん爲に、善く神の誠を廢す。一〇 **フリセイ**、**モイセイ**曰へり、**爾**の父及び**爾**の母を敬へ、又曰へり、父或は母を置く者は死すべしと。二 然れども**爾**等曰ふ、人若し父或は母に對ひて、**爾**が我より得べき者は「**コルマン**」**譯**すれば、禮物と爲れり云は、**一**、**二**、**三**、**爾**等既に其人に己の

父或は母の爲に何事をも爲さざるを許す。一三か 斯く爾等が股けし傳を以て神の言を
厭し且多く是くの如きことを行ふ。一四すなはらしゅうみん 乃衆 民を召して之に謂へり、皆我に聴き
て悟れ、一五およそ 凡そ外より人に入る者は彼を汚す能はず惟彼より出づる者は斯れ人を
汚すなり。一六みみ 耳ありて聴くを得る者は聴くべし。一七かれ 彼が民を離れて家に入りし時
門徒彼に譬の事を問へり。一八かれ 彼は之に謂ふ、爾等も亦斯く悟鈍きか、豈知らずや凡そ
外より人に入る者は彼を汚す能はず、一九けだしそのころい すなはらばら 蓋其心に入らず、乃腹に入りて外に出づ、
是に由りて凡の食物は潔めらる。二〇またち 又曰へり、人より出づる者は斯れ人を汚すなり。
二一けだしうち すなはらちこころ 盜内より、即人の心より出づる者は惡念、姦淫、邪淫、兇殺、二二たふせつたんらんあふくき
竊、邪修、疾、殺、淫、驕、傲、狂、妄なり。二三これら 此等の惡は、皆内より出で、人を汚すなり。二四かれ 彼
は彼處を起ちて、タル及びシドンの境に來り家に入りて、人の知らんことを欲せざり
しが、隱るゝを得ざりき。二五けだしなきき 盜汚鬼を患ふる女を有てる婦彼の事を聞きて、來りて其
足下に俯伏せり。二六こゝろ 此の婦は異邦人にして、シロスニキヤに生れし者なり、彼に其女
より冤鬼を逐ひ出さんことを請へり。二七しか 然れどもイイスス之に謂へり、先づ兒童に

飽かしむるを容せ、蓋見曹の餅を取りて、狗に投ぐるは宜しからず。二八 婦後に答へて曰へり、主よ、然り、但狗も食卓の下に在りて、見曹の屑を食ふ。二九 彼は之に謂へり、此の香に因りて、往け、冤鬼は爾の女より出たり。三〇 婦其家に來りて、冤鬼已に出で、女の其牀に臥せるを見たり。三一 イイスス復テタル及びシドンの境を出で、テカガリの境の中を經て、ガリレヤの海に至れり。三二 鹽にして、訥れる者を彼に搯へ來りて、手を其上に按せんことを求むる者あり。三三 彼獨之を搯へて、民を離れ、指を其耳に入れ、嚙して其舌に捫り。三四 天を仰ぎて、歎息して、之に謂ふ、「モリス」譯すれば、啓け。三五 直に其耳は啓け、舌の結は解け、其言ふこと明になれり。三六 イイスス彼等に何人にも告げざらんことを戒めたり、然れども彼等愈播揚せり。三七 且駭異に勝へずして曰へり、其爲せる事皆善し、聖者をも聞く者、爲し、啞者をも言ふ者、爲す。

第八節

一日民極めて多く有りて、食ふ物なかりしに、イイスス其門徒を召して、之に謂ふ、二 我斯の民を憫む、蓋已に三日我と併に在りて、食ふ物なし。三 我若し彼等を飢

みて其家に歸らしめば、途中に廻れん蓋其中に遠くより來りし者あり。其門徒彼に答へて曰へり、人此に野に在りて、彼等を飽かしむべき餅を何處より得んや。彼等に問へり、爾等に餅幾何かある。曰く、七。是に於て民に命じて地に坐せしめ、七の餅を取りて、感謝して之を擧ぎ、其門徒に與へて之を陳れしむるに、彼等は民の前に陳れたり。又些須の小さき魚あり、之をも祝福して前に陳れしめたり。乃食ひて飽き、其餘りたる屑七籃を拾へり。食ひし者は約四千人なりき。乃彼等を歸らしめたり。直に其門徒と偕に舟に登りて、ゲルマヌスの境に來れり。二乃リセイ等出でて、彼を詣り、彼を試みて天よりする休徴を求めたり。二彼中、心より歎息して曰く、斯の世何ぞ休徴を求むる、我誠に爾等に語ぐ、斯の世に休徴は與へられざらん。二三乃彼等を離れて、復舟に登りて、彼の岸に往けり。一時に其門徒餅を取ることを忘れたり、舟には惟一の餅の外有らざりき。一四彼は之に戒めて曰へり、謹みて、乃リセイ等の酔さ、イロドの酔さを防げ。一五彼等相議して曰へり、是れ我等に餅なきを指すなり。一七イロス之を知りて、彼等に謂ふ、何ぞ餅なきことを議する、爾等猶未だ知らず、未だ悟らざる

か爾等の心猶煩なるか。一八爾等目ありて視ざるか耳ありて聽かざるか亦記憶せざるか。一九我五の餅を五千人の爲に擘きし時爾等餘屑を拾ひて幾筐に盈てし。彼に謂ふ十二。二〇またな、又七の餅を四千人の爲に擘きし時餘屑を幾筐拾ひし。曰く七。二一彼等に謂へり何ぞ悟らざる。二二ワフサイダに來れるに醫者を彼に攜へて之に携らんこきを求むる者あり。二三彼醫者の手を執り之を引きて村の外に出で其目に唾し彼の上に手を按せて見る所ありやと問へり。二四彼仰ぎ視て曰へり我人人の行くこと樹の如くなるを見る。二五後復手を其目に按せて彼に仰ぎ視ること命じたれば彼愈いて明に庶物を見たり。二六乃彼を其家に遣して曰へり村に入る勿れ村の内の人に告ぐる勿れ。二七イイスス其門徒と偕にフリブのケサリヤの緒村に出でしに途中其門徒に問ひて曰へり人人我を言ひて誰さか爲す。二八彼等對へて曰へり投洗イオアンと爲し他の者はイリヤと爲し又他の者は預言者の一人と爲す。二九彼は之に謂ふ爾等は我を言ひて誰さか爲す。ペトル彼に對へて曰く爾はハリストスなり。三〇乃彼等に戒めて己の事を人に語る勿らじめたり。三一是に於て始めて彼等に

人の子が多く苦を受け、長老等と司祭師長と學士等とに棄てられ、且殺されて第三日に復活すべきことを教へたり。彼明に此の事を語れるに、ペトル彼を援きて諫めたり。彼身を轉じて、其門徒を見て、ペトルを戒めて曰へり、サタナ、我より退け、蓋は神の事を念はず、乃人の事を念ふ。遂に民を其門徒と共に召して、彼等に謂へり、我に従はんことを欲する者は、己を捨て、其十字架を背ひて我に従へ。蓋己の生命を救はんことを欲する者は、之を喪はん、我及び福音の爲に己の生命を喪はん者は、之を救はん。蓋人若し全世界を獲とも己の靈を損はば、何の益かあらん、抑人何を與へて、其靈の償を爲さんや。蓋此の姦惡の世に於て、我及び私の言を耻ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖なる天使等と偕に來らん時彼を耻ぢん。

第四章 一又彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、神の國が權能を以て來るを見んとする者あり。六日を越えて、イエスは、ペトル、イアコフ、イオアンを描へ、獨彼等のみを率ゐて、高き山に登り、彼等の前にて容を變へたり。其衣は纈きて、雪の如く甚白くなれり、地上の漂工の白くする能はざ

る者の如し。四 イリヤはモイセイと借に彼等に現れて、イイススと語れり。五 イイススに謂ふ、夫子、我等此に居るは善し、我等三の廬を建て、一は爾の爲、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん。六 蓋自ら善ふ所を知らざりき、彼等大に懼れし故なり。七 又雲有りて、彼等を蓋ひ、雲より聲出で、云ふ、此は我の至愛の子なり、彼に聽け。八 彼等、依、覆視して、既に誰をも見ず、獨イイススのみ、彼等と借に在りき。九 山を下る時、イイスス、彼等に、人の子が死より復活せざる先には、見たること、人に語ぐる勿らん、こゝを命じたり。一〇 彼等斯の言を其中に留めて、相議して曰へり、死より復活すは、何の意ぞ。一一 又彼に問ひて曰へり、學士等がイリヤ先に来るべしと云ふは何ぞや。一二 彼答へて曰へり、然り、イリヤ先に来りて、萬事を整ふべし、人の子も亦之を指して、録されし如く、多く苦を受け、人に卑めらるべし。一三 惟我爾等に語ぐ、イリヤ已に來り、而して人人欲する所に隨ひて、彼を待へり、彼を指して録されしが如し。一四 既に門徒の所に來りて、群衆の彼等を環り、且學士等の彼等と議論するを見たり。一五 衆民、候、彼を見て、跋き、趨り前みて、安を問へり。一六 彼學士等に問ひて曰へり、彼等と議論

するは何の事ぞ。一七 民中の一人答へて曰へり師よ我啞の鬼に憑られたる我が子を爾に搦て来れり。一八 鬼は何處に彼を執ふとも投げ仆し彼沫を噴き齒を切り體枯る。我爾の門徒に之を逐ひ出ださんことを請ひたれども彼等能はざりき。一九 イイスス彼に答へて曰く噫信なき世や我何時までか爾等と偕に在らん何時までか爾等を忍ばん彼を我が許に搦て来れ。二〇 乃彼を搦て来れり彼イイススを見れば鬼忽彼を拘擧させ彼地に仆れ横びて沫を噴けり。二一 イイスス其父に問へり彼に斯く爲りしは何の時よりか。曰へり幼き時よりなり。二二 鬼は彼を滅さん爲に火に又水に投じたり。爾若し何なかな能せば我等を憫みて我等を助けよ。二三 イイスス之に謂へり爾若し幾何か信することを能せば信する者には能せざることをなし。二四 童子の父直に涙を垂れて呼びて曰へり主よ我信す我が不信を助けよ。二五 イイスス民の趨せ果るを見て汚鬼を禁めて之に謂へり噫にして聾なる鬼よ我爾に命す彼より出でて再び彼に入る勿れ。二六 鬼號びて甚しく彼を拘擧させて出でたり彼は死せし者の若くならりて多くの者彼死せり云ふに至れり。二七 イイスス其手を執りて彼を起したれば

彼即立てり。二八 イイスス家に入りし時、其門徒私に彼に問へり、我等が之を逐ひ出す能はざりしは何の故ぞ。二九 彼曰へり、祈禱さずして由らざれば、此の類出づるを得ざるなり。三〇 彼等彼處を出て、ガリラヤを過ぐ、彼は人の之を知らんことを欲せざりき。三一 蓋其門徒に教へて、人の手は人人の手に付され、人人彼を殺し、殺されて後、彼第三日に復活せん」と曰へり。三二 惟彼等は此の言を曉らざりき、亦彼に問ふことを恐れたり。三三 彼カペルナウムに來りて家に在る時、彼等に問へり、爾等が途中相議せしは何の事ぞ。三四 彼等默然たり、蓋途中孰が大なるを相議したり。三五 彼坐して、十二徒を召して、之に謂ふ、先たらんと欲する者は衆の後を爲り、衆の役者と爲るべし。三六 又幼兒を取りて、彼等の中に立て、且之を抱きて、彼等に謂へり。三七 我が名に因りて是くの如き幼兒の一人を接けん者は、我を接くるなり、我を接けん者は、我を接くるに非ず。三八 乃我を遣し、者を接くるなり。三九 イサアン彼に答へて曰へり、師よ、我等は爾の名を以て魔鬼を逐ひ出し、而して我等に従はざる人を見て、之に禁じたり、其我等に従はざる故なり。四〇 イイスス曰へり、之に禁する勿れ、蓋我が名を以て異能を行ひし者は、

未だ幾ならずして我を誹る能はず。蓋爾等に敵せざる者は爾等の與國なり。爾等がメサストスに屬する故を以て、我が名に因りて、爾等に水一杯を飲ましめん者は、我誠に爾等に詛ぐ、其賞を失はざらん。然れども我を信する此の小子の一人を脚に誘はん者は、寧ろ石を其頸に懸けられて、海に投せられん。若し爾の手爾を脚に誘は、之を斷て、爾の爲には、殘缺にして生命に入るは、爾の手ありて地獄に滅せざる火に入るより勝れり。彼處には彼等の蟲死せず、火滅ばず。若し爾の足爾を脚に誘は、之を斷て、爾の爲には、跛にして生命に入るは、爾の足ありて地獄に滅せざる火に投せらるゝより勝れり。彼處には彼等の蟲死せず、火滅ばず。若し爾の目爾を脚に誘は、之を抉れ、爾の爲には、一の目ありて、神の國に入るは、爾の目ありて火の地獄に投せらるゝより勝れり。彼處には彼等の蟲死せず、火滅ばず。蓋凡の人は火を以て鹽せられん、又凡の祭物は鹽を以て鹽せられん。鹽は善き物なり、然れども鹽若し其味を失は、何を以て之を鹹くせん。爾等の内に鹽を有ち、亦互の和平を有て。

第二十章 一 イイスス起ちて彼處を去り、イオアルダンの外よりイウダヤの境に來れり。民復彼に集れり。に彼は常の如く復之を教へたり。二 弗リセイ等就きて彼を試みて問へり、人其妻を出すは宜しきか。三 彼答へて曰へり、モイセイは爾等に何を命ぜしか。四 彼等曰へり、モイセイは離婚を書きて之を出すを許せり。五 イイスス彼等に答へて曰へり、彼は爾等の殘忍なるに因りて爾等の爲に此の誡を書せり。六 然れども遺成の始には、神之を男女に造れり。七 是の故に人は其父母を離れ、八 其妻に著きて、二の者一體と爲らん。然らば彼等は既に二人に非ず、乃一體なり。九 故に神の耦せし者は、人之を分つ可からず。一〇 家に在りて其門徒彼に復此の事を問へり。一一 彼は之に謂ふ、其妻を出して他に娶る者は、妻に對して姦淫を行ふなり。一二 妻も若し其夫を棄て、他に適わば姦淫を行ふなり。一三 幼兒を彼に攜へ來れるあり、彼等に觸れん爲なり、門徒攜ふる者を戒めたり。一四 然れどもイイスス之を見て、愠りて彼等に謂へり、幼兒の我に就くを容せ、之に禁する勿れ、蓋神の國は是くの如き者に屬す。一五 我誠に爾等に語く、幼兒の如くに神の國を承けざる者は、之に入るを得ず。一六 乃彼等を抱き、手を其上

に接せて彼等に視し居せり。二七彼が途に出づる時、或人趨り前みて、彼の前に跪きて問へり。善なる師よ、我永遠の生命を開かん爲に何を爲すべきか。一八イエス彼に謂へり。爾は何ぞ我を善と稱ふる、猶神より外に善なる者なし。一九爾は絨を織り、淫する母れ、殺す母れ、竊む母れ、妄證する母れ、欺き取る母れ、爾の父母を敬へ。二〇彼對へて曰へり。師よ、我幼より皆之を守れり。二一イエス彼に目を注ぎて彼を愛し、而して彼に謂へり。爾に猶一の足らざる事あり、往きて爾の所有を售りて、貧者に施せ、然らば財を天に有たん、且來りて、十字架を貰ひて我に従へ。二三彼此の言に縁りて、色沮み愛ひて去れり、大なる資産を有てる故なり。二四イエス環視して、其門徒に謂ふ、富を有つ者の神の國に入るは難き哉。二五門徒其言に駭けり。イエス復答へて、彼等に謂ふ、小子よ、富を恃む者の神の國に入るは難き哉。二六駭駭が針の孔を穿るは富める者が、神の國に入るより易し。二七彼等甚驚きて互に言へり、然らば誰か能く救はれん。二八イエス彼等に目を注ぎて曰く、此れ人には能せざる所なれども、神には能せざる所なし。二九是に於て、ペトル彼に謂へり、視よ、我等一切を捨て、爾に

從へり。ニル イイスス答へて曰へり、我誠に爾等に語ぐ我及び福音の爲に家、或は兄弟、
或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は子、或は田疇を捨て、
而して今斯の時、皆逐の中
に在りては家、兄弟、姉妹、父、母、子、田疇を百倍多く受け、又未來の世に在
りては、永遠の生命を受けざる者あらず。
惟多く先なる者は後に、後なる者は
先にならん。
三二 イエルサリムに上る時、途申イイスス先だちで行き、彼等眩き且懼れ
て、之に從へり。彼復十二徒を召して、己に及ばんとする事を語げて、
三三 曰へり、我
等イエルサリムに上る、人の子は司祭、諸長及び學士等に付されん、彼等之を死に定め、
之を異邦人に付し、
三四 之を辱め、之を鞭ち、之に唾し、之を殺さん、而して彼第三日に復
活せん。
三五 時にセラテイの子イアコフ及びイオアン彼に就きて曰く、師よ、我等の求
むる所願は、くは爾我等の爲に之を行へ。
三六 彼は之に謂へり、我が爾等の爲に何を行
はんことを欲するか。
三七 彼等曰へり、我等に爾が光榮の中に於て、一人は爾の右に、一
人は爾の左に坐せんことを賜へ。
三八 イイスス彼等に謂へり、爾等求むる所を知らず、
爾等我が飲む爵を飲むことを能するか、我が受くる洗を受くることを能するか。
三九

彼等曰へり能す。イエス彼等に謂へり爾等は我が飲む爵を飲み我が受くる洗を受
けん。 然れども我が右及び我が左に坐することは我が與ふべきに非ず、乃備へ
られたる者に與へられん。 十門徒之を聞きて、イアコフ及びイオアンを慍れり。
二 イエス彼等を召して曰く、諸民の稱して王侯と爲す者其民を主り、大人等其上に
權を執るは爾等の知る所なり。 惟爾等の中には斯くある可からず、乃爾等の中
に大ならんを欲する者は爾等の役者と爲る可し。 爾等の中に首たらんを欲する
者は衆人の僕と爲るべし。 蓋人の子の來りしも、人を役ばん爲に非ず、乃人に役
はれ、且己の生命を與へて衆くの者の贖を爲さん爲なり。 イエリホンに來る。彼が
其門徒及び衆くの民と偕にイエリホンを出づる時、タメイの子アルタメイと云ふ習
者道の旁に坐して乞へり。 是れイエスナソレイと聞きて、彼呼びて曰へり、
タワドの子イエスよ、我を憐め。 多くの者彼を禁めて黙さしむれども、彼愈大
に呼べり、タワドの子よ、我を憐め。 イエス止りて、彼を呼ばしめたれば、人人習者
を呼びて之に謂ふ、心を安んじよ、起て、爾を呼ぶ。 彼上衣を棄て、起ちてイエス

に就けり。五二 イイスス答へて彼に解ふ、我が爾に何を爲さんことを欲するか。警者曰く、夫子、我が見るを得んことを。五三 イイスス彼に解へり、往け、爾の信は爾を救へり。彼直に見るを得て、イイススに路に従へり。

一

イエルサリムに近づき、橄欖山に過ぐ、カヌギヤ及びカヌニヤに至らん

とする時、イイスス二人の門徒を遣して、之に解ふ、爾等の前なる村に往け、其内に入らば、直に繋ぎたる小 驢、人の未だ乗らざりし者に遇はん之を解きて、牽き來れ、若し爾等に何を爲すかと言ふ者あらば、主之を語むと言へ、然らば直に之を此に遣さん。四 彼等往きて、峻路に門の外に繋ぎたる小 驢に遇ひて、之を解けり。彼處に立てる者の中、政人彼等に解へり、小 驢を解きて何をか爲す。彼等イイススの命ぜし如く對へたれば、乃之を許せり。五 已に小 驢をイイススに牽き來りて、己の衣を其上に置き、イイスス之に乗れり。八 多くの者は己の衣を途に布き、他の者は樹の枝を伐りて途に布けり。九 且前に行き後に従ふ人人呼びて曰へり、「オサンナ、主の名に因りて來る者は祝福せらる、一〇 我が父ダウダの國、主の名に因りて來る者は祝福せらる、至

高きに「オサンナ」。一 イイススイエルサリムに至り、殿に入りて、徧く圍視し、時已に
晩くなりしに因りて、十二徒と偕にワスニヤに出でたり。二 明日彼等がワスニヤを
出でし時、彼飢ゑたり。三 遂に葉の有る無花果樹を見て、之に往けり、其上に得る所な
きか、既に來れば、葉の外に得る所なかりき、無花果の時未だ至らざればなり。四 イ
イスス之に對ひて曰へり、今より後人永く爾の果を食ふ可からず。其門徒之を聞けり。
一五 彼等復イエルサリムに來れり。イイスス殿に入りて、其中に貿易する者を逐ひ出
だし、兌換する者の案と、鴿を繋ぐ者の椅とを倒し、一六 罫を擲へて殿の中を過ぐ
るを許さざりき。一七 又彼等に誨へて曰へり、我が家は萬民の爲に祈禱の家と稱へら
れん、と縁されたるに非ずや、然るに爾等之を盜賊の巢窟と爲せり。一八 學士等及び司
祭諸長は此を聞き、如何にして彼を滅さんと謀れり、蓋彼を懼れたり、衆民其詞を奇
とせしが故なり。一九 時已に晩くなりて、彼城の外に出でたり。二〇 翌朝過ぐる時、無花
果樹の根より枯れたるを見たり。二一 ベトル憶ひ起して、彼に爾ふ、夫子、爾が祖ひ
し無花果樹は枯れたり。二二 イイスス答へて、彼等に爾ふ、爾を信ぜよ。二三 蓋、我、賊に

爾等に語ぐ若し人此の山に移りて海に投ぜよと云ひ而して其心に疑はずして其言の如く成らんと言ふれば何を言ふとも彼に成らん。二四この故に我爾等に語ぐ凡そ所處の時に求むる所は之を得んと言ふれば然らば爾等に成らん。二五又立ちて所趨する時若し人を慫むることあらば之を免せ天に在す爾等の父も爾等の過を免さん爲なり。二六爾等若し人に免さずば天に在す爾等の父も爾等の過を免さん爲なり。二七復イエ
ルサリムに來れり。彼が殿を歩める時司祭師長と學士等と長老等と彼に就きて二八曰く爾何の權を以て是を行ふか誰か爾に是を行ふ權を與へたる。二九イエス答へて彼等に謂へり我も亦一言爾等に問はん我に答へよ然らば我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げん。三〇イオアンの洗禮は天よりせしか抑人よりせじか我に答へよ。三一彼等竊に議して曰へり若し天よりせよと云はば爾等何ぞ彼を信ぜざりしと云はん。三二若し人よりせよと云はば民を畏る盜皆イオアンを以て實に預言者なりとせり。三三遂にイエスに答へて曰く知らず。イエスも彼等に答へて曰く我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げざらん。

園丁に以て彼等に語りて曰へり、或人葡萄園を樹る之に籬を環らし、
酒樽を掘り塔を建て、之を園丁に託して他方に往けり。二期に及びて彼は園丁より葡
萄の果を收めん爲に、其僕を園丁に遣せり。彼等之を執へて打ち空しく返らしめた
り。復他の僕を彼等に遣し、之をも石にて撃ち、其首に傷つけ辱めて返らしめた
り。又他の者を遣し、之を殺せり、其他の多くの者を或は打ち、或は殺せり。猶其
一の至愛の子あり、卒に是をも彼等に遣して曰へり、我が子に愧ぢんぞ。然れども彼
の園丁は相語りて曰へり、此れ罫子なり、往きて彼を殺さん、然らば其罫業は我等の有
さならん。八すなはちこれ、さら
爲さんか、彼來りて園丁を滅し、葡萄園を他の者に託せん。一、爾等聖書に、工師が棄て
たる石は、嵐隅の首石と爲れり。二、此れ主の成す所にして、我等の目に奇異なりとす
と云ふを未だ讀まざりしか。一、彼等はイススを執へんと謀りたれども、民を懼れ
たり、蓋其彼等を指して譬を言ひしを覺れり、乃彼を離れて去れり。一、又彼を其言
に因りて習せん爲に、フリセイ等及びイロドの黨の數人を彼に遣せり。一、此等の者

來りて、彼に謂ふ、師よ、我等は爾が眞なる者にして、何人にも偏らざるを知る。蓋爾は貌を以て人を取らず、乃眞に神の道を教ふ。税をケサリに納むるは宜しや否や、一、我等納めんか、納めざらんか。イエス、彼等の詐を知りて、之に謂へり、何ぞ我を試みる。銀一枚を搯へて、我に視せ。一、彼等搯へ來りしに、之に謂ふ、何れ誰の像と號なるか。曰く、ケサリの。一、イエス、彼等に答へて、曰へり、ケサリの物をケサリに納め、神の物を神に納めよ。彼等之を奇き爲せり。一、又サドケイ等、即復活なしと言ふ者、彼に就きて問ひて曰く、一、師よ、モーセイ我等の爲に書して云へり、若し人の兄弟死して妻を遺し、子を遺さずば、其兄弟其妻を娶りて、兄弟の嗣を興すべしと。二、兄弟七人ありしが、第一の者妻を娶れり、而して死して子を遺さざりき。三、第二の者も之を娶りて死せり、亦子を遺さざりき、第三の者も亦然り、七人之を娶りて子を遺さざりき、其後妻も亦死せり。三、然らば復活には、彼等が復活せん時は、此の婦は其中誰の妻と爲らんか。蓋七人之を妻と爲せり。二、イエス、彼等に答へて、曰へり、爾等は聖書をも神の能をも知らずして、之が爲に迷ふか。三、蓋死より復活せん時は、娶らず、嫁がす、乃天

使等の如く天に在るなり。二六死者の復活することに付きては爾等モイセイの書に、
練の篇に於て如何に神が彼に、我はアウラアムの神イサクの神、イアコフの神なり
と言ひしを未だ讀まざりしか、二七神は死者の神に非ず、乃生者の神なり故に爾等
大に迷へり。二八學士等の一人彼等の議論を聞き、イイススの善く對へしを見て、彼に
就きて問へり一切の誠の中何か第一たる。二九イイスス之に答へて曰へり一切の誠
の中第一なる者は云く、イスラエリよ、聽け、主我等の神は一の主なり、三〇又爾心を
盡し靈を盡し意を盡し力を盡して、主爾の神を愛せよ、此れ第一の誠なり。三一第二は
是に同じき者、即爾の隣を愛すること己の如くせよ。斯の二の者より大なる誠は有
らず。三二學士彼に謂へり善い教師よ、爾が神は一にして、其外に神なしと謂ひしは實
なり。三三又心を盡し、智を盡し、靈を盡し力を盡して、彼を愛し、又己の如く隣を愛する
は、悉くの全備と祭祀とに愈れり。三四イイスス其智を以て對へしを見て、之に謂へり、
爾は神の國に遠からず。是より敢て復彼に問ふ者なかりき。三五イイスス又殿に於て
數を宣べて曰へり、學士等何ぞハリストスはダワドの子なりと云ふ、三六爾等、
ダワド

自ら聖神に由りて言へり、主我が主に明へり、爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の
の発き爲すに送れ。三十七 斯くマワド自ら彼を主と稱ふ、如何ぞ彼は其子たる。衆くの
民は樂みて彼に聞けり。三十八 彼又其效の中に曰へり、隨みて學士等を防げ、彼等は長き
衣にて遊ぶを好み、街衢には剛安、會堂には首座、鐘には上席を好む。三十九 此等衆の
家を香み、伴りて長き所を爲す者は、尤重き定罪を受けん。四十 イイスス、獻賽函に對
ひて坐し、民が金錢を獻賽函に投するを見たり。多くの富める者は多く投じたり。四十一
一人の貧しき、襤褸來りて、「レプタ」を投じたり、即五蓋なり。四十二 イイスス其門徒を召し
て、之に謂ふ、我誠に爾等に語ぐ、此の貧しき襤褸は、凡そ獻賽函に投する者より多く投じ
たり。四十三 盜皆其羨餘より投じ、彼は其乏しき所より、凡の有てる者、即其生計を盡く
投じたり。

一 イイスス殿を出づる時、其門徒の一人彼に明ふ、師よ、此の石の若何、此の
造構の若何を觀よ。二 イイスス彼に答へて曰へり、爾此等の大なる造構を見るか、此に
は一の石も石の上に造らずして、皆圮されん。三 彼が橄欖山に殿に對ひて坐せる時、

トル、イアコフ、イオブン、ブンドレイ、竊に彼に問へり、請ふ我等に告げよ、何の時に此の事あらん、又此れ皆成らんとする時は、如何なる兆あるか。イス、彼等に答へて曰へり、慎みて人に惑はざる、勿れ。蓋多くの者は我が名を冒して來り、是れ我なりと云ひて、多くの者を惑はさん。爾等、戦と戦の風聲を聞かん時、懼る、勿れ、蓋此れ有るべし、惟此れ尙末期には非ず。蓋民は民を攻め、國は國を攻めん、處處に地震あり、饑饉變亂あらん、此等は苦難の始なり。爾等、自ら慎め、蓋人人爾等を公會に解し、會堂に懸たん、又爾等は我が爲の故に、諸侯諸王の前に立てられん、彼等に證を爲さん爲なり。一、福音は、先づ萬民に傳へらるべし。二、爾等を曳きて解さん時、先づ何を言ふべきを慮る勿れ、亦預め、籌る勿れ、乃其時爾等に與へられん事を言へ、蓋爾等言はんとするに非ず、乃、聖神なり。一、兄弟は兄弟を父は子を死に付し、子は親を攻め、且之を殺さん。一、爾等我が名の爲に衆人に憎まれん、惟終に至るまで忍ぶ者は救はれん。一、爾等預言者、マニエルに因りて言はれたる荒廢の憎むべき物の立つ處からざる處に立つたを見れば、(讀む者悟るべし)其時イサテヤに在る者は山に遁る

べし。一五 屋の上うへに在ある者ものは家いに下くだるべからず其家そのいへより物ものを取とらん爲ために内うちに入いるべからず。一六 田たに在ある者ものは其衣そのころもを取とらん爲ために歸かへるべからず。一七 當日そのひには妊はらめる者ものを乳ちを哺のまする者ものを隔はる能かず。一八 爾等なんぢらの過とがぐるこゝの冬ふゆに在あらざらん爲ために所いれ。一九 蓋けがし其日そのひに有あらんとするくわんなん想かん難なんは神かみが萬物ばんぶつを遣つりし始はじめより今いまに至いたるまで未いまだ此かくの如ごときは有あらざりき後のちも亦また有あらざらん。二〇 若もし主しゆ其日そのひを滅げんぜざりしならば凡おほの肉身にくしんは救すはれざりしならん然しかれども彼かれは其選そのえらびし所ところの選えらばれたる者ものの爲ために其日そのひを滅げんじたり。二一 其時そのとき若もし人爾等ひとなんぢらに告つげて親みよ、ハリストス此こゝに在あり、或あるは親みよ、彼かれに在あり云いはば信しんずる勿なかれ。二二 蓋けがし偽いつはりハリスト及および偽いつはり預言者よげんしゃ起おこりて奇蹟きせきと奇蹟きせきを施ほし若もし能よくすべくば、選えらばれたる者ものをも惑まはすに至いたらん。二三 爾等なんぢら慎しんめ親みよ、我われ預よめ皆爾等みななんぢらに言いへり。二四 其日そのひ後のちの患難くわんなんの後のち日は晦くろみ月つきは其光そのひかりを施ほさず。二五 星ほしは天てんより隕おち天勢てんせいは震ふるひ動うごかん。二六 其時そのとき人ひとの子こが大おほなる機能りんのうと光榮くわうえいを以もつて雲くもに乘のりて來きたるを見みん。二七 其時そのとき彼かれは其天使そのてんし等を遣つかはし其選そのえらばれたる者ものを四風しふうより集あつめて地ちの極はてより天てんの極はてに至いたらん。二八 無花果樹いちじくの葉はを擧あげ其枝そのえだ已すでに柔やわにして瓊萌はきせば爾等なんぢら夏なつの近ちかきを知る。二

九か 是くの如く爾等此等の事の成るを見れば、時の近くして門に在るを知れ。三〇我誠に
 爾等に語ぐ、此の代未だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。三一天地は廢せん、然れども我
 が言は廢せざらん。三二其日其時は、之を知る者なし、天の使等も子も知らず、唯父のみ
 之を知る。三三爾め敵醒所繕せよ、盜爾等此の期の何の時に來るを知らず。三四譬へば
 人他の地に往かんとして、其家を離るゝ時、其諸僕に權を與へ、各に爲すべきことを授
 け、爾等に敵醒せんことを命ぜしが如し。三五故に敵醒せよ、蓋爾等は家主の何の時
 即暮に、或は夜半に、或は鷓鴣に、或は平旦に來るを知らず。三六恐らくは彼突に來り
 て、爾等の寢ぬるに遇はん。三七我が爾等に敵醒せよと訓ふは、即衆人に訓ふなり。
 三十八二日の後は、逾越節及び除酵節なり。司祭諸長と學士等とは如何に詭計
 を用ゐて、イエスを執へて、之を殺さんと謀れり、三十九惟曰へり、節期に於てすべからず、
 恐らくは民の中に亂は起らん。四十彼がワスニヤに於て、猶者シモンの家に在りて、席坐
 せる時、一の婦、價賣き純、眞なる「ナルド」の香膏を盛れる玉の盒を擲へ來り、盒を破
 りて、彼の首に沃げり。四十一或者愼りて、相語りて曰へり、此の香膏の廢設は何の爲ぞ、

蓋此れ銀三百餘の價に賣りて、貧しき者に施すを得しならん。乃婦を咎めたり。イ
 イスス曰へり、之を舍け、何ぞ之を擡す。彼は我が爲に善き功を爲せり。蓋貧しき者は
 常に爾等と備にし、爾等欲する時之に善を行ふを得、我は常に爾等と備にするにあら
 ず。彼は能する所を行へり、即我が儘に音ねりて、之を葬に備へたり。我誠に爾等に
 語ぐ、全世界の中、凡そ此の福音の傳へられん處には、此の婦の爲し、事も述べられて、
 其記念と爲らん。一〇時に十二の一なるイウダ「イスカリオト」司祭諸長に往けり、イ
 ススを之に賣らん爲なり。二彼等聞きて喜び、銀を彼に與へんことを約したれば、彼
 は如何にして好き機に於て之を付さん謀れり。二三除酵節の首の日、即逾越節の
 羔を宰る時、門徒イイススに謂ふ、我等が往きて、何處に爾の爲に逾越節の食を備へ
 んことを欲するか。一三彼二人の門徒を遣して、之に謂ふ、城に往け、水を盛れる瓶を攜
 ぶる人爾等に遇はん、之に従ひて。一四其入る所の家の主に語げよ、師言ふ、我が門徒と
 備に逾越節の食を食すべき筈は何處に在るか。一五彼爾等に敷き飾りて備へたる大
 なる樓を示さん、彼處に我等の爲に備へよ。一六門徒出て、城に來りしに、其言ひし者

事に遇へり、乃逾越節筵を備へたり。一七、暮に及びて、彼十二徒と偕に來る。一八、既に
 席坐して食する時、イエス曰へり、我誠に爾等に語ぐ、爾等の中の一人、我と共に食す
 る者は、我を賣らん。一九、彼等憂ひて、一一、彼に問へり、是れ我に非ずや、又他の者云ふ、是
 れ我に非ずや。二〇、答へて曰へり、十二の中の一人、我と偕に孟に彌す者、是なり。二一、人の
 子は、逆く之を指して録されしが如し、惟人の子を買る者は、彌なる哉、斯の人生れざり
 しならば、彼の爲に善かりしならん。二三、彼等が食する時、イエス餅を取り、祝禱して
 之を擘き、彼等に與へて曰へり、取りて食へ、是れ我の體なり。二四、又爵を取り、感謝して
 彼等に與へしに、皆之を飲めり。二五、彼曰へり、是れ我の新約の血、衆くの人の爲に流さ
 るる者なり。二六、我誠に爾等に語ぐ、我復葡萄の實より飲ますして、神の國に於て新し
 き者を飲む日に至らむ。二七、既に臥ひて橄欖山に往けり。二八、イエス彼等に謂ふ、爾
 等皆今夜我の爲に眠かん、豈録せるあり、我牧者を擧たん而して、羊は散らん。二九、我
 が復活の後、我爾等に先だちてガリレヤに往かん。三〇、ペトル彼に謂へり、皆眠くとも、
 我は然らざらん。三一、イエス彼に謂ふ、我誠に爾等に語ぐ、今日此の夜、鷓の再鳴か

ざる先に、爾三次我を諒まん。彼益力言して曰へり、我爾を借に死すとも、爾を
 諒まざらん、皆亦是くの如く言へり。ゲフシマニヤミ名づくる處に來りて、イエス
 其門徒に謂ふ、爾等此に坐して、我が往きて祈るを待て。乃、ベトル、イアコフ、イ
 アブンを擲へて、己を借にし、畏と哀とを備せり。又彼等に謂ふ、我が靈憂ひて死
 に近づけり、爾等此に在りて、徹醒せよ。乃少し離れて、地に伏し、若し能すべ
 ば、斯の時の彼を過ぎんことを祈りて。曰へり、「アウラ」父よ、爾には能せざる所な
 し、此の辭をして我を過ぎしめよ、然れども我が欲する所成らずして、爾が欲する所成
 るべし。途に來りて、彼等の寢ぬるを見て、ベトルに謂ふ、シモンよ、爾醒ぬるか、一時
 も徹醒する能はざりしか、爾等徹醒せよ、祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり、神は
 勇めども、肉體は弱し。復往きて同じき言を言ひて祈れ。返りて、彼等の復寢
 ぬるを見たり、其目倦みたればなり、彼等何を以て彼に對ふべきを知らざりき。第
 三次來りて、彼等に謂ふ、彼等尙醒れて休むか、己みの時至れり、觀よ、人の子は罪人の手
 に付さる。起きよ、行かん、觀よ、我を付す者は近づけり。彼が尙言ふ時、忽十二

のひこり一なるイリダは来り、劍つるぎと棒ぼうを持てる多くの民、司祭諸長、學士等及び長老等より遣つかはされし者は、彼かれと借かかにせり。四四 イイススを付つす者、彼等かれらに貌しほしを與あたへて曰いへり、我が接せつ吻ぶんせん者は、即すなはち斯ひとの人なり、彼かれを執とらへて、憤つしみて之これを曳ひけよ。四五 來りて直ただちに彼かれに就つきて曰いく、夫子ウツノ夫子ウツノ、乃すなはち彼かれに接吻せつぶんせり。四六 彼等かれら其手そのてをイイススに措おきて、之これを執とらへたり。四七 此こゝに立たてる者ものの一人、劍けんを抜ぬきて、司祭長の僕はくを撃うちて、其耳そのみみを削そげり。四八 イイスス、彼等かれらに解いへり、爾等なんぢらは盜賊なすびに向むかふ如ごとく、劍つるぎと棒ぼうを持もちて、我われを捕とらへん爲ために出いでたり。四九 我われ日日わが爾等なんぢらと借かかに殿でんに在ありて、誨なしに、爾等なんぢら我われを執とらへざりき、然しかれども、聖書せいしよは應かたふべし。五〇 其時そのとき、彼かれを遣すて、奔はれり。五一 一の少すくき者もの、裸體はだかに布ぬのを纏まとひて、彼かれに従したがひしに、兵卒へいそう之これを執とらふ、五二 少すくき者もの、布ぬのを束ためて、裸體はだかにして奔はれり。五三 イイススを曳ひきて、司祭長さいしやうに至いたりしに、彼處かそこには、司祭諸長さいしやう、長老等ちやうらう、學士等がくし、成あつまれり。五四 ベトル遠とほく彼かれに隨したがひて、司祭長さいしやうの中庭ちゆうていの内うちに入り、下吏等したやくらと借かかに坐まして、火ひに煖あたたまれり。五五 司祭諸長さいしやう及び全公會ぜんこうかいは、イイススを死しに致いたさん爲ために、彼かれに對たいする證しやうを求めたれども、得えざりき。五六 盜たう多おほくの者もの、彼かれに對たいして、妄證まうしやうしたれども、其證そのしやうは符あはざりき。五七 或者あるもの起たちて、彼かれに對たいして

交證して曰へり。我等其言ふを聞けり、曰く、我手にて造られたる此の殿を毀ちて、三日の中に手にて造られざる他の者を建てん。但し此の證も亦符はざりき。是に於て司祭長中に立ちて、イイススに問ひて曰へり、爾答ふる所なきか、彼等が爾に對して證する所如何。然れども彼默然として一も答へざりき。司祭長復彼に問ひて曰へり、爾は証せらるゝ者の子ハリストスなるか。イイスス曰へり、我なり、且爾等は人の子が大能の右に坐し、天の雲に乗りて來るを見ん。其時司祭長己の衣を裂きて曰く、我等何ぞ復證者を求めん、爾等其神を瀆すを聞けり、爾等如何に意ふか。彼等皆之を死に當る者と定めたり。是に於て或者は彼に唾し、又其面を掩ひて、彼を撃ちて曰へり、預言せよ、下吏等も亦其頬を批てり。マートル下中に中庭に在る時、司祭長の婢の一人は來り、マートルの燈まれるを見て之に目を注ぎて曰く、爾もナザレトのイイススと備に在りき。然れども彼證みて曰へり、我爾が言ふ所を知らず、又覺らず。乃外に前庭に出でたれば、鷓鴣けり。婢又彼を見て、旁に立てる者に謂へり、此の人も其黨の一人なり。七〇、彼復證みたり。少頃ありて、彼處に立

て、ものまた復べトルに附へり、賊に附も其黨の一人なり、盜用はガリレヤ人にじて、附の言語は似たり。七二 彼は阻ひ且誓へり、我爾等が言ふ所の人を識らす。七三 斯の時、再鳴けり。べトルはイエススの彼に、鶴の二次鳴かざる先に、爾三次我を識まん、云ひし言を憶ひ起して哭けり。

【七四】 平旦に及びて、直に司祭諸長は長老答畢士等及び全公會と共に集議し、イエスを縛りて、曳きてピラトに解せり。七五 彼に問へり、爾はイウテヤ人の王なるか。彼答へて曰へり、爾言ふ。司祭諸長は多くの事を以て彼を訟へたり。七六 彼に復彼に問ひて曰へり、爾答ふる所なきか。爾、爾に對して證すること幾何ぞ。七七 イエス、仍一言も答へざりき、ピラト奇むに至れり。七八 節期には、彼一人の囚を民の求むる所に任せて釋すことありき。七九 時にワラウラ名づくる者、其共謀者、僭に聚がれ居たり、即騒亂の時に殺人を爲し、盟なり。民は聲を揚げて、常に彼等の爲に行ひ、如く爲さんことを求めたれば、九〇 彼答へて曰へり、我が爾等にイウテヤ人の王を釋さんことを欲するか。九一 盜用祭諸長が嫉妬に因りて、彼を解し、を知れり。九二 然

るに初祭諸長は民に唆めて、彼を釋さんことを乞はしめたり。一五
 へて復彼等に謂へり、然らば爾等がイウテヤ人の王と名づくる者には、我が何を爲さ
 んことを欲するか。一六 彼等復駭びて曰へり、彼を十字架に釘せよ。一七 彼等に
 謂へり、彼は何の惡を行ひしか。然れども彼等愈々據べり、彼を十字架に釘せよ。一八
 時ピラト民の望に適はしめんと欲して、アラウを彼等に釋し、イイススを鞭ちて十
 字架に釘せん爲に付せり。一九 兵卒彼を曳きて中庭の内、即公廨に至り、全營を集め、
 一七 彼に紫袍を衣せ、棘の鬘を纏みて冠らせ、一八 其安を問ひて曰へり、イウテヤ人
 の王段べよ。一九 又荦を以て其首を撃ち、彼に唾し、跪きて彼を拜せり。二〇 既に戯れ畢
 りて、其紫袍を脱ぎ、彼の衣を衣せ、十字架に釘せん爲に彼を曳き往けり。二一 或キ
 リテヤの人シモン、即アレキサンデル及びルプの父が、田より來り過ぐるを強ひて、
 其十字架を負はしめたり。二二 ゴルゴスの處降すれば、饑餓の處に曳き至りて、二三 汲
 水を和へたる酒を彼に飲ませしに、彼受けざりき。二四 彼を十字架に釘せし者は、其衣
 を分ち、孰か何を得んと圖を取れり。二五 第三時に在りて、彼を十字架に釘せり。二六 其

脚の標に書して曰へり、イウテヤ人の王さ。彼に二人の盜賊を十字架に釘せり、一人は其右、一人は其左なり。是に於て聖書の言應へり、曰く、罪犯者と僭に算へられたり。過ぐる者彼を詣り首を搦かして曰へり、喧殿を毀ちて三日に之を建つる者よ、己を救ひて十字架より下れ。同じく司祭諸長も學士等と僭に嘲りて相語りて曰へり、他人を救ひて己を救ふ能はず。ハリストス、イスラエリの王、今十字架より下るべし、我等が見て彼を信せん爲なり。彼と僭は十字架に釘せられし者も彼を詣れり。第六時に及び、暁冥は全地を蔽ひて、第九時に至れり。第九時にイイスス大聲に呼びて曰へり、エロイ、エロイ、ラマ、サラフニ譯すれば、我が神よ、我が神よ、何ぞ我を遺てたる。旁に立てる者の中、或人之を聞きて曰へり、視よ、イリヤを呼ぶ。一人趨り往きて、海絨に船を盈たし、棹に束れて彼に飲ましめて曰へり、姑く舍け、イリヤ來りて、彼を下すや否やを觀ん。イイスス大聲を發して、氣絶じたり。時に殿の幔は上より下に至るまで裂けて、二さなれり。彼に對ひて立ちたる百夫長は、其斯く呼びて氣絶じしを見て、曰へり、斯の人は誠に神の子なり。彼處に

亦遙に望める婦等あり、其中にマリヤ「マゲダリナ」小なるイアコフとイオシヤとの母マリヤ及びサロミヤ、^{四一} 即彼がガリレヤに在りし時にも彼に従ひて事へし者及び其他彼と偕にイエルサリムに上りし多くの婦ありき。^{四二} 日已に暮れしに、是の日は備節日にして安息日の前日なりし故。^{四三} アリマスヤの人イオシフ貴き議士自らも神の國を俟てる者は來り、毅然としてピラトの許に入りて、イエススの屍を求めたり。^{四四} ピラト其已に死せしを奇み、百夫長を召して彼死して久しきかを問ひ、^{四五} 百夫長より之を知りて屍をイオシフに與へたり。^{四六} 彼は布を買ひ之を下して布に裹み之を磐に懸ちたる墓に置き、石を墓の門に轉せり。^{四七} マリヤ「マゲダリナ」及びイオシヤの母マリヤは彼を置きたる處を見たり。

四八 安息日過ぎて、マリヤ「マゲダリナ」イアコフの母マリヤ及びサロミヤ、香料を買ひたり、往きてイエスに覆らん爲なり。^{四九} 七日の首の日、甚早く墓に來る、日の出づる頃なり。^{五〇} 相語りて曰へり、誰が我等の爲に石を墓の門より移さん。^{五一} 目を擧げて石の已に移されたるを見る、蓋其石は甚大なり。^{五二} 彼等墓に入りて、白衣を衣

たる少者が右の方に坐せるを見て駭けり。彼は之に俯ふ駭く勿れ爾等は十字架に釘せられしナザレトのイエスを尋ね彼は復活して此に在らず。曠ふ此は彼を置きし處なり。往きて其門徒及びペトルに語つて言へ、彼は爾等に先だちてかりレヤに往く、爾等彼處に於て彼を見ん其爾等に言ひしが如し。婦急ぎ出で、墓より奔り、眠き且つ驚きて、一言も人に語げざりき。懼れしが故なり。七日の首の日朝早く、イエス復活して、先づマリヤ「マグダリナ」即其曾て七の魔鬼を逐ひ出し、所の者に現れたり。一、婦往きて、先に彼と偕に在りし哀み哭ける者に告げたれども、二、彼等其生きて、之に見られたりき聞きて、信ぜざりき。三、其後彼等の中の二人が村に往く時、イエス變りたる容を以て之に途に現れたり。四、二人返りて、餘の者に告げしに、彼等をも信ぜざりき。五、卒に十一門徒に其席坐の間に現れて、其信なき心の頑なるさを責めたり、彼の復活したるを見し者を信ぜざりし故なり。六、又彼等に謂へり、全世界に往きて福音を悉くの受造物に傳へよ、七、信じて洗を受くる者は救はれ信ぜざる者は罪に定められん。八、信する者には斯の休徴は従はん、我が名に因りて

鬼おにを逐おとひ出いだし、新あらたなる方こゝろ言ことばを言いひ、一八ひ蛇へびを操とり、毒どくを飲のむも、彼等かれらを害がいせざらん、手てを病者びやうじやに按おせば、愈いゆるを得えん。一九し主しゆは彼等かれらに踏かりしのち後のち天てんに升のぼり、神かみの右みぎに坐ませり。二〇し彼等かれらは出いで、四方しはうに教をしを傳つたへ、主しゆは彼等かれらを相あいひ、之これに從したがふ、休やすむを以もつて、其言そのことばを固かためたり。

[of m y]

ルカに因る聖福音

一四一

一四二

我等の中に明に知られたる事。即ち始より昔の實見者及び役者たりし者。我等に傳へたる事に就きて、多くの者が手を舉げて傳記を作るに因り、尊憲なるヲオアルよ、我も凡の事を始より審に推し原れ、次第を以て爾の爲に書さん。この思を起せり、爾が畢びたる教の聖き基を知らん爲なり。五 イウテヤの王イロドの時、アラヤの班に屬する司祭にザハリヤと名づくる者あり、其妻はアアロンの裔にして、名をエリサワタと云ふ。二人ながら神の前に義なる者にして、主の一切の誠命禮儀を虧くるなく行へり。彼等に子なかりき、エリサワタは妊まざる者たりし故なり、二人共に年已に老いたり。ザハリヤが其班の次に依りて、司祭の職を神の前に行ふに値りて、司祭の例に循ひ、籤を擧きて、主の殿に入りて、香を焚くを得たり。一、香を焚く時、衆民外に在りて禱れり。二、主の天使ザハリヤに現れて、香壇の右に立てり。三、ザハリヤ之を見て、驚き且懼れたり。一、天使彼に謂へり、ザハリヤ懼るゝ毋れ、蓋爾の

所^き時^{たう}は聞^きかれたり。爾^{なんぢ}の妻^{つま}エリサヌタ子を生ま^うん。爾^{なんぢ}之^{これ}をイオアンと名^なづけん。一四 爾^{なんぢ}
 には喜^{よろこ}びたのしみあらん。且^{かつ}多くの名^{もの}は其^{その}生^まるゝに因^よりて悦^{よろこ}ばん。一五 彼^{かれ}は主^{まへ}の前に大^{おほい}
 なる者^{もの}とならん。酒^{さけ}と醇^{しゅ}を飲^のまず。其^{その}母^はの胎^{はら}よりして聖^{せい}神^{しん}に充^みてられん。一六 彼^{かれ}は
 イズライリの諸^{しよ}子の多^{おほ}くの者^{もの}を轉^{てん}じて、主^{しゅ}彼^{かれ}等の脚^{かみ}に踏^きせしめん。一七 彼^{かれ}はイリヤの
 精^{せい}神^{しん}と能^{のう}力^{りよく}を以^{もつ}て主^{しゅ}の前に行^ゆかん。父^{ちち}の心^{こころ}を子^こに逆^{さか}ふ者^{もの}を後^{あつち}者の智^ち慧^えに歸^{かへ}らしめ
 て備^{そな}へられたる民^{たみ}を主^{しゅ}に進^{すす}めん爲^{ため}なり。一八 ザハリヤ天使^{てんし}に謂^いへり、我^{われ}何を以^{もつ}て之^{これ}を
 知^しらん。蓋^{けだし}我^{われ}老^れいたり。我^{われ}が妻^{つま}も年^{とし}邁^{しゆ}けり。一九 天使^{てんし}彼^{かれ}に答^{こた}へて曰^いへり、我^{われ}はガウリイル、
 脚^{かみ}の前に立^たつ者^{もの}なり。使^{つかひ}を奉^{ほう}じて爾^{なんぢ}に告^つげ。爾^{なんぢ}に此^この福音^{きんごん}を爲^なす。二〇 親^{おや}よ、爾^{なんぢ}積^{せき}となり、
 言^{ことば}ふ能^{あた}はずして、此^この事^{こと}の成^なる日^ひに至^{いた}らん。我^{われ}が言^{ことば}を信^{しん}ぜざりし故^{ゆゑ}なり。是^この言^{ことば}は時^{とき}に
 及^{およ}びて必^{かな}ず應^{たま}はん。二一 時に民^{たみ}はザハリヤを候^まちて、其^{その}殿^{でん}の内^{うち}に久^{ひさ}しく在^あるを奇^{あやし}めり。
 二三 途^ちに出^いで、彼^{かれ}等^らに言^{ことば}ふ能^{あた}はざれば、乃^{すなは}ち其^{その}殿^{でん}の内^{うち}に異^い象^{しやう}を見^みしこと^{こと}を曉^{さと}れり。彼^{かれ}は
 首^{かぶ}を以^{もつ}て彼^{かれ}等^らに意^いを示^{しめ}し、而^{しかう}して瘖^{おふし}たりき。二三 其^{その}職^{つとめ}事^{こと}の日^ひ満^みつるに及^{およ}びて、家^{いえ}に歸^{かへ}れ
 り。二四 此^この日^ひの後^{のち}、其^{その}妻^{つま}エリサヌタ妊^{はら}みて、隠^{かく}れ居^をりしこと^{こと}五月^{ごがつ}にして白^いへり。二五 主^{しゅ}

は斯く我に爲せり。彼は此の日に於て我を嘗みて、我が耻を人人の間に洒がしめたり。
二六 第六月に於て、天使ガウリイルは神より使を奉じて、ガリレヤの邑ナザレトに名
 づくる所に、二七 ダワドの家の人、名はイオシフと云ふ者に聘せられたる處女に臨め
 り、處女の名はマリヤなり。二八 天使入りて之に謂へり、二九 恩寵を蒙れる者、畏べよ。主は爾
 と偕にす。爾は女の中に祝福せられたり。三〇 女彼を見て、其言を訝り、此の問安は何事
 ならんと思へり。三一 天使之に謂へり、マリヤ、三二 勿れ、蓋爾は神の前に恩寵を獲た
 り。三三 親よ、爾妊みて子を生まん、其名をイイススと名づけん。三四 彼は大なる者とな
 りて、至上者の子と稱へられん。主神は彼に其祖ダワドの位を與へん。三五 彼は世世に
三六 アコフの家に王となりて、其國終なからん。三七 マリヤ、天使に謂へり、我人に適かざる
 に、如何にして此の事あらん。三八 天使彼に答へて曰へり、三九 聖神爾に臨み、至上者の能爾
 を蔭はん。故に生む所の聖なる者も、神の子と稱へられん。四〇 親よ、爾の親戚エリサ
四一 夕、年若いて子を妊めり、四二 乘妊まざる者と稱せられしに、今日に六月なり。四三 蓋爾に在
 りては、凡そ其言ふ所能はざることなし。四四 マリヤ曰へり、四五 我は主の婢なり、爾の言の

如く我に成るべし。天使彼を離れたり。當日マリヤ起ちて、亟に山地に適き、イサマの邑に至り、ザハリヤの家に入りて、エリサマに安を問へり。エリサママリヤの安を問ふを聞きし時、胎兒其腹の内に躍れり。エリサマ、聖神に滿てられ、大聲に呼びて曰へり、爾は女の中に祝福せられたり。爾の腹の果も祝福せられたり。我が主の母我に臨り、我何より此を得たるか。蓋爾が安を問ふ聲の我が耳に入りし時、胎兒我が腹の内に喜び躍れり。信ぜし者は福なり。蓋主より彼に告げられし事は、必成らん。マリヤ曰へり、我が蓋は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと稱ばん。蓋權能者は我に大なる事を爲せり、其名は聖なり。其矜恤は世世彼を畏る者に臨まん。彼は其臂の力を顯し、心の意の驕れる者を散らせり。權ある者を位より擯け、卑しき者を擧げ、飢うる者を養き、物に飽かしめ、富める者を空しく返らしめたり。其僕イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アカラアムと其裔を世世に恤まんことを記念せり。マリヤはエリサマと共に居りしこと

三月にして其家に歸れり。五七
隣と親戚とは主が其大なる矜恤を彼に垂れしを開きて彼と偕に喜べり。五九
に及びて子に割禮を行はんと爲に來り之を其父の名に依りてザハリヤと名づけん
せしに、六〇 其母答へて曰へり否之をイオアンと名づく可し。六一 彼等曰へり爾が親
戚の中に一人も此の名を名づくる者なし。六二 遂に其父に形を以て如何に之を名づ
けんか欲するを問ひしに、六三 彼筒を請ひて書して曰へり其名はイオアンなりと書
之を奇とせり。六四 直に其口啓け舌解け彼言を發して神を祝讚せり。六五 其近隣の者
皆懼れ且此等の事遠くイウテヤの山地に傳れり。六六 凡そ聞きし者其心に之を職め
て曰へり此の子は若何にならんか主の手は彼と偕にせり。六七 其父ザハリヤ聖神に
滿てられ預言して曰へり、六八 祝讚せらる、哉主イズライの神蓋其民を眷みて之
に贖を爲し、六九 我等の爲に救の角を其僕ダウダの家に興せり。七〇 古世より其聖なる
預言者の口を以て言ひしが如し、七一 即我等を我が諸敵及び凡そ我等を惡む者
の手より救ひ、七二 以て矜恤を我が先祖に施し其聖なる約、七三 即我が祖アウラア

△に矢ひたる誓を記念せん。七四 爾ら我等に我が諸敵の手より救はれし後、七五 懼なく彼の前に在りて、聖を以て、我を以て、生涯彼に事へしめん。七六 子よ、爾も至上者の預言者さ稱へられん。登主の面前に行きて、其道を備へ、七七 彼の民に其救は、即諸罪の赦にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。七八 此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨り、七九 幽暗と死の陰に坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん爲なり。八〇 子は漸く生長し、精神益強健にして、其イズライリに顯る日に至るまで野に居りき。

四四 彼の日ケサリアツカストより詔出で、天下の人を成く籍に登らしむ。二

此の籍はキリニイのシリヤを治むる時初めて行はれし者なり。五三 是に於て衆人籍に登らん爲に、各其邑に往けり。五四 イオシフも亦ダワ下の宗族と血統となるを以て、五五 マリヤ其聘せられたる妻、已に孕める者さ、備に籍に登らん爲に、ガリレヤの邑ナザレトより、イウサヤに、ダワ下の邑ツフレエムと名づくる處に往けり。五六 彼等が彼處に在る時に、産日届れり。五七 乃其家子を生み、之を襁褓に裹みて、槽に置けり。旅館には彼等

の爲に居る所なかりし故なり。八此の地に牧者あり、夜間野に於て其羊の群を守れり。九視主の天使彼等の前に立ち、主の光榮彼等を覆り照せり、彼等大に懼れたり。一〇天使彼等に訓へり、懼るゝ勿れ、蓋視よ、我爾等に大なる喜、萬民に及ばんさする者を福音す。一一今日爾等の爲にダマドの邑に於て、救主即主ハリストス生れたり。一二爾等襁褓に裹まれたる嬰兒の槽に臥せるを見ん、是れ其徴なり。一三倏天使さ借に衆くの天軍あり、神を讚美して曰へり、一四至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には惠臨めり。一五天使等が彼等を離れて天に升りし時、牧者互に言へり、マフレエムに往きて、彼處に成りし事、主が我等に示し、所を觀ん。一六予急ぎ來りて、マリヤとイオシフ及び槽に臥せる嬰兒を見たり。一七既に見て、此の兒に關して、彼等に告げられし事を語れり。一八聞きし者皆牧者が語りし事を奇させり。一九惟マリヤは此等の言を悉く、其心に藏めて、之を守れり。二〇牧者は、凡そ彼等に告げられし如く、聞きし事見し事の爲に、神を讚美して返れり。二一八日満ちて、嬰兒に割禮を行ふべき時、至りたれば、其名をイイススと名づけたり、即其未だ妊まれざる先に、天使の名づけ

ところなり。二二 モイセイの律法に依りて、潔の日の満つるに及び嬰兒を擡へてイエ
 サリムに上れり之を主に奉らん爲なり。二三 主の律法に録されしが如し曰く凡そ初
 めて胎を開く男子は主に聖なりと稱へらるべし。二四 又主の律法に言ふ所に依り
 て雙の班鳩或は二の雛鴿を祭に獻げん爲なり。二五 視よ、イエカサリムにシメオンと
 名づくる人あり斯の人義にして敬虔なりイスラエリを慰むる者を俟ち而して聖
 彼に臨り。二六 彼に聖神に由りて主のハリストスを見ざる先には死を見ざらん
 示されたり。二七 彼神に依りて殿に來れり父母が嬰兒イイススを擡べて之に律法の
 例を行はん爲に入りし時。二八 彼は嬰兒を其手に取り神を祝讀じて曰へり、二九 主
 今用の旨に循ひて爾の僕を釋し安然として逝かじむ。三〇 我が目は爾の效を見
 たり、三一 爾が萬民の前に備へし者なり、三二 是れ異邦人を照す光及び爾の民イスラ
 イリの榮なり。三三 イオシブ及び嬰兒の母は彼に關じて言はるゝ事を奇させり。三四
 シメオン 彼等を祝願して其母マリヤに謂へり視よ此の子は置かれてイスラエリの
 中に来くの者の預れ又は興るを致し且取論の號さ爲らん。三五 衆くの心の念の露れ

人爲なり、爾にも、銀は靈を賣らん。又預言女アンナあり、アシルの支派、ヌエイルの
 女なり、處女の時より夫と偕に居りしこと七載、年大に老いたり。三七、八十四の
 齡にして、駭を離れず、密に祈禱を以て晝夜奉事せし者なり。三八、彼も斯の時來り就
 きて、主を讚美し、且此の嬰兒の事を凡そイエエルサリムに在りて、願を俟つ者に語れり。
 三九、既に主の律法に遵ひ、悉く之を究へて、ガリレヤの故邑ナザレトに歸れり。四〇、子
 は漸く成長し、輪神益強健にして、智慧充ち、神の恩寵は彼に臨めり。四一、其父母歳
 毎に逾越節筵にイエエルサリムに往けり。四二、彼の十二歳になりし時、亦節筵の例に遵
 ひて、イエエルサリムに上りしに、四三、日卒りて返る時、童子イエス、スイエエルサリムに留
 れり。イオシフと其母は之を知らずして、四四、彼は同行者の中に在り、急へり、一日
 程を行きて、彼を親戚知己の間に尋ねしに、四五、遇はざりき、乃彼を尋ねて、イエエルサリ
 ムに返れり。四六、三日の後、彼に殿に遇へるに、彼教師の中に坐して、且聽き、且問へり。四
 七、彼に聞く者皆其智慧と其應對を奇とせり。四八、父母彼を見て、駭けり、其母彼に解
 へり、見よ、何ぞ我等に斯く行ひたる、親よ、爾の父と我と憂ひて、爾を尋ねたり。四九、彼曰

へり、奚ぞ我を尋れたる豈我は我が父に属する所に在るべきを知らずや。然れども彼等は其言ひし言を曉らざりき。一
一 イイスス彼等と偕に下りて、ナザレトに來り、彼等に順ひ居りき。彼の母は此等の言を悉く其心に藏めたり。二
二 イイススは智慧と静と神及び人人の寵愛に益進めり。

三章

一 五十二年、ポンタイピラトイウテヤの方伯たり、イロ

ドガリレヤの分封の君たり、其兄弟スリプイトレヤ及びトラホニダの地の分封の君たり、ササニアアリニヤの分封の君たり、二
二 アンナ及びカイアスの司祭長たる時、彼の言はサマリヤの子イオアシに野に臨めり。三
三 彼はイカルダンの近傍を周く行きて、野の牧の爲に悔改の油を傳へたり。四
四 預言者イサイヤの言の書に録せるが如し云く、野に呼ぶ者の聲ありて云ふ、主の道を備へ、其徑を直くせよ。五
五 凡の谷は填められ、凡の山と岡とは卑くせられ、曲れるは直くせられ、險じきは平にせられん、六
六 而して凡の肉身は神の救を見ん。七
七 イオアシは洗を受くる爲に來れる民に問へり、曠の類ふ誰か爾等に將來の怒を避くることを示したる、八
八 然らば悔改に合ふ果を結べ、自ら意ひ

て、我等の父はアウラアムなりと云ふ勿れ蓋我爾等に語く神は此の石よりアウラアの爲に子を興すを能す。既に斧も樹の根に置かる凡そ善き果を結ばざる樹は研られて火に投げられん。一〇民彼に問ひて曰へり然らば我等何を爲すべきか。一二彼答へて曰へり二の衣を有てる者は有たざる者に與へよ食を有てる者も然せよ。二三税吏も亦洗を受くる爲に來りて彼に詣へり師よ我等何を爲すべきか。一四彼答へて曰へり爾等に定められたる者より多く取る勿れ。一五軍士も亦彼に問ひて曰へり我等は何を爲すべきか。彼等に詣へり人を劫す勿れ廻ふる勿れ爾等の俸給を以て足れりさせよ。一六民が望を傾きて皆其心にイオアンを是れハリストスに非すやと度りし時、一七イオアン衆に答へて曰へり我水を以て爾等に洗を授く然れども更に我より強き者は來る我其腰の帶を解くにも堪へず彼は聖神及び火を以て爾等に洗を授けん。一七其筈は其手に在り彼は其禾場を淨めて麥を其倉に歛め糠を滅ぬざる火に燬かん。一八其他多くの事を教へて民に屬音せり。一九分封の君イロド其兄弟の妻イロデアアの爲及び凡そイロドの行ひし惡の爲に彼に責められて、二〇凡の事に又之

を増せり、即ちイザアンを獄に閉せり。二一民皆洗を受くる時、イエスも亦洗を受けて
 所れるに、天開けて、三三聖神見ゆる形を以て、鳩の如く其上に降り、且天より聲あり
 て曰へり、爾は我の至愛の子、我爾を喜べり。二二イエス、其務を始むる時、年一約三十
 なり。人彼を以てイオシフの子と爲せり。イオシフの父はイリイ、二四其父はマトフト
 其父はレウ、其父はハメル、其父はイアンナ、其父はイオシフ、二五其父はマタサイ、其父
 はアモス、其父はナウム、其父はエスリム、其父はナゲイ、二六其父はマアフ、其父はマ
 ライ、其父はセメイ、其父はイオシフ、其父はイリダ、二七其父はイオアンナ、其父はリサ、其
 父はソロソリ、其父はサラス、其父はニリ、二八其父はメルヒ、其父はアライ、其父
 はコサム、其父はエルモタム、其父はイル、二九其父はイカシイ、其父はエリエセル、其父
 はイオリム、其父はマトフト、其父はレウ、三〇其父はシメオン、其父はイウタ、其父はイ
 オシフ、其父はイオナン、其父はエリアキム、三一其父はメレア、其父はマインナン、其父は
 マタフ、其父はナソン、其父はダラド、三二其父はイモセイ、其父はオウラ、其父はウチズ
 其父はサルモン、其父はナソソン、三三其父はアマナダフ、其父はアラム、其父はエスロ

△其父はスレス、其父はイウダ、^{三四}其父はイアコフ、其父はイサアク、其父はアウラア、
△其父はスラ、其父はナホル、^{三五}其父はセルフ、其父はラガフ、其父はスレク、其父はエ
アル、其父はサラ、^{三六}其父はカイナン、其父はアルヌクサド、其父はシム、其父はノイ、其
父はラメフ、^{三七}其父はマフサラ、其父はエノフ、其父はイアレド、其父はマレレイル、其
父はカイナン、其父はエノス、其父はシフ、其父はアヌム、其父は神なり。

第四章

一 イイスス、聖神に満てられて、イオアルダンより歸り、神に導かれて野に適き、
四十日の間、惡魔に試みられたり。此の諸日には一切食はざりき、其卒るに及びて、
に飢ゑたり。^三惡魔彼に謂へり、爾若し神の子ならば、此の石に命じて餅を爲らしめよ。
四 イイスス之に答へて曰へり、錄せるあり、人は惟餅のみを以て生くべきに非ず、乃
凡の神の言を以てす。^五惡魔彼を擡へて、高き山に登り、瞬の間に世界の萬國を示して、
六 彼に謂へり、此等の一切の權威と榮華とを爾に與へん、蓋此れ我に委ねられたり、我
欲する者に之を與ふ。七 故に爾若し我を拜せば、悉く爾の有とならん。八 イイスス之に
答へて曰へり、サタナ、我より退け、蓋錄せるあり、主爾の神を拜せよ、爾彼のみに事へよ。

又彼を捕へて、イエエルサリムに至り殿の頂に立たしめて、彼に謂へり、爾若し神の
 子ならば、自ら是より下に投ぜむ、一〇、
 盜録せるあり、爾の爲に其天使に命じて爾を護
 らじめん、一一、
 彼等其手にて爾を抱へて、爾の足を石に懸かざらじめん、二、
 イイス
 ス之に答へて曰へり、言へるあり、主爾の神を試みる勿れ。一三、
 惡魔は既に其誘試を
 盡して暫く彼を離れたり。一四、
 イイスス神の能を誇て、ガリレヤに歸れり、其聲名遠
 く四方に播れり。一五、
 彼其諸會堂に於て教を宣べ、衆人に讚榮せられたり。一六、
 其養育せられし所のナザレトに來り、安息の日に其常例に依りて會堂に入り讀まん
 ざ、欲じて起てり。一七、
 預言者イサイヤの書を彼に與ふるあり、彼は書を披きて、左に繰
 せる所を出せり、云く、一八、
 主の神我に在り、蓋彼は我に齊じて、貧しき者に福音せしめ、
 我を遣して心の傷める者を醫し、辨者に環を昏者に見ることを傳べ、隠せらるる者に
 自由を與へ、一九、
 主の禧年を傳へしめたり。二〇、
 乃書を掩ひ、役者に與へて坐せ
 しに、會堂に在る者皆彼に目を注げり。二一、
 彼宣へ始めて曰へり、此の爾等が讀きし所
 の書は今應へり。二二、
 衆皆之を証し、且其口より出づる恩寵の言を奇として曰へり、

是れイサシフの子に非ずや。二三 イイスス彼等に謂へり、爾等必我に訟を引きて云はん、醫師よ己を醫せ、我等が聞きし所カヘルナカムに行はれし事を、此に爾の故土にも行へ。二四 又曰へり、我誠に爾等に語ぐ、預言者は其故土に在りて納れらるゝ者あらす。二五 我眞實に爾等に語ぐ、イリヤの日に、三年六月天閉ちて大なる饑饉全地に至りし時、イメライリの中に多くの饑ありたれども、二六 イリヤは其一人にも遣されざりき、唯シドンのサレプタにのみ饑なる婦に遣されたり。二七 又預言者エリセイの時、イメライリの中に多くの癩病者ありたれども、其一人も潔められざりき、唯シリヤのチエマンのみ潔められたり。二八 會堂に在る者此を聞きて皆大に怒り、二九 起ちて彼を邑の外に逐ひ、曳きて其邑の建てられたる山の崖に至り、彼を推し下さんせしに、三〇 彼は衆の中を過ぎて去れり。三一 ガリレヤの邑カヘルナカムに來り安息日に於て彼等を教へしに、三二 人人其詞を奇させり、其言に信ありし故なり。三三 會堂に汚鬼に憑らるゝ人あり、大聲に呼びて曰へり、三四 嗚ナザレトのイイススよ、我等と爾と何ぞ與らん、爾は我等を滅さん爲に來りしか、我爾が誰なるを知る、乃神の聖なる者

なり。三五 イイソス彼を禁めて曰へり、口を緘ちて此の人より出でよ。寃鬼之を堂中に
仆し、少しも之を傷はずじて出でたり。三六 衆皆驚きて相語りて曰へり、是れ如何なる
る言ぞ、豈彼横を以て能を以て、汚鬼に命じて彼等出づ。三七 其聲聞徧く地の四方に揚
れり。三八 彼會堂を出で、シモンの家に入れり、シモンの岳母熱を病む、甚じ人之
が爲に彼に詣へり。三九 彼其傍に立ちて熱を禁め、乃退けり、婚直に起きて彼
等に供奉せり。四〇 日の入る時種種の病を患ふる者を有てる人、成之を攜へて彼に就
きたるに、彼一手を其上に按せて之を醫せり。四一 寃鬼も亦多くの人より出で、呼
びて曰へり、爾は神の子ハリストスなり。然るに彼は之に禁めて、其ハリストスたるを
顯ることを言ふを許さざりき。四二 朝に及びて、イイソス出で、野の處に遁けり、民彼
を尋ね、彼に來りて、其彼等を離れ去らんことを止めたり。四三 然れども彼は之に謂へ
り、我他の邑にも神の國を福音す可し、豈我は是が爲に遣されたり。四四 乃ガリレヤ
の諸會堂に於て教を宣べたり。

四四 民が神の言を聴かん爲に彼に擁し、還りし時、彼ケンニサレトの湖の濱に

立ちて、二の舟の湖に在るを見たり。漁者は舟を離れて網を洗へり。三は彼はシモンに
 顧する一の舟に登りて、少しく岸より離れんことを請ひ坐して舟より民を教へたり。
 四語り竟りて、シモンに爾へり。深き處に移り網を下して漁せよ。五シモン彼に對へて
 曰へり。夫子よ、我等終夜勞して得る所なかりき。然れども爾の言に依りて、我網を下さ
 六。七既に之を行ひて、魚を圍めること甚多く、網裂くるに至れり。八乃他の舟に在る
 九侶を招きて、來り助けしむるに、彼等來りて、魚二の舟に切ちて、幾と洗まんせり。ハシ
 モンペトル之を見て、イイススの膝下に伏して曰へり。主よ、我を離れよ。我罪人なれば
 一。二蓋彼及び彼と偕に在りし者は皆流りたる魚の爲に、甚驚けり。三シモンが
 四侶たりしセマテイの子イアコフ及びイオアンも亦然り。イイススシモンに爾へり。懼
 五る、勿れ。今より後爾人を漁らん。六彼等舟を岸に曳き、一切を捨て、彼に従へり。七
 八イイスス一の邑に在りし時、全身癩病を患ふる人來り、イイススを見て俯伏し、彼に
 九求めて曰へり。主よ、爾若し留まば、我を潔むるを能す。一〇彼手を伸べて之に觸れて曰
 一。二へり。我望む。潔まれ。癩病直に離れたり。一三イイスス彼に戒めて言ふ。人に告ぐる勿

れ、乃、往きて、己を司祭に示せ、且、爾の潔まりし爲に、モイセイの命せし如く、獻じて、彼等に證を爲せ。一五、然れども、其聲名、益、播り、衆くの民は、教を聽き、又、其諸病を醫さん爲に、彼に集れり。一六、唯、彼は退きて、野に遁きて、隠れり。一七、一日、彼教を宣べしに、フリセイ等と、教法師等と、ガリレヤの諸郷、イウテヤ及びイエルサリムより來りし者は、魚し、注の能は、病者を醫すこと、に於て、顯れたり。一八、視よ、人人癩瘰の者を、牀に載せて、昇き來り、之を家に入れて、イオイススの前に置かん、と欲したれども、一九、人の來きに因りて、昇き入るゝ所を得ざれば、屋上に升り、瓦の間より、彼を牀のまゝに、縋り下して、中にイオイススの前に置けり。二〇、イオイスス、彼等の信を見て、其人に、爾へり、人よ、爾の罪は、爾に赦さる。二一、學士等及び、ガリセイ等、竊に議して曰、へり、此の醫液を言ふ者は、誰ぞ、獨神より、外に、誰か、罪を赦すを得ん。二二、イオイスス、彼等の意を知りて、彼等に答へて曰、へり、爾等、何ぞ、心の中に、議する。二三、爾の罪は、爾に赦さる、と言ひ、或は、起きて、行け、と言ふは、孰か、易き。二四、然れども、爾等が、人の子の地に在りて、罪を赦す權あることを知らん爲、(癩瘰の者に向ひて曰、へり、爾に、罪を、起きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。二五

彼直に彼等の前に起き臥し居たる牀を取り、神を厭棄して、其家に往けり。二六
家皆
駭きて、神を厭棄し、且大に懼れて曰へり、我等今日奇異なることを見たり。二七
斯の後
イエスマス出でて、税吏名はレワイと曰ふ者の税関に坐せるを見て、之に謂へり、我に従
へ。二八
彼一切を捨て、起ちて彼に従へり。二九
レワイ其家に於て彼の爲に大なる筵
を設けしに、密税吏及び他の者は多く彼等と與に席坐せり。三〇
學士等も入り、
等
は怨言して、彼の門徒に謂へり、爾等は何ぞ税吏及び罪人と與に食飲する。三一
イエ
スマス彼等に答へて曰へり、康強なる者は醫師を需めず、乃病を責ふ者は之を需む。三二
我が來りしは、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して悔改せしめん爲なり。三三
彼
等イエスマスに謂へり、イオアンの門徒は、曷嘗して新酒を爲す、乃リモイ等の門徒も
亦然り、惟爾の門徒が食飲するは何ぞや。三四
彼は之に謂へり、爾等は、
婚筵の客に新酒
者の尙彼等と偕に在る時、豈嘗せしむるを得んや。三五
然れども、
新娶者の彼等より取
らるゝ日、至らん其日には、
飲せん。三六
又筵を設けて、
彼等に謂へり、
新しき衣の布を取
りて、
舊き衣を補ふ者あらず、
然らずば、
新しき衣をも裂き、
且新しき者より取りたる布

は舊き者と合はざらん。二七又新しき酒を舊き革蓋に盛る者あらず、然らずば新しき酒は蓋を敗りて、酒溢れ蓋も亡びん。二八乃新しき酒は新しき蓋に盛るべし、然らずば舊き酒を飲みて直に新しきを欲する者あらず、蓋曰ふ舊きは更に善し。

第二節 一逾越節の二日の後の首の安息日に、イエスマ采田を通ぎ行けることあり、彼の門徒種を摘み、手に拵みて食へり。二或るリセイ等彼等に謂へり、爾等何ぞ安息日に行ふべからざることを行ふ。三イエスマ之に答へて曰へり、爾等はダワドが己及び其従者の飢ゑし時行ひし事、即如何にして彼は神の家に入りて、司祭等の外何人も食ふべからざる供前の餅を取りて食ひ、且之を従者に與へしを讀まさりしか。又彼等に謂へり、人の子は亦安息日の主なり。四他の安息日に彼會堂に入りて教ふることありしに、彼處に右の手の枯へたる人ありき。五學士等と入りて、彼等は安息日に於て斯の人を醫すや否やを窺へり、彼を罪する間を得ん爲なり。六彼は其意を知りて、手の枯へたる人に謂へり、起きて中に立て、彼起きて立てり。七イエスマ彼等に謂

へり、我爾等に問はん、安息日には善を行ひ、或は惡を行ふ、生命を救ひ、或は之を滅す、孰か宜しき、彼等黙然たり。一〇、遂に衆人を選視して、斯の人に俯へり、爾の手を伸べよ、彼斯く爲したれば、其手は健になりしこと、他の手の如し。二、彼等狂ひ怒りて、互に何をイオスに爲さん、と議れり。三、當日彼は祈禱の爲に山に登りて、終夜神に禱れり。一、夜の明くるに及びて、其門徒を召し、彼等の中より十二人を選びて、之を使徒と名づけたり。一四、即シモン、名をペトルと命ぜし者、及び其兄弟アンドレイ、イアコフ及びイオアン、スリブ及びアルフロメイ、一五、マトス、イ及びス、マ、アルスイの子、イアコフ及びシモン、稱してツロトと云ふ者、一六、イアコフの兄弟、イウダ及びイウダ、イスカリオト、即後に彼を賣りし者なり。一七、イオス、彼等と偕に下りて、平地に立てり、爰に其衆くの門徒、及び衆くの民、イウデアの四方、イエルサリム、井にタルミシドン、この海濱よりして、一八、彼に聽かん爲、且己の疾の醫されん爲に、來りし者、又汚鬼を患ふる者ありき、彼等醫されたり。一九、衆、民彼に捫らん、と欲せり、蓋能彼より出で、衆を醫せり。二〇、彼は目を擧げて、其門徒を視て曰へり、神の貧しき者は福なり、神の國は爾等の

有なればなり。二一今飢うる者は福なり、爾等飽くを得んとすればなり。今泣く者は福なり、爾等笑ふを得んとすればなり。三二人の子の爲に、人人爾等を憎み、爾等を絶ち、且語り、爾等の名を惡しき者として棄つる時は、爾等福なり。三三其日に喜び樂め、天には、爾等の賞多ければなり、蓋彼等の先祖は是くの如く預言者に行へり。二四然るに、爾等富める者は、禍なる哉、爾等既に慰を得たればなり。二五今飽きたる者は、禍なる哉、爾等飢ゑんとすればなり。二六今笑ふ者は、禍なる哉、爾等哀み哭がんとすればなり。二七人皆、爾等の事を善く言はん時は、爾等福なる哉、蓋彼等の先祖は是くの如く、偽預言者に行へり。二八我、爾等聽く者に、語ぐ、爾等の敵を愛し、爾等を憎む者に善を爲し、二九爾等を誣ふ者を祝福し、爾等を成ぐる者の爲に、爲に、爾の頬を批つ者には、他の頬をも向けよ、爾の外服を奪ふ者には、裏衣をも取ることを拒む勿れ。三〇凡そ、爾に求むる者には、與へ、爾の物を取る者には、復之を促す勿れ。三一人の、爾等に行はんを欲する事は、爾等も是くの如く之を人に行へ。三二爾等若し、爾等を愛する者、愛せば、爾等に何の感謝があらん、蓋、罪人等も、彼等を愛する者、愛す。三三若し、爾等に善を行ふ者に善

如何に兄弟の目より物屑を出すべきを見ん。善き樹には悪しき果を結ぶ者なく、又悪しき樹には善き果を結ぶ者なし。凡の樹は其果に由りて識らる。蓋荆棘よりは無花果を摘まず、又蒺藜よりは葡萄を採らず。善き人は其心の善き寶庫より善き者を出し、悪しき人は其心の悪しき寶庫より悪しき者を出す。蓋心に充つる者は口に言ふなり。爾等何を我を主と、主と稱へ而して我が言ふ所を行はざる。凡そ我に來り、我が言を聞きて之を行ふ者は、我其何人に似たるを爾等に示さん。彼は家を建つるに、掘り且つ深くし、基を磐の上に置きたる人に似たり。洪水の有りし時、横流は其家を衝きたれども、之を動かす能はざりき。磐の上に基けたればなり。聞きて行はざる者は家を土の上に基なくして建てたる人に似たり。横流の之を衝きたる時、直に倒れたり。且其家の頽壞は大なりき。

四四 彼は悉く其言を民に總かしめ畢りて、ガベルナウムに入れり。或百夫長、其愛する僕病みて死せんとせしに、イエイスの事を聞きて、イウサヤの長老等を彼に遣し來りて、其僕を醫さんことを請へり。彼等イエイスに來りて、切に彼に來

めて曰へり、爾此の人の爲に此を爲すは宜しきなり。蓋彼は我が民を愛し、我等の爲に會堂を建てたり。イスス彼等と偕に往きて、既に其家に遠からざる時、百夫長友を遣して、彼に謂へり、主よ、勞する勿れ、蓋爾が私の舎に入るは、我當らす。故に我亦己を以て爾に就くに堪へずとせり、乃一言を出せ、然らば我が僕愈ほん。蓋我人の權に屬すれども、我が下に兵卒ありて、我此に往けと云へば、往き、彼に來れと云へば、來り、我が僕に是を行へと云へば、行ふ。イスス之を聞きて、彼を奇とし、願みて、從へる民に謂へり、我爾等に謂ぐ、イスライのの中にも我是くの如し、信を見ざりき。一〇つかに一者家に歸りて、病める僕の已に愈されしを見たり。一二その後、イススナインと名づくる邑に往けるに、其門徒の多人及び衆くの民は彼と偕に行けり。一三其邑の門に近づきし時、彼處に死者の昇き出さる、あり、母の獨の子にして、其母は慙なり、邑の民多きと偕にせり。一四主彼を見て、憫みて、彼に謂へり、哭く勿れ。一五乃近づきて、櫬に觸れたれば、昇く者止れり、彼曰へり、少者よ、爾に謂ふ、起きよ。一六死者起きて坐し、且言へり、イスス之を其母に與へたり。一七衆皆懼れて、神を讚祭して曰へり、大なる預言

者は我等の中に興れり、神は其民を眷みたり。一七 彼に於ける此の聲聞はイサヤの
全國及び其四方に揚れり。一八 イオアンの門徒は悉く此等の事を彼に告げれば、
九 イオアン其門徒の二人を召し、イイススに遺して曰へり、來るべき者は爾なるか、抑
我等他の者を俟つべきか。二〇 彼等イイススに來りて曰へり、授けよ、イオアン我等を爾
に遺して云く來るべき者は爾なるか、抑我等他の者を俟つべきか。二一 斯の時彼は
多くの者を諸の疾、病及び惡鬼より醫し、又多くの醫者に見るこゝを賜へり。二二 イ
イスス彼等に答へて曰へり、往きて、見し所聞きし所を、イオアンに告げよ、即醫者は明
き敏者は歩み、癩者は潔まり、聾者は聽き、死者は起き、貧者は富む。二三 凡そ我の爲に
惑はざる者は福なり。二四 イオアンの使者が去りし後、イイススイオアンの事を擧げ
て民に誦へり、爾等何を觀んとして野に出でしか、風に動かさるる藁か、抑何を
觀んとして出でしか、柔き衣を衣たる人か、視よ、錦を衣て着れる者は王の宮に在り。二
六 然らば何を觀んとして出でしか、預言者が然り、我爾等に語ぐ、彼は預言者よりも大
なり。二七 彼は即ち夫の緣して、視よ、我我が使を爾の面前に遺し、爾に先だちて爾の道

を備へしめんと曰はれたる者なり。二八我爾等に語ぐ婦の生みし者の中授洗イ
オアンより大なる預言者は有らず然れども神の國に於て至小き者は彼より大な
り。二九彼に聞きし衆民及び稅吏等はイオアンの洗禮を受けて神の義を稱せり。三〇
然れどもフリセイ等及び律法師等は彼より洗禮を受けずして彼等に於ける神の旨
を拒みたり。三一主又曰へり然らば我此の世の人人を誰に譬へん彼等は誰に似たる
か。三二彼等は童子街に坐して相呼びて我等は爾等に箒を吹きたれども爾等踊らざ
りき爾等に悲の歌を謡ひたれども爾等哭かざりき云ふ者に似たり。三三蓋授洗
イオアン來りて餅を食はず酒を飲まず爾等云ふ彼魔鬼に憑らるる人の子來り
て食ひ飲む又音ふ親よ是れ食を嗜み酒を好む者稅吏及び罪人の友なり。三四惟容
智の子は密容智の義を明にせり。三五フリセイ等の一人彼に共に食せんこさを請ひ
たれば彼はフリセイの家に入りて席坐せり。三六時に其邑の婦にして罪ある者彼が
フリセイの家に席坐するを知りて香膏を盛れる玉の盒を攜へ來り。三八其後に足の
下に立ち哭きて涙を以て其足を濡し己の首の髪を以て之を拭ひ其足に接吻して之

に香膏を抹れり。三九 彼を招きたるるりセイは此を見て己の中に誦へり此の人若し
預言者たらば彼に捫る者の孰たり如何なる婦たるか知らん蓋是れ聖女なり。四〇
イイスス彼に答へて曰へり、シモンよ、我爾に言ふべき事あり。彼曰く師よ、之を言へ。四
一 イイスス曰へり、或債主に二人の預債者ありて、一人は銀五百枚、一人は五十枚を貢
へり。四二 其償ふ能はざるに因りて、彼は二人に免せり然らば二人の中彼を愛するへ
さ孰か多からん、試に言へ。四三 シモン對へて曰へり、意ふに多く免されし者ならん。彼
は之に誦へり、爾が踰りしこと正し。四四 是に於て婦を顧みて、シモンに誦へり、爾此の
婦を見るか、我爾の家に入りしに、爾は我が足の爲に水を給へざりき、然るに彼は涙を
以て我が足を濡し、首の髮を以て之を拭へり。四五 爾は我に接吻せざりき、然るに彼は
我が此に入りし時より、我が足に接吻して已めず。四六 爾は我が首に油を抹らざりき、
然るに彼は香膏を我が足に抹れり。四七 是の故に我爾に語ぐ、彼の多くの罪は赦さる、
蓋彼多く愛せり、然れども少く赦さる、者は少く愛するなり。四八 予は是れを誦へり、
爾の罪は赦さる。四九 彼と共に席坐する者己の中に言へり、此れ何人にして、爾をも赦

すか。五〇 彼婦に謂へり、爾の信は爾を救へり安んとして往け。

第二 厥後彼は諸の邑及び村を巡りて、教を宣べ、神の國を福音せり彼に十

二徒あり、亦曾て惡鬼及び諸病より痊されたる數人の婦あり、即七の惡鬼の出で

たるマリア、稱して「マゲダリナ」と云ふ者、又イロドの家宰、フザの妻、イオアンナ、又ス

サンナ及び其他多くの婦、其所有を以て彼に事へし者なり。衆くの民、諸の邑より

集りて、彼に就きたれば、彼を設けて曰へり、五、擗く者は其種を擗かん爲に出でたり、

擗く時路の旁に遠ちし者あり、乃踐まれたり、又天空の鳥之を啄めり。石の上に遠ち

し者あり、萌は出で、穢れたり、濁濁なきが故なり。棘の中に遠ちし者あり、棘共に長

びて、之を敷へり。八、沃壤に遠ちし者あり、萌は出で、實を結ぶこと百倍せり。之を言ひ

て呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。其門徒彼に問ひて曰へり、此の譬は何

ぞ。一〇 彼曰へり、爾等には神の國の奧義を知ること與へられたれども、他の者には譬

を用ゐる、彼等視れども見ず、聽けども悟らざる爲なり。一一 此の譬の義は左の如し、種

は神の言なり。一二 路の旁の者は是れ聽けども、後惡魔來りて、其心より言を奪ふ、彼等

が信じて救はれざらん爲なり。一三石の上の者は是れ聽く時喜びて言を受くれども、己に根なくして暫く信じ勝惑の時に背く。一四藁の中に造らし者は是れ聽きて去り、而して度生の慮さ財財と安樂さに蔽はれて寶を結ばず。一五沃壤に造らし者は是れ寶を聽きて清潔良善なる心に之を守り忍耐して寶を結ぶ。(之を言ひて呼べり耳ありて聽くを得る者は聽くべし。)一六燈を燃し而して器を以て之を覆ひ或は牀の下に置く者あらず乃燈臺の上に置く者が光を見ん爲なり。一七蓋隠れて顯れざる者なく、蔽して知られず且露ならざる者なし。一八故に爾等聽くことの如何を慎め、蓋有てる者は之に與へられ有たざる者は其有てりさ意ふ物も之より奪はれん。一九時に彼の母及び兄弟彼に來りしに群衆の爲に近づくを得ざりき。二〇或彼に告げて曰へり爾の母及び爾の兄弟外に立ちて爾を見んさ欲す。二一彼は之に答へて曰へり、我が母及び我が兄弟は神の言を聽きて行ふ者は是なり。二二一日彼は門徒と偕に舟に登りて、彼等に謂へり、我等湖の彼の岸に濟るべし、乃行けり。二三行く時彼寢たり。颶風湖に吹き下し、水舟に滿たんとして危きこと甚し。二四門徒就きて彼を醒まし

て曰へり、夫子、夫子、我等亡ぶ。彼起きて、風と水の瀼とを禁めたれば、則止みて、穢になれり。二五 彼等に爾へり、爾等の信は安に在るか。彼等懼れ驚きて、互に言へり、是れ何人ぞ、風にも水にも命じて、亦彼に順ふ。二六 かりレヤに對へるガダラの地に着きて、二七 彼が岸に登りし時、邑の一人の者彼を迎へたり、乃久しく冤鬼に惹られ、衣を衣す家に住まずして、墓に住める者なり。二八 此の人、イイヌスを見て、號び彼の前に俯伏し、大なる聲を以て曰へり、至上なる神の子、イイヌスよ、我と爾と何ぞ與らん、爾に求む我を苦しむる勿れ。二九 蓋し、イイヌスは汚鬼に此の人より出づるを命じたり、其彼を拘へしこと久しければなり。彼を守りて、鐵索と桎梏とに繋ぎたれども、彼繋を断ちて、冤鬼の爲に野に逐はれたり。三〇 伊イヌス彼に問ひて曰へり、爾の名は何ぞ、彼曰へり、大隊多くの冤鬼彼に入りたればなり。三一 冤鬼はイイヌスに、彼等に瀕に往くを命ぜざらんことを求めたり。三二 彼處に豕の大隊の山に牧はれたるあり、冤鬼は彼に、其中に入るを許さんことを求めたれば、彼之を許せり。三三 冤鬼人より出で、豕に入りしに、群は山坡より湖に逸けて溺れたり。三四 牧ふ者有りし事を觀て、奔り往きて、邑及び隣村に告

げたれば、^{三五}人人有りし所を親ん爲に出で、^{三六}イイススに來りて、^{三七}寃鬼の出でたる人が
 衣を着、心慥にして、^{三八}イイススの足下に坐せるを見て、^{三九}懼れたり。^{四〇}見し者は、^{四一}寃鬼に
 憑られたる人の如何に愈されしを告げたれば、^{四二}ガダラ地方の民は、^{四三}皆イイススに
 彼等を離れんことを請へり、^{四四}大に懼れし故なり。^{四五}彼舟に登りて、^{四六}返れり。^{四七}寃鬼の出で
 たる人は、^{四八}彼と偕に居らんことを求めたれども、^{四九}イイスス之を去らしめて、^{五〇}曰へり、^{五一}寃
 爾の家に歸りて、^{五二}神が用に如何なる事を行ひしを告げよ。^{五三}彼往きて、^{五四}全邑に、^{五五}イイススが
 彼に如何なる事を行ひしを宣べたり。^{五六}イイススが返りし時、^{五七}民彼を接けたり、^{五八}皆彼
 を俟ちたればなり。^{五九}觀よ、^{六〇}イアイルと名づくる人にして、^{六一}會堂の宰たる者來りて、^{六二}イ
 イススの足下に俯伏し、^{六三}其家に入らんことを求めたり。^{六四}蓋彼に獨の女、^{六五}年約十
 二の者ありて、^{六六}今死せんことを告げ、^{六七}彼が行く時、^{六八}民之に擡し、^{六九}過れり。^{七〇}十二年血漏を患ふ
 る婦醫師の爲に、^{七一}其悉くの所有を費したれども、^{七二}一人にも癒さるゝを得ざりし者は、^{七三}
^{七四}後より就きて、^{七五}彼の衣の裾に、^{七六}捫りしに、^{七七}其血漏直に止れり。^{七八}イイスス曰へり、^{七九}誰
 か我に捫りたる。衆の認めざる時、^{八〇}ト形及び、^{八一}彼と偕に在りし者曰へり、^{八二}夫子、^{八三}民用を、^{八四}

りて擁し返るに爾は誰か我に捫りたるを謂ふか。然れどもイエス曰へり我に
捫りし者あり蓋我能の我より出でしを覺たり。婦は自ら隠す能はざるを見て、
驚きて來り彼の前に俯伏して彼に捫りし故又如何にして立に愈されしを彼に衆民
の前に告げたり。彼は之に謂へり女よ心を安んぜよ爾の信は爾を救へり安ん
して往け。彼が尙有る時會堂の宰の家より人來りて曰く爾の女曰に死せり師を
頌はす勿れ。イエス之を聞きて幸に答へて曰へり懼るゝ勿れ惟信ぜよ彼は救
はれん。家に來りてペトル、イオアン、イアコフ及び小女の父母の外誰にも入るこ
きを許さざりき。衆人爲に哭き哀めるに彼曰へり哭く勿れ彼は死せしに非ず、
乃寝ぬるなり。人人其死せしを知りて彼を咽へり。彼衆を外に出して其手
を執りて呼びて曰へり小女起きよ。其神返りて直に起きたり彼は之に食を與へ
んことを命ぜり。其父母駭きたり、イエス彼等に戒めて行はれし事を人に告ぐ
る勿らしめたり。

福音書

一 イエス十二徒を召し集めて、彼等に凡の魔鬼を制し又諸病を醫す能

糧を以て、三彼等を神の國を傳へ、亦病者を醫さん爲に遣し、且彼等に謂へり、旅の爲に杖をも、藪をも、糧をも、銀をも、一切取る勿れ、二の衣をも攜ふる勿れ。何の家に入ることも、彼處に留りて、亦彼處より途に出でよ。若し爾等を接げざる者あらば、其邑を出づる時、爾等の足の塵をも拂へ、彼等に對する證を爲さん爲なり。彼等出て、鄉村を行き、遠く福音を宣へ、醫を施せり。分封の君イロド、凡そイイススの行ひし事を聞きて、惑へり、蓋或者は是をイオアンの死より復活せしなりと言ひ、他の者はイリヤの現れしなりと言ひ、又他の者は古の預言者の一人の復活せしなりと云へり。九イロド曰へり、イオアンは、我已に其首を斬れり、今我が是くの如き事を聞くは、斯れ何人ぞ、乃彼を見んま欲せり。一〇使徒等歸りて、其行ひし事を以て、イイススに告げたり、彼は之を攜へて、密にカフサイダ名づくる邑に、近き野の處に退けり。一二民之を知りて、彼に隨ひしに、彼は之を接けて、神の國の事を語り、且醫を需むる者を醫せり。一二日の長く、時十二徒彼に就きて曰へり、民を去らしめよ、彼等が四周の鄉村に往きて、宿を取り、食を覓めん爲なり、蓋我等は此に野の處に在るなり。二三然れども、彼曰へり、爾等

之に食を與へよ。彼等曰へり、若し往きて此の衆民の爲に食を市はずば、我等には五の餅と二の魚との外に有るなし。一四、其人約五千ありき。彼其門徒に謂へり、彼等を五十づゝ並び坐せしめよ。一五、是の如く行ひて衆人を坐せしめたり。一六、彼は五の餅と二の魚を取りて天を仰ぎて之を祝福し之を擘き、門徒に與へて、民の前に陳れしめたり。一七、皆食ひて飽き、其餘りたる屑十二筐を拾へり。一八、イイス、獨處に於て祈禱する事ありしに、門徒彼と偕にせり。彼は之に問ひて曰へり、民我を言ひて誰と爲す。一九、彼等答へて曰へり、授洗イオアンと爲し、他の者はイリヤと爲し、又他の者は古の預言者の一人復活したりと爲す。二〇、彼は之に謂へり、爾等は我を言ひて誰と爲す。二一、ペトル答へて曰へり、神のバリストスと爲す。二二、イイス、彼等に戒めて、此事を人に告ぐる勿らんことを命じたり。二三、又曰へり、人の子は多く苦を受け、長老等と司祭、諸長と學士等とに棄てられ、且殺されて、第三日に復活すべし。二四、衆に謂へり、人若し我に従はん、欲せば己を捨て、日日其十字架を負ひて、我に従へ。二五、己の生命を救はん、欲する者は之を喪はん、我の爲に己の生命を喪はん者は、之を救は

心。二五 蓋人全世界を獲とも己を喪ひ或は損は、何の益かあらん。二六 蓋我及び我の首を耻ぢん者は、人の子は己と父と聖なる天使等々の光榮を以て來らん時彼を耻ぢん。二七 我誠に爾等に語ぐ此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、神の國を見んとする者あり。二八 此等の言の後約八日を越へて、彼はペトル、イオアン、イアコフを攜へ山に登りて禱れり。二九 禱る時其面の容は變り、其衣は皎くして輝けり。三〇 觀と二人の彼と語れるあり、即ちモイセオ及びイリヤなり。三一 光榮の中に現れて、彼が本エルサリムに成すべき逝世の事を告ぐ。三二 ペトル及び之と偕に在りし者は、傍みで睡れたり、既に寐りて、在イススの光榮及び二人の彼と偕に立てるを見たり。三三 其彼を醒るゝ時、告ぐ、モイセオに謂へり、夫子よ、我等此に居るは善と、我等三の處を建て、一は爾の爲、二はモイセオの爲、一はイリヤの爲にせん、自ら言ふ所を知らざりき。三四 彼が尙之を言ふ時、雲ありて、彼等を蓋へり、雲に入りし時、懼れたり。三五 雲より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子なり、彼に聽け。三六 聲已に發して、イススの獨在るを見たり。彼等黙して、當時には見し事を誰にも告げざりき。三七 翌日、彼等が山より下

りし時、衆の民は彼を迎へたり。三八 親よ民の中の一人呼びて曰へり、師よ、爾に求む。我が子を奪みよ、此れ我が獨子なり。三九 惡鬼彼を執ふれば、彼忽叫び、彼を拘擥させ、沫を噴かしめ、彼を傷ひて、漸く離る。四〇 我爾の門徒に之を送ひ出さんことを求めたれども、彼等能はざりき。四一 イイスス答へて曰へり、噫、信なき悖れる世や、我何時まで爾等と借にし、爾等を忍ばん、爾の子を此に搦べ來れ。四二 彼が來る時、惡鬼彼を倒して、拘擥させたり、イイスス汚鬼を禁め、子を醫して、其父に與へたり。四三 衆皆神の大能を奇させり、衆が凡そイイススの行ひし事を奇とする時、彼其門徒に謂へり、爾等此の言を己の耳に藏めよ、人の子は人人の手に付されん。四四 然れども、彼等は此の言を曉らざりき、此れ彼等の爲に掩はれて、其之に遠せざるを致せり、而して此の言を彼に聞ふことを懼れたり。四五 時に、彼等に念は起れり、彼等の中孰が大なるぞ。四六 イイスス其心の念を窺て、幼児を取り、之を己の側に立て、四七 彼等に謂へり、我が名に因りて此の幼児を接けん者は、我を接くるなり、我を接けん者は、我を遣し、者を接くるなり、蓋爾等衆の中に、最小き者は、是れ大なる者なり。四八 イオアン答へて曰へ

り、夫子よ、我等は爾の名を以て、魔鬼を逐ひ出す人を見て、之に禁じたり。其我等に従はざる故なり。五〇 イイヌス之に謂へり、禁する勿れ。蓋爾等に敵せざる者は爾等の與屬なり。五一 彼が世より擧げらるゝ日の近づきし時、彼イエルサリムに面して行かんことを定めたり。五二 使を其面前に遣し、之に彼等往きて、サマリヤの郷に入り、彼が爲に備へんことをたれども、五三 彼處には彼を納れざりき。其イエルサリムに面して往くが故なり。五四 其門徒イアコフ及びイオアサン之を見て、謂へり、主よ、爾は我等がイリヤの爲し、如く火の天より降りて、彼等を滅さんことを命ずるを欲するか。五五 イイヌス顧みて、彼等を戒めて曰へり、爾等は自ら如何なる神に屬するを知らず。五六 蓋人の子の來りしは、人人の靈を滅さん爲に非ず、乃之を救はん爲なり。途に他の郷に往けり。五七 彼等が道を行く時、或彼に謂へり、主よ、爾何處に往くとも、我等に従はん。五八 イイヌス之に謂へり、狐には穴あり、天空の鳥には巢あり、惟人の子には首を枕する處なし。五九 又他の者に謂へり、我に従へ。彼曰へり、主よ、我先づ往きて、我が父を葬るを容せ。六〇 然れども、イイヌス之に謂へり、死者に其死者を葬るを任せ、爾は往きて、

神の國を傳へよ。又他の者曰へり、主よ、我爾に従はん、但先づ往きて吾が家の者に別を告ぐるを容せ。イニスス之に謂へり、手を鞞に著けて、後を顧みる者は神の國に當らざるなり。

爾後主は又別に七十門徒を選ひ、彼等各二人を己に先だて、自ら往かんと欲する所の諸邑路良に遣し、彼等に謂へり、積は多く、工は少し、故に、積主に、はたらきよ、工を其積所に遣さんことを求めよ。往け、我が爾等を遣すは、羔を狼の中に入るゝが如し、金匱をも行竊をも、腰をも搦ふる勿れ、途中にて人に安を問ふ勿れ。人の家に入る時は、先づ此の家に平安と曰へ。若し彼處に平安の干あらば、爾等の平安は彼に留らん、然らずば、爾等に歸らん。其家に居りて、彼等に在る所の者を食飲せよ、盃勞する者の其値を得るは宜しきなり、家より家に移る勿れ。何の邑に入ることも、人爾等を接げば、其爾等の前に供ふる者を食へ。其中に在る病者を醫せ、又衆に告げて曰へ、神の國は爾等に近づけり。何の邑に入ることも、人爾等を接げずば、其街に出て、曰へ、爾等の邑より我等に著きたる塵をも、我等は爾等に對ひて拂ふ、然れど

も之を知れ、神の國は爾等に近づけり。一三〇我爾等に語ぐ、彼の日に於てソドムは斯
の邑より忍び易からん。一三一彌なる彼爾ホラシンよ、彌なる彼爾マフサイダよ、益爾
等の中に行はれし、爾能は若しタル及びソドンに行はれしならば、彼等は早く麻を衣、
灰を漿り、坐して悔改せしならん。一三二然らば審判に於てタル及びソドンは爾等より
忍び易からん。一三三天にまで擧げられしカベルナツムよ、爾も地獄にまで落されん。
一三四爾等に聽く者は我に聽く爾等を拒む者は我を拒む、我を拒む者は我を遣し、
者を拒むなり。一三五七十門徒喜びて返りて曰へり、主よ、爾の名に因りて、冤鬼も我等に服
す。一三六彼は之に誦へり、我サタナの電の如く天より限ちしを見たり。一三七觀よ、我等
に蛇、蟻及び悉くの敵の能を踐む權を與ふ、一三八爾等を害せざらん。一三九然れども、惡鬼
の爾等に服するを喜さ爲す勿れ、乃爾等の名の天に傳されしを喜さ爲せ。一四〇當時
イエス神を以て喜びて曰へり、父天地の主よ、我爾を讚榮す、爾此等を智者及び遠者
に隠して之を赤子に顯し、に因る父よ、然り蓋是くの如きは爾の旨の喜せし所なり。
一四一門徒を顧みて曰へり、萬物は我が父より我に授けられたり、父の外に子の繼たる

を識る者なく、子及び子が顯さんと欲する者の外に父の誰たるを識る者なし。二三また
門徒を顧みて、特に彼等に謂へり、爾等が見る所を見る目は胎なり。二四我、爾等に
謂く、多くの預言者と君王とは、爾等が見る所を見んと欲して見ざりき、爾等が聞く所
を聞かんぞ欲して聞かさりき。二五時に一の律法師起ちて彼を試みて曰へり、師よ、我
何を爲して永遠の生命を賜はんか。二六彼は之に謂へり、律法に何をか録せる、爾如何
に讀むか。二七答へて曰へり、爾心を盡し、心を盡し、力を盡し、意を盡して、主爾の神を愛
せよ、又爾の鄰を愛するこそ己の如くせよ。二八 イイスス之に謂へり、爾の答へし所正
し之を爲せ、乃、生さん。二九然れども彼は己を義とせんと欲して、イイススに謂へり、
我が鄰とは誰ぞや。三〇 イイスス答へて曰へり、或人、イエリサリムよりイエリホンに
下る時、盜賊に遇へり、彼等其衣を剝ぎ、彼に傷つけ、幾と死するばかりにして、彼を捨て
て去れり。三一適一の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。三二同じく、レ
ウトも彼處に至り近づきて彼を見て、過ぎ去れり。三三惟、或サマリヤ人は行きて此に
至り、彼を見て憫み、三四就きて、其傷に油と酒とを沃ぎて、之を裹み、彼を己の家畜に乗

せ旅館に引き至りて彼を看護せり。明日行かんとする時銀二枚を出し館主に與へて之に謂へり此の人を看護せよ、費若し此より益せば我返る時爾に償はん。此の三人の中、爾孰を盜賊に遇ひし者の罪さ意ふか。彼曰へり此の人に矜恤を施しし者なり。イエス彼に謂へり往きて爾も是くの如く行へ。彼等が行ける時、イエスの村に入りしに或婦マルスと名づくる者彼を其家に迎へたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イエスの足下に坐して其言を聴けり。マルスは供事の多きに困りて心を煩はし、就きて曰へり主よ、我が姉妹我一人を遺して供事せしむるを爾意き爲さざるか、之に命じて我を助けしめよ。イエス彼に答へて曰へり、マルスよ、マルスよ、爾は多くの事を慮りて心を勞せり、然れども需むる所は一のみ。マリヤは善き分を擲びたり、是は彼より善ふ可からず。

第二十章 イエス某處に歸りて既に休めし時其門徒の一人彼に謂へり、主よ、我等に歸ることを教へよ、イオアンも其門徒に教へしが如し。彼は之に謂へり、爾等歸る時言へ天に在す我等の父よ、爾はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は、

天に行はるゝが如く地にも行はれん。我が日用の糧を毎日我等に與へ給へ。我等に我が罪を免し給へ。盜我等も凡そ我等に負ふ者に免す。我等を誘に導かず。強我等を凶惡より救ひ給へ。又彼等に餌へり。爾等の中孰か友あり。夜半彼に來りて。友よ我に三の餅を借せ。蓋我が友途中より我に來りしに我之に供すべき者なし。曰はんに。彼内より之に答へて。我を煩はす勿れ。門已に閉ぢ。我が兒曹我と與に牀に在り。我起きて。爾に與ふる能はず。曰はん。我爾等に餅を餅ぐ。若し彼は友なるが故に。起きて彼に與へずば。乃其切迫に依りて。起きて其齋むる如く彼に與へん。我も爾等に餅を餅ぐ。來め。然らば爾等に與へられん。然らば遇はん。門を叩け。然らば爾等の爲に啓かれん。一。凡そ求むる者は得ざる者は遇ひ。門を叩く者には啓かれん。一。爾等の中父たる者孰か其子餅を求めんに。之に石を與へ。或は魚を求めんに。之に魚に代へて蛇を與へ。一。或は卵を求めんに。之に糠を與へん。一。然らば爾等惡しき者なるに。尙善き賜を其子に與ふるを知る。況や天に在す父は之に求むる者に。靈神を與へざらんや。一。或時彼瘖なる魔鬼を逐ひ出せり。魔鬼出で。瘖者言ひしに。民之を奇とせ

り。然れども其中の政者曰へり彼は冤鬼の魁ヲエルセラルに藉りて冤鬼を逐ひ出す。一六 彼の者は彼を試みて天よりする休徴を求めたり。一七 イイスス彼等の意を知りて彼等に謂へり凡の國自ら分れ争はゞ所壊となり家自ら分れ争はゞ倒れん。一八 若しサタナも分れ争はゞ其國如何にして立たん。然るに爾等は言ふ我ヲエルセラルに藉りて冤鬼を逐ひ出す。一九 若し我ヲエルセラルに藉りて冤鬼を逐ひ出さば、爾等の諸子は誰に藉りて之を逐ひ出すか、故に彼等は爾等の審判者と爲らん。二〇 然れども若し我神の指に藉りて冤鬼を逐ひ出さば、則神の國果して爾等に臨みしなり。二一 強き者武器を執りて其家を守る時は其所有安全なり。二三 然れども彼より更に強き者來りて彼に勝つ時は其恃させし武器を悉く奪ひて贖物を分たん。二三 我を借にせざる者は我に敵し我を借に聚めざる者は散らすなり。二四 汚鬼人より出で、後水なき地を廻り安息を求むれども待すして曰く我暫て出でし我が家に歸らん。二五 既に來りて其家の掃き且つ飾りたるを見、二六 乃往きて己よりも悪しき他の七鬼を摺へ來り借に入りて、彼處に居るなり。是に於て其人の爲に後の患は先より更

に甚し。二七此を言ふ時一の婦民の中より聲を擧げて彼に爾へり爾を孕みし腹さ爾が哺ひし乳さは福なり。二八彼は曰へり然り神の言を聽きて之を守る者は福なり。二九民の多く集れる時彼宣へ始めて曰へり此の世は悪しくして休徴を求む而して預言者イオナの休徴の外之に休徴は與へられざらん。三〇蓋イオナがニ子ワヤ人の爲に休徴さ爲りし如く人の子も此の世の爲に是くの如く爲らん。三一南方の女王は審判の時に斯の世の人と共に起ちて彼等を罪せん蓋彼は地の極よりツロモンの智慧を聽かん爲に來れり觀よ此にはツロモンより大なる者あり。三二ニ子ワヤの人は審判の時に斯の世と共に起ちて之を罪せん蓋彼等はイオナの傳教に由りて悔改せり觀よ此にはイオナより大なる者あり。三三燈を燃して之を照れたる處或は斗の下に置く者あらず乃燈臺の上に置く入る者が光を見ん爲なり。三四身の燈は目なり故に爾の目の淨き時は爾の全身も明なり其惡しき時は爾の身も暗し。三五故に慎め爾が内の光の暗さならざらんこきな。三六若し爾の全身明にして一部の暗き所もなくば則全く明ならん燈の其光を以て爾を照すが如し。三七彼が言ふ時或る

セ、彼に共に食せんことを請ひたれば、彼入りて席坐せり。三八 乃り、セいは彼が食する前に手を洗はざりしを見て、異めり。三九 主は之に謂へり、爾等乃り、セい、今杯を飲まざるの外を深むれども、爾等の内には貪婪と悪悪と充てり。四〇 無知なる者よ、外を遣りし者は亦内をも遣りしに非ずや。四一 惟所有の中より施濟を爲せ、然らば爾等の爲に皆潔からん。四二 爾なる餓爾等乃り、セいよ、蓋爾等は蒲荷芸香及び凡の野菜の十分の一を納めて、義と神に於ける愛さを遣つ、此れ行ふ可きなり、彼も亦遣つ可からず。四三 爾なる餓爾等乃り、セいよ、蓋爾等は會堂には首席、街衢には間安を好む。四四 爾なる餓爾等、偽善なる學士及び乃り、セい等よ、蓋爾等は隠れたる墓に似たり、其上を履む人は之を知らず。四五 律法師等の一人彼に答へて曰へり、師よ、爾之を言ひて、我等を辱しむ。四六 彼曰へり、爾等律法師も爾なる餓、蓋爾等は預ひ難き任を人に任はせて、己は一の指をも其任に觸れず。四七 爾等、爾なる餓、蓋爾等は其先祖が殺し、預言者の墓を掘つ。四八 是を以て、爾等は先祖の爲し、こゝを證し、且之に與す、蓋爾等は預言者を殺し、爾等は其墓を掘つ。四九 故に神の智慧も言へり、我預言者及び使徒等を、彼等に

遣さん、彼等は其中或者を殺し、或者を逐はん、
創世以來流されし諸預言者の血は、
より衆められん爲なり。然り、我爾等に語ぐ、是れ此の代より衆められん。
爾等律法師よ、蓋爾等は知識の綸を取りて、自ら入らず入る者をも阻めり。
を言ふ時、學士等及びソリセイ等追りて、彼を詰り、彼に多くの事を答へしめ、
伺ひて、其口より出づる何事をか捕へんと欲せり、彼を罪せん爲なり。

民數萬集りて、相蹂むに至れる時、彼先づ其門徒に謂へり、
我等の群を防げ、是れ偽善なり。覆はれて隠れざる者なく、隠れて知られざる者なし。
故に爾等が暗の中に首ひし事は、光の中に聞はん、密なる室に於て耳に附きて語りし事は、嵐の上に傳へられん。我爾等我が友に首ふ身を殺して、後に何事をも爲す能はざる者を懼るゝ勿れ。我爾等に誰をか懼るべきを示さん、即殺して後に地獄に投する権を有つ者を懼れよ、然り、我爾等に語ぐ、斯の者を懼れよ。五の雀は二錢にて售らるゝに非ずや、然るに其一も神の前に忘れられず。爾等に於ては首の鬘も皆數

へられたり。故に懼るゝ勿れ爾等には多くの雀より貸し。我又爾等に語ぐ凡そ我を人の前に認めん者は人の子も彼を神の使等の前に認めん。我を人の前に諱まん者は、神の使等の前に諱まれん。一〇凡そ人の子に敵して言を出す者は赦されん然れども聖神を漬す者は赦されざらん。一一爾等を曳きて會堂又は政を執り楯を有つ者の前に至らん時如何に或は何を答ふべく或は何を言ふべきを慮る勿れ。一二其の時聖神爾等に言ふべきことを教へん。一三民の中の一人彼に附へり師ふ我が兄弟に我と遺産を分つことを命ぜよ。一四彼は之に附へり人よ誰か我を立て、爾等の裁判官或は分配者と爲したる。一五是に於て彼等に附へり慎みて食を防げ盗人の生命は其所有の饑なるに因らざるなり。一六又譬を設けて彼等に附へり或富める人に田畝の善く實れるあり、一七彼自ら付りて曰へり我何を爲さんか蓋我が作物を賊むべき處なし。一八又曰へり我斯く爲さん我が倉を毀ちて更に大なる者を建て斯の中に我が悉くの穀物と貨物とを聚めて、一九我が盤に附はん、爾には多年の爲に蓄へたる多くの貨物あり息み食ひ飲み樂めよ。二〇然れども神は彼に附へり無知なる者

よ今夜爾の靈を爾より奪めん然らば爾が備へし所の者は誰に歸せんか。二凡そ己の爲に財を積み神に於て富まざる者は是くの如し。三又其門徒に爾へり故に我爾等に語ぐ爾等の生命の爲に何を食ひ爾等の身體の爲に何を衣んさ慮る勿れ。三生命は糧より大にして身體は衣より大なり。四試に狼を思へ彼等は稼かす給らず、倉もなく納屋もなし而して神は之を養ふ爾等は鳥より貴きこと幾何ぞ。五且爾等の中誰か慮りて其身の長一尺だに延ぶるを得ん。六然らば至小き事すら能せずるに何ぞ其餘の事を慮る。七試に百合の如何にか長するを思へ勞かず紡がず然れども我爾等に語ぐソロモンも其榮華の極に於て其衣猶此の花の一に及ばざりき。八今日野に在り明日燼に投げらるる草にも神は斯く衣すれば況や爾等をや小僧の者よ。九故に爾等何を食ひ或は何を飲まんさ求むる勿れ亦思ひ煩ふ勿れ。一〇蓋此れ皆世の異邦人の求むる所なり爾等の父は此等の者の爾等に必要なるを知る。一一惟神の國を求めよ然らば此れ皆爾等に加はらん。一二小き群よ憶る勿れ蓋爾等の父は爾等に國を賜はんことを喜べり。一三爾等の所有を售りて施濟を爲せ己

の爲に古びざる藝盡きざる財を天に備へよ。彼處には盜賊近づかず。蓋壞はず。三
 爾等の財の在る所には爾等の心も在らん。四 爾等の腹は帯せられ。爾等の腹は燃ゆ
 べし。五 爾等は其主が燧篋より歸るを俟ちて。彼來りて門を叩く時直に彼の爲に啓
 かんとする人々に似るべし。六 主來りて其諸僕の徹醒するを見れば。彼等。福なり。我
 誠に爾等に語ぐ。彼自ら腹に帯し。彼等を席坐せしめ。前みて。彼等に供事せん。七 若し
 第二更に來り。又第三更に來りて。彼等の是くの如きを見れば。其諸僕。福なり。八 若し
 家主盜賊の何の時に來るを知らば。徹醒して。其家を穿つを許さざらん。是れ爾等の知
 る所なり。九 故に爾等も己を備へよ。蓋爾等が怠はざる時に。人の子來らん。一〇
 爾彼に期へり。主よ。此の譬は我等に言ふか。抑衆人に言ふか。一一 主曰へり。孰か忠に
 して。習なる家宰。其主が諸僕の上に立て。時に隨ひて。彼等に定置の糧を與へしむる
 者たる。一二 主の來る時。彼が斯く行ふを見れば。其僕。福なり。一三 我誠に爾等に語ぐ。彼
 を立て。其一切の所有を督らしめん。一四 然れども。若し其僕心の中に。我が主の來る
 は遅からん。と曰ひて。僕婢を打ち。食ひ。飲み。且。醉へば。一五 乃。俟たざる。日。知らざる。時

に其僕の主來りて彼を断ち彼を不忠の者と同じき分に處せん。其主の旨を知りて備へず其旨に順ひて行はざりし僕は多く拵たれん。知らずして別に當る事を行ひし者は少く拵たれん。凡そ多く與へられし者は多く促されん多く託せられし者は更に多く索められん。我火を地に投ぜん爲に來れり此の火の日に燃ゆることを我認むこと幾何ぞ。我に受くべき施禮あり其成るに至るまで我遂に迫ること如何ばかりぞ。爾等は我和平を地に與へん爲に來れりと思ふか我爾等に謂ふ然らず即分離なり。蓋是より後一家に五人分離じて三人は二人に二人は三人に敵せん。父は子に子は父に敵し母は女に女は母に敵し姑は其婦に婦は其姑に敵せん。又民に謂へり爾等雲の四より起るを見れば直に言ふ雨ふらん果して然り。風の南より吹くを見れば言ふ暑くならん果して然り。偽善者よ爾等天地の面を別つを知りて尙ぞ此の時を別たさる。且爾等何ぞ己に依りて宜しき所を判断せざる。爾を訟ふる者と僧に有司に往く時途中に在りて彼より釋を得んことを勉めよ恐らくは彼爾を曳きて裁判官に至り裁判官爾を下吏に付し下

吏は爾を獄に下さん。我爾に詣ぐ、爾を監だに假はすば、彼より出づるを得ず。

田田田

其時數人來りて、ピラトが其血を其祭物に雜へしガリレヤ人の事をイ

イススに告げたり。彼は之に答へて曰へり、爾等此のガリレヤ人は斯く苦を受けし

故に、悉くのガリレヤ人より多く罪ありしと意ふか。我爾等に詣ぐ、然らず、乃爾等

若し悔改せずば、皆是くの如く亡びん。或は彼のシロアムの塔倒れて殺されし十八

人は、悉くのイエエルサリムに居る者より多く罪を負ひたりと意ふか。我爾等に詣ぐ、

然らず、乃爾等悔改せずば、皆同じく亡びん。又書を設けて曰へり、或人其葡萄園

に植ゑたる無花果樹ありしに、來りて之に果を求むれども、得ざりき。遂に園丁に謂

へり、視よ、我三年來りて、此の無花果樹に果を求むれども、得ず、之を斫れ、何ぞ徒に地を

塞ぐ。園丁彼に對へて曰く、主よ、今年も之を容して、我が其周圍を掘りて、肥料を置

を待て、或は果を結ばん、否すば、後に之を斫らん。安息日に彼一の會堂に在りて

教を宣べたり。二爰に十八年病の鬼を患ふる婦あり、監みて、少しも伸ぶる能はざり

き。二三、イイスス之を見て呼びて之に詣へり、婦よ、爾は其病より釋かれたり。二三、乃

て手を彼に接せられたれば、彼直に伸びて神を讚美せり。一四 會堂の宰、イエスマスが安息日に醫を施ししを恨りて、民に誦へり、工作を爲すべき日は六日あり、其中に來りて醫されよ、安息の日に於てせされ。一五 主彼に答へて曰へり、偽善者よ、爾等各安息日に於て其牛或は驢を槽より解き、之を牽きて飲ばざるか。一六 況やアウラムの女なる此の婦、十八年サタナに縛られたる者の結を、安息の日に於て解くべからざりしか。一七 彼が之を言ふ時、彼に敵する者は皆愧ぢ、衆民は彼が凡の光明なる行事を喜べり。一八 彼曰へり、神の國は何に似たるか、我之を何に譬へん。一九 是れ芥種人取りて其園に播きたる者の如し、乃長じて大なる樹となり、天空の鳥其枝に棲り。二〇 又曰へり、神の國を何に譬へん。二一 是れ稗の如し、婦之を取りて、三斗の麴の中に納れしに、悉く發酵するに至れり。二二 イイスス 諸の邑及び村を経て、教を宣べ、イエルサリムに向ひて行けり。二三 或彼に誦へり、主よ、救はるゝ者寡きか。二四 イイスス 彼等に誦へり、力を竭くして、穿き門より入れ、豈我爾等に誦く多くの者は入るを求めて得ざらん。二五 家主起きて、門を閉ぢて、後爾等外に立ちて、門を叩きて曰はん、主よ、主よ、我等

の爲に啓け彼爾等に答へて曰はん、我爾等が突れよりするを識らず。 二六其時爾等曰はん、我等爾の前に食欲し、爾亦我等の術に教へたり。 二七然れども彼曰はん、我爾等に語ぐ、我爾等が突れよりするを識らず、凡そ不義を行ふ者は我より離れよ。 二八時に爾等アウラム、イサアク、イアコフ及び諸預言者が神の國に在り、己が外に逐はるを見て、彼處に哭き切齒せん。 二九東より、西より、北より、南より、人來りて、神の國に席坐せん。 三〇親よ、後なる者の先となり、先なる者の後となることあらん。 三一或る日、セイ等就きて彼に謂へり、出で、此を離れよ、蓋イロド爾を殺さんと欲す。 三二彼は之に謂へり、往きて彼の狐に告げよ、親よ、我今日及び明日冤鬼を逐ひ出し、醫を施し、第三日に終らん。 三三然れども今日明日及び次の日に我行くべし、蓋預言者のイエエルサリムの外に亡ぶるは有らざるなり。 三四イエエルサリムよ、イエエルサリムよ、預言者を殺し、爾に遺されし者を石にて撃つ者よ、我幾次か、母鷄が其雛を翼の下に集むる如く、爾の諸子を集めんことを欲したれども、爾等は欲せざりき。 三五親よ、爾等の家は虚しくして、爾等に遺さる、我爾等に語ぐ、今より後、主の名に因りて來る者は祝福せらるる云ふ

時に至るまで爾等我を見ざらん。

一 イイスス安息日に一の宰なるフリセイの家に入りて餅を食ふことありしに、人人彼を親へり。二 爰に水腫病を疾める人の彼の前に立てるあり。三 イイスス

律法師及びフリセイ等に問ひて曰へり安息日に醫を施すは宜しきか。彼等默然たり。彼は其人に觸れて之を醫して去らしめたり。又彼等に謂へり爾等の中誰にか腫

疾は牛の井に陥ることあらんに、安息の日にも直に之を曳き出さざらんか。彼等之に對ふる能はざりき。招かれたる者の首座を擲へるを見て醫を散けて彼等に謂へ

り、爾人より婚筵に招かれん時首座に坐する勿れ恐らくは爾より尊き者の招かる

いありて、爾と彼とを招きし者來りて、爾に謂はん斯の人に座を讓れ、其時爾蓋ち

て、末座に就かん。一〇 乃招かれん時往きて末座に坐せよ、爾を招きし者來らん時爾

に、友よ、上座に進めと言はん爲なり、其時爾同席者の前に於て榮あらん。一一 蓋凡そ

自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。一二 又彼を招きし者

に謂へり、爾午餐或は晚餐を設くる時爾の朋友をも、兄弟をも、親戚をも、富める鄰をも、

招く勿れ、恐らくは彼等も亦爾を招きて、爾報を受けん。一三 乃筵を設くる時、貧乏、
廢疾跛者、聾者を招け、一四 然らば彼等が爾に報ゆる能はざるに因りて、爾報なり、義
者の復活の時に爾報を得んことすればなり。一五 彼と偕に席坐する一人、此を聞きて、彼
に謂へり、神の國に於て餅を食はん者は寡なり。一六 彼は之に謂へり、或人大なる晩餐
を設けて、多くの者を招きたり。一七 晩餐の時に及び、其僕を遣して招かれたる者に謂
へり、來れ、筵一切已に備はれり。一八 彼等皆同じく辭したり。第一の者曰へり、我田地を
買ひたり、往きて之を見んことを要す、請ふ我が辭するを允せ。一九 他の者曰へり、我牛
五頭を買ひたり、之を試みん爲に往く、請ふ我が辭するを允せ。二〇 又他の者曰へり、我
妻を娶りたり、是の故に來る能はず。二一 其僕歸りて之を主に告げたれば、家主怒りて、
其僕に謂へり、速に邑の街と巷とに出で、貧乏、廢疾跛者、聾者を此に引き來れ。二三
僕曰へり、主よ、爾の命せし如く行ひたれども、尙餘れる座あり。二四 主は僕に謂へり、道
路及び藩籬の間に出で、入らんことを設得して、我が家に盈たしめよ。二五 我爾
等に語ぐ、彼の招かれたる人は、一も我が晩餐を嘗めざらん。蓋召されたる者は多けれ

ども選ばれたる者は少し。二五衆の民彼と借に行けるに彼は願みて之に餅へり、二
 人若し我に來りて其父母妻子兄弟姉妹又己の生命をも憎まずば我が門徒と爲る
 を得ず。二七己の十字架を任ひて我に従はざる者も亦我が門徒と爲るを得ず。二八
 爾等の中孰か塔を建てんと欲して先づ坐して其資金の之を成すに足れるかを計ら
 ざらん。二九恐らくは其基を置きて終ふるこそ能はずば見る者皆彼を嘲ひて曰はん。
 三〇此の人建て始めて終ふるこそ能はざりきと。或は何れの王か出でて他の王と
 戦はん先に先坐して一萬を以て夫の二萬を率ゐて來り攻むる者に敵するを得るか
 能はざらん。三一然らずば敵の尙遠く在る時彼使を遣して和を請はん。三二是くの如
 く爾等の中凡そ其有てる所を捨てざる者は我が門徒と爲るを得ず。三三鹽は善き物
 なり然れども鹽若し其味を失はば何を以て之を鹹くせん。三四地にも肥料にも宜し
 からず惟之を外に棄つ。耳ありて聴くを得る者は聴くべし。三五
 三六 稅吏及び罪人等はイススに總かん爲に皆彼に近づけり。三
 等と學士等と之を怨みて曰へり彼は罪人等を納れて之と共に食す。三七此の譬を設

けて彼等に謂へり、爾等の中何人が、一百の羊ありて其一を失はば、九十九を野に會き往きて亡はれし者を得るに至るまで之を尋ねざらんや、之を得て喜びて己の所に在ひ、家に歸りて其友及び隣を呼び集めて彼等に謂はん、我と共に喜べ、我は亡はれし羊を獲たりき。我爾等に語ぐ是くの如く天には一の悔い改むる罪人の爲の喜ば、悔改を要せざる九十九の義人の爲の喜に勝らん。或は何の婦か、金銀十枚ありて、其一枚を失はば燈を燃し室を掃ひ獲るに至るまで勤めて尋ねざらんや、之を獲て其友及び隣を呼び集めて曰はん、我と共に喜べ、我は失ひし金銀を獲たりき。一、我爾等に語ぐ是の如く神の使等の前には一の悔い改むる罪人の爲に喜あり。一、又曰へり、或人に二の子あり、一、其次子父に謂へり父よ、我が得べき産業の分を我に與へよ、父其産業を彼等に分てり。一、幾日も経ざるに、次子は其得たる者を盡く集めて、遠き地に旅行し、彼處に放蕩に生活して其産業を浪費せり。一、盡く耗し、及びて其地に大なる饑饉起り、彼始めて乏しきを覚むたり。一、乃往きて、其地の住民の、一に身を寄せたれば、其人彼を田に遣して、家を牧はしめたり。一、彼は家の食ふ

豆莢を以て其腹を充たさんと欲したれども彼に與ふる者なかりき。一七つひみ子がかへり
みて曰へり我が父には幾何かの傭人の糧に餘れるあるに我は飢ゑて亡ぶ。一八起ち
て我が父に往きて之に謂はん父よ我天及び爾の前に罪を獲たり、既に爾の子さ
稱べらるゝに堪へず我を爾が傭人の一の如く爲せよ。二〇乃起ちて其父に往けり。
尙遠く在りし時其父彼を見て憫み趨り前みて其頸を抱きて彼に接吻せり。二二子
之に謂へり父よ我天及び爾の前に罪を獲たり既に爾の子さ稱べらるゝに堪へず。二
然れども父は其傭人に謂へり最も美しき衣を出して彼に衣せよ指銀を其手に懸
を其足に施せ。二三且肥れたる犢を牽きて之を宰れ我等食ひ樂しまん。二四此の我
が子は死して復生き失はれて又得られたり是に於て彼等樂しめり。二五適其長
子田に在りしが歸りて家に近づける時樂さ舞さを聞きたれば、二六一の僕を呼びて
是れ何事ぞと問ひしに、二七彼曰へり爾の弟來りしなり爾の父は其恙なくして彼
を得たるに因りて肥れたる犢を宰りたり。二八長子怒りて入るを欲せざりき其父出
で彼に勤めしに、二九彼父に答へて曰へり視よ我多年爾に事へて未だ嘗て爾の命

に遣はされども、爾未だ嘗て小山羊を我に與へて、我を友と共樂に樂しめざりき。然るに此の田の子、奴と共、爾の産業を耗し、者の來りし時は、爾彼の爲に肥たる轅を牽れり。三、父後に爾へり、子よ、爾は常に我と借に在り、我に屬する者は皆爾に屬す。三、惟此の爾の弟は死して復生し、失はれて又得られたるが故に、我等喜ぶ樂しむべきなり。

一、イイスス又其門徒に爾へり、或富める人に管理者ありて、其主の産業を耗すに彼に訴へられたり。二、主彼を呼びて曰へり、我が爾に付きて聞く事は、斯れ何ぞや。管理の報告を出せ、蓋爾は仍管理するを得ず。三、管理者、爾に爾へり、我が主我より管理の職を奪ふ我何を爲さんか、働くには力なく、乞ふは耻づ。四、我爲すべき事を知る、我が管理の職を解かれん時、人人に我を其家に接しめん爲なりき。五、其主の負債者を一一呼びて、其第一の者に、爾へり、爾我が主に負ふこと幾何ぞ。六、曰へり、油百斗なり。彼に爾へり、爾の券を取り、爾に坐して、五十と書け。次に他の者に、爾へり、爾負ふこと幾何ぞ。曰へり、麥百斛なり。彼に、爾に負ふ、爾の券を取りて、八十と書け。八、主は不義な

る管理者を譽めたり其爲しし事の巧なるが故なり蓋此の世の諸子は其族類に於て、
光の諸子に較ぶれば更に巧なり。我も爾等に語ぐ不義の財を以て己の爲に友を求
めよ爾等の匠からん時彼等が爾等を永遠の宅に接けん爲なり。二〇女子に於て思
なる者は多き事に於ても思なり少き事に於て不義なる者は多き事に於ても不義な
り。一故に爾等若し不義の財に於て思ならずば誰か爾等に眞の財を託せん。一三若
し他に屬する者に思ならずば誰か爾等に屬する者を爾等に與へん。一四僕は二人の
主に事ふる能はず蓋或は此を惡み彼を愛し或は此を重んじ彼を輕んぜん。爾等は辨
じ財に較ね事ふる能はず。一五利を好むよりセイ等も悉く之を聞き而して彼を晒
へり。一六彼は之に謂へり爾等人人の前に己を義と爲す然れども神は爾等の心を知
れり蓋人人の中に高しとする事は神の前に惡むべきなり。一七律法と預言者とはイ
オアンに至りて止れり其時より神の國は福音せられ人人力を用ゐて之に遊む。一八
然れども天地の廢するは律法の一畫の闕くるに較ぶれば更に易し。一九凡そ其妻を
出して他に娶る者は姦淫を行ふなり夫に出されたる婦を娶る者も亦姦淫を行ふな

り。一九 富める人あり、紫冠と細布を衣、日日奢り樂めり。二〇 亦貧しき者ヲザリ
と名づくるあり、全身臍物を病みて、富める人の門に臥し、二一 其食、車より遺つる屑
を以て腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其臍物を舐れり。二三 貧しき者死して、天使
等に因りて、アウラムの窟に送られ、富める者も死して、葬られたり。二四 地獄に苦の
中に在りて、彼其目を擧げて、遙にアウラム及び其窟に在るヲザリを見たり。二五
乃呼びて曰へり、父アウラムよ、我を憐み、ヲザリを遣して、其指の尖を水に蘸して、
我が舌を涼さしめよ、蓋我此の窟の中に苦む。二六 然れどもアウラム曰へり、子よ、爾
は存命の時爾の善を受け、ヲザリは同じく其惡を受けたりとを憶へ、今彼は此に慰み、
爾は苦む。二七 此のみならず、爾等と我等との間に巨なる淵は限れり、故に此より爾
等に渉らんと欲する者は能はず、彼よりも我等に渉るを得ず。二八 彼曰へり、然らば父
よ、請ふ、ヲザリを我が父の家に遣せ。二九 蓋我に五人の兄弟あり、彼をして其前に置
を爲さしめよ、彼等も此の苦の處に來らざらん爲なり。三〇 アウラム之に謂ふ、彼等
にモイセイ及び預言者あり、之に聽くべし。三一 彼曰へり、否、父アウラムよ、然れども

若し死の中より彼等に往く者あらば彼等悔改せん。三一 アウラム曰へり若しモイ
 セイ及び預言者に聽かずば縱ひ死より復活する者ありとも信ぜざらん。
 一 イイスス又其門徒に謂へり誘惑は來らざるを得ず惟之を來す者は禍
 なる哉。二人此の小子の一人を罪に誘はんよりは寧ろ磨石を其頭に懸けられて海に投
 ぜられん。三 己を慎め若し爾の兄弟爾に罪を獲ば彼を戒めよ若し悔いば彼に免せ。
 若し一日に七次爾に罪を獲亦一日に七次自ら省みて我悔ゆと曰はば彼に免せ。四 使
 徒等主に謂へり我等に信を益せ。六 主曰へり若し爾等に芥種さいしゆの如き信しんあらば此の桑
 に抜けて海に植われと言ふことも爾等に聽かん。七 孰か爾等の中に耕し或は畜を牧ふ
 僕あらんに其田より歸りて後之に直に來りて席坐せよと云ふ者あらんや。八 豈彼に
 曰はすや我が晚餐を備へ我の食飲する間帯を束れて我に事へ後爾食飲せよと。九 彼
 は其僕が命ぜられしことを行ひし爲に之に謝せんか我之を意はず。一〇 是くの如く
 爾等も凡そ爾等に命ぜられし事を行ひし時には謂へ我等は無益の僕なり行ふべき
 事を行ひしのみと。二 彼イエルサリムに往くにサマリヤとガリヤとの間を経た

り。二三或る村に入る時癩病者十人彼を迎へ遠く立ちて聲を揚げて曰へり。二三イ
イスス夫子よ我等を憐れ。二四 イイスス彼等を見て曰へり往きて己を罰祭等に示せ。
彼等往く時潔まれり。二五 其中一人己の愈されしを見て返りて大聲を以て神を讃
榮し。二六 イイススの足下に俯伏して感謝せり彼はサマリヤの人なり。二七 イイスス
曰へり潔まりし者は十人に非ずや其九は何處に在るか。二八 此の異族人の外如何ぞ
返りて光榮を神に歸せざる。二九 又彼に謂へり起ちて往け爾の信は爾を救へり。三〇
乃リセイ等に神の國は何の時に來ると問はれて彼等に答へて曰へり神の國は顯に
來らず。三一 人人觀よ此處に在り或は觀よ彼處に在り。三二 曰はざらん。蓋觀よ神の國は
爾等の裏に在り。三三 又門徒に謂へり爾等人の子の一日を見ん。三三 欲する時至らん而
して之を見ざらん。三四 人人爾等に觀よ此處に在り或は觀よ彼處に在り。三五 爾は往
く勿れ從ふ勿れ。三六 蓋電が天の此の渾より閃きて天の彼の渾にまで光るが如く
人の子も其日に是くの如くならん。三七 然れども彼は先づ多く苦を受けて此の世に
棄てらる可し。三八 ノイの日に在りし如く人の子の日にも是くの如くならん。三九 人

人食ひ飲み、娶り嫁ぎて、ノイの方舟に入る日に至り洪水來りて、盡く彼等を滅せり。二
八 同様に又ロトの日に在りしが如し、人人食ひ飲み、買ひ賣り樹を搦造せり、二九 然れ
どもロトがソドムより出でし日、天より火と硫黄と雨りて、盡く彼等を滅せり。三〇 人
の子の圓る一日にも亦是くの如くならん。三一 當日屋の上に在らん者は、其器家に
在らば、之を取らん爲に下る可からず、田に在らん者も同じく後へ歸る可からず。三三
ロトの妻を記憶せよ。三二 己の生命を救はんを求むる者は、之を喪はん、之を喪ふ者は、
之を存せん。三四 我爾等に語り、其夜二人榻を同じくせんに、一人は取られ、一人は遣さ
れん。三五 二人の婦共に磨を旋かんに、一人は取られ、一人は遣されん。三六 二人田に在
らん、一人は取られ、一人は遣されん。三七 彼等問ひて曰く、主よ、何處にか之れ有る。彼
は之に謂へり、屍の在る所には、聚集らん。

第三十八章 イイスス又譬を設けて、彼等に恒に祈禱して倦むべからざることを言
へり、二 曰く、或邑に裁判官あり、神を畏れず、人に耻ぢず。三 其邑に一の養あり、彼に來り
て曰へり、我を我が仇より援けよ。四 彼久しく肯はざりしが、其後自ら思ひて曰へり、我

辨を畏れず人に耻ぢずと雖、此の彼我を煩はすに因りて、我之を援けん、其恒に來りて、我に聒しくせざらん爲なり。主曰へり不義なる裁判官の言ふ所を聴け。神は晝夜彼に顧ぶ所の其選びたる者を、久しく忍ぶとも終に援けざらんや。我爾等に語ぐ速に彼等に援けん。然れども人の子來りて、信を地に見んや。又己を義なりと信じて、他人を義する者に、此の譬を聞れり。一二人所購せん爲に殿に登れり、一はろりて、一は税吏なり。一ろりて、己の裏に斯く竊れり、神よ、我爾に感謝す、我他人の殘酷不義、或は此の税吏の如くならずるを以てなり。一我七日に二次、竊し、凡そ得る所の十分の一を獻ぐ。一税吏は遠く立ちて、目を舉げて、天を仰がず、乃臂を掲ちて曰へり、神よ、我罪人を憐めよ。一我爾等に語ぐ、此の人は彼の人よりは義させられて、家に歸れり。蓋凡そ自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。一嬰兒を彼に攜へ來れるあり、彼等に觸れん爲なり、門徒見て之を戒めたり。一然れども、イイスス彼等と呼びて曰へり、幼兒の我に就くを容せ、之に禁する勿れ、蓋神の國は是くの如き者に屬す。一我誠に爾等に語ぐ、幼兒の如く

に神の國を承けざる者は之に入るを得ず。一八或は彼に問ひて曰へり善なる師よ、
 我永遠の生命を嗣がんと爲に何を爲すべきか。一九 イイスス彼に謂へり爾は何ぞ我を
 善と稱ふる獨神より外に善なる者なし。二〇 爾は誠な讎れり淫する毋れ殺す毋れ、
 竊む毋れ妄証する毋れ爾の父母を敬へ。二一 彼曰へり我幼きより皆之を守れり。二
 二 イイスス之を聞きて彼に謂へり爾に獨一の足らざる事あり悉く爾の所有を售り
 て貧者に施せ然らば財を天に有たん且來りて我に従へ。二三 彼之を聞きて甚憂ひ
 たり巨に富める故なり。二四 イイスス其甚憂ひたるを見て曰へり富を有つ者の神
 の國に入るは難き哉。二五 盜駱駝が針の孔を穿るは富める者が神の國に入るより易
 し。二六 之を聞きし者曰へり然らば誰か能く救はれん。二七 彼曰へり人には能せざる
 所神には能するなり。二八 ペトル曰へり願よ我等一切を捨て、爾に従へり。二九 イイ
 ス 彼等に謂へり我誠に爾等に語く神の國の爲に家或は父母或は兄弟或は姉妹或
 は妻或は子を捨て、三〇 而して斯の時に多倍を受け未來の世に永遠の生命を受けさ
 る者あらず。三一 十二門徒を招きて、彼等に謂へり願よ、我等イエルサリムに上る而し

て預言者に因りて人の子を指して録されし事皆成らん。蓋彼は異邦人に付され、嘲られ辱められ、唾せられん。人彼を鞭ち彼を殺さん而して第三日に彼復活せん。然れども彼等少しも之を曉らざりき。斯の言は彼等の爲に隠れて彼等解はれし事を知らざりき。彼がイエリホンに近づける時、或習者道の旁に坐して乞へり。民の過ぐるを聞きて、是れ何事ぞと問へば、人人彼にイエスナザレイの過ぐるなりと告げたり。彼呼びて曰へり、ダワドの子イエススよ、我を憐め。前に行く者彼を禁めて臥さしむれども、彼愈大に呼べり、ダワドの子よ、我を憐め。イエスス止りて彼を攜へ来るを命じ、其近づきし時之に問ひて、曰へり、我が爾に何を爲さんことを欲するか。彼曰へり、主よ、我が見るを得んことを。イエスス彼に俯へり、見るを得よ。爾の信は爾を救へり。彼直に見るを得、神を讚榮して、イエススに従へり。衆民是を見て、讚美を神に歸せり。

一 イエススイエリホンに入りて過ぎ行けり。視よ、ザグヘイと名づくる者あり、税吏の長にして富める者なり。イエススの如何なる人たるを見んぞ欲した

れども人の衆きに因りて見るを得ざりき身の長短ければなり。乃趨り前みて彼
を見ん爲に無花果樹に升れり彼此の旁を過ぎんさすればなり。イエス此の處に
來りし時仰きて之を見て曰へりザクヘイよ速に下れ蓋我今日爾の家に入るべし。
彼急ぎ下り喜びてイエスを接けたり。人皆之を見て怨みて曰へり彼往きて即人
の客を爲れり。ザクヘイ立ちて主に謂へり主よ我所有の半を以て貧しき者に施さ
ん若し誣ひて人より取しこそあらば四倍にして之を償はん。イエス彼に謂へ
り今日汝は此の家に臨めり此の人もアツラアの子なればなり。蓋人の子は亡
びし者を尋ねて救はん爲に來れり。二 彼等が之を聞く時イエス又譬を設けたり、
蓋彼已にイエルサリムに近づき彼等は神の園直に臨るべしと意へり。三 故に彼
曰へり或賣き人遠き地に往けり園を受けて歸らん爲なり。一 往く時十人の僕を召
して彼等に銀十斤を與へて曰へり我が歸るまで貿易せよ。二 其國民彼を憎みて後
より使を遣して曰へり我等は斯の人の我等に王たるを欲せず。三 彼が園を受けて
賣りし時彼の銀を與へし諸僕を召すことを命じたり。各幾何か利を獲たるを知ら

ん爲なり。一六第一の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は十斤を獲たり。一七主彼に聞へり、善い哉、善なる僕よ、爾は小き者に於て忠なりしに因りて十の邑を宰れ。一八其次の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は五斤を獲たり。一九之にも聞へり、爾も五の邑を宰れ。二〇又其次の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は此に在り、我市に賣みて之を隠れり。二一爾を畏れし故なり、蓋爾は嚴酷なる人にして、置かさりし者を取り、播かさりし者を得る。二三主彼に聞ふ、愚しき僕よ、我爾の口に依りて爾を鞠かん、爾は我が嚴酷なる人にして、置かさりし者を取り、播かさりし者を得るを知りたらば。二三何ぞ我が銀を兌換肆に預けざりし、然せば我來りて、之を利と與に受けしならん。二四遂に前に立てる者に聞へり、彼より一斤を取りて、十斤を有てる者に與へよ。二五彼等曰へり、主よ、彼已に十斤を有てり。二六曰く、我爾等に語ぐ、凡そ有てる者には與へられ、有たざる者よりは、其有てる物も奪はれん。二七且彼の我が敵、我が彼等に王たるを欲せざりし者を、此に曳き來りて、我が前に誅せよ。二八之を言ひ畢りて、イエス前に行き、イエルサリムに向ひて上れり。二九橄欖山と名づくる山に遡く、ワスギヤ及びワスニヤに近づきし

時彼二人の門徒を遣して 三〇 曰へり、前なる村に往け、其内に入らば、繫ぎたる小驢、
人の未だ嘗て乗らざりし者に遇はん之を解きて牽き來れ。 三一 若し爾等に何爲れぞ
解くぞ問ふ者あらば、斯く彼に言へ、主之を解む。 三二 遣はされし者往きて、彼が言ひ
し如き事に遇へり。 三三 小驢を解く時、其主彼等に謂へり、何ぞ小驢を解く。 三
四 彼等曰へり、主之を解む。 三五 乃之をイイススに牽き來り、己の衣を、小驢に掛
け、イイススを其上に乗せたり。 三六 彼が行く時、人人己の衣を途に布けり。 三七 已に橄
欖山より下路に近づける時、大衆の門徒は喜びて、其見し所の悉くの異能の爲に、大聲
に稱を讚美して 三八 曰へり、主の名に因りて來る王は、祝福せらる。天には、和平至高き
には、光榮と。 三九 民の中より、或る者イイススに、彼に謂へり、師よ、爾の門徒を禁めよ。 四〇 彼
は之に答へて曰へり、我爾等に語ぐ、若し彼等默さば、石は呼ばん。 四一 既に近づきし時、
城を見て、之が爲に哭きて 四二 曰へり、嗟若し爾も、此の爾の日に、だに、爾の平安に關す
る事を知りたらんには、然れども、此れ今爾の目に、隠れたり。 四三 蓋日爾に至りて、爾
の敵は、壘を築きて、爾を繞り、四方より爾を攻め、 四四 爾及び爾の中に、爾の諸子を滅

し爾の中に石を石の上に造らざらん。爾の眷顧の時を爾知らざりしに因りてなり。遂に殿に入りて、其中に鴉鳥する者を逐ひ出して、彼等に謂へり、我が家は祈禱の家なりと造られたるに、爾等之を空賊の巢窟と爲せり。乃日日殿に在りて、教を宣べたり。司祭諸長、學士等及び民の長老等、彼を滅さんと謀りたれども、爲す可き所を知らざりき。蓋民皆離れずして、彼に隨けり。

當時の一日、イエス殿に在りて、民を教へ、福音を宣ぶるに、司祭諸長及び學士等は長老等と共に就きて、彼に謂へり、我等に語げよ、爾何の權を以て是を行ふか。或は誰か爾に此の權を與へたる。彼は之に答へて曰へり、我も亦一言爾等に問はん、我に語げよ、イオアンの洗禮は天よりせしか、抑人よりせしか。彼等竊に議して曰へり、若し天よりせしと云はば、爾等何ぞ彼を信ぜざりしと云はん。若し人よりせしと云はば、民皆石を以て我等を撃たん、イオアンを預言者と信すればなり。遂に答へて曰へり、突れよりせしを知らず。イエス彼等に謂へり、我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げざらん。是に於て、彼は此の譬を民に語れり、或人葡萄園を植む之を園丁

に託して、他方に往きて久しく居たり。一〇期に及びて、彼は僕を園丁に遣して、彼に葡萄の實を與へしめんさせしに、園丁之を扑ちて、空しく返らしめたり。一〇復他の僕を遣し、に彼等之をも扑ち辱しめて、空しく返らしめたり。一二又第三の者を遣し、これをも傷つけて、逐ひ出せり。一三其時葡萄園の主曰へり、我何を爲さんか、我が至愛の子を遣さん、或は彼を見て愧ぢんさ。一四然れども園丁彼を見て、相讓して曰へり、此れ嗣子なり、往きて彼を殺さん、其嗣業の我等の有さならん爲なり。一五乃彼を葡萄園の外に曳き出して殺せり。然らば葡萄園の主は彼等に何を爲さんか。一六彼來りて、其園丁を滅し、葡萄園を他の者に託せん。之を聞きし者曰へり、願はくは此れ有らざらん。一七然るにイイスス彼等に目を注ぎて曰へり、餘して、工師が棄てたる石は、屋隅の首石と爲れり、云ふは何ぞや。一八凡そ此の石の上に倒るゝ者は、壞られ、此の石の其上に墜つる者は碎かれん。一九斯の時、司祭諸長と學士等とは、彼に手を措かんぞ謀りたり、れども、民を懼れたり、其彼等を指して、此の譬を語りしを覺りたればなり。二〇乃彼を窺ひて、義者の爲をなせる問者を遣して、言に因りて、彼を羅せんと欲せり、彼を有司

に及び方伯の權威に解さん爲なり。二一 彼等問ひて曰へり、師よ我等は附が正しく言ひ且教へ、税を以て人を取らず、乃眞に神の道を教ふるを知る。二三 我等税をケサリに納むるは宜しや否や。二三 イイスス彼等の惡意を知りて曰へり、何ぞ我を試みる。二四 銀一枚を我に示せ、斯に誰の像と號あるか。答へて曰へり、ケサリの。二五 彼は之に謂へり、然らばケサリの物をケサリに納め、神の物を神に納めよ。二六 彼等民の前に其言を執ふるを得ず、其答を奇として默然たり。二七 又復活なしと言ふサドケイ等の數人、彼に就きて問ひて、二八 曰く、師よ、モイセイ我等の爲に書して云へり、若し人の兄弟妻あり、子なくして死せば、兄弟其妻を娶りて、其兄弟の嗣を興すべしと。二九 兄弟七人ありしが、第一の者妻を娶り、子なくして死せり。三〇 第二の者此の妻を娶り、亦子なくして死せり。三一 第三の者も之を娶れり、其七に至るまで皆然り、共に子を遺さずして死せり。三二 其後妻も亦死せり。三三 然らば復活の時、彼は其中誰の妻と爲らんか。蓋七人之を妻と爲せり。三四 イイスス彼等に答へて曰へり、斯の世の諸子は娶るあり嫁ぐあり、三五 然れども彼の世及び死よりの復活を得るに當れる者は娶るなく嫁ぐなし、

三六 盜已に死す。能はず、彼等は天使等と俾し、且復活の子として神の子なればなり。三七 死者の復活することに付きては、モイセイも練の墓に於て、主をアツラアムの神、イサクの神、イアコフの神と稱ふるを以て之を顯せり。三八 神は死者の神に非ず、乃生者の神なり、蓋彼に在りては皆生くるなり。三九 政學士等答へて曰へり、師、爾の言ひし所善し。四〇 是より致て復彼に問ふ所なりき。四一 イイスス彼等に謂へり、人如何ぞ、リストスをダワドの子なりと云ふ。四二 ダワド自ら聖詠の番に云ふ、主我が主に謂へり、爾我が右に坐して、我が敵を爾の足の踏と爲すに迄れ。四三 斯くダワドは彼を主と稱ふ、如何ぞ彼は其子たる。四四 民皆懇く時彼其門徒に謂へり、爾みて學士等を防げ、彼等は長き衣にて遊ぶを好み、街衢には問安會堂には首座筵には上座を喜ぶ。四五 彼等は筵の家を呑み、俾りて長き所を爲す、彼等尤重き定罪を受けん。

四六 一 イイスス目を擧げて、宿める人人の其獻金を獻賽函に投するを見、又一人の貧しき贅の「三レブク」を投するを見て、曰へり、我誠に爾等に謂く、此の貧

しき、蓋は衆人より多く投じたり。蓋彼等皆其羨餘より厭金を神に投じ、彼は其乏しき所より其有てる生計を盡く投じたり。或が殿の事其美しき石と赤絹品とを以て飾りたる事を誦れる時、彼曰へり、日來らん此の爾等が見る物の中一の石も石の上へに遠らすして皆圮されん。彼等問ひて曰へり、師よ何の時に此の事有らんか。又此等の成らんとする時は、如何なる兆あるか。彼曰へり、慎みて惑はざる、勿れ蓋多くの者は我が名を冒して來り、是れ我なりと云はん、時は廻づけり、彼等の後に從ふ勿れ。爾等戰と亂さを聞かん時、懼る、勿れ、蓋此等の事は先づ有るべし、然れども末期は未だ遠ならず。一、其時彼等に誦へり、民は民を攻め、爾は國を攻めん。二、處處に大なる地震、饑饉疫癘あり、畏るべき現象及び大なる休徵天よりするあらん。三、凡そ此等の事の先に、人人其手を爾等に指し、爾等を避逐して、會黨及び獄に解し、我が名の爲に爾等を諸王諸侯の前に曳かん。一、爾等が此の事に遇ふは、怨を爲さん爲なり。二、故に爾等の心を定めて、何を對へんか預め、慮る勿れ。三、蓋我爾等に口と智慧とを與へて、凡そ爾等の仇をして辨駁敵對する能はざらしめん。一、爾等亦父母兄弟

親戚朋友より解され、且爾等の中或者は殺されん。一七爾等我が名の爲に衆人に憎まれん。一八然れども爾等の首の髮の一も衰びざらん。一九忍耐を以て爾等の靈を救へ。二〇爾等イエルサリムが軍に圍まれたるを見る時は、其亡の近づきしを知れ。二一其時イサデヤに在る者は山に遁るべし、城の中に在る者は此より出づべし、郷に在る者は其中に入るべからず。二二盜此れ復讐の日なり、凡そ録されし事の應はん爲なり。二三當日には妊める者と乳を哺まする者と溺なる者、盜大なる苗は地に在りて怒は斯の民に及べん。二四彼等は劔の刃に斃れ、又諸民の中に擄にせられん、イエルサリムは異邦民に蹂られて、異邦民の期の満つるに迄らん。二五日月星辰には異象あり、地には諸民の煩悶と顛沛とあらん、海は暴きて濤たらん。二六人人畏懼に依り、又全地に來らんとする禍を俟つに依りて、氣の絶ゆるあらん、蓋天勢は震ひ動かん。二七其時人の子が権能と大なる光榮とを以て雲に乗りて來るを見ん。二八此等の事の成り始むる時、起きて爾等の首を翹げ、盜爾等の贖は近づけり。二九またこへまう、又譬を設けて彼等に語へり、無花果樹及び凡の樹を觀よ。三〇已に萌す時は、爾等之を見て、自ら夏の近きを知る。三

一 是くの如く爾等亦此等の事の成るを見ん時は、所の國の近きを知れ。三二 我誠に爾等に語ぐ、此の世未だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。三三 天地は廢せん、然れども我が言は廢せざらん。三四 自ら慎め、恐らくは爾等の心は鹽糞、洗濯及び度生の、處に鈍くせられて、彼の日突然爾等に至らん。三五 盜斯の日は網の如く、一切全地の面に住む者に臨まん。三六 故に恒に徹醒して祈れ、此等來らんことを、事を悉く迎れて、人の子の前に立つに堪へん爲なり。三七 イイスス晝は殿に在りて、教を宣べ、夜は出でて橄欖山に名づくる山に宿れり。三八 民皆朝早く殿に來り、彼に就きて聽けり。

第二十三章

一 除酵節、即、逾越節、名づくる節は近づけり。二 司祭諸長、學士等

は如何にイイススを殺さんと謀れり、盜民を畏れたり。三 時にサタナは十二の一なるイウダ、稱して「イスカリオト」と云ふ者に入れり。四 彼往きて、司祭諸長及び庶司と共に、如何にイイススを彼等に付さんことを語れり。五 彼等喜びて、銀を彼に與へんことを約したれば、彼諾ひて、民の在らざる時にイイススを彼等に付さん爲に、好き機を窺へり。六 除酵日、即、逾越節の羔を宰るべき日、至れり。七 イイススはバトル及びイサアン

を遣して曰へり、往きて、我等が食せん爲に逾越節筵を備へよ。彼等曰へり、何處に之を備へんことを欲するか。一〇 彼は之に酬へり、視よ、爾等が城に入る時、水を盛れる瓶を攜ふる人、爾等に遇はん之に隨ひて、其入る所の家に入りて、二 家の主に語げよ、師爾に酬ふ、我が門徒と偕に逾越節筵を食すべき室は何處に在るか。三 彼爾等に敷き飾りたる大なる樓を示さん、彼處に備へよ。四 彼等往きて、其首ひし若き事に遇ひて、逾越節筵を備へたり。五 時至りて、イエス、席坐し、十二使徒、彼と偕にせり。六 彼等に謂へり、我は苦を受くる先に、此の逾越節筵を爾等と偕に食せんことを甚望めり。七 蓋、我、爾等に語ぐ、我復之を食せずして、其神の國に成るに至らん。八 乃、爾を執りて、感謝して曰へり、此を取りて、互に分て。九 蓋、我、爾等に語ぐ、我復葡萄の實より飲まずして、神の國の臨むに至らん。一〇 又餅を取り、感謝して之を擘き、彼等に與へて曰へり、是、我の體、爾等の爲に付さるゝ者なり、爾等此を行ひて、我を記念せよ。一一 同じく、晚餐の後に、爾を執りて曰へり、此の爵は、乃、新約、爾等の爲に流さるゝ、我が血を以て立つる者なり。一二 視よ、我を賣る者の手は、我と偕に席上に在り。一三 人の子は、遣

く預め定められしが如し。袖彼を賣る者は禍なる哉。二三 彼等互に誰か此を爲さんとするを問へり。二四 又彼等の中に孰が大なるを互に争ふことあり。二五 彼は之に謂へり。諸王は其諸民を主り民の上に權を執る者は恩主と稱へらる。二六 然れども爾等は斯くある可からず。乃爾等の中に大なる者は、小き者の如く首たる者は、役はるべき者の如くなるべし。二七 汝執が大なる席坐する者か、役はるべき者か、席坐する者に非ずや。然れども我は爾等の中に在りて役はるべき者の如し。二八 爾等我が患難の中に於て恒に我と偕にせり。二九 我も亦爾等に國を遺し予ぶ。我が父の我に遺し予べしが如し。三〇 爾等が我が國に於て、我が席に食飲し、且位に坐して、イズライリの十二支派を審判せん爲なり。三一 主又曰へり。シモンよ、シモンよ、親よ、サマナ爾等を夢の如く箴はんことを求めたり。三二 然れども我爾の爲に爾の儘の盡きざらんことを爲れり。而して爾後に轉じて、爾の兄弟を棄めよ。三三 對て曰へり。主よ、我爾と偕に獄にも死にも往かんことを備へたり。三四 彼曰へり。ペトよ、我爾に謂く、今日、鷓の鳴かざる先に、爾三次我を諒みて、説らすと言はん。三五 又彼等に謂へり。我が爾等を金囊も、行袋も、履もな

くして遣し、時、爾等缺けたるこそありしか。曰く、無かりき。彼曰へり、然れども今は金匱ある者は之を取れ、行袋も亦然り、劍なき者は衣を賣りて之を買へ。三十七、盗我爾等に誦ぐ、録して、罪犯者さ倍に算へられたり云へるこそも、我に於て應ふべし、盗我を指して録されし事は終あり。三十八、彼等曰へり、主よ、親よ、此に二の劍あり。彼曰へり、足れり。三十九、乃出でて、例の如く橄欖山に往けり、其門徒も彼に従へり。四十、其處に至りて、彼等に誦へり、祈禱して、誘惑に入るを免れよ。四十一、自ら石の投げらるゝ程に、彼等を離れ、膝を屈めて、禱りて。四十二、曰へり、父よ、嗟若し爾此の爵をして我を過ぎしめんことを肯じたらんには、然れども、私の旨成らずして、爾の旨成るべし。四十三、天使は天より現れて、彼を堅めたり。四十四、彼痛く哀みて、禱るこそ、愈切なり、其汗は血の滴の如く地に下れり。四十五、祈禱より起きて、門徒に來り、其憂に依りて、寢ぬるを見て、四十六、彼等に誦へり、何ぞ寢ぬる、起きて祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり。四十七、彼が尙言ふ時、親よ、民至り、十二の一、イウダさ名づくる者之に先だちて行き、イオススに就きて接吻せり。四十八、此の獄を彼等に與へたり、我が接吻せん者は、即斯の人なり。四十九、イオスス之に誦

へり、イウダ、爾接吻を以て人の手を付すか。彼と借に在りし者、事の及ばんとす
るを見て、彼に翹へり、主よ、我等銀を以て撃たんか。其中の一人は司祭長の僕を撃
ちて、其右の耳を削げり。イイスス答へて曰へり、此に至りて止めよ、乃其耳に捫
りて、之を醫せり。イイススは己に向ひ來れる司祭諸長と殿の庶司と長老等とに
謂へり、爾等は盜賊に向ふ如く、劍と棒とを持ちて、我を捕へん爲に出でたり。我日
日爾等と借に殿に在りしに、爾等我に手を措かざりき、然れども今は爾等の時及び黒
暗の勢なり。既に彼を執へて、曳きて司祭長の家に至れり。ペトル遠く隨へり。
人人が中庭の内に火を燃きて、共に坐せし時、ペトルも其中に坐したり。一人の婢
彼が火に向ひて坐せるを見之に目を注ぎて曰へり、此の人も彼と借にありき。然
れども彼諱みて曰へり、女よ、我彼を識らす。少頃ありて、他の者彼を見て曰へり、爾
も彼等の一人なり。ペトル曰へり、人よ、然らす。約一時を過ぎて、又一人言を力めて
曰へり、實に此の人も彼と借にありき、蓋是れガリレヤの人なり。然れどもペトル
曰へり、人よ、我爾が言ふ所を識らす。尙之を言ふ時、忽鷄鳴けり。主身を轉じて、

ペトルに目を注ぎたれば、ペトル主の彼に、鶏の鳴かざる先に、爾三次我を諱まんと言ひし言を憶ひ起して、六二外に出で、痛く哭けり。六三 イイススを執れる者戯れて、彼を拵てり。六四 其目を蔽ひて、其面を批ち、問ひて曰へり、預言せよ、爾を撃ちし者は誰ぞ。六五 其他多くの事を問ひて、彼を詰れり。六六 平旦に及びて、民の長老等と司祭諸長と、六七 衆士等と集りて、彼を其公會に曳きて、六八 曰へり、爾はハリストスなるか、我等に告げよ。六九 彼曰へり、我若し爾等に告げば、爾等信ぜざらん、七〇 若し爾等に問はば、爾等應へざらん、又我を釋さざらん。七一 今より後人の子は、神の大能の右に坐せん。七二 衆曰へり、然らば、爾は神の子なるか。彼答へて曰へり、爾等言ふ、我は是なり。七三 彼答曰へり、何ぞ復證を求めん、蓋我等自ら其口より聞けり。

第三章 衆皆起ちて、彼をピラトの前に曳き、七四 彼を訟へて曰へり、我等は此の人が、我が民を惑はし、税をケサリに納むるを禁じ、自らハリストス王と稱ふるを見たり。七五 ピラト彼に問ひて曰へり、爾はイツデヤ人の王なるか。彼答へて曰へり、爾等言ふ、ピラト司祭諸長及び民に問へり、我此の人に、一も罪あるを見ず。七六 然れども、彼等

全書ひて曰へり、彼民を亂し、全イウテヤに教へて、ガリレヤより始め、此の處に至れり。ピラトはガリレヤを聞き、此の人はガリレヤ人なるか、と問ひ、既にして其イロドの權下に屬するを知りて、彼を當時同じくイエルサリムに在りしイロドに遣せり。ハイロドイイススを見て、甚喜べり、蓋久しく彼を見ん、欲せり、彼の事を多く聞き、且彼に由りて行はる、休徴を見ん、こゝを望みたればなり。故に多くの首を以て彼に問ひたれども、彼は何をも答へざりき。司祭諸長と學士等と立ちて、彼を訟ふる。こゝに甚切なり。然れどもイロドは其士卒と共に、彼を侮り、且嘲弄して、彼に鮮なる衣を衣せて、復彼をピラトに遣せり。是の日に於て、ピラト及びイロド互に親しくなれり、蓋先には相離たりき。一、ピラトは司祭諸長、有司等及び民を呼び集めて、一、彼等に問へり、爾等は此の人を以て民を惑はす者、爲して、我に與き、至れり、或は我爾等が訟ふる所を以て、爾等の前に密べて、此の人に、一、も即あるを見ざりき。一、イロドも亦然り、蓋我之を彼に遣したれども、其中に、一、も死に當る事を得ざりき。一、故に我答うちて、之を釋さん。一、蓋節期の爲に、一、の囚を彼等に釋すべき事ありき。一、

然れども民皆號びて曰へり、此を去れ、ソラソラを我等に釋せ。一九此の人は城の中に
亂を作し人を殺しに因りて獄に下されたり。二〇ピラトはイエスを釋さん欲
して復聲を揚げたれども、二一彼等呼びて曰へり、彼を十字架に釘せよ、十字架に釘せ
よ。二二ピラト第三次曰へり、彼は何の惡を行ひしか、我一も其中に死に當ることを見
ざりき故に答うちて彼を釋さん。二三然れども彼等益聲を厲まして彼を十字架に
釘せんことを求めたりしが、彼等と司祭諸長との聲は勝てり。二四ピラト遂に其求の
如く擬めて、二五亂さ殺人の爲に獄に下されたる人、彼等が求めし者を釋し、イエス
を付して、彼等の意旨に任せたり。二六彼を曳き往く時、或キリヤ子の人シモンが田
より來り過ぐるを執へ之に十字架を負はせて、イエスに從はしめたり。二七衆くの
民は彼に隨ひ、又多くの婦ありて、彼の爲に哭き哀めり。二八イエス、彼等を顧みて曰
へり、イエスのサラムの女よ、私の爲に哭く勿れ、己及び爾等の子の爲に哭け。二九蓋觀
日に至りて、人人曰はん、妊まざる者未だ産まざる、胎未だ哺はせざる乳は腐なり。三〇
其時、人人山に對ひて、我等の上、に倒れよ、巖に對ひて、我等を掩へよ、曰はん。三一蓋若し

青き木に斯く爲さば枯木は如何にせられん。三二
死に處せん爲に曳けり。三三 園藤は名づくる處に來りて彼處に彼及び二の犯罪者を
十字架に釘せり。一は其右、一は左なり。三四 イノス曰へり父よ彼等を赦せ蓋彼等は
爲す所を知らず。人間を取りて其衣を分てり。三五 民立ちて觀たり有司等も衆と與に
嘲りて曰へり彼は他人を救へり若し彼ハリストス神の選びたる者ならば己を救ふ
べし。三六 兵卒も亦彼に戯れ捉づきて隨を與へて。三七 曰へり爾若しイウテア人の王
ならば己を救へ。三八 彼の上にマリシ、ロマ、エウレイの文字を以て書したる標あり曰
く是れイウテア人の王なりと。三九 懸けられたる犯罪者の一人彼を詣りて曰へり爾
若しハリストスならば己と我等とを救へ。四〇 他の一人之を戒めて曰へり爾登神を
昇れざるや蓋爾も同じく定罪せられたり。四一 惟我等に在りては當然なり我が行に
稱へる事を受くればなり然れども彼は己も不善を行はざりき。四二 乃イノスに
對ひて曰へり主よ爾の國に來らん時我を記念せよ。四三 イノス彼に謂へり我誠に
爾に詣り爾今日我と偕に樂園に在らん。四四 時約六時なり晦冥は全地を蔽ひて第九

時に至れり。四五日は嘆み殿の機は中より裂けたり。四六 イイサス大聲に呼びて曰へり父よ、我が神を爾の手に託す。之を言ひて、氣絶ぬたり。四七 夫、長成りし事を見て、神を讚榮して曰へり、此の人は誠に義人なり。四八 之を觀ん爲に榮りたる衆民は、成りし事を見て、寶を拵ちて返れり。四九 彼の相識及びガリレヤより彼に従ひし婦等、皆遠く立ちて、此等の事を見たり。五〇 時にイオシフと名づくる人、賤士にして、善且義なる者、五二 彼等の謀と所爲とに驚せず、イウテヤの邑アリマスヤに歸し、自らも神の國を俟てる者は、五三 ヒロトに就きて、イイサスの屍を求めたり。五三 既に之を下して、布に裹み、槨に置ちたる未だ人の葬られざる墓に置きたり。五四 是の日は備節日にして、安息日已に遡つけり。五五 ガリレヤよりイイサスと偕に來りし婦等、後に隨ひて、及び如何に彼の屍を置きたるを觀たり。五六 歸りて後、香料と香油とを備へ、誠に遵ひて安息日を息みたり。

【三】 【四】 七日の首の日、朝、甚早く彼等は備へたる香料を攜へて、墓に來れり、他の婦も彼等と偕にせり。二、石の墓より移されたるを見、入りて、主イイサスの屍

を見ざりき。之が爲に惑へる時視よ輝ける衣を衣たる二人彼等の前に立てり。彼等懼れて而を地に伏せられたれば二人之に謂へり何を産ける者を死者の申に尋ねる。彼は此に在らず、乃復活せり彼が命ガリレヤに在りし時如何に爾等に語つて、人の手が罪人の手に付され、十字架に釘せられ、第三日に復活すべきことを云ひしを憶へ。彼等其言を憶ひ起し、墓より歸りて悉く此を十一門徒及び其餘の者に告げたり。一〇使徒に之を告げたる者は、「マクダリナ、マリヤ、イオアンナ、イアエブの母、マリヤ及び其他彼等並に在りし者なり。一一使徒は彼等の首を空首と爲して之を信ぜざりき。一二然れどもペトル起ちて墓に趨り往き俯して、惟裏布の置けるを見其成りし事を心に異みて歸れり。一三是の日其中の二人、イエルサリムを去ること約六十小里なるエムマサスと名づくる村に往きしが、一四互に凡そ此等の有りし事を語れり。一五歸り且論ずる時、イイスス親ら近づきて、彼等並に同行けり。一六然れども二人の目は掘められて彼を識らざるを致せり。一七彼曰へり爾等は行きて何事かを互に論じ、又何ぞ憂ふる色ある。一八其一人クレチパと名づくる者彼に對へて曰へり、イエル

サリムに來りし者の中、預、獨、近、日、其、中、に、成、り、し、事、を、知、ら、ざ、る、か。 一、九、と、問、ひ、て、曰、へ、り、
何、の、事、ぞ。 彼、等、曰、へ、り、イ、イ、ス、ス、ナ、ソ、レ、イ、即、紳、及、び、衆、民、の、前、に、行、き、言、さ、に、能、力、あ、る、
預、言、者、た、り、し、者、に、在、り、し、事、。 二、〇、い、か、如、何、に、我、等、の、司、祭、師、長、及、び、有、司、等、が、彼、を、解、し、て、死、
に、定、め、十、字、架、に、釘、せ、し、事、な、り。 二、一、我、等、は、嘗、て、此、の、人、は、イ、メ、ラ、イ、リ、を、贖、ふ、べ、き、者、な、
り、と、望、め、り、然、れ、ど、此、れ、皆、成、り、し、よ、り、今、已、に、第、三、日、な、り。 二、二、然、る、に、又、我、等、の、中、の、
或、婦、等、は、我、等、を、驚、か、せ、り、彼、等、朝、早、く、墓、に、在、り、し、が、 二、三、其、屍、を、見、ず、し、て、來、り、て、天、
使、等、の、現、れ、て、彼、は、生、く、と、言、ふ、を、見、し、こ、さ、を、聞、け、た、り。 二、四、我、等、の、中、の、數、人、墓、に、適、き、
し、に、果、し、て、婦、の、言、ひ、し、如、き、事、を、見、た、り、惟、彼、を、見、ざ、り、き。 二、五、イ、イ、ス、ス、彼、等、に、館、へ、り、
噫、無、知、に、し、て、凡、そ、諸、預、言、者、の、言、ひ、し、事、を、信、ず、る、に、心、の、遅、き、者、よ。 二、六、ハ、リ、ス、ト、ス、は、
此、く、の、如、く、苦、を、受、け、て、其、光、榮、に、入、る、べ、か、り、し、に、非、ず、や。 二、七、是、に、於、て、モ、イ、セ、イ、よ、り、
始、め、て、諸、預、言、者、に、及、ぶ、ま、で、凡、そ、聖、書、に、彼、を、指、し、て、駁、す、る、こ、さ、を、彼、等、に、説、き、明、せ、り。
二、八、往、く、所、の、村、に、近、づ、き、し、に、彼、は、尙、遠、く、行、か、ん、と、す、る、者、の、若、し。 二、九、二、人、彼、を、留、め、
て、曰、へ、り、我、等、を、倍、に、止、れ、豈、時、暮、れ、ん、と、し、日、已、に、仄、け、り、彼、入、り、て、窗、に、止、れ、り。 三、〇、席、

坐せる時彼餅を取りて祝福し喰きて彼等に與へたり。其時二人目啓けて彼を識れり而して彼忽見ゆすなりき。彼等互に言へり途中彼が我等と語り且我等に聖書を解き明し、時我等の心我が裏に燃ゆしに非ずや。即時に起ちてイエルサリムに歸り十一門徒及び之と偕に聚れる者に遇へり。僉言ふ主は實に復活せり而してシモンに現れたり。二人も亦途中に在りし事及び如何に其餅を喰く時彼等に識られし事を述べたり。此等の事を語れる時、イエス親ら彼等の中に立ちて曰へり爾等に平安。彼等驚き且懼れて見る所は神なりと意へり。イエスが足を彼等に誦へり何ぞ懼れ惑ふ胡爲れぞ此の意は爾等の心に起れる。我が手が足を視よ、是我自なり我に捫りて視よ、蓋神には骨肉なし其我に有るを見るが如し。此を言ひて手足を彼等に示せり。彼等喜に因りて猶未だ信ぜず且異める時、彼曰へり此に食ふべき物あるか。彼等は突りたる魚一片と蟹房を彼に與へたれば、取りて彼等の前に食へり。又彼等に誦へり我猶爾等と偕に在りし時爾等に誦りて、モイセイの律法預言者及び聖徒に我を指して録されし事皆應ふべし

さ云ひしは、乃是なり。其時彼等の智識を啓きて、聖書を悟らしめたり。又彼等に
 訓へり、斯く録されたり、而して斯くハリストスは、苦を受け、第三日に死より復活す
 べかりき。且其名に因りて、悔改と諸罪の赦さば、イエルサリムより始めて、萬民に
 傳へらるべきなり。爾等は此等の事の證者なり。視よ、我は我が父の許約せし
 者を爾等に遣さん、爾等イエルサリムの城に居りて、上より能力を衣するに迄れ。一
 イイス、彼等を外に牽ゐて、ツ、ニヤに至り、手を擧げて、彼等に祝福せり。二
 爾等彼等を離れ、擧げられて、天に升れり。三、彼等之を拜し、大に喜びて、イエルサリム
 に歸り、四、恒に殿に在りて、神を頌美、祝福せり、「アマモン」。

ルカ福音

第二十四章

三三三

イオアンに因る聖福音

一は初めに言有り、言は神と共に在り、言は即神なり。是の言は太初に神と共に在り。三萬物は彼に由りて造られたり、凡そ造られたる者には、一も彼に由らずして造られしは無し。彼の中に生命有り、生命は人の光なり。光は暗に照り、暗は之を蔽はざりき。神より造されし人あり、其名はイオアンなり。彼は證の爲に來れり、光の事を證し、衆人をして彼に因りて信ぜしめん爲なり。彼は光に非ず、乃光の事を證せん爲に遣されたり。眞の光あり、凡そ世に來る人を照す者なり。一〇彼等て世に在り、世は彼に由りて造られたり、而して世は彼を知らざりき。一〇己に屬する者に來れり、而して己に屬する者は彼を受けざりき。一三彼を受け、其名を信する者には、彼の神の子と爲る權を賜へり。一三是れ血氣に由るに非ず、情欲に由るに非ず、人欲に由るに非ず、乃神に由りて生れし者なり。一四言は肉體と成りて、我等の中に居りたり、恩寵と眞實とに滿てられたり。我等彼の光榮を見たり、父の獨生子の如き光榮なり。一五

イオアン彼の事を證し呼びて曰へり我が嘗て我の後に來る者は我の前を越れり蓋
其本我より先なる者なりと言ひしは即斯の人なり。一六彼の充滿より我等皆恩寵の
上に恩寵を受けたり。一七律法はヨイセイに由りて授けられ恩寵は眞實さはイイ
ススハリストスに由りて來れり。一八神を見し人未だ嘗てあらず惟獨生の子女の體
に在る者は彼を彰せり。一九イオアンの證は左の如しイウア十人イエルサリムより
司祭及び「レソト」等を遣して彼に爾は誰たるを問ひし時、二〇彼承けて謙まざりき承
けて曰く我はハリストスに非ず。二一又彼に問へり然らば何を爾はイリヤなるか。曰
く非ず。預言者なるか。答へて曰へり否。二三彼等之に爾へり爾は誰ぞ我等を遣しし者
に答を爲さしめよ爾は己の事を如何に云ふか。二四彼曰へり我は野に呼ぶ者の聲主
の道を直くせよと云ふ者なり預言者イサイヤの言ひしが如し。二五遣されし者は
リセイ等に屬せり。二六彼等又之に問ひて曰へり爾ハリストスに非ず、イリヤに非ず、
預言者に非ざれば何ぞ洗を授くる。二七イオアン彼等に答へて曰へり我は水を以て
洗を授く然れども爾等の中に立てる者あり爾等の識らざる者なり。二八彼は則我

の後に來りて、我の前さ爲れる者なり。我は其履の帯を解くにも堪へず。二八此の事は
イオアルダンの外なるワスワラ、即イオアンの洗を授くる處に行はれたり。二九明日
イオアンはイイススの己に來るを見て曰く、親よ、神の羔、世の罪を任ぶ者なり。三〇
我が驚て、我の後に來る者ありて、我の前さ爲れり、蓋其本我より先なる者なりと云ひ
しは、即斯の人なり。三一我は彼を識らざりき、然れども來りて、水を以て洗を授くる
は、殊に彼がイスライリに關されん爲なり。三二イオアン又證して曰へり、我は聖神の
の如く、天より降りて、彼に止るを見たり。三三我は彼を識らざりき、然れども水を以て
洗を授けん爲に、我を遣し、者は我に酬へり、爾が聖神の降りて、之に止るを見る者、此
れ、即聖神を以て洗を授くる者なりと。三四我之を見、而して其神の子たるを證せり。
三五明日イオアン又立てり、其門徒の二人偕にせり。三六イイススの行くを見て曰く、
親よ、神の羔なり。三七二門徒其言を聞き、て、イイススに従へり。三八イイスス顧みて、彼
等の其後に從ふを見て、之に謂ふ、爾等何を求むるか。彼等曰へり、ラサラ、譯すれば、夫子、
爾何にか居る。三九曰く、來りて觀よ。彼等來りて、其居る所を觀、是の日、彼と偕に居た

り時約十時なりき。四〇 イオアンに聽きて、イエスに從ひし二人の中一はアンドレ
イ即シモンペトルの兄弟なり。彼先づ其兄弟シモンに遇ひて之に謂ふ、我等メ
シヤ(譯すればハリストス)に遇へり。四二 乃彼をイエスに攜へたり。イエス彼
に目を注ぎて曰へり、爾はイオナの子シモンなり、爾はキス(譯すればペトル)と稱べ
られん。四三 明日イエスガリレヤに往かんを欲し、スルプに遇ひて之に謂ふ、我に從
へ。四四 スルプはワフサイタの人にして、アンドレイ及びペトルと邑を同じくせり。
四五 スルプはナスナイルに遇ひて之に謂ふ、我等は、モイセイが其律法に及び諸預言者
が記し、所の者に遇へり、是れイオシフの子、ナザレトの人、イエスなり。四六 ナスナ
イル之に謂へり、豈ナザレトより善き者の出づるあらんや。スルプ曰く、來りて觀よ。四
七 イエスはナスナイルの己に來るを見て、彼を指して曰く、觀よ、誠にイスライリ人
にして、詭譎なき者なり。四八 ナスナイル彼に謂ふ、爾何に由りて我を知れるか。イエス
答へて曰へり、スルプが未だ爾を呼ばざる先、爾が無花果樹の下に在る時、我爾を見
たり。四九 ナスナイル答へて彼に謂ふ、夫子、爾は神の子、爾はイスライリの王なり。五〇

イエス答へて曰へり我が爾を無花果樹の下に見たりと言ひしに因りて爾倍す爾此よりも大なる事を見ん。又彼に爾ふ我誠に誠に爾等に語ぐ是より爾等は天國にて神の使が人の子の上に降降するを見ん。

第三回

第三日にガリレヤのカナに婚筵ありイエスの母も彼處に在りき。二

イスス及び其門徒も亦婚筵に招かれたり。酒の乏しきに困りてイエスの母之に謂ふ彼等に酒なし。イエス曰く婦よ我と爾と何ぞ與らん我の時未だ至らず。其母諸僕に謂ふ彼が爾等に命する所を行へ。彼處にイツァヤ人の潔の例に従ひて石の水甕六あり各二三斗を容る。イエス諸僕に謂ふ甕に水を満たせ之に滿たして幾と溢る。又彼等に謂ふ今抱みて司筵者に遞れ乃遞れり。司筵者は酒に變じたる水を嘗めて其美れよりするを知らざりき唯水を抱みし諸僕之を知れり。新娶者と呼びて、彼に謂ふ凡の人は先づ旨酒を進め爾なるに及びて吾酒を進む爾は旨酒を留めて今に至れり。是くの如くイエスガリレヤのカナに於て休徴の始を立て其光榮を顯せり其門徒彼を信せり。厥後彼親ら及び其母其兄弟其門徒

徒はカベルナウムに下りて、彼處に居りし日多からず。一三 イウテヤ人の逾越節近づきて、イノススイエルサリムに上れり。一四 殿に於て牛羊鴿を市り及び兌換する者の坐せるを見れば、一五 繩を以て鞭を爲りて其衆及び羊牛を殿より逐ひ出し、兌換する者の金を散らし其案を倒し、一六 餽を市る者に罰へり、此の物を此より取れ、我が父の家を貿易の家と爲す勿れ。一七 是に於て彼の門徒は、録して、爾の家に於ける熱心は我を勉むと云へるを憶ひ起せり。一八 イウテヤ人彼に謂へり、爾に此等の事を行ふ權あるな、何の休徴を以て我等に示さんか。一九 イノスス彼等に答へて曰へり、爾等此の殿を建て、我三日にして之を興さん。二〇 イウテヤ人曰へり、此の殿を建てるには四十六年を経たるに、爾三日にして之を興さんか。二一 然れども彼は其肉體の殿を指して云ひしなり。二三 彼が死より復活せし後、其門徒は彼が嘗て之を言ひしことを憶ひ起して、聖書にイノススの言ひし言を信ぜり。二四 彼が逾越節筵にイエルサリムに在りし時、多くの者彼が行ひし休徴を見て、其名を信ぜり。二五 然れどもイノスス自ら己を彼等に託せざりき、蓋し衆人を知れり、二六 又他人が人を監するを要せざりき、自ら

人の中蔵を知りたればなり。

第三節

一、ろリセイ等の中に名はニコラムと云ふ人あり、イウゲヤ人の宰の一なり。

二、此の人夜イイススに來りて彼に謂へり、夫子、我等は爾が神より來りし師なるを知り、盜爾が行ふ所の休徴は、若し神之と信にせずば、人行ふ能はず。三、イイスス彼に答へて曰へり、我誠に爾に爾に語ぐ、人若し上より生れずば、神の眼を見るを得ず。四、ニコラム彼に謂ふ、人既に老ゆれば、如何ぞ生るゝを得ん、豈、再、其母の腹に入りて、生るゝを得んや。五、イイスス答へて曰へり、我誠に爾に爾に語ぐ、人若し水及び神より生れずば、神の國に入るを得ず。六、肉より生れし者は肉なり、神より生れし者は神なり。七、我が爾に爾等上より生るべしと云ひしを奇しむ勿れ。八、風は欲する所に吹く、爾其聲を聞けども、其何より來り、何へ往くを知らず、凡そ神より生れし者は是くの如し。九、ニコラム彼に答へて曰へり、焉ぞ斯の事あるを得ん。一〇、イイスス答へて曰へり、爾はイブラヒムの師なるに、猶斯の事を知らざるか。一一、我誠に爾に爾等に語ぐ、我等は知る所を言ひ、見し所を證す、而して爾等は我等の證を受けず。一二、我地の事を言ひしに、爾等信

せざれば若し天の事を言はし、爾等安そ信ぜん。一三 天より降りし人の子、天に在る者の外に、天に降りし者なし。一四 モイセイが野に在りて蛇を擧げし如く、人の子も是くの如く擧げらるべし。一五 凡そ彼を信する者の亡ぶるなく、乃永遠の生命を得ん爲なり。一六 蓋神は世を愛して、其獨生の子を賜ふに至れり、凡そ彼を信する者の亡ぶるなく、乃永遠の生命を得ん爲なり。一七 蓋神が其子を世に遣し、は世を定即せん爲に非ず、乃世の彼に由りて救はれん爲なり。一八 彼を信する者は定即せられず、信せざる者は已に定即せられたり、神の獨生の子の名を信せざりし故なり。一九 定即せは左の如し、光世に來りしに、人人光よりも多く暗を愛せり、彼等の行の惡かりし故なり。二〇 蓋凡そ不善を作す者は光を惡みて、光に就かず、彼の行の責められざらん爲なり、其惡しき故なり。二一 然れども眞實を行ふ者は光に就く、彼の行の顯れん爲なり、神に在りて行はれし故なり。二二 斯の後、イイスス其門徒と與に、イウサヤの地に來り、彼等と偕に彼處に居りて、洗を授けたり。二三 イサアンも亦サリムに近きエノンに在りて、洗を授けたり、彼處には水多き故なり、人人來りて洗を受けたり。二四 蓋イサアン

未だ獄に下されざりき。二五 時にイオアンの門徒はイウヂヤ人さ潔の事に就きて論
を起せり。二六 イオアンに來りて之に謂へり、夫子、爾と偕にイオルダシの外に在りて、
爾が証せし所の者視よ、彼は洗を授け、人皆彼に往く。二七 イオアン答へて曰へり、天よ
り授けられしに非ざれば、人一人も受くる能はず。二八 我が嘗て、我はハリストスに非ず、
すなはちそのまへにつかは
乃、其前に遣されし者なりと言ひしこそは、爾等自ら我が爲に證す。二九 新婚ある者
は新娶者なり、新娶者の友立ちて彼に聽く者は、新娶者の聲の爲に甚喜ぶ。今我が此
の喜は滿てられたり。三〇 彼は長すべく、我は消すべし。三一 上より來る者は萬有の上
に在り、地よりする者は地に屬し、其言ふ所も亦地に屬す、天より來る者は萬有の上に
在り。三二 彼は其見し所聞きし所を證す、而して彼の證を受くる者なし。三三 其證を受
けし者は神の眞なるを印證せり。三四 聖神の遣しし者は神の言を言ふ、神が神を與ふ
るには限量を以てせざればなり。三五 父は子を愛し、而して萬物を其手に授けたり。三
六 子を信する者は永遠の生命を有ち、子を信せざる者は生命を見ざらん、乃神の怒は
其上に止る。

四四 イオイスは其門徒を得及び洗を授くることイオアンより多きを、ソリ
イ人が聞きたりし、知りし時、然れどもイオイス親ら洗を授けしに非ず、其門徒此を
爲せり。乃イウテヤを離れて、復ガリレヤに往けり。彼サマリヤを過ぐべきに由
りて、サマリヤの邑シハリ名づくる處に來れり、イアコフが其子イオシフに與へ
たる地に近し。彼處にイアコフの井あり。イオイス旅に疲れて、井の傍に坐せり。時約
六時なり。サマリヤの婦水を汲む爲に來れり。イオイス之に謂ふ、我に飲ましめよ。ハ
蓋其門徒は食を市はん爲に邑に往けり。サマリヤの婦彼に謂ふ、爾はイウテヤ人た
るに、如何にして我サマリヤの婦に飲むを求むるか。蓋イウテヤ人とサマリヤ人は
相交際せざるなり。一〇 イオイス之に答へて曰へり、若し爾は、神の賜及び我に飲ま
しめよと、爾に貧ふ者の誰たるを知らば、爾自ら彼に求めん、而して彼は爾に活ける水
を與へん。一 爾彼に謂ふ、主よ、爾に汲む器なく、井も亦深し、然らば何より爾に活ける
水あるか。二三 爾豈我が祖イアコフより大なるか、彼は我等に此の井を與へ、己も其跡
子も、其家畜も之より飲みたり。二三 イオイス答へて謂へり、凡そ此の水を飲む者は復

渴かん、一四然れども我が興へんとする水を飲む者は世世に渴かさらん乃我が彼に
興へんとする水は其中に於て永遠の生命に湧く水の泉と爲らん、一五婚後に爾ふ主
よ我に此の水を興へよ我が渴かす亦此に來りて汲まざらん爲なり、一六イエスス之
に爾ふ往きて爾の夫を呼びて此に來れ、一七婚對へて曰へり我に夫なし。イエスス之
に爾ふ爾が夫なしと言ひしは是なり、一八蓋爾に五人の夫ありき而して今有る者
は爾の夫に非ず此れ爾眞を言へり、一九婚後に爾ふ主よ我親るに爾は預言者なり、二
〇我が先祖は此の山に拜せり然るに爾等は拜すべき處はイエエルサリムに在りと言
ふ、二一イエスス之に爾ふ婚よ我を信ぜよ此の山にも非ずイエエルサリムにも非ずし
て父を拜せん時は來る、二三爾等は拜する所を知らず我等は拜する所を知る蓋教は
イウテヤ人よりするなり、二四然れども時は來る今は是なり眞の禮拜者は神を以て
眞を以て父を拜せん蓋父は是くの如く彼を拜する者を覓む、二五神は神なり彼を拜
する者は神を以て眞を以て拜すべし、二六婚後に爾ふ我知るミシヤ、即ハリストス
は來らん彼來る時悉く我等に告げん、二七イエスス之に爾ふ是れ我爾と語る者な

り。二七ニセ適其門徒來りて彼が婦を語れるを異みたれども二ニ爾は何を求むるか或は之を何を語るか云ひし考なし。二八ニハ時に婦其水瓶を遺して邑に往きて人人に謂ふ、二九ニユ來りて我が凡そ行ひし事を我に告げし人を觀よ見れハリストスに非ずや。三〇ニシ人人邑を出で、彼に往けり。三一ニヒ此の際門徒彼に請ひて曰へり夫子食へ。三二ニニ然れども彼は之に謂へり我に食ふべき糧あり爾等が知らざる者なり。三三ニサ故に門徒互に言へり彼が彼に食を饋りたる。三四ニシイオニスス彼等に謂ふ我が糧は我を遺しし者の言を行ひ其功を成就するに在り。三五ニヒ爾等は尙四月にして收穫は來らんと云ふに非ずや、我爾等に語ぐ爾等の目を擧げて田を觀よ已に白くして獲るべし。三六ニロ獲る者は實を得て實を永遠の生命に積む播く者も獲る者も共に喜ばん爲なり。三七ニシ蓋彼は播き此は獲るを云へるは斯に於て眞なり。三八ニハ我爾等を遺して爾等が勞せざりし所を獲らしむ他人は勞し爾等は其勞に入れり。三九ニヒ彼の邑の多くのサマリヤ人は婦が彼は我が凡そ行ひし事を我に告げたりと證せし言に因りて彼を信ぜり。四〇ニユ故にサマリヤ人は彼に就きし時借に留らんことを請へり彼は彼處に留りしこと二日なり。四一

一、なほおほ 衆多くの者は彼の言に因りて信ぜり。四二 而して婦に謂へり、我等は已に爾の言に
因りて信するに非ず、蓋自ら聞きて、彼は誠まことに世の教主きうしゆハリストスなりと知れり。四三
二日を越こえて、彼彼處かれかれこを出いで、ガマリヤに往ゆけり。四四 蓋、イエスス親ちから、預言者よげんしゃは其
故土ふるまこに於て辱たたげられずと證しやうせり。四五 ガマリヤガマリヤに來りし時、ガマリヤ人じん彼を接あけたり、凡
そ彼かれがイエエルサリムサリムに節筵まつりの時ときに行なひし事ことを見みたればなり、蓋彼等かれらも亦節筵まつりに往ゆけ
り。四六 是こゝに於てイエスス復またガマリヤのカナカナに來り、嘗かつて水みづを酒さけに變へぜし處ところなり。四七
二の王臣わうしんあり、其子そのこカベルナサムカベルナサムに在りて病やめり。四八 彼はイエススのイウテヤイウテヤより
ガマリヤガマリヤに來りしを聞ききて、之これに就つき下りて、其子そのこを醫いさんこきを請こへり、蓋子けだしは死しに
瀕ひめり。四九 イエスス之これに謂いへり、爾等なんぢら若もし休きうめちやう奇蹟きせきを見みずば、信しんぜざらん。五〇 王
臣しん彼かれに謂いふ、主しゆよ、請こふ、我が子この死しせざる先まに下くだれ。五一 イエスス之これに謂いふ、往ゆけ、爾なんぢの子こ
は生いく、人はイエスス之これに言いひし言ことばを信しんじて往ゆけり。五二 往ゆく時とき、其その諸しよ僕はく彼かれに遇あひて、
告つげて曰いへり、爾なんぢの子こは生いく。五三 彼は之これに、其その何なんの時ときに愈いは始はじめしを問こひたれば、彼かれに
謂いへり、昨日きのう第七だいしち時に熱あつ退りやけり。五四 父ちちは、此これ 卽すなはち、イエススが彼かれに爾なんぢの子こは生いくと言い

ひし時なるを知れり。是に於て彼自ら及び其全家皆信じたり。此れ第二の休徴なり。イイススイウアヤよりガリレヤに來りて之を行へり。

四四 一厥後イウアヤ人の節筵ありて、イイススイエルサリムに上れり。ニイエル

サリムに羊の門の側に池あり、エウレノの音にカズメグと曰ふ。之に傍ひて五の應あり、此の中に多くの病者、跛者、痲枯る者、臥して、水の動くを待てり。蓋主の使時ありて池に下りて、水を動かせり、水の動く後先づ池に入る者は、何の病を患ふるに驗なく、愈ゆるを得たり。彼處に一人三十八年病を患ふる者ありき。イイスス彼が臥せるを見、其之を患ふることを已に久しきを知りて、彼に謂ふ、爾愈ゆることを欲するか。七病者答へて曰へり、主よ、然り但水の動く時、我を扶けて池に下す人なし、我が來る時は、他人我に先だちて下る。ハイイスス彼に謂ふ、起きて、爾の床を取りて行け。其の人直に愈ゆる其床を取りて行けり、是の日は安息日なり。故にイウアヤ人愈されし者に謂へり、安息日なり、爾床を取るは宜しからず。二彼答へて曰へり、我を愈し、者は我に爾の床を取りて行けと言へり。二三彼等問へり、爾に床を取りて行けと言ひし

人は誰ぞ。一三 愈されし者は其誰たるを知らざりき。蓋彼處に人の衆きに因りて、イイスス隠れたり。一四 既後イイスス此の人に殿に遇ひて、之に解へり、視よ、爾は愈れたり。復暉を犯す勿れ、恐らくは患に遭ふこと更に甚しからん。一五 彼往きて、イウテヤ人に、我を愈しし者はイイススなりと告げたり。一六 是に於てイウテヤ人イイススを密逐して、殺さんことを謀れり、彼が安息日に此くの如き事を行ひし故なり。一七 イイスス彼等に解へり、我が父は今に至るまで爲じ、我も亦爲す。一八 此れに縁りてイウテヤ人愈彼を殺さんことを謀れり、其第安息日を犯し、のみならず、乃又神を己の父と言ひて、己を神と齊しく爲し、故なり。一九 イイスス彼等に答へて曰へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、子は若し父の行ふ所を見ずば、己に由りて何事をも行ふ能はず、父の行ふ所は、子も亦同じく之を行ふ。二〇 蓋父は子を愛して、凡そ己の行ふ所を彼に示す、且此より大なる事を彼に示さん、爾等の奇まん爲なり。二一 蓋父が死せし者を起して、之を生かすが如く、子も亦欲する所の者を生かす。二二 蓋父は何人をも審判せず、乃悉くの審判を子に委れたり。二三 衆皆子を敬ふこと、父を敬ふが如くせん爲なり。子を敬は

ざる者は、彼を道じ、父を敬はず。二四 我誠に誠に爾等に語り、我が言を聴きて、我を道
 じし者を信する人は、永遠の生命を有ち、且審判の爲に來らず、乃死より生命に移れり。
 二五 我誠に誠に爾等に語り、時は來る、今は是れなり、死せし者は神の子の聲を聞かん、
 之を聞き、て生きん。二六 父が己の中に生命を有つが如く、此くの如く、子にも己の中
 に生命を有たしめ。二七 且彼に審判を行ふ權を與へたり、其人の子たるに因りてなり。
 二八 之を密む勿れ、盜時は來る、凡そ墓の中に在る者は神の子の聲を聞かん、二九 而して
 善を行ひし者は、生命の復活に出で、惡を爲じし者は、定即の復活に出でん。三〇 我何
 事をも己に由りて行ふ能はず、聞く所に道ひて審判す、而して我が審判は義なり、蓋我
 己の旨を求めず、乃我を道し、父の旨を求むるなり。三一 若し我自ら己の事を證せ
 ば、我が證は眞ならず。三二 別に我の事を證する者あり、我其我を證する證の眞なるを
 知る。三三 爾等皆て人をイオアンに遣し、に彼は眞實の爲に證を作せり。三四 然れど
 も我は人より證を受けず、乃此を言ふは爾等の教はれん爲なり。三五 彼は燃ゆる且光る
 燈たりき、爾等は其光に在りて暫く喜ばんを欲せり。三六 然るに我にはイオアンの

證より大なる者あり、蓋父が我に與へて成さしむる事、此の我が行ふ所の事は、我の爲に、父が我を遣ししことを證す。三七我を遣しし父自ら我の爲に證を作せり。惟爾等未だ曾て其聲を聞かず、其形を見ざりき。三八其言を爾等の裏に存せず、蓋彼の遣しし者は、爾等之を信ぜざるなり。三九書を探れ、蓋爾等は此に由りて永遠の生命を得んと思ふ、此れ我の事を證するなり。四〇然れども、爾等は生命を得ん爲に我に就くを欲せず。四一我榮を人より受けず。四二惟我爾等を知る、爾等の裏には神に於ける愛なし。四三我は我が父の名に因りて來りしに、爾等我を受けず、若し他人己の名に因りて來らば、爾等之を受けん。四四爾等互に榮を相受け、獨一の神よりする榮を求めずして、豈信するを得んや。四五我爾等を父の前へ訴へんと、意ふ勿れ、爾等を訴ふる者に、トイセ、イあり、爾等が恃む所の者なり。四六蓋爾等若しトイセ、我を信ぜば、我をも信せん。彼は我の事を書したればなり。四七若し爾等彼の書を信ぜずば、焉ぞ我の言を信せん。

四八 厥後、イエスがガリラヤの海、即チマリアダの海の彼の岸に濟りしに、衆くの民彼に隨へり、彼が病者に行ひし奇蹟を見ればなり。三

彼處に門徒と偕に坐せり。時にイウテヤ人の節筵なる逾越節近づけり。イイスス目を擧げて衆くの民の彼に來るを見て、フリプに問ふ我等何處より餅を市ひて彼等に食はしめんか。之を言ひしは彼を試みん爲なり蓋自ら何を行はんとするを知り。フリプ答へて曰へり銀二百を以て餅を市ふとも彼等の爲に各少しづつを受くるに足らず。其門徒の一、シモンペトルの兄弟アンドレイ彼に謂ふ此に一の童子ありて麩麥の餅五と小魚二とを有てり然れども是れ何なり此の多數に爲さん。

一〇 イイスス曰へり人人を坐せしめよ。其處に多くの草あり。是に於て人人席坐せり。數約五千なり。二 イイスス餅を取り感謝して門徒に分ち與べ門徒は席坐する者に與へたり魚も亦然り各欲する所に從へり。衆既に飽きて彼門徒に謂ふ餘りたる屑を聚めて廢る所母らしめよ。一三乃聚めて食ひし者の餘したる五の麩麥の餅の屑を十二の籃に盈てたり。一人一人イイススの行ひし奇蹟を見て曰へり是れ誠に世に來るべき預言者なり。一四 イイススは彼等が來り念に彼を執りて王と爲さんと欲するを知りて復獨山に遁れたり。一六 日の暮る時其門徒下りて海に至り。一七 舟

に登りて、海の彼の岸なるカ、ベルナツムに往けり。既に昏くなりて、イエスス彼等に來らす。一八風大に吹きて、海は浪たてり。一九漕ぎ行くこと約二十五或は三十小里にして、彼はイエススの海を履みて、舟に近づくを見て、懼れたり。二〇彼は之に謂ふ、是れ我なり、懼るゝ勿れ。二一門徒彼を舟に接けん、欲せり、舟は直に往く所の地に着きたり。二三明日、海の彼の岸に立てる民は、彼處に門徒の登りたる舟の外に他の舟なく、且イエススは門徒さ僂に舟に登らずして、門徒のみ往きしを見たり。二四時に他の舟はテスリアダより、主の感謝して、後餅を食ひと所に近く來れり。二五是に於て民は、イエススの此に在らず、其門徒も在らざるを見て、己も亦舟に登り、イエススを探れて、カエルナツムに來れり。二六海の彼の岸に於て彼に遇ひて、白へり、夫子、爾は何の時に此に來れる。二七イエスス彼等に答へて曰へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、爾等の我を尋ねるは、奇蹟を見し故に非ず、乃餅を食ひて飽きたる故なり。二八朽つる糧の爲に勞する勿れ、乃永遠の生命に存する糧、人の子が爾等に與へんとする者の爲に勞せよ、豈父なる神は彼を印證せり。二九彼等曰へり、我等何を行ひて、神の事を爲さんか。三〇イエス

答へて曰へり、神の事きは爾等が彼の遣し、者を信するこゝは是なり。彼等曰へり、爾何の休徴を行ひて、我等をして之を見て、爾を信せしめんか、爾何を爲すか。我等の先祖は野に在りて、「マンナ」を食へり、練されしが如し、天より彼等に餅を與へて食はしめたりと。イエイス、彼等に謂へり、我誠に誠に爾等に謂ぐ、モイセインが爾等に餅を天より與へしに非ず、乃我が父は爾等に眞の餅を天より與ふる。蓋神の餅は天より降りて、世に生命を與ふる者なり。彼等曰へり、主よ、恒に我等に斯の餅を與ふる。イエイス、彼等に謂へり、我は生命の餅なり、我に來る者は飢ゑず、我を信する者は永く渴かざらん。然れども、我爾等に嘗て、爾等我を見たれども、信せずと、言へり。凡そ父の我に與ふる者は、我に來る者は、我之を外に逐はざらん。蓋我が天より降りしは己の旨を行はん爲に非ず、乃我を遣し、父の旨を行はん爲なり。我を遣し、父の旨は即彼が我に與へし者の中、我其一をも亡はずして、末日に於て悉く之を復活せしめんとするに在り。我を遣し、者の旨は即凡そ子を見て之を信する者は、永遠の生命を有ち、我末の日に於て彼を復活せしめんとするに

在り。四一 時にイウテヤ人其我は天より降りし餅なりと言ひしに因りて彼を怨みて
 云へり此れイオソフの子イイスス我等が其父と母とを織れる者に非ずや如何
 にして彼は我天より降りし餅なりと言ふか。四二 イイスス彼等に答へて曰へり爾等相共に
 怨音する母れ。四三 我を遣し父之を引かざれば人我に来る能はず我に来る者は我
 末の日に於て之を復活せしめん。四四 諸預言者に録せるあり彼等皆神に致へられん
 凡そ父に聽きて學びし者は我に来る。四五 此れ人曾て父を見たりと曰ふに非ず惟
 神よりする者は彼父を見たるなり。四六 我誠に誠に爾等に語り我を信する者は永遠
 の生命を有つ。四七 我は生命の餅なり。四八 爾等の先祖は野に在りて「マンナ」を食ひた
 れども死せり。四九 夫れ天より降りし餅は乃之を食ふ者死せざるを致さん。五〇 我は天
 より降りし生ける餅なり此の餅を食ふ者は世世に生きん。我が與へんとする餅は即
 我の體なり我が世の生命の爲に與へんとする者なり。五一 時にイウテヤ人互に論じ
 て曰へり彼如何ぞ我等に其體を與へて食はしむるを得ん。五二 イイスス彼等に語へ
 り我誠に誠に爾等に語り爾等若し人の子の體を食はず其血を飲まずば己の裏に生

命を有たざらん。我が體を食ひ、我が血を飲む者は永遠の生命を有つ、我末の日に於て彼を復活せしめん。蓋我が體は眞に糧なり、我が血は眞に食物なり。我が體を食ひ、我が血を飲む者は、我に居り、我も彼に居るなり。生くる父我を遣し、且我父に由りて生くるが如く、我を食ふ者も我に由りて生くる。新れば乃天より降りし餅なり。爾等の先祖が「マシナ」を食ひて、死せし如きに非ず、此の餅を食ふ者は世に生くる。此等の事は、彼カヘルナウムに教ふる時、會堂に於て言へり。其門徒の中多くの者之を聞きて曰へり、難い哉斯の言誰か之を聽くを得ん。イイスス己の裏に其門徒が怨言するを知りて、彼等に問へり、此れ爾等を惑はすか。爾等若し人の子が靈に在りし處に升るを見ば如何。神は生かす者なり、肉は益なし。我が爾等に語りし言は神なり、生命なり。然れども爾等の中に信ぜざる者あり。蓋イイススは初より信ぜざる者の誰たる、及び彼を賣らんとする者の誰たるを知れり。又曰へり、故に我曾て爾等に、我が父より之に與へらるゝに非ざれば、人我に來る能はずと言へり。是より其門徒多く返りて、復彼と偕に行かざりき。イイスス十二徒に

爾へり、爾等も去らんと欲するか。六八 シモン、彼に答へて曰へり、主よ、我等誰にか往かん、爾は永遠の生命の言を有つ。六九 我等は爾がハリストス、活ける神の子たるを信じ、且知れり。七〇 イイスス、彼等に答へて曰へり、我爾等十二を選びしに非ずや、而して爾等の中一人は悪魔なり。七一 是れ彼はシモンの子イウダ「イスカリオト」を指して言へり、蓋此の人は十二の一にして、彼を賣らんとする者なり。

第四章

厥後イイススガリレヤを巡れり、蓋イウダヤを巡らんことを欲せざりき、

イウダヤ人彼を殺さんぞ謀りたればなり。二 イウダヤ人の節筵なる張幕節近づけり。三 イイススの兄弟彼に爾へり、此を去りてイウダヤに往け、爾の門徒も爾が行ふ所の事を見ん爲なり。四 蓋人自ら爾れんと欲して、隠に事を行ふ者あらず。若し爾此等の事を行ば、己を世に顯せ。蓋其兄弟も亦彼を信ぜざりき。五 イイスス、彼等に爾、我の時未だ至らず、爾等の時は恒に備れり。七二 世は爾等を惡む能はず、然れども我を惡む、我其行ふ所の惡しきを隠すればなり。七三 爾等は此の節筵に上れ、我は未だ此の節筵に上らず、蓋我の時未だ盈たざるなり。七四 之を彼等に言ひて、ガリレヤに留れり。七五 然

れども其兄弟の節筵に上りし後彼も亦上れり、昭然ならずして、乃隱然なるが如し。
一二節筵の時、イウテヤ人彼を尋ねて曰へり、彼は安に在るか。二三民の中に彼の事に
於て多くの論ありき、或は善なりと曰ひ、或は否、乃民を惑はす、曰へり。二三然れど、
もイウテヤ人を懼るゝに由りて、圖に彼の事を言ふ者なかりき。二四節筵已に半にし
て、イイスス殿に上りて教へたり。二五イウテヤ人奇として曰へり、此の人事はざるに、
如何にして書を識れるか。二六イイスス彼等に答へて曰へり、我が教は我に屬するに
非ず、乃我を遣し、者に屬するなり。二七人若し彼の旨を行はんと欲せば、斯の教の神
よりするか、或は我が己に由りて言ふかを知らん。二八己に由りて言ふ者は己の榮を
求む之を遣し、者の榮を求むる者は斯れ眞なる者にして、其衷に不義なし。二九モイ
セイ、豈律法を爾等に與へしに非ずや、而して爾等の中に律法を守る者なし。爾等胡爲
れぞ我を殺さんと謀る。三〇民答へて曰へり、爾等鬼に憑らる、誰が爾を殺さんと謀る。
三一イイスス答へて彼等に謂へり、我一の事を行ひしに、爾等皆之を奇む。三二モイセイ
、爾等に割禮を授けたり、此れモイセイに由るに非ずして、先祖に由るに、斷り而して

爾等安息日に於て人に割禮を行ふ。二二
日に割禮を受くるに爾等我が安息日に於て人の全身を愈しに因りて我に怒るか。
二二 外税に依りて密する勿れ乃義の密を以て密せよ。二二 是に於てイエルサリムの
或人人曰へり此れ彼等が殺さんぞ謀る者に非ずや。二二 視よ彼明に語る而して彼等
は之に言ふ所なし豈有司等は彼を誠にハリストスなりと承け認めしか。二七 然れど
も我等は斯の人の突れよりするを知る惟ハリストス來らん時は其突れよりするを
知る者なからん。二八 厥時イエス殿に於て致へて呼びて曰へり爾等我をも知る亦
我の突れよりするを知る然れども我は己に由りて來りしに非ず乃我を遣し眞な
る者あり爾等の知らざる者なり。二九 我は彼を知る蓋我は彼よりし彼は我を遣せり。
三〇 是に於て彼等イエスを執へんと謀りたれども手を彼に措く者なかりき彼の
時未だ至らざればなり。三一 民の中多くの者彼を信じて曰へりハリストス來らん時
は豈斯の人の行ひしより多くの休徴を行ばんや。三二 乃りセイ等は民が彼の事を斯
く論ずるを聞けり乃乃りセイ等及び司祭諸長は彼を執へん爲に下吏を遣せり。

三三 イイスス曰へり、我尙暫く爾等と偕に在りて、我を遣じ、者に往かん。 爾等我を尋れて、遇はざらん、且我が在る所には、爾等來る能はず。 三三 イウテヤ人相附りて曰へり、彼は何に往きて、我等をして彼に遇はざらしめんか、豈彼はヨリン民の中に散じ、處る者に往きて、ヨリン人を教へんと欲するか。 三六 彼が、爾等我を尋れて、遇はざらん、且我が在る所には、爾等來る能はずと言ひし言は何の謂ぞや。 三七 節節の末の大なる日に、イイスス立ちて呼びて曰へり、人渴かば、我に來りて飲め。 三八 我を信する者は、聖書に云へる如く、其腹より活ける水の川は流れる。 三九 之を言ひしは、彼を信する者の受けんとする神を指せるなり、豈聖神未だ降らざりき、イイスス未だ榮を受けざればなり。 四〇 民の中多くの者此の言を聞き、曰へり、斯の人は誠に預言者なり。 四一 他の者は曰へり、斯れハリストスなり。 又他の者は曰へり、豈ガリレヤよりハリストス來らんや。 四二 聖書には、ハリストスはダマドの裔より、且ダマドの居りし處なるガフレエムより來ると云へるに非ずや。 四三 是に於て民の中に、彼の事に縁りて、紛論起りたり。 四四 其中の或る者彼を執へんと欲したれど、手を彼に措く者なかりき。 四五 下吏は

司祭諸長及びフリセイ等に返りたれば、彼等之に誦へり、爾等何ぞ彼を曳き來らざる。
四六下更答へて曰へり、人未だ曾て斯の人の如く言ひしことあらず。四七フリセイ等は
彼等に答へて曰へり、豈爾等も惑はされしか。四八有司或はフリセイ等の中に彼を
信ぜし者あるか。四九惟此の民律法を識らざる者は、誦はるゝなり。五〇夜イススに
來りしニコデム、彼等の中の一人なる者は、彼等に誦ふ、五二豈我が律法は未だ人の訟
を聴かず、其行ふ所を知らざる先に、人を罪するか。五三彼等答へて曰へり、爾も亦ガリ
レヤよりするか、尋ねて見よ、預言者はガリレヤより起るなし。五四是に於て、各其家
に歸れり。

一 イイスス橄欖山に往けり。二朝早く復殿に來れるに、民皆彼に就き、彼坐し
て之を教へたり。三爰に學士等及びフリセイ等は淫に於て執へられたる婦を彼に曳
き來り之の中に立て、四彼に誦ふ、師よ、此の婦は今淫に於て執へられたり。五モイセ
イは律法に、我等に是くの若き者を石を以て撃ち殺すを命じたり、爾は何を言はんか。
六彼等が之を言ひしは、イイススを試みて彼を訟ふる由を得ん爲なり。イイスス顧み

すして、脚を鞠めて指を以て地に蹴けり。彼等固ひて已まざれば、イエス起きて彼等に謂へり、爾等の中耶なき者は先づ石を以て之に投げよ。彼身を鞠めて地に蹴けり。彼等之を聞き、其良心に責められ、長なる者より始めて、末なる者に至るまで、一出で往き、イエス獨遣り及び暗中に立てり。イエス起きて、人無く唯暗のみ在るを見て、之に謂へり、婦よ、爾を駭ふる者安に在るか、誰も爾を眼せざりしか。彼答へて曰へり、主よ、誰もなし。イエス之に謂へり、我も爾を眼せず、往け、是より罪を犯す勿れ。一三 イエス復衆に語りて曰へり、我は世の光なり、我に従ふ者は暗を行かず、乃生命の光を獲ん。一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一 出で往き、イエス獨遣り及び暗中に立てり。 二 イエス起きて、人無く唯暗のみ在るを見て、之に謂へり、婦よ、爾を駭ふる者安に在るか、誰も爾を眼せざりしか。 三 彼答へて曰へり、主よ、誰もなし。 イエス之に謂へり、我も爾を眼せず、往け、是より罪を犯す勿れ。 四 イエス復衆に語りて曰へり、我は世の光なり、我に従ふ者は暗を行かず、乃生命の光を獲ん。 五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一 我は何れより來り、何れに往くを知る、爾等は我が何れより來り、何れに往くを知らず。 二 爾等は肉に藉ひて密す、我は何人をも密せず。 三 蓋し我密せば、我が密は眞なり、蓋我獨在るに非ず、乃我及び我を遣し、父在るなり。 四 爾等の律法にも録せるあり、二人の證は眞なりと。 五 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

なり。一九 彼等曰へり、爾の父は安に在るか。イエス答へて曰へり、爾等我をも我が父をも識らず、若し爾等我を識らば、我が父をも識るならん。二〇 此等の言は、イエス殿に在りて教へし時、獻寮所に於て之を言へり、彼を執ふる者なかりき彼の時未だ至らざればなり。二一 イエス復彼等に謂へり、我は往く、爾等我を尋ねん、而して爾等の脚の中に死なん。我が往く所には爾等來る能はず。二二 イウテヤ人曰へり、豈彼は己を殺さんか、盜云ふ、我が往く所には爾等來る能はずと。二三 イエス彼等に謂へり、爾等は下に屬し、我は上に屬す、爾等は斯の世に屬し、我は斯の世に屬せず。二四 故に我爾等に謂へり、爾等の脚の中に死なん。二五 彼等曰へり、爾は誰なる。イエス彼等に謂へり、我は始より爾等に言ふ所の如き者なり。二六 我には爾等の事に於て語り且密すること多くあり、然れども我を遺し、者は眞なり、我彼より聞きし事を以て世に語る。二七 彼等は其父を指して言ひしを悟らざりき。二八 故にイエス彼等に謂へり、爾等人の子を擧ぐる後、是れ我なりと知り、且我が己に由りて何事をも行はず、乃我が父の我に教へし如く之を

知るを知らん。二九我を遣し、者は我を遣して、獨在らしめず、蓋我等に其悦ぶ所を行ふなり。三〇彼が此を語れる時、多くの者彼を信ぜり。三一時にイエスに彼を信ぜしイウテヤ人に謂へり、爾等若し恒に我が言に居らば、誠に我が門徒たるなり。三二爾等眞實を識らん、眞實は爾等を自由の者と爲さん。三三彼に答へて曰へり、我等はアウラアムの裔なり、未だ曾て人の奴隷と爲らざりき、爾何ぞ自由の者と爲らんと言ふ。三四イエス彼等に答へて曰へり、我誠は誠に爾等に語り、凡そ罪を行ふ者は罪の奴隷なり。三五然れども、奴隷は永く家に居らず、子は永く居るなり。三六故に若し子爾等を自由たらしめば、爾等は誠に自由の者と爲らん。三七我等がアウラアムの裔たるを知る、然れども、爾等我を殺さんと謀る、蓋我が言は、爾等の衷に容れられず。三八我は我が父に於て見し事を言ひ、爾等は爾等の父に於て見し事を行ふ。三九彼に答へて曰へり、我等の父はアウラアムなり。四十イエス彼等に謂ふ、爾等若しアウラアムの子たらば、アウラアムの事を行ふならん。四一然るに、爾等今我即、神より聞きたる眞實を爾等に語りし人を殺さんと謀る、アウラアムは之を行はざりき。四二爾等は爾

等の父の事を行ふ。彼に問へり、我等は淫に由りて生れしに非ず、我等に一の父あり、即神なり。 四二 イイスス彼等に謂へり、若し神、爾等の父たらば、爾等我を愛するならん、我神より出で、來りしに因る。蓋我已に由りて來りしに非ず、乃彼は我を遣せり。 四三 爾等何ぞ我が語れることを悟らざる、我が言を聽く能はざる故なり。 四四 爾等は爾等の父惡魔に屬し、爾等の父の怒を行はんと欲す。彼は始より殺人者にして、眞實に立たざりき、眞實其衷に在らざればなり。彼は誰を言ふ時、己に屬する者を言ふ。蓋彼は、罪者、且罪の父なり。 四五 然れども我眞實を言ふに因りて、爾等我を信せず。 四六 爾等の中誰か罪を以て我を責めん、若し我眞實を言はば、爾等何ぞ我を信せざる。 四七 神に屬する者は神の言を聽く。爾等の聽かざるは、神に屬せざる故なり。 四八 イウデア人彼に答へて曰へり、我等、爾がサマリヤ人にして、且冤鬼に惹らるゝ者なりと言ふは、宜ならずや。 四九 イイスス答へて曰へり、我は冤鬼に惹らるゝに非ず、乃我は我が父を尊び、爾等は我を辱む。 五〇 然れども我は己の榮を求めず、一の求むる者、且審判する者あるなり。 五一 我誠に誠に、爾等に語ぐ人若し我が言を守らば、世世に死を見ざらん。 五二

ウテヤ人彼に謂へり、今我等は爾が冤鬼に憑らるゝを知れり。アウラム死し、諸預言者も亦然り而して爾言ふ人若し我が言を守らば、世世に死なざるらん。五三 爾言我が父アウラム已に死せし者より大なるか、諸預言者も亦死せり、爾は己を誰と爲す。五四 イイスス答へて曰へり、若し我已を榮せば、我が榮は無に歸す。我を榮する者は我が父、即爾等が我等の神と言ふ所の者なり。五五 爾等は彼を識らず、我は彼を識る。若し我彼を識らずと言は、爾等の如き 証者と爲らん。然れども我は彼を識り、且彼の言を守る。五六 爾等の父アウラムは、甚我の日を見んことを欲めり、彼且之を見而して喜べり。五七 イウテヤ人彼に謂へり、爾年尙五十に及ばざるに、アウラムを見しか。五八 イイスス彼等に謂へり、我誠に誠に爾等に解く、アウラムの未だ有らざる先に、我在るなり。五九 是に於て彼等石を取りて、彼を撃たんさせり、然れどもイイスス隠れて、其中を過ぎ、殿を出で、去れり。

第十章 イイスス行く時、生ながら替なる人を見たり。二〇 門徒彼に問ひて曰へり、夫子斯の人の替にして生れしは、是れ孰か、即を獲たる彼か、抑其親か。二一 イイスス答へ

て曰へり、彼も罪を獲ず、其親も亦然り、乃彼に於て神の作爲の顯れん爲なり。我尙
 害なる間、我を遣し、者の作爲を爲すべし、夜來る其時は誰も爲す能はず。我世に在
 る時は、世の光なり。之を言ひて、地に唾し、唾を以て泥を成し、其泥を瞽の目に塗りて、
 之に謂へり、往きて、シロアムの池に洗へ。シロアム、譯すれば、遺されし者なり。彼往き
 て洗ひ、見るを得て來れり。其隣の人及び先に彼が瞽なるを見し者曰へり、此れ坐し
 て乞ひし者に非ずや。或曰へり、是は彼なり、或曰へり、彼に似たる者なり、彼は曰
 へり、是は我なり。彼等之に謂へり、爾の目は如何にして啓けたるか。彼答へて
 曰へり、イエス、其名づくる人、泥を成して、我が目に塗りて、我に謂へり、シロアムの池
 に往きて洗へと、我往きて、洗ひて見るを得たり。彼等曰へり、其人安に在るか。曰く、
 我知らず。此の瞽たりし者を、ろりセイ等に擲へ至る。イエスが泥を成して、
 其目を啓きし日は、安息日なり。ろりセイ等も亦其如何に見るを得たるを問ひた
 れば、答へて曰へり、泥を我の目に置き、我洗ひて見るを得たり。ろりセイ等の中の
 或者曰へり、斯の人は神よりするに非ず、安息日を守らざればなり。他の者曰へり、罪あ

る人は安んずるは是の如き奇蹟を行ふを得ん。是に於て彼等の中に紛論ありき。一七また復啓
者に爾は彼の事に於て何を言はんか。蓋彼は爾の目を啓きたり。曰く是れ預言者
なり。一八イウアヤ人は其素習にして後に見るを得たるを信ぜずして此の見るを得
たる者の二親を呼び至らしむるを待ちて、一九之に問ひて曰へり此れ爾等の子爾等
が啓にして生れたり。曰ふ者なるか。今如何にして見るか。二〇其親彼等に答へて曰
へり此れ我が子なること又其啓にして生れたることば我等之を知る。二一然れども
今如何にして見るか。我等之を知らず。或は誰か其目を啓きしを我等知らず。彼は年長
せり彼に問ふべし自ら己の事を語らん。二二親の斯く言ひしは、イウアヤ人を懼れし
に因りてなり。蓋イウアヤ人已に相謀りて若し人彼をハリストスと認めば會堂より
驅けらるべしと定めたり。二三是の故に其親は彼は年長せり彼に問ふべしと曰へり。
二四是に於て啓たりし人を再呼びて之に謂へり、光榮を身に歸せよ。我等は斯の人
の罪人たるを知る。二五彼答へて曰へり、其罪人たりや否や。我之を知らず。唯一の事を
知る、即我本啓たりしに今は見る。二六又之に謂へり、彼は何を爾に爲し、如何

にして爾の目を啓きし。二七〇 答へて曰へり、我已に爾等に言へり、而して爾等聽かざり
き、何ぞ復聞かんぞ欲する。豈爾等も彼の門徒と爲らんと欲するか。二八一 彼等之を詭り
て曰へり、爾は其門徒、我等はモイセイの門徒なり。二八二 我等は神がモイセイに詭りし
を知る、然れども斯の人の突れよりするを知らず。二八三 其人答へて彼等に謂へり、此は
奇しき事なり、爾等は彼の突れよりするを知らず、然るに彼は我が目を啓きたり。二八四 我
等は神が與人に聽かざるを知る、然れども若し人神を敬ひ、其旨を行はば斯の人に聽
く。二八五 世の始より以來、未だ人の生ながら啓なる者の目を啓きしを聞かざりき。二八六
若し斯の人神よりせしに非ずば、何事をも行ふを得ざりしならん。二八七 彼等之に答へ
て曰へり、爾は全く野の中に生れたり、而して爾我等を教ふるか。遂に彼を外に逐ひ出
せり。二八八 イイススは其彼を逐ひ出し、を聞きて、彼に遇ひて曰へり、爾神の子を信す
るか。二八九 彼答へて曰へり、主よ、是れ誰なるか、我が彼を信ぜん爲なり。二九〇 イイスス之
に謂へり、爾已に彼を見たり、且爾と詭る者は是なり。二九一 彼曰へり、主よ、我信す、乃彼
を拜せり。二九二 イイスス曰へり、我密判の爲に斯の世に來れり、見ざる者は見、見ざる者は

譬と爲らん爲なり。四〇 彼と借に在りしりせイ等の中の或者之を聞きて彼に謂へり、豈我等も譬なるか。四一 イイスス彼等に謂へり、爾等若し譬ならば罪なからん、然れども今爾等は我等見ると言ふに困りて爾等の罪尙存す。

四二 我誠に誠に、爾等に語ぐ羊の牢に入るに門よりせずして、他の處より踰ゆる者は、竊盜なり、強盜なり。四三 門より入る者は羊の牧者なり。四四 門を守る者は彼の爲に啓き、羊は其聲を聴く、彼己の羊の名を呼びて之を引き出す。四五 己の羊を出す時之に先だちて行き、羊彼に従ふ、其聲を識るが故なり。四六 疎き者に從はず、乃之より逃ぐ、疎き者の聲を識らざるが故なり。四七 イイスス此の譬を彼等に謂へり、然れども彼等は其謂りしこと何たるを悟らざりき。四八 故にイイスス復彼等に謂へり、我誠に誠に、爾等に謂ぐ、我は羊の門なり。四九 凡そ我より先に來りし者は、竊盜なり、強盜なり、然れども羊は彼等に聽かざりき。五〇 我は門なり、我に由りて入る者は救を得、且入り且出で、草場を得ん。五一 盜の來るは、唯盜み殺し滅さん爲のみ。五二 我の來りしは、其生命を有ち、且數に之を有たん爲なり。五三 我は善き牧者なり、善き牧者は己の生命を羊の爲に捐つ。五四

牧者ぼくしゃならざるた備者びやくしゃ羊ひつじの己おのれに属ぞくせざる者ものは、狼おほかみの來きたるを見て、羊ひつじを獲とて、逃にぐ狼おほかみは羊ひつじを奪うばひ、又また之これを散ちす。一三や備者びやくしゃは逃にぐ、其その備者びやくしゃたるを以もつてなり、羊ひつじを顧かへみず。一四わ我われは善よき牧者ぼくしゃにして、我われに属ぞくする者ものを識しり、我われに属ぞくする者ものも亦また我われを識しる。一五ち父ちちの我われを識しるが如ごとく、我われも亦また父ちちを識しる、且かつ我われが生命いのちを羊ひつじの爲ために捐すつ。一六わ我われに又また他たの羊ひつじ、此この羊ひつじに属ぞくせざる者ものあり、我われは彼等かれらをも引ひくべし、彼等かれらは我われが聲こゑを聽きかん而しかうして、一の群むれの牧者ぼくしゃと爲ならん。一七ち父ちちの我われを愛あいする所以ゆゑは、此これ蓋けだ我われは我われが生命いのちを捐すつ、復また之これを受けん爲ためなり。一八た孰たれも之これを我われより奪うばふなし、乃すなはち我われ自ら之これを捐すつ。我われに之これを捐すつる權けんあり、復また之これを受うくる權けんあり。我われは此この誠まことを我われが父ちちより受うけたり。一九この言ことばに緣よりて、復またイウテヤ人の間あひだに紛論まごころん起おこれり。二〇そのうちをば、其中その多くの者もの曰いへり、彼かれは冤鬼えんきに憑よられて狂くるふなり、何なんぞ彼かれに聽きく。二一た他の者もの曰いへり、此これ冤鬼えんきに憑よらるゝ者ものの言ことばに非あらず、豈あに冤鬼えんきは瞽者めしひの目めを啓ひらくを得えんや。二二イエエルサリムに重おも修しゆ飾しあり、時方ときまさに冬ふゆなり。二三イイスス殿でんに在ありて、ソロモンソロモンの廊ちやうを歩あゆめるに、二四イウテヤ人じん彼かれを獲とりて曰いへり、爾なんぢ何時いつまでか我等われらを疑ぎ惑わくせしむる、若もし爾なんぢハリスハリストストスならば、明あきらかに我等われらに告つげよ。二五イイスス彼等かれらに答こたへて曰い

へり、我爾等に告げたり、而して爾等倍せず、我の我が父の名に因りて行ふ事は、我が爲に證を作す。二六、然れども爾等倍せず、蓋爾等は我に用する羊に非ず、我が爾等に言ひしが如し。二七、我が羊は私の聲を聴く、我は彼等を識り、彼等は我に従ふ。二八、我は彼等に永遠の生命を與ふ、彼等は世世に滅びず、誰も彼等を我が手より奪はざらん。二九、彼等を我に與へし、我が父は萬有より大なり、誰も我が父の手より彼等を奪ふ能はず。三〇、我と父とは一なり。三一、時にイウテヤ人復石を取りて、彼を撃たんせり。三二、イウス彼等に答へて曰へり、我は多くの善き事を我が父より爾等に示せり、其中何の事に由りて、石を以て我を撃つか。三三、イウテヤ人彼に答へて曰へり、我等は善き事の爲に石を以て爾を撃つに非ず、乃、鹽漬の爲、爾が人として己を神と爲すが爲なり。三四、イウス彼等に答へて曰へり、爾等の律法に録されしに非ずや、我曰へり、爾等は神なりと。三五、若し神の言を奉ぜし者を神と名づけ、而して聖霊降する能はずば、爾等は父が成聖して世に遣し、者に其我は神の子なりと云ひしに因りて、爾等すといふか。三六、若し我我が父の事を行はずば、我を信する勿れ。三七、若し之を行はば、我を

信ぜずとも、我が事を信ぜよ。父の我に在り、我も父に在るを知りて、信ぜん爲なり。是に於て復彼を執へんと謀りたれども、彼は其手を避けたり。復イオアルタンの外に、イオアンが先に洗を授けし處に往きて、彼處に居たり。多々の者彼に來り、且曰へり、イオアンは何の休微をも行はざりき、然れどもイオアンが彼を指して言ひし事は、皆眞なり。彼處に於て多々の者彼を信ぜり。

一 病める者あり、ラザリと云ふ、カスニヤ、即マリヤ及び其姉妹マルスの村の人なり。二 マリヤは、即香膏を主に膏り、髮を以て其足を拭ひし者にして、病めるラザリは彼の兄弟なり。三 姉妹はイイススに人を遣して曰へり、主よ、爾の愛する者は病めり。四 イイスス之を聞きて曰へり、此の病は死を致さず、乃神の光榮を致さん、神の子が之に由りて榮せられん爲なり。五 イイススはマルス及び其姉妹ラザリを愛せり。六 既に彼病めりき聞きて、仍其在りし處に留れること二日なり。七 其後門徒に謂ふ、我等復イウテヤに往かん。八 門徒彼に謂ふ、夫子、イウテヤ人近ごろ石を以て爾を撃たん、謀れり、爾復彼處に往くか。九 イイスス答へて曰へり、一日には十二時ある

に非ずや人若し晝に行かば、暎かす此の世の光を見るに因りてなり。一〇人若し夜に行かば、暎く彼に光なきに因りてなり。一一此を言ひし後彼等に謂ふ我等の友ラザリ賤れたり然れども我往きて彼を醒ます。一二門徒曰へり主よ彼若し賤れたらば愈ねん。一三イエス彼の死の事を言ひしに彼等は其賤れて臥める事を言ふ意へり。一四其時イエス明に彼等に謂へりラザリは死せり。一五而して我は我が彼處に在らざりしを爾等の爲に喜ぶ爾等を信ぜしめん爲なり然れども彼に往かん。一六又テテムと名づくる者同門徒に謂へり我等も往きて彼と偕に死なん。一七イエス來りてラザリの已に墓に葬れらて四日なるに遇へり。一八マリスヤはイエエルサリムに近し相去ること約十五小里なり。一九イツテヤ人多くマルス及びマリヤに來り其兄弟の事に緣りて彼等を慰めん爲なり。二〇マルスはイエスの來るを聞きて、往きて彼を迎へたりマリヤは仍家に坐せり。二一マルスはイエスに謂へり主よ爾若し此に在りしならば我が兄弟は死せざりしならん。二三然れども我知る今も爾が凡そ神に求めん者は神爾に賜はん。二四イエス之に謂ふ爾の兄弟は復活せん。二五

マルス曰く、我は末の日の復活の時に彼が復活せんことを知る。二五 イイスス之に謂へり、我は復活なり、生命なり、我を信する者は、死すも生きん。二六 凡そ生きて我を信する者は、世世に死せざらん。爾此を信するか。二七 曰く、主よ、然り、我は爾が世に来るべきハリストス、神の子たるを信せり。二八 之を言ひて後、往きて、潛に其姉妹マリヤを呼びて曰へり、師来りて、爾を呼ぶ。二九 マリヤ此を聞き、亟に起ちて、彼に往けり。三〇 時にイイスス未だ村に入らずして、仍マルスが彼を迎へし所に在り。三一 マリヤと偕に家に在りて、之を慰めし、イウテヤ人は、其亟に起ちて出でしを見て、之に隨へり、曰ふ、彼は墓に往きて、彼處に哭かんぞ。三二 マリヤはイイススの在りし所に來り、彼を見て、其足下に俯伏して曰へり、主よ、爾若し此に在りしならば、我が兄弟は死せざりしならん。三三 イイスス彼が哭き、又彼と偕に來りし、イウテヤ人の哭くを見て、心に哀みて、自ら側めり。三四 曰く、爾等何處に彼を置きと。彼に酬ふ、主よ、來りて、觀よ。三五 イイスス泣けり。三六 イウテヤ人曰へり、觀よ、其彼を愛せしこそ如何ばかりぞ。三七 其中の或者曰へり、啓者の目を啓きたる此の人は、彼をも死せざらしむる能はざりしか。三八 イイス

ス復裏に哀みて墓に来る。是れ洞にして其上に石を置けるあり。三九 イイスス曰く石
 を去れ。死者の姉妹マルス彼に謂ふ主よ已に臭し蓋彼死して四日なり。四〇 イイスス
 之に謂ふ我爾に若し信せば神の光榮を見んと言ひしに非ずや。四一 是に於て彼等石
 を死者の置きたる所より去れり。イイスス目を上に擧げて曰へり父よ爾が我に聞き
 した、我爾に感謝す。四二 我は爾が恒に我に聽くを知れり然れども環り立てる民の爲
 に之を言へり彼等の爾が我を遣しこそを信せん爲なり。四三 之を言ひて大なる聲
 を以て呼べりラザリよ外に出でよ。四四 死せし者出でたり手足は布に纏かれ面は巾
 に覆まれたり。イイスス彼等に謂ふ之を釋きて行かしめよ。四五 其時マリヤに來りて
 イイススの行ひし事を見たるイウアヤ人の中の多くの者彼を信せり。四六 然れども
 其中の硬者は乃りセイ等に往きて之にイイススの行ひし事を告げたり。四七 是に於
 て司祭路長及び乃りセイ等は公會を集めて曰へり我等何を爲さんか蓋此の人は多
 くの奇蹟を行ふ。四八 若し是くの如く彼を會かば人皆彼を信せん而してロマ人來り
 て我等の地をも民をも奪はん。四九 其中の一人なるカイアスは是の歳司祭長たる者は

彼等に謂へり、爾等何をも知らず、又一人民の爲に死して、全民滅びざらん事の我
 等に益あるを思はず。彼之を言ひしは、己に由るに非ず、乃是の歳の司祭長と
 して、イイススの民の爲に死せんとするを預言せしなり。是れ特新の民の爲のみ
 ならず、乃亦散じたる神の諸子を一に集めん爲なり。是の日より彼等相議して、
 イイススを殺さんと決せり。故にイイススはより顯にイウテヤ人の中を行かず、
 乃彼處より野に近き地、エフライム名づくる邑に往きて、此に門徒と僮に居たり。
 五二 イウテヤの逾越節近づきたれば、多くの者は己を潔めん爲に、逾越節に先だちて、
 地よりイエルサリムに上れり。衆イイススを尋ね、殿に立ちて相語りて曰へ
 り、爾等如何に愈ふか、彼は節筵に來らざらんか。司祭諸長及びパリサイ等は、令を
 出して云へり、若し人彼の在る所を知らば、之を告ぐべし、彼を執へん爲なり。
 五三 一逾越節の前六日、イイススワシムニヤに來れり、即ラザリを呼んで死して、彼
 が死より復活せしめし者の居る所なり。彼處に於て彼の爲に晩餐を設けたり、マル
 五 供事し、ラザリは彼と僮に席坐せし者の一たり。マリヤは純良なる「ナルド」の價

費き香膏一斤を執りて、イイススの足に膏り、己の髪を以て其足を拭へり家は香膏
 の香氣に満たされたり。其門徒の一、シモンの子イサダ、イスカリオト、即彼を賣ら
 んとする者曰く、何ぞ此の香膏を銀三百に售りて、貧しき者に施さざりし。彼の之
 を首ひしは、貧しき者を慮る爲に非ず、即竊者たるに因りてなり。彼は金匣を持ち、
 其内に藏めたる者を擲へたり。イイスス曰へり、彼を會け、彼は我が葬の日の爲に此を
 貯へたり。蓋貧しき者は常に爾等と備にす、我は常に爾等と備にするにあらず。九
 ウテヤの衆くの民は彼の彼處に在るを知りて、獨イイススの爲のみならず、乃其死
 より復活せしめしラザリをも見ん爲に來れり。一〇司祭諸長はラザリをも殺さんこ
 さを謀りたり、二盜彼の故に因りて多くのイウテヤ人往きて、イイススを信ぜり。一
 明日節遂の爲に來りし衆くの民は、イイススのイエルサリムに來るを聞きて、二三
 櫻欄の枝を取り、出で、彼を迎へ、呼びて曰へり、「オサンナ、主の名に因りて來るイス
 ライリの王は祝福せらる。一四イイスス小驢を獲て、之に乗れり、鎌されしが如し、
 五く、一五シモンの女、懼る、勿れ祝よ、爾の王は小驢に乗りて臨む。一六彼の

門徒は初此を曉らざりき然れどもイイススの榮せられし後此の事の彼を指して録され且此を彼に行ひしを憶ひ起せり。一七先にイイススと僭に在りし民は彼がラザリを墓より呼び出して之を死より復活せしめし事を證せり。一八此に續りて民は彼を迎へたり蓋彼が此の奇蹟を行ひしを聞けり。一九アリセイ等相離りて曰へり豈爾等が謀る所の一も益なきを見ざるか觀よ世は皆彼に従へり。二〇餅筵に禮拜する爲に上りたる者の中にマリヤ人あり。二一彼等は加利レヤのワフサイダの人なるアリに就きて之に請ひて曰へり君よ我等イイススを見んことを認む。二三アリツプ來りてアンドレイに告げアンドレイ及びアリツプは又之をイイススに告ぐ。二四イイスス彼等に答へて曰へり人の子の榮せらるゝ時至れり。二五我賊に賊に爾等に語ぐ夢の粒若し地に遺ちて死なすば獨存す若死なば多くの實を結ぶ。二六己の生命を愛する者は之を喪はん己の生命を斯の世に惡む者は永生の爲に之を贖らん。二七人若し我に事へば我に従ふべし我が在る所は我に事ふる者も亦彼處に在らん。人若し我に事へば我が父彼を喪はん。二八今我が靈は傷めり我何をか言はん父よ我を斯の時より

救へ、然れどし我は特に斯の時の爲に來れり。二八父と爾の名を榮せよ。時に天より聲
來りて云ふ我巳に之を榮せり、且復之を榮せん。二九旁に立ちて聞きし民は曰へり、
雷の聲ひしなり、他の者は曰へり、天使の彼に語りしなり。三〇
イイス答へて曰へり、此の聲の有りしは、我の爲に非ず、乃爾等の爲なり。三一
今斯の世は審判せらる、今斯の世の君は外に逐はれん。三二
我が地より擧げられん時は、衆を引きて我に就かしめん。三三
彼が此を言ひしは、其何の死を以て死せんとするを示しなり。三四
民彼に對へて曰へり、我等律法に、ハリストスは世世に存すと、言へるを聞けり、爾何ぞ人の子に擧げらるべしと、言ふ、此の人の子は誰ぞ。三五
イイス答へて曰へり、爾等が信ぜざるに在り、光ある間に行け、暗の爾等を蔽はざらん爲なり、暗に行く者は何へ往くを知らず。三六
爾等光ある間に、光を信ぜよ、光の子と爲らん爲なり、イイス答へて曰へり、言ひ、彼等を離れて隠れたり。三七
彼は斯く多くの休徴を彼等の前に行ひたれども、尙彼を信ぜざりき。三八
預言者イサイヤの言に應ふを致す、云く、主よ、誰か我等より聞きし事を信じたる、主の聲は誰にか顯れたるぞ。三九
彼等が信ずること能はざりしは、蓋

イサヤの復讐ひしが如く、^{四〇}其目を醫にし其心を頑にせり、恐らくは目にて観、
心にて悟り、轉じて我が彼等を醫さんぞ。^{四一}イサヤの之を言ひしは彼の光榮を見、
彼を指して語りし時に在り。^{四二}然るに有司の中にも多くの者は彼を信ぜり、惟るり
セイ等の故に因りて之を顧さざりき、會堂より逐はれざらん爲なり。^{四三}蓋人の光
榮を受せしこそ、神の光榮に過ぎたり。^{四四}イイスス呼びて曰へり、我を信する者は、我
を信するに非ず、乃我を遣し、者を信するなり。^{四五}我を見る者は、我を遣し、者を
見るなり。^{四六}我は光にして世に來れり、凡そ我を信する者の暗に居らざらん爲なり。
^{四七}若し人我が言を聞きて信ぜずば、我彼を定罪せず、蓋我が來りしは、世を定罪せん
爲に非ず、乃世を救はん爲なり。^{四八}我を拒みて我が言を納れざる者には、之を定罪
する者あり、即我が語りし言なり、此れ末の日に於て彼を定罪せん。^{四九}蓋我は己
に由りて語りしに非ず、即我を遣し、父は、彼我に言ふべき事、語るべき事を命ぜり。
^{五〇}我は其命の永遠の生命なるを知る。故に我が語る所は、父の我に言ひし如く、語る
なり。

一

逾越節筵の前に

イイスス既に己が此の世を離れて父に逝く時の至り

しを知りて世に在る己に屬する者を愛して終に至るまで之を愛せり。二 晚餐の時

寤己にシモンの子イリタ「イスカリオト」の心に彼を賣る意を入れしに、三 イイススは

父が及物を其手に授け、且己が脚より出で、亦脚に逝くを知りて、四 晚餐より起ち、其

衣を釋き、手巾を取りて、自ら帯にし、五 次ぎて水を盤に盛りて、始めて門徒の足を濯ひ、

帯にしたる手巾を以て之を拭へり。六 シモンペトルに來れるに彼曰く、主よ、爾我が足

を濯ふか。七 イイスス之に答へて曰へり、我が行ふ所は、爾今知らず、後に之を悟らん。八

ペトル彼に謂ふ、爾永く我が足を濯はざらん。イイスス答へて曰へり、若し我爾を濯は

ずば、爾は我と分なし。九 シモンペトル彼に謂ふ、主よ、止我が足のみならず、乃亦手と

首と。一〇 イイスス之に謂ふ、既に洗はれたる者は、足の外に濯ふを要せず、蓋身皆、潔

し、爾等も潔し、然れども、盡く然るには非ず。一一 盜彼は己を賣らんとする者を知れ

り、故に盡く、潔きには非ずと云へり。一二 既に彼等の足を濯ひて、己の衣を衣、復席坐

して、彼等に謂へり、我が爾等に行ひし事を知るか。一三 爾等我を呼びて師と爲し、主と

爲す、爾等の言ふ所善し、蓋我は是なり。一四 故に若し我、主又師たるに、爾等の足を濯ひ
しならば、爾等も互に足を濯ふべし。一五 我、爾等に模範を與へたり、我が爾等に行
ひし如く、爾等も行はん爲なり。一六 我、誠に誠に、爾等に語ぐ、僕は其主より大ならず、使
者は之を遣し、者より大ならず。一七 爾等若し之を知りて、之を行はば、禍なり。一八 我
盡く爾等を指して言ふに非ず、我は選びたる者を知る。然れども、聖書の言ふ所に應
ふを致す云く、我と與に餅を食ふ者は、我に向ひて其腫を擧げたり。一九 未だ成らざ
る先に、我、預め、爾等に語ふ、其成るに及びて、爾等の是れ我なり、と信ぜん爲なり。二〇
我、誠に誠に、爾等に語ぐ、我が遣す者を接くる者は、我を接くるなり、我を接くる者は、
我を遣し、者を接くるなり。二一 我、此を言ひし後、心傷みて、離して曰へり、我、誠
に誠に、爾等に語ぐ、爾等の中の一人は我を賣らん。二三 門徒相親て、其誰を指して言ふ
か、と異めり。二四 門徒の一、イエスの愛せし者は、イエスの懐に倚りて、席坐せり。二五
シモン、ペトル、彼に首を以て意を示して、其言ふ所の離たるを問はしめたり。二六 彼
は、イエスの首に就きて言ふ、主よ、是れ離なるか。二七 我、答へて曰く、我が餅の

片かたを照あして與あへんとする者もの是これなり。乃すなはち片かたを照あしてシモンの子こイウダイスカリカオト
に與あへたり。二七に片かたを受けし後のちにサタナ彼かれの中うちに入れり。イイスス彼かれに謂いふ爾なんぢが爲なす
所ところの事ことは速すみやかに之これを爲なせ。二八然れども席せき坐ませる者ものは一ひとも其その何なにの意いを以もつて之これを首いひし
を悟さとらざりき。二九蓋イウダが金匣かねばこを管あつかへるに因よりて或ある者ものはイイスス彼かれに我われ等ら
節まじり筵もに需もちぬるべき物ものを市かへと云いひ或あるは貧まじし者ものに何なにを施ほさしむる意いへり。三〇
彼かれは片かたを受けて直ただちに出いでたり時とき正まさに夜よなり。三一彼の出いでし後のちイイスス曰いはく今いま人の
子こは榮えいせられたり神かみも亦また彼かれの中うちに榮えいせられたり。三二若し神かみは彼かれの中うちに榮えいせられし
ならば神かみも亦また彼かれの中うちに榮えいせん且かつ速すみやかに彼かれを榮えいせん。三三小子よ我われ尙なほ暫時しばらく爾等なんぢらと
借かかにす爾等なんぢら我われを尋たづねん而しかうして我われが曾かつてイウダヤ人じんに我われの往ゆく所ところには爾等なんぢら來きたる能あたは
ずと云いひし如ごとく今いま爾等なんぢらにも亦また云いふなり。三四我新あらたなる誠まことを爾等なんぢらに與あふ即すなはち爾等なんぢら相あひあい
すべし我われが爾等なんぢらを愛あいするが如ごとく爾等なんぢらも是かくの如ごとく相あひあいすべし。三五爾等若なんぢらし相あひあい
ば人ひと皆みな此これに由よりて爾等なんぢらの我われが門かど徒たたるを知らん。三六シモンペトルペトル彼かれに謂いふ主しゆよ爾
何なににか往ゆく。イイスス之これに答こたへて曰いへり我われの往ゆく所ところには爾等なんぢら今いま我われに從したがふ能あたはず然しかれど

も後我に従はん。三七ハトル彼に謂ふ、主よ、我胡爲れぞ、今爾に従ふ能はざる、我爾の爲に我が生命を損てん。三八 イイスス之に答へて曰へり、爾の生命を我が爲に損てんか、我誠、に誠、爾に語ぐ爲の鳴かざる前に爾三次我を諒まん。

然らずば、我爾等に言いしならん、我往きて、爾等の爲に所を備へん。三九 往きて、爾等の爲に所を備へば、復來りて、爾等を接けて、我に就かしめん、我が居る所に爾等も居らん爲なり。四〇 我が何處に往くを爾等知り、其道をも知る。四一 爾に謂ふ、主よ、我等は爾の何處に往くを知らず、焉ぞ其道を知るを得ん。四二 イイスス之に謂ふ、我は道なり、眞實なり、生命なり、人若し我に由らずば、父に來るなし。四三 爾等若し我を識らば、我が父をも識らん。今より爾等彼を識り、且彼を見たり。四四 爾に謂ふ、主よ、我等に父を示せ、然らば我等に足る。四五 イイスス之に謂ふ、爾等よ、我斯く久しく爾等と偕にするに、爾未だ我を識らざるか。我を見し者は、父を見しなり、如何ぞ爾我等に父を示せと云ふ。四六 我の父に居り、父の我に居ることを爾信ぜざるか。我が爾等に言ふ所の言は己に由りて

言ふに非ず、我に居る父は、彼事を行ふなり。 一 爾等、我が父に居り、父も我に居ると云ふを、我に信ぜよ。然らざるは、其事に縁りて我に信ぜよ。 二 我、誠に誠に爾等に語り、我を信する者は、我が行ふ所の事を彼も亦行はん、且此より大なる者を行はん、蓋我は我が父に往く。 三 爾等、凡そ我が名に因りて求めん者は、我之を行はん、父が子の中に榮せられん爲なり。 四 爾等の我が名に因りて求めん者は、我行はん。 五 爾等若し我を愛せば、我が誠を守れ。 六 我父に求めん彼は、別に憐愍者を爾等に與へて、世に爾等と偕に居らしめん。 七 眞實の神にして、世は彼を接くる能はず、其彼を見ず、又彼を識らざる故なり、爾等は彼を識る、蓋彼は爾等と偕に居り、且爾等の裏に在らん。 八 我爾等を捨て、孤子とせず、我爾等に來らん。 九 尙頃くして、世は復我を見ず、然れども、爾等我を見ん、蓋我は生く、爾等も亦生きん。 一〇 その日に、爾等は、我が父に居り、爾等の我に居り、我も爾等に居るを知らん。 一一 我が誠を有ちて之を守る者は、是れ、即我を愛する者なり、我を愛する者は、我が父に愛せられん、我も彼を愛し、且己を彼に顯さん。 一二 イウダ、「イスカリオト」ならざる者、彼に謂ふ、主よ、胡爲れぞ、爾は己を我等に顯

んささ欲して世には然せざる。三 イイスス之に答へて曰へり人若し我を愛せば我
 が言を守らん我が父も彼を愛せん且我等彼に來りて彼に住居を爲さん。二四我を愛
 せざる者は我が言を守らず爾等が聞く所の言は我が言に非ず乃我を遣し父の
 言なり。二五我爾等と借に在りて此を爾等に言へり。二六悔者即 聖神父が我の
 名に緣りて遣さんとする者は彼凡の事を爾等に效へ且我が爾等に言ひし事を皆爾
 等に記念せしめん。二七我平安を爾等に遣す我が平安を爾等に與ふ我が爾等に與ふ
 るは世の與ふるが如きに非ず爾等の心擾るゝ母れ又懼るゝ母れ。二八我往きて復爾
 等に來らん我が言ひしことは爾等之を聞けり爾等若し我を愛せば我父に往くこ
 云ひしに緣りて喜ばん蓋我が父は我より大なり。二九我今事の未だ成らざる先に爾
 等に言へり其成らん時に爾等の信ぜん爲なり。三〇我既に爾等と語らんこと多から
 ず蓋此の世の君は來る彼は我の中に有つ所なし。三一然れども世の我が父を愛し父
 が我に命ぜし如く行ふを知らん爲に起ちて此より往かん。

福音書 一
 我は眞の葡萄の樹我が父は園師なり。凡そ我に在りて實を結ばざる

枝は彼之を去り、凡そ實を結ぶ者は、之を深む、其益繁く實を結ばん爲なり。爾等既に我が爾等に語りし言に由りて深められたり。爾等我に居れ、我も爾等に居らん。枝若し葡萄の樹に居らずば、自ら實を結ぶ能はず、爾等も若し我に居らずば、亦是くの如し。我は葡萄の樹、爾等は枝なり、我に居り、我も彼に居る所の者は、斯の者多くの實を結ぶ、爾等我無くしては、何事をも行ふ能はず。人若し我に居らずば、枝の如く外に棄てられて枯る、此くの如き枝を集めて、火に投ず、此れ乃焚く。爾等若し我に居り、我が爾等に居らば、凡そ望む所を求めよ、然らば爾等に成らん。爾等若し多くの實を結ばり、我が父は此に由りて榮せられん、爾等乃我が門徒と爲らん。父の我を愛するが如く、我も爾等を愛す、爾等我が愛に居れ。一、爾等若し我が誠を守らば、我が愛に居らん、我も我が父の誠を守りて、其愛に居るが如し。二、我が此を爾等に語りしは、我が喜の爾等に居り、爾等の喜の全からん爲なり。三、我が爾等を愛するが如く、爾等相愛すべし、此れ我の誠なり。一、人其友の爲に生命を捐つるは、愛此より大なるはなし。二、爾等若し我が爾等に誠むる事を行はば、即我が友たり。三、我既に爾等を

僕わたくし曰いばす、盜たう僕わたくしは其主そのしゆの行なふ所ところを知らず、乃すなはち爾等なんぢらを友ともと曰いへり、凡およそ我われが父ちちより聞ききし所ところを爾等なんぢらに告つげしに縁よる。一六なんぢらわれ 爾等なんぢら我われを選えらびしに非あらず、我われは爾等なんぢらを選えらび爾等なんぢらを立たてたり、爾等なんぢらが往ゆきて、貨みを結むすび、且かつ爾等なんぢらの貨みの存ぞんせん爲ため、爾等なんぢらが凡およそ我われが名なに因よりて父ちちに求もとむる所ところは、彼爾等かれなんぢらに與あたへん爲ためなり。一七われこれ 我われ此これを爾等なんぢらに誡いましむ、爾等なんぢら相愛あひあいすべし。一八よ 世よ若もし爾等なんぢらを惡にくまば、爾等なんぢらに先まだちて我われを惡にくめり、と知しれ。一九なんぢら 爾等なんぢら若もし世よに屬ぞくせば、世よは己おのれに屬ぞくする者ものを愛あいせん、然しかれども爾等なんぢらは世よに屬ぞくせず、乃すなはち我われは爾等なんぢらを世よより選えらべり、此これに由よりて世よは爾等なんぢらを惡にくむ。二〇わ 我われが嘗かつて爾等なんぢらに僕わたくしは其主そのしゆより大おほい、と云いひし言ことばを憶おもへ。人ひと若もし我われを窟くわん逐ちくせば、爾等なんぢらをも窟くわん逐ちくせん。若もし我われが言ことばを守まもらば、爾等なんぢらの言ことばをも守まもらん。二一しか 然しかれども是これ皆みな我われの名なに因よりて爾等なんぢらに行なはらん、我われを遣つかはし、者ものを讒しらざる故ゆゑなり。二二われ 我われ若もし來きたりて、彼等かれらに言いはざりしならば、彼等かれら罪つみなからん、然しかれども今いまは其罪そのつみを辭じするを得えず。二三われ 我われを惡にくむ者ものは我われが父ちちをも惡にくむ。二四われ 我われ若もし彼等かれらの中うちに、他たの者ものの未いまだ爲なさざりし事ことを行なはざりしならば、彼等かれら罪つみなからん、然しかれども今いま彼等かれらは我われ及び我われが父ちちを已すでに見み且かつ惡にくめり。二五か 是こゝの如ごとく、彼等かれらの律法りつぽうに故ゆゑなくして、我われを惡にくめり、と讒しせる言ことば

應へり。二六 われが父より爾等に遣さんとする撫恤者眞實の神父より出づる者は來らん時彼等の事を證せん。二七 爾等も亦證せん始より我と偕に在るに因りてなり。

三 我が此を爾等に語りしは、爾等の眼がさらん爲なり。二八 人爾等を會堂より逐はん、且凡そ爾等を殺す者は、此を以て神に奉事すと意ふ時至らん。二九 此等の事を行はんとするは、父と我とを識らざるに因りてなり。三〇 然れども、我が此を爾等に語りしは、爾等が時の至るに及びて、我が此を爾等に言ひしを憶ひ起さん爲なり。初より此を爾等に言はざりしは、爾等と偕に在りし故なり。三一 今我を遣し、者に往く而して、爾等の中、我に何に往くか問ふ者なし。三二 惟我が此を爾等に語りしに因りて、憂は爾等の心に盈てり。三三 然れども、我眞を爾等に語り、我が往くは、爾等の爲に益あり、蓋若し我往かずば、撫恤者爾等に來らざらん、我往かば、彼を爾等に遣さん。三四 彼來りて、脚に於て、我に於て、審判に於て、世を責めん。三五 脚に於ては、其我を信ぜざるに因りてなり。一〇 我に於ては、我が父に往き、爾等復我を見ざらんとするに因りてなり。一一 審判に於ては、此の世の君の審判せられしに因りてなり。一二 我尙多く爾等に言ふべき事あれど

も爾等今容るゝ能はず。一三 然れども彼即眞實の神來らん時爾等を凡の眞實に導
かん蓋彼は己に由りて言はんことを非ず、乃聞かんことを事と言はん且將來の
事を爾等に示さん。一四 彼は我を榮せん蓋我に屬する者より取りて爾等に示さん。一
五 凡そ父の有つ所の者は我に屬す故に我彼は我に屬する者より取りて爾等に示さ
んと言へり。一六 頃して爾等我を見ざらん復頃して我を見ん蓋我父に往く。一七
是に於て其門徒の或者相語りて曰へり彼が我等に頃して我を見ざらん復頃して
我を見ん且我父に往くと言ふは是れ何ぞや。一八 故に曰へり彼が頃して云ふは此れ何
事ぞや我等其言ふ所を知らず。一九 イイススは其己に問はんことを欲するを知りて彼等
に問へり我が頃して我を見ざらん復頃して我を見んと言ひしを爾等相尋ねるか。
二〇 我誠に誠に爾等に語りて爾等は哭き哀まん世は喜ばん爾等は憂へん然れども爾
等の憂は變じて喜ばならん。二一 婦は産むに及びて愛を懐く其期至りたればなり然
れども子を生みし後は喜に因りて復苦を懐はず人世に生れたればなり。二二 是く
の如く爾等も今憂を懐く然れども我復爾等を見ん而して爾等の心は喜ばん且其

喜よろこびを爾等なんぢらより奪うばふ者ものなし。二三そのひ其日に於おて爾等我なんぢらわれに問こふ所ところなからん、我誠われまことに誠まことに爾等なんぢらに語つく、凡おそ我われが名なに因よりて父ちちに求もとむる所ところは、彼爾等かれなんぢらに與あへん。二四いま今に至いたるまで爾等なんぢら我われが名なに因よりて求もとむる所ところなかりき、求めよ、然しからば得えん、爾等なんぢらの喜よろこびの全まからん爲ためなり。二五われたごへ我われを以もつて此等これらの事ことを爾等なんぢらに語かたれり、然しかれども復また替たごへを以もつて爾等なんぢらに語かたらず、乃すなはち明あきらかに父ちちの事ことを爾等なんぢらに示しめす時とき至いたらん。二六そのひ其日に於おて爾等我なんぢらわれが名なに因よりて求もとめん、而しかうして我爾等われなんぢらの爲ために父ちちに願ねがはんと曰いはず、二七りたしち蓋あ父ちち親つから爾等なんぢらを愛あひ、爾等なんぢらが我われを愛あひ、且かつ我われが爾かみより出いでしこさを信しんぜしに因よりてなり。二八われちち我われは父ちちより出いで、世よに來きたれり、復また世よを離はなれて、父ちちに往ゆく。二九そのしん其門徒かみ彼かれに謂いふ、祿みよ、今爾等いまなんぢらは明あきらかに語かたれり、一ひとも替たごへを言いはず。三〇いまわれら今我等いまわれらは、爾等なんぢらが知しらざる所ところなく、且かつ人ひとの爾なんぢに問こふを待またざるを知る、此これに縁よりて我等われらは、爾等なんぢらが神かみより出いでたるを信しんず。三一イスイイス、彼等かれらに答こたへて曰いへり、今信いましんずるか、三二み親かみよ、時ときは至いたる、今已いまに至いたれり、爾等なんぢら各おの各おの其所そのところに散さんじて、我われを獨ひとり遣つかさん、然しかれども我獨われひとりに非あらず、蓋あ父ちち我われと偕ともに在あるなり。三三われ我われが此これを爾等なんぢらに語かたし、爾等なんぢらが我われに在ありて平安へいあんを有あらん爲ためなり。世よに在ありて爾等なんぢら患難くわんなんを受けん、然しかれども勇いさめよ、我われは世よに勝かてり。

ヨハネの福音

一 イイスス此を言ひ究りて其自を天に擧げて曰へり父よ時至れり爾の

子を榮せよ爾の子も爾を榮せん爲なり。二 爾は彼に凡の肉體の上の權を與へた

り彼が凡を爾の彼に與へし者に永遠の生命を與へん爲なり。三 永遠の生命とは即

ち爾獨一の眞の神及び爾が遣し、イイススバリスドスを知るこそ是なり。四 我已に

爾を地に榮し爾が我に與へて行はしむる事を成せり。五 今爾父よ我をじて爾に在り

て榮を享けしめよ、即ち創世の先に我が爾に在りて有ちたる榮なり。六 爾が世の中よ

り我に與へし人々に我爾の名を顯せり、彼等は爾に屬し、爾彼等を我に與へたり、彼等

爾の言を守れり。七 今彼等は凡そ爾が我に與へし者皆爾よりするを知れり。八 爾は

爾が我に與へし言を彼等に與へたり、彼等之を受け、且我が爾より出でしを彼に知り、

又爾が我を遣ししを信ぜり。九 我は彼等の爲に祈る世の爲に祈らず、乃ち爾が我に與

へし者の爲なり、蓋彼等は爾に屬す。一〇 凡そ我に屬する者は爾に屬し、爾に屬する者

は我に屬す、我は彼等の中に榮せられたり。一一 我は是より世に在らず、彼等は世に在

り、我爾に往く、聖なる父よ、爾が我に與へし者は爾の名に因りて之を守りて、彼等を我

等の如く二と爲らしめよ。一三我彼等と偕に世に在りし時、爾の名に因りて彼等を守
 れり、爾が我に與へし者は、我之を守り、其中一も亡びず、惟沈淪の子は亡びたり、聖者の
 應ふを致す。一三我爾に往く我世に在りて之を言ふ、彼等が己の中に我の余き喜
 を有たん爲なり。一四我爾の言を彼等に與へたり、而して世は彼等を惡めり、若彼等は
 世に屬せず、我の世に屬せざるが如し。一五我が祈るは、爾が彼等を世より取らん爲に
 非ず、乃、彼等を惡より護らん爲なり。一六彼等は世に屬せず、我の世に屬せざるが如
 し。一七爾の眞實を以て、彼等を聖にせよ、爾の言は眞實なり。一八爾が我を世に遣し
 如く、我も彼等を世に遣せり。一九我彼等の爲に己を聖にす、彼等も眞實を以て聖にせ
 られん爲なり。二〇我惟彼等の爲にのみ祈るに非ず、乃、亦彼等の言に録りて我を信
 する者の爲なり。二一願はくは皆一と爲らん、父よ、爾が我に在り、我も爾に在るが如く、
 願はくは彼等も我等に在りて一と爲らん、世が爾の我を遣し、信せん爲なり。二二
 亦爾が我に與へし榮を、我彼等に與へたり、我等の一なるが如く、彼等の一と爲らん爲
 なり。二三我は彼等に在り、爾は我に在り、彼等をして一に成全せしめん爲、且世が爾の

我を遣し又我を愛する如く彼等を受すること知らん爲なり。二四
父よ我は爾が我に與へし者の我が居る所に我と偕に居らんことを望む彼等が我が榮を見ん爲なり。二五
即爾が我に與へし榮なり、蓋爾は創世の先より我を愛せり。二六
我なる父よ世は爾を讎らす然れども我は爾を讎れり彼等も爾が我を遣しを讎れり。二七
我爾の名を彼等に示せり復之を示さん爾が我を愛する愛は彼等に在り我も彼等に在らん爲なり。

第二十八章

一 イイスス此を首ひて後其門徒と偕にゲドロン河の外に出でたり彼處に圍あり彼及び彼の門徒は其中に入れり。二 彼を賣るイウタも此の處を讎れり蓋イイスス 屢其門徒と偕に彼處に集りたり。三 故にイウタは兵卒一隊を及び司祭諸長とろりセイ等より下吏を受けて、炬と燈と兵器とを以て此の處に來れり。四 イイススは凡そ己に及ぼんとする事を知りて、出で、彼等に謂へり、爾等誰を尋ぬるか。五 彼に答へて曰へり、イイススナソレイなり。イイスス彼等に謂ふ、我は是なり。彼を賣るイウタも彼等と偕に立てり。六 イイススが我は是なりと首ひし時彼等後へ退きて地

に仆れたり。復彼等に問へり、爾等誰を尋ねるか。彼等曰へり、イオニスナソレイナリ。
 一 イオニス答へて曰へり、我爾等に我は是なりと謂へり、故に若し我を尋ねるならば、
 此の輩を容して去らしめよ、彼が言ひし言に應ふを致す云く、爾が我に與へし者
 の中、我一人をも亡さざりきと。二 時にシモンペトル、劍ありて之を抜き、司祭長の僕
 を撃ちて其右の耳を削げり、僕の名はマルホナリ。三 イオニス、ペトルに謂へり、爾の
 劍を鞘に納めよ、父の我に與へし露は、我等之を飲まざらんや。四 是に於て、兵卒三千
 夫長、イウテヤの下吏、イオニスを執へて之を縛り、五 先づ之をアンナに曳き至
 れり、爾彼は是の司祭長たるカイアスの岳父ナリ。六 カイアスは、即イウテヤ人
 に謂りて、一人民の爲に死するは益ありと云ひし人ナリ。七 シモンペトル及び他の
 一人の門徒、イオニスに従へり、此の門徒は司祭長の識る所の者にして、イオニスも
 司祭長の中庭に入り、八 ペトルは門の外に立てり、後司祭長の識る所の門徒は出
 て、門を守る女に言ひて、ペトルを内に入れたり。九 是に於て、門を守る婢、ペトルに
 謂ふ、爾も此の人の門徒の一に非ずや。彼曰く、然らず。一〇 時に諸僕及び下吏等、寒きに

因りて火を焚き、彼に立ちて、煖まり、ペトルも亦彼等と偕に立ちて煖まれり。一九 司祭長は、イイススに其門徒及び其教の事を問へり。二〇 イイスス彼に答へて曰へり、我明に世に語れり、我常に會堂及び殿、即イウヂヤ人の恒に集る所に於て、汝を宣べて、隠に語りしことなし。二一 何ぞ我に問ふ隠きし者に、我が彼等に何を語りしを問へ、視よ、此の輩は我が言ひし事を知る。二二 彼が此を言ひし時、旁に立て、方下吏の一人、イイススの頬を批ちて曰へり、爾は司祭長に斯く對ふるぞ。二三 イイスス彼に答へて曰へり、若し我が言ひし事恐しくば、其隠しき事を證せよ、若し善くば、何ぞ我を批つ。二四 アンナは彼を縛りたるまゝ、司祭長ガイアスに送れり。二五 時にシモンペトル立ちて煖まれり。或彼に謂へり、爾も其門徒の一に非ずや。彼諒みて曰へり、然らず。二六 司祭長の僕の一、ペトルが耳を削ぎたる者の親戚曰く、我爾が彼と偕に團に在るを見しに非ずや。二七 ペトル復諒みたり、怒、鵠、鳴けり。二八 彼等イイススを曳きて、ガイアスより公廨に至れり。時已に平旦なり、彼等は公廨に入らざりき、汚されざらん爲、即逾越節筵を食するを得ん爲なり。二九 ヒヲト出で、彼等に謂へり、爾等何事を以て此の人

を訟ふるか。三〇 答へて曰へり、彼若し惡を行ふ者に非ずば、我等彼を爾に解さざりしならん。三一 ピラト彼等に謂へり、爾等彼を取りて、爾等の律法に循ひて彼を審判せよ。イウテヤ人之に謂へり、我等には人を死に處する權なし。三二 是れイイススが如何なる死を以て死なんとするを指して言ひし言に應ふを致す。三三 其時ピラト復公階に入り、イイススを召して、彼に謂へり、爾はイウテヤ人の王なるか。三四 イイスス彼に答へて曰へり、爾已に由りて之を言ふか、抑他の者が我の事を爾に言ひしか。三五 ピラト答へて曰へり、我豈イウテヤ人ならんや、爾の民と司祭諸長とは爾を我に解せり、爾何を爲ししか。三六 イイスス答へて曰へり、我が國は此の世に屬せず者じ、我が國此の世に屬せば、我が諸儀は取ひて、我がイウテヤ人に付さるゝを免れしめしならん、然れども今我が國は此に屬せざるなり。三七 ピラト彼に謂へり、然らば爾は王なるか。イイスス答へて曰へり、爾言ふ、我は王なり。我此が爲に生れ、此が爲に世に來れり、即眞實の事を證せん爲なり、凡そ眞實に屬する者は、我の聲を聽く。三八 ピラト彼に謂ふ、眞實とは何ぞや。此を言ひて後復出で、イウテヤ人に謂ふ、我は彼に「しも爾あるを見ず。三九

然るに爾等には、逾越節に於て我が爾等に一人を釋す例あり故に我が爾等にイウテ
ヤ人の王を釋さんことを欲する可。四〇衆人復號びて曰へり斯の人に非ず、乃リ
ラウアをシラウアは盜賊なり。

一其時ピラトイイススを取りて鞭てり。二兵卒練の冕を編みて、其首に
冠らせ、紫の袍を彼に衣せて、三曰へり、イウテヤ人の王、慶べよ、且其頰を批てり。四ピ
ラト復外に出で、彼等に謂ふ、視よ、我彼を曳きて、爾等の前に出す、爾等が、我の彼に
も脚あるを見ざることを、知らん爲なり。五イイスス練の冕を冠り、紫の袍を衣て、
外に出でたり。ピラト彼等に謂ふ、視よ、人なり。六司祭諸長と下吏等と彼を見て、號びて
曰へり、十字架に釘せよ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ、爾等彼を取りて、十字架に
釘せよ、蓋我彼に脚あるを見ず。セ、イウテヤ人答へて曰へり、我等に律法あり、我が律法
に据れば、彼は死すべし、蓋己を神の子と爲せり。八ピラト此の言を聞きて、益懼れた
り。九、復公麻に入りて、イイススに謂ふ、爾は突れよりする。然れどもイイスス彼に答を
爲さざりき。一〇ピラト彼に謂ふ、我に言はざる可、爾蓋我に爾を十字架に釘する權あ

り亦爾を釋す權あるを知らざるか。一
 しに非されば爾我に對して一も權あるなし故に我を爾に解しく者の罪は更に大なり。二三
 是よりピラト彼を釋さん謀れり。然れどもイウテヤ人號びて曰へり爾若し此の人を釋さばケサリの友に非ず凡そ己を王と爲す者はケサリに叛く者なり。二四
 ピラト此の言を聞きてイイススを外に曳き出し審判座に「リスストウカトシ」エウレイの言にカウラスと名づくる所に坐せり。一四
 其日は逾越節の節日にして時は約六時なり。ピラトイウテヤ人に謂ふ視よ爾等の王なり。一五
 然れども彼等號びて曰へり之を去れ之を去れ十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ爾等の王を釘せんか。司祭諸長對へて曰へり我等にはケサリの外に王なし。一六
 其時ピラト彼を十字架に釘せんと爲し付せり。彼等イイススを取りて曳き行けり。一七
 彼己の十字架を預ひ出で、曠野の處エウレイの言に「エルゴス」と名づくる所に至れり。一八
 彼處に在りて彼を十字架に釘せり又二人を彼と偕に釘せり。一は右一は左、イイスス中に在り。一九
 ピラト標を書して十字架の上に置けり書して云く、イイススナザレナイウテヤ人の王と。二〇
 イウテ

ヤ人の多くの者此の標を預めり、蓋イイススの釘せられし處は城に近かりき其標エ
ウレイケレテヤロマの文を以て書されたり。二二 イウテヤ人の司祭諸長はピラトに
謂へり、イウテヤ人の王を以て書す勿れ、乃彼自ら、或はイウテヤ人の王なりと云へり
書せ。二三 ピラト答へて曰へり、我が書し、こゝは書せり。二四 兵卒はイイススを釘せ
し後、其外交を取り、之を四分して、各一分を得たり、又裏衣を取り、裏衣は縫なく上
より渾く縫りたる者なり。二五 故に彼等相語りて曰へり、之を裂かすして、之が爲に聞
すべし、誰か之を得るを親ん、是れ聖書に録して共に我が外衣を分ち、我が裏衣を聞せ
り、と云ふに應ふを致す、兵卒新く行へり。二六 イイススの母と母の姉妹、クレサバの妻
マリヤと、マリヤ「マカゲリナ」と其十字架の傍に立てり。二七 イイススは其母及び愛す
る所の門徒の此に立てるを見て、母に謂ふ、婦よ、親よ、爾の子なり。二八 次ぎて門徒に謂
ふ、親よ、爾の母なり。其時より此の門徒彼を己の家に取れり。二九 厥後イイスス一切の
事已に成りたるを知りて、聖書に應ひて曰ふ、我渴く。三〇 彼處に醋の滿ちたる器の匜
けりあり、兵卒海城を踏に漬し、牛膝草に束れて、彼の口に遞れり。三一 イイスス醋を受

けし後曰く成れり。乃首を俯して神を付せり。三二其日は備節日にして彼の安息日
は大なる日なるに因りて、イウテヤ人は安息日に屍を十字架に留めざらん爲ピラト
に、彼等の屍を折りて、屍を取り下さんことを請へり。三三故に兵卒來りて、彼を借に十
字架に釘せられし第一の者の屍を折り、第二の者にも亦然せり。三四 イイススに來り
て、其已に死したるを見れば、彼の屍を折らざりき。三五 然れども一人の兵卒、戈を以
て、其脊を刺せり、血と水と出でたり。三六 見し者は證を作せり、其證は眞なり、彼は言
ふ所の眞なるを知る、爾等をして信ぜしめん爲なり。三七 蓋斯の事の成りしは、聖書の
應ふを致す、云く其骨は折られざらん。三八 聖書の他篇に又云ふ、彼等は其刺し、者
を觀ん。三九 其後アリマサヤの人イオシフ、イイススの門徒にして、唯イウテヤ人を
懼るゝに因りて、自ら隠したる者は、ピラトにイイススの屍を取るを許さんことを請
へり、ピラト之を許したれば、彼來りて、イイススの屍を取れり。四〇 又ニコラム、夜
間イイススに來りし者は、没薬と蘆薈とを合せたる者、約百斤を搗へて來れり。四一
彼等イイススの屍を取り、布を以て香料と與に之を裹めり、イウテヤ人の葬の例の如

し。一彼が十字架に釘せられし所に圍あり圍の中に未だ替て人の葬られざる新なる墓あり。二其日はイウテヤ入の備節日なるに因りて、イエスを彼處に置きたり。墓の近かりし故なり。

一七日の首の日朝尙味き時マリヤ「マグダリナ」墓に來りて石の墓より移されたるを見る。二故に趨りて、シモンペトル及びイエスの愛せし他の門徒に來りて彼等に謂ふ、人主を墓より取れり我等其何處に彼を置きしを知らず。三ペトル及び他の門徒出で、墓に往けり。二人共に趨りしが、他の門徒はペトルより疾く趨りて先に墓に來れり。四俯して布の置けるを見たれども入らざりき。五シモンペトル彼に次ぎて來り墓に入りて布の置けるを見、又其首を獲みし巾の布と共に在らず乃捲きて別に他の處に置けるを見たり。六其時先に墓に來りし他の門徒も入りて見而して信ぜり。七蓋彼等は未だ其死より復活すべき事の聖書に載せたるを知らざりき。八是に於て二の門徒復己の所に歸れり。九マリヤは墓の外に立ちて哭けり。哭く時墓に俯して、一二の天使が白衣にしてイエスの屍の置かれし處に、一は首に一は

足に坐せるを見る。一三 彼等之に謂ふ、婦よ何ぞ哭ける。彼曰く、人我が主を取れり、我其
 何處に彼を置きしを知らず。一四 此を言ひて、願みて、イエスの立てるを見る、然れど
 も其イエスマなるを知らざりき。一五 イエスマ彼に謂ふ、婦よ何ぞ哭ける、誰を尋ねる
 か。婦は聞丁なりと意ひて之に謂ふ、君よ若し爾彼を移し、ならば何處に置きしを我
 に告げよ、我彼を取らん。一六 イエスマ之に謂ふ、マリアよ、婦、願みて彼に謂ふ、マリア
 二 爾すれば夫子なり。一七 イエスマ之に謂ふ、我に謂る勿れ、蓋我未だ我が父に升らざ
 りき、乃往きて、我が兄弟に告げて曰、我は我が父及び爾等の父、我が姉及び爾等の
 姉に升る。一八 マリヤ「マリアダリナ」往きて、門徒に己が主を見しこと及び其彼に之を
 言ひしことを告げたり。一九 是の日、即七日の首の日、既に墓れて門徒の集れる處の
 門、イエスマ十人を煙るいに因りて、閉ぢたるに、イエスマ來りて、中に立ちて、彼等に謂ふ、
 爾等に平安。二〇 此を言ひて、彼等に己の手足及び脊を示せり。門徒主を見て喜べり。二
 一 イエスマ復彼等に謂へり、爾等に平安、父が我を遣し、如く我も亦爾等を遣す。二二
 此を言ひて、氣を嘘きて、彼等に謂ふ、聖神を受けよ。二三 爾等人に其脚を踏さば、則釋

さる人ひとに其罪そのつみを留めとどめば則留めらる。二四 イイススの來りし時とき十二の二なるふたマ稱し
て云いふ者もの彼等かれらと偕ともに在らざりき。二五 彼の門徒かかれ彼に謂いへり我等われら主しゆを見たり。
然しかれども彼かれは之これに謂いへり我若われもし其手そのてに釘くわの迹あとを見ず我われが指ゆびを釘くわの迹あとに入れず我われが
手てを其脊そのわきに入いれずば信しんぜざらん。二六 八日やつかを越こへて門徒かかれ復また内に在りマも彼等かれらと偕とも
にせり。門閉かふぢたるに、イイスス來りて彼等かれらの中に立ちて曰いへり爾等なんぢらに平安へいあん。二七 次つぎ
てマに謂いふ爾なんぢの指ゆびを此こゝに伸のべて我われが手てを視みよ爾なんぢの手てを伸のべて我われが脊わきに入いれよ信しん
ぜざる勿なれ乃信すなはちしんぜよ。二八 マ答こたへて彼かれに謂いへり我われが主しゆ我われが神かみよ。二九 イイスス
彼かれに謂いふ爾なんぢは我われを見みしに緣よりて信しんぜり見みずして信しんする者ものは福さいはひなり。三〇 イイススは
其門徒そのもんたの前に於おいて亦他またたの多おほくの奇蹟きせき此こゝの番しよに載のせざる者ものを行おこなへり。三一 此こゝを載のせた
るは爾等なんぢらがイイススは神かみの子こハリストスなりと信しんじ且信かつしんじて其名そのなに因よりて生命いのちを
得えん爲ためなり。

【三三】 一厥後そののちイイスス復また其門徒そのもんたに云いふマアタの海濱うみべに現あらはれたり其現そのあらはれた
ること左ひだりの如ごとし。二 シモンペトルしもんマ稱しょうして云いふ者ものガリラヤガリラヤのカナカナのナズ

ナイル、ゼラタイの二子、及び他の二人の門徒共に在り。三 シモンペトル彼等に謂ふ我
往きて漁せん。彼等曰ふ、我等も爾等と偕に往かん。出で、直に舟に登りしが是の夜は獲
る所なかりき。四 既に明けて、イイスス岸に立てり、然るに門徒は其イイススたるを知
らざりき。五 イイスス彼等に謂ふ、小子よ、爾等に食ふべき物あるか。彼等答へて曰へり、
無し。彼は之に謂へり、網を舟の右に施せ、然らば得ん。彼等施し、之を擧ぐるこ
能はざりき、魚の多き故なり。六 時にイイススの愛せし所の門徒ペトルに謂ふ、是れ主
なり。シモンペトル是れ主なりと聞き、愕なりしに因りて、衣を束れて、海に投ぜり。八
他の門徒は舟に乗り、魚の盈てる網を曳きて至れり、蓋地を離るゝこと遠からず、約
二百尺なり。九 地に上りし時燃わたる火其上に置きたる魚及び餅あぶを見る。一〇 イ
イスス彼等に謂ふ、今爾等が獲たる魚數尾を攜へ來れ。一一 シモンペトル往きて、網を
地に曳き上げたり、中に大なる魚一百五十三尾盈てり、斯く多しと、網は裂けざり
き。一二 イイスス彼等に謂ふ、來りて食せよ。門徒一も爾は誰たるか、問ふことな敢てせ
ざりき、其主たるを知らばなり。一三 イイスス前みて餅を取りて、彼等に與ふ、魚も亦然

り。一四 イイススが死より復活して後、其門徒に現れしこと此れ其三なり。一五 彼等の食せし時、イイススシモンペトルに謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛すること彼等に過ぎたるか。彼曰ふ、主よ、然り、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。一六 第二次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛すること彼等に過ぎたるか。又第二次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛すること彼等に過ぎたるか。然り、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。一七 第三次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛すること彼等に過ぎたるか。ペトル第三次に爾我を愛すること、謂ひしに因りて憂ひて、彼に謂へり、主よ、爾は知らざる所なし、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。一八 我誠に誠に爾に謂く、爾少き時に於て、自ら帯を束れて欲する所に行けり、老ゆるに及びて、爾の手を伸べん、他人爾を束れて、爾が欲せざる所に曳かん。一九 此を言ひしは、ペトルが若何なる死を以て神を榮せんことを示せるなり。言ひ竟りて、又彼に謂ふ、我に従へ。二〇 ペトル願みて、イイススの愛せし所の門徒の後に従ふを見る、即 晩餐の時、イイススの背に倚りて、主よ、爾を賣る者は誰ぞと云ひし者なり。二一 ペトル彼を見て、イイススに謂ふ、主よ、斯の人は如何。二二

イエスス彼に謂ふ、我若し彼が存して、我が来るを待つことを欲せば、爾と何ぞ與らん、爾我に従へ。 二三 是に於て此の言は兄弟の間に散じて、此の門徒は死せざらんと言へり。 然れども、イエススは彼に、死せざらんと言ひしに非ず、乃我若し彼が存して、我が来るを待つことを欲せば、爾と何ぞ與らんと言ひしなり。 二四 此等の事を證し、且之を書し、省は、即此の門徒なり、我等は彼の証の眞なるを知る。 二五 イエススの行ひし事、他に亦多く有り、若し一一之を書さば、我意ふ、其書は世載するに勝へざらん、「アミ

衣にして彼等の前に立ちて、^{二一}曰へり、ガリレヤの人よ、何ぞ天を仰ぎて立てる爾等より天に上りし此のイイススは爾等が其天に升るを見し如く、是くの如く復來らん。

^{二二}其時彼等は橄欖山を名づくる山よりイエエルサリムに歸れり、此の山はイエエルサリムに近くして安息日に行く程なり。

^{二三}既に來りて樓に登れり、彼處に留る者は、ペトル及びイアエフ、イオアン及びアンドレイ、ナルブ及びマ、ゾルフ、ロメイ及びマトス、イアルスイの子、イアエフ及びシモン、クロト及びイアエフの兄弟、イウダなり。

^{二四}彼等皆心を一にして、婦等、イイススの母マリヤ、彼の兄弟、僮に祈禱、祈願を務めたり。

^{二五}彼の日に於て、ペトルは門徒（共に集れる者約百二十人）の中に立ちて曰へり、兄弟よ、聖神がダウダの口を以て、イイススを執へし者の導者を爲りたるイウダを指して預言せし書は應ふべかりしなり。

^{二七}彼は我等の列に加へられて、此の義の國を受けたり。

^{二八}然れども不義の價を以て田を買ひ、身落ちし時、腹裂けて其腸皆流れたり。

^{二九}此れ凡そイエエルサリムに居る者の知る所と爲りて、此の田を彼等の方言に「アケルダマ」即血の田と稱ふるに至れり。

^{三〇}蓋聖詠の書に録せるあり、云く、彼

の住所は虚しくなりて、其中に居る者なかるべし。又其職位は、他人之を受くべし。二
 一、是の故に主イエスの我等の中に出入せし時、二三 即イオアンの洗禮より始め、
 其我等を離れて、升りし日に至るまで、常に我等と偕に在りし者の中、一人我等と同じ
 く其復活の證者と爲るべきなり。二四 是に於て、二人、即イオアシア、稱して「アルサワ
 と云ひ、又イウストと稱へられし者及びマトスイを擧げて、二五 祈りて曰へり、主萬人
 の心を識る者よ、爾は此の二人の中、爾が選びたる一人を示して、二六 此の奉事及び使
 徒職の閑を承けしめ給へ。蓋イウタは此の職を離れて、其所に往けり。二七 是に於て、彼
 等に圖を與へしに、圖はマトスイに爲れり、彼乃十一の使徒の列に加へられたり。
第三章 五旬節の日至りて、使徒皆心を一にして共に在り。一 忽天より聲ありて、
 迅しき風の度るが如し、彼等が坐せる所の家に滿てり。二 岐れたる舌火の如き者、彼等
 に現れて、各人に止れり。三 彼等皆聖神に滿てられて、異方の言を言ひ始めたり、神の彼
 等に言はしめしが如し。四 時に敬虔なるイウテヤ人、天下の諸國より來りて、イエルサ
 リムに居る者あり。此の聲の作りし時、大衆集りて、聴きたり、蓋各己の方言を語

るを聞けり。皆駭き、凡奇みて互に言へり、視よ、此の語る者は皆ガリレヤ人に非ずや。
如何にして我等は各我が生れし所の方言を聞くか。我等はベルスヤ、ミナヤ、エ
ラムの人、メソポタミヤ、イウテヤ及び九バドキヤ、ポント及びアシヤ、二〇
ブリギヤ及び
ビメムスリヤ、エギプト及びキリチヤに近きリウヤの地方に居る者、ロマより來りし
者、イウテヤ人及び進教者、二一
クリト及びアラウヤの人たるに、如何にして彼等が我
が方言を以て神の大用を語るを聞くか。二三
皆驚き訝りて互に言へり、是れ何の意ぞ。
一三
又或者は嘲りて曰へり、彼等は甜き酒に酔ひなれり。一四
ペトル十一と偕に立ち
て聲を揚げて、彼等に謂へり、イウテヤの人及び凡そイエルサリムに居る者よ、此れ爾
等の知る所と爲るべし、我が首に耳を傾けよ。一五
彼等は爾等の意ふ如く、醉へるに非
ず、蓋今は日の第三時なり。一六
此れ即預言者イオイリに因りて言ひし所なり。一七
主曰く、末の日に於て、我は我が神を以て凡の肉體に注がんと、爾等の子女は預言し、爾等
の少き者は異象を見、爾等の老いたる者は夢の兆を見ん。一八
彼の日に於て、我は我が
神を以て、我が僕及び我が婢に注がんと、則彼等は預言せん。一九
我奇蹟を上なる天に、

休徴を下なる地に施さん、血さ火と烟とあらん。二〇日は降冥に月は血に變ぜん、此れ主の大にして光榮なる日の未だ來らざる先に在らん。二一凡そ主の名を離はん者は救を得ん。二三イメウアイリの人よ、此の言を聴け、イイススナゾレイ、即神が彼を以て爾等の中に於て、爾等自らも知れる如く行ひし、眞能と奇蹟と休徴とに因りて、神より爾等に證せられし人。二四神の定めたる言と預知とに因りて解されし者を、爾等取りて、不法の者の手を以て十字架に釘して殺せり。二五然れども神は死の標を釋きて、彼を復活せしめたり、死は彼を留むること能はざりしに因る。二六蓋ダワドは彼を指して曰く、我恒に主を我が前に見たり、蓋彼は我が右に在り、我が動かざらん爲なり。二七此に因りて我が心は喜び、我が舌は樂めり、我が肉體も望に安んぜん、二八爾が靈を地獄に遠さず、爾の聖者に朽つるを見ざらしめん。二九爾我に生命の道を示せり、爾我を爾の前の前に於て喜に満たしめん。三〇兄弟よ、我太祖ダワドの事を敢て爾等に言ふべし、彼は死して葬られ、其墓は今日に至るまで我等の中に在り。三一然れども彼は預言者にして、神が彼に誓ひて、其裔の中より、肉體に依りて、メリストスを

興して、其位に坐せしめんことを約せしを知りて、三一先見して、ハリストスの復活を
 指じて、彼の靈は地獄に遠されず、彼の肉體は朽つるを見ざりきと云へり。三二此のイ
 イスを辨は復活せしめたり、我等は昔其證者なり。三三故に彼は神の右の手にて舉
 げられて、父より許約せられし聖神を受けて、此の今爾等が見る所、聞く所の者を注
 げり。三四蓋、ダマドは天に升らざりき、然れども自ら言ふ、主我が主に謂へり、爾我が右
 に坐して、三五我が爾の敵を爾の足の癩さなすに迄れき。三六然らばイスラエルの全
 家、確に知るべし、爾等が十字架に釘せし此のイイスは、神彼を主と爲し、ハリスト
 スと爲し、三七こゝを。彼等之を聞き、心刺さるゝが如し、ペトル及び他の使徒に謂
 へり、兄弟よ、我等何を爲すべきか。三八ペトル彼等に謂へり、悔改せよ、而して、各、罪の
 赦の爲に、イイスマリス、トスの名に因りて、洗を受くべし、然らば、聖神の賜を受けん。
三九蓋許約は爾等及び爾等の諸子、又凡の遠き人、即主我が神が召さんとする者に
 属す。四〇其他多くの言を以て證して、彼等に勸めて曰へり、此の邪なる世より、救はれ
 よと。四一故に喜びて、彼の言を納れし者は、洗を受けたり。是の日、門徒に加はりし者約

三千人なり。四二 彼等は恒に使徒の訓を受け、交際を爲し、餅を擧ぎ、祈禱を行へり。四三
人の心、皆畏を懼けり、多くの奇蹟と休徴とは、使徒に由りて、イエルサリムに行はれ
たり。四四 信する者皆相集りて、共に諸物を用ゐたり。四五 産業と所有とを擧ぎ、各人の
需用に従ひて、之を衆に分てり。四六 日日心を一つにして、殿に在り、家に餅を擧ぎて、歡
喜と村直なる心を以て食を食ひ、四七 隣を讚美し、衆民の親愛を獲たり。主は教はる
る者を日日教會に加へたり。

第九時 第九時の祈禱の時、ペトル及びイオアン共に殿に升れり。二は母の胎よりし
て跛なる者あり、人日日彼を昇きて、美門と名づくる殿の門の側に置けり、殿に入る者
に施濟を乞はん爲なり。三 彼はペトル及びイオアンが殿に入らんとするを見て、施濟
を乞へり。四 ペトルはイオアンと與に彼に目を注ぎて曰へり、我等を觀よ。五 彼は得る
所あらんと思ひて、然彼等を觀たり。六 ペトル曰へり、金銀は我に無し、然れども我に有
る者を帯に與ふ、イエススハリストスナゾレイの名に因りて、立ちて歩め。七 乃其右
の手を執りて、彼を起したれば、其足と踝と直に健くなれり。八 彼は踊りて立ち、且歩み

彼等も偕に殿に入りて、歩み且躍り、神を讚美せり。民皆彼が歩みて、神を讚美するを見、一〇其紫殿の美門に坐して、施濟を乞ひし者なるを識りて、彼に成りしことを甚
駭き奇めり。一、愈されたる跛者が、ペトル及びイオアンを離れざるに因りて、駭ける
民は皆彼等に、ソロモンの廊名づくる所に、趨り就けり。二三、ペトル之を見て、民に語
りて曰へり、イスラエリの人人よ、何ぞ此を奇きする抑何ぞ我等に目を注ぐこと、我等
が己の能力或は敬虔を以て、彼を歩ませし如くする。二三、アウラアム、イサアク、イブ
ラの神、我が先祖の神は、其子イイス、爾等が解し、者、ピラトが彼を釋さんと擬せし
時、爾等が其面の前に拒みし者を榮せり。一四、爾等は聖なる者、義なる者を拒み、人を殺
し、者を爾等に賜はんことを求めて、一五、生命の宰を殺せり。神は彼を死より復活せ
しめたり、我等は其證者なり。一六、彼の名を信するに頼りて、其名は、爾等が見る所識る
所の、此の人を健くせり、彼に因る信は、此の人に、爾等衆の前に、此の全愈を與へたり。
一七、兄弟よ、我今知る、爾等は知らざるに由りて、之を行へり、爾等の有用も亦然り。一八、
神は其諸預言者の口を以て、ハリストスの苦を受けんことを預言せし如く、斯く應は

せたり。一九故に爾等悔改轉移して爾等の諸罪の抹さるゝを救せ。二〇主の顔より安
 慰の時の來らん爲彼が爾等に預定せられしハリストスイエスを遣さん爲なり。
 二一蓋神が古世より其聖なる諸預言者の口を以て言ひしことの悉く振興せられん
 時に至るまで天は彼を受くべきなり。二二モイセイは先祖に誦へり、主爾等の神は爾
 等の兄弟の中より我の若き預言者を爾等に起さん凡そ彼が爾等に誦らんとするこ
 とは彼に聽け。二三凡そ此の預言者に聽かざる者は民の中より滅されん。二四サム
 イルより以來凡そ語りし所の預言者は亦此の日を預言せり。二五爾等は諸預言者及
 び許約の諸子なり、即神がアブラムに、爾の裔に由りて地の萬族は祝福せられん
 云ひて爾等の先祖に賜ひし許約なり。二六神は其子イエスを復活せしめて、先づ爾
 等に彼を遣せり爾等に祝福して、爾等各人を諸惡より轉せしめん爲なり。
第四章 彼等が民に誦れる時、諸司祭と殿の司とサドケイ等と就きて、二彼等が民
 を救へ、及びイエスを引きて、死よりの復活を傳ふるに因りて慍れり。三乃、彼等に
 手を掲きて、且に至るまで彼等を守らしめたり、時已に暮れたればなり。四然れども言

を聽きし者の中多く信ぜり、其數約五千人なり。明日彼等の有司、長老、學士等、及び
司祭長アンナ、又カイアス、イオアン、アレキサンドル、其他司祭長の族人は、イエエルサリ
ムに集り、使徒の中に立て、問へり、爾等は何の能、或は何の名を以て、此を行ひしか。
其時、ペトル、聖神に滿てられて、彼等に謂へり、民の司有及び、イメライリの長老等、
若し今日我等病みたる人に行ひし善事に就きて、其如何に愈されしを訊されば、
○ 則 爾等衆及び、全イメライリ民は知るべし、イイスス、ハリストス、ナゾレイ、爾等
が十字架に釘せし者、神が死より復活せしめし者の名に由りて、即 彼に由りて、此の
人、健にして、爾等の前に立てるなり。二 彼は、乃 爾等、工師たる者が、棄てし所の石、
屋隅の首石と成りたる者なり、二三 此の外別に、救を得しむる者なし。蓋天下には、人に
與へられたる他の名の、我等が由りて、以て救を得べき者あらず。一三 彼等は、ペトル、及
びイオアンの毅然たるを見、其無學にして、賤しき者なるを察して、奇めり、又其會て、
イイススと偕に在りしを知れり。一四 然れども、愈されたる人の之と偕に立てるを見て、
取す可き辭なかりき。一五 乃之に會所の外に出づるを命じて、後相隨して曰へり、

此の人人に何を爲すべきか。蓋彼等に由りて著しき奇蹟の行はれしことは、凡そイエ
エルサリムに居る者に顯なり、我等之を無き言ふ能はず。一七しかども此の事の尙廣
く民間に傳はらざらん爲に、彼等を恐喝して、復其名を以て何人にも語らざらんこと
を戒むべし。一八すなはち、乃彼等を召して、更にイエスの名を以て言ふことなく、教ふるこ
となきを命じたり。一九しかども、然れどもペトル及びイオアン、彼等に答へて曰へり、神に應
じより、愈りて、爾等に聽くは、神の前に在りて發なるか、自ら判断せよ。二〇しかども、蓋我等は、見
し所聞きし所を語らざるを得ず。二一しかども、彼等は之を附する所以を得ずして、恐喝を加へ
て、之を釋せり、民の故を以てなり、衆皆行はれし事に由りて、神を讚美したればなり。二
ニしかども、蓋奇蹟に由りて愈ゆるを得たる人は、四十餘歳なり。二三しかども、使徒釋されて、其友に來り、
凡そ司祭、諸長老、長老等との之に言ひし事を告げたり。二四しかども、彼等之を聞き、心を一に
し聲を擡げて、神に籲びて曰へり、主宰よ、爾は天地海及び其中の萬物を造りし神なり、
二五しかども、爾は聖神を以て、我が祖爾の僕、ダウダの口に藉りて曰へり、異邦何爲れぞ、蓋
民何爲れぞ、徒に謀る、二六しかども、地の諸王興り、諸侯相集りて、主を攻め、其ハリストスを攻む

二七、蓋、勢にイロド及びボンカイビラトは、異邦人及びイスラエリ民と共に、此の
 城に集りて、爾の聖なる子イエスに齊つげられし者を攻めたり。二八、爾の手及び
 爾の旨の預め定めし事を行はん爲なり。二九、主よ、今も彼等の恐喝を墜みて、爾の諸僕
 に、毅然として爾の言を言はしめ、三〇、爾の手を伸べて、爾の聖なる子イエスの名を
 以て醫を施し、休徵奇蹟を行ひ給へ。三一、彼等の祈禱畢りて、後、其集れる處、震ひ動き、皆
 聖神に滿てられて、侃侃として神の言を言へり。三二、信じたる衆民は、心を一にし、靈を
 一にし、一人も其所有を己の物とせずして、共に給物を公用せり。三三、使徒は大なる
 能を以て、主イエスハリストスの復活を證せり、大なる恩寵は、彼等衆人に在り。三四、
 彼等の中に一人も乏しき者なかりき、蓋凡そ地政は家を有てる者は、之を售り、其售り
 たる價を攜へて、使徒の足下に置き、而して各人に、其需むる所に隨ひて、之を與へ
 られたり。三五、斯くレカの族にして、キブルに生れしイサシヤ、使徒にマルナヲ譯すれ
 ば、勤慰の子と稱へられし者は、三六、田畠有りて、之を售り、其金を攜へて、使徒の足下に
 置けり。

第四回

然れども一人アナニヤと名づくる者其妻サプスラと偕に産業を售り、
 其妻も與り知りて價の數分を藏し、數分を搦へて使徒の足下に置けり。ペトル曰へ
 り、アナニヤ何爲れぞサタナ爾の心に聖神に偽りて地の價の數分を藏す意を蓄てた
 る。爾の有せし所は爾に屬せしに非ずや之を售りて得し所は爾の權に在りしに非
 ずや爾何ぞ此の事を心に懐きたる爾は人に偽りしに非ず、乃、神に偽りしなり。ア
 ナニヤ此の言を聞きて、仆れて氣絶ひたり、之を聞きし者大に懼れたり。少者等起ち
 て之を取り、鼻き出して葬れり。約三時の後、其妻も未だ有りし事を知らずして、來れ
 り。ペトル彼に問ひて曰へり、我に告げよ、爾等此の價を以て地を售りしか。彼曰へり、
 然り、此の價なり。ペトル彼に謂へり、爾等何爲れぞ共に謀りて、主の神を試みる哉、
 爾の夫を葬りし者の足は門の前に在り、爾をも鼻き出さん。一、二、三、に彼の足下
 に仆れて、氣絶ひたり。少者等入りて、其死したるを見、之を鼻き出して、夫の側そばに葬れり。
 一、二、三、全教會きりよくわいと凡そ之を聞きし者ものは、大に懼れたり。使徒の手てに由りて、民間みんかんに多
 くの休徵きゆうしやうと奇蹟きせきとは行はれたり、衆皆心を一にして、ソロモンの廊ろうに在り。一、三、餘の者

は敢て彼等に附かさりき然れども民は彼等を崇めたり。一四男女の信する者増多
く主に就き、一五人病者を衞に昇き出して床及び榻に置き、ペトルの過ぎて其影の或
は之を陸はんこきを翼ふに至れり。一六又衆くの人ば近傍の諸邑より病める者及び
汚鬼を患ふる者を攜へて、イエルサリムに集れり皆愈ゆるを得たり。一七司祭長及び
凡そ彼を信する者、サドケイの異端の徒は起ちて、賊に滿てられ、一八其手を使徒に
措きて之を公獄に下せり。一九然れども主の使徒獄の門を啓き、彼等を引き出して曰
へり、二〇往きて殿に立ち、此の生命の言を播く民に聞れ。二一彼等之を聞きて、早朝殿
に入りて敷へたり。時に司祭長及び之を信する者來りて、公會及びイメライリの諸
子の長老等を召し集め、獄に使用して、使徒を將るに至らんことを命ぜり。二二下吏往きて、
彼等を獄の中に見さりき、乃ち反りて告げて、二三曰へり、我等は獄の固く閉され守る
者の門の前に立てるを見たれども、之を啓けば、内に一人をも見ざりき。二四司祭長殿
の司及び他の司祭諸長は、此の言を聞きて、此れ何ならんを異めり。二五或來りて彼
等に告げて曰へり、觀よ、爾等が獄に下しし者は、殿に立ちて、民を救ふ。二六其時殿の司

は下吏したやくと偕ともに往ゆきて、彼等かれらを攜たづへ來きたれり、然しかれども強しふることを爲なさざりき、民たみが石いしを以もつて擊うたんことを懼おそれし故ゆゑなり。二七にじち攜たづへ來きたりて、彼等かれらを公會こうかいの中に立たてたり。司祭長しさいちやう彼等かれらに問こひて曰いへり、二八にはつ我等われらは爾等なんたらに、此この名なを以もつて效くわふることを感きしく禁きんせしに非あらずや、然しかるに視みよ、爾等なんたらは其教そのをしへをイエルサリムに滿みたせ、而しかして此この人の血ちを我等われらに歸きせんことを欲ほつす。二九にじゅうベトレ及び諸使徒しよしと對こたへて曰いへり、神かみに従したがふこと人に従したがふより愈まさるは、立たしきなり。三〇さんじゅう我が先祖せんぞの神かみは爾等なんたらが木きに懸かけて殺ころし、イエスを復活ふくわつせしめたり。三一さんじゅういち神かみは其右そのみぎの手てを以もつて彼かれを舉あげて、主しゆと爲なし、救主きうしゆと爲なせり、イズライリに悔くわい改かむの教くわしを與あたへん爲たり。三二さんじゅうに我等われらは此この事ことの爲ために證しやうを爲なす者ものなり、神かみが彼かれに従したがふ者ものに與あたへし、聖神せいしんも亦證またしやうを爲なす。三三さんじゅうさん彼等かれら之これを聞ききて、怒いかりに勝たへずして、使徒しとを殺ころさんと謀はかれり。三四さんじゅうよん然しかれども一ひとのフリセイ人じん、名なはガマリイル、教法師くわほふしにして衆民しゆみんに導たづねる者ものは、公會こうかいの中に立たちて、使徒しとを暫しばらく外そとに出いだすを命めいじて、三五さんじゅうご彼等かれらに謂いへり、イズワイリ人じんよ、爾等なんたら此この人人ひとに就つきて、何なにを爲なすべきかを自ら慎みづかつし。三六さんじゅうろく蓋あはより先まず、スウダス起たりて、自ら大おほなりとし、之これに附つきし者もの約四百人やくよひやくにんありしが、彼かれは殺ころされ、從したがひし者ものは皆みな

散じて有るなきに歸せり。其後登籍の時ガリレヤ人イウダ起りて多くの民を誘ひて己に從はしめしが彼も亡び彼に從ひし者も皆散じたり。今も我爾等に語く此の人人を會きて彼等を容せ蓋此の謀或は此の所爲若し人に出らば自ら毀れん。若し神に由らば爾等之を毀る能はず且恐らくは爾等神に敵する者爲らん。彼等は之に從へり乃使徒を召して之を打ちイイススの名を以て言ふことを禁じて彼等を釋せり。彼等公會の前より出て主イイススの名に因りて辱を受くるに堪ふる者爲りしを喜べり。日日殿に在り又人の家に在りて教を宣べイイススハリストスの福音を傳へて已めざりき。



一そのひもん

益加はりしに

「エウロニスト」

ガエウレイ人

に對して怨言せし

故なり。十二の使徒は

大敵の

故に兄

門徒を招きて曰へり我等神の言を會きて食卓の事を務むるは宜しからず。故に兄

弟と爾等の中より善き證を得聖神と智慧とに満てられたる者七人を擇べ我等之を立て此の事を司らしめ我等は専ら祈禱と傳教とを務めん。此の言は衆民に悦

ばれて、遂に信と聖神とに満てられたる人ステファン、又スリッブ、プロホル、ニカノル、ネモン、バルメン、及びアンネオセヤの連教者ニコライを選びて、之を使徒等の前に立て、彼等所屬して、手を其上に按せたり。辨の言増長し、門徒の數甚イエルサリムに増加し、司祭の中にも多く教に服ひし者あり。信と能とに滿てられたるステファンは、大なる奇蹟休徵を民間に行へり。時に「リベルラン」と稱ふる會堂及びキリヤヤレンキサンドリヤ、キリヤヤ、アモヤ人の諸會堂に屬する、或人起ちて、ステファンと辯論せり、一〇然れども智慧と彼が由りて言ひし所の聖神とに敵する能はざりき。一、其時私に人に勸めて、言はしめて曰へり、我等は彼がモイセイ及び神を勝る言を聞るを聞けり。二、是に於て民と長老等と學士等とを動かし、突に氷りて、彼を執へ、公會に曳き至り、一、惡妄の證を立て、言はしめて曰へり、此の人は此の聖なる所及び律法を勝る言を聞りて已めず。一、我等は彼の言ふを聞けり、曰く、イイスナソレイは此の所を毀ち、モイセイが我等に授けし例を易へん。公會中に坐せる者皆彼に目を注ぎて、其面を見るに、天使の面の如し。

第二節 一時に司祭長曰へり果して此くの如きか。彼曰へり兄弟及び諸父よ之を
 破け、光榮の跡は我が祖アウラムに其未だムランに徙らざる先に、メソポタミアに
 現れて、彼に謂へり、爾の地を出で爾の親族及び爾の父の家を離れて、我が爾に示さ
 んとする地に往け。其時彼はハルマヤの地より出で、ムランに居りたり其父の死
 せし後神は彼を彼處より、田舎が今住める此の地に徙せり。然るに此には足を立つ
 るばかりの地の嗣業だに彼に與へざりき惟彼に未だ子あらずりし時、此の地を業さ
 して、彼及び彼の裔に與へんことを約せり。神は斯く謂へり彼の裔は他の地に移住
 民と爲り、彼處には之を奴隸と爲し、之を苦めて四百年を歴ん。神又曰へり、彼等を奴
 隸させん民は、我之を審判せん厥後彼等は出で、我に此の處に奉事せん。又彼に
 割禮の約を與へたり。其後アウラムはイサアクを生み、第八日に於て之に割禮を行
 へり、イサアクはイアコフを生み、イアコフは十二の族祖を生めり。族祖はイオシフ
 を妬みて之をエジプトに賣れり然れども神は彼と偕に在りて、一〇 彼を其悉くの患
 難より拯ひ彼にエジプトの王スラオンの前に恩寵と智慧とを與へたり王彼を立て

て、エギプト及び己が全家の望み爲せり。一 饑饉は大きな患難はエギプト并にハ
ナアンの全地に及びて我が先祖は糧を得ざりき。二 イアコフはエギプトに穀物あ
りき聞きて初めて我が先祖を彼に遣せり。三 再遣しし時、イオシフは己を其兄弟
に讒らしめ、且イオシフの族はラウオンの知る所爲れり。四 イオシフ遣して其父
イアコフ及び其全族七十五人を迎へたり。五 イアコフエギプトに下りて己も我が
先祖も終れり。六 乃シヘムに擧へられて、アウラムが銀の價を以て、シヘムのエ
ムセルの跡子より買ひたる墓に葬められたり。七 神が告ひて、アウラムに許約せ
し期の近づくに隨ひ、民はエギプトに繁殖して、愈多くなり。八 イオシフを讒らさ
る他の王のエギプトに起るに迫り。九 彼は惡を我が族に謀りて、我が先祖を苦し
め、其墓を築て、活かさざらんことを命ぜり。一〇 斯の時、モイセイ生れて、解の前に
美しかりき。三月間、其父の家に育てられたり。一一 築てらるゝに及びて、ラウオンの女
彼を取り、養ひて己の子と爲せり。一二 モイセイは益々エギプトの學術を教へられて、
言と行とに能ありき。一三 彼年四十に至りて、其兄弟なるイスラエリの跡子を顧み

んさする心起れり。二四其中一人の處げらるゝを見て、之を保障し、屈せらるゝ者の爲に仇を報いて、エギプト人を殺せり。二五意へらく其兄弟は神が彼の手を以て彼等に救を與ふるを悟るならん、と然れども彼等は悟らざりき。二六次の日彼等の相闘へるを見て、和を勸めて曰へり、爾等は兄弟なるに、何を互に不義を爲す。二七然れども其部に不義を爲す者は彼を斥けて曰へり、誰か爾を立て、我等の有司及び彼判官を爲したる。二八爾は昨日エギプト人を殺し、如く我を殺さんと欲するか。二九モイセイ此の言に因りて、奔りて、マテアムの地に移住し、彼處に在りて二人の子を生めり。三〇四十年を越えて後、シナイ山の野に於て、主の使彼に燃ゆる棘の火焰に現れたり。三一モイセイ見て、異象を奇み、之を密に視ん爲に近づける時、主の聲彼に在りて曰へり、三二我は爾が列祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり。モイセイ腹を懐きて、敢て視ざりき。三三主は彼に御へり、爾の足の履を解け、蓋、爾が立てる處は、聖地なり。三四我はエギプトに在る我が民の苦を見、其歎息を聞き、彼を救はん爲に降れり、今往け、我爾をエギプトに遣さん。三五此のモイセイ、彼等が拒みて、誰か爾を立て

ヲ^{四四}ワロンより遠く往さん。我等の先祖には野に於て證詞の幕ありき、^{四五}セイセイに蹈りし者が其見し所の式に遊びて之を造らん事を命ぜしが如し。我等の先祖はイイススと僭に之を奉じて神が我等の先祖の面前より逐ひし異邦民の領地に據へ入れり。此くの如くにして^{四六}タワドの日に至れり。彼は神の前に恩寵を獲て、^{四七}イブコフの神の爲に居所を設けんことを願へり。ソロモンは彼の爲に家を建てたり。然れども至上者は手にて造られたる殿に居らず、預言者の云ふ所の如し、^{四八}主曰く天は我の寶座地は我の足の発なり。爾等我が爲に何の家を建てんか、或は我が安息の爲に何の所あらんか、^{四九}我が手昔之を造りしに非ずやと。孤墳にして、心と耳とに響頭を受けざる者、爾等恒に聖神に逆ふ、爾等の先祖の若く、爾等も亦是くの若し。^{五〇}爾等の先祖は蘇の預言者を容逐せざりしか、彼等は義者の來るを預言せし者を殺せり、爾等は今此の義者を解し、且殺す者と爲れり。^{五一}爾等は、乃天使等の捧持に由りて、律法を受けて之を守らざりし者なり。^{五二}彼等此を聞きて、其心怒に勝はず、^{五三}切齒して彼に向へり。時にステファン聖神に滿てられ、天を仰ぎて神の光榮及

びイイススが神の右に立てるを見て、曰へり、感よ、我天開けて、人の手が神の右に立てるを見る。然れども、彼等大なる聲を以て叫びて、耳を掩ひ、心を同じくして、彼に掩し、遁り、城の外に曳き出して、石を以て彼を撃てり。隠者等己の衣を、一の少年、サウルと名づくる者の足下に置き、石を以てステアソンを撃てり。彼所りて曰へり、主イイススよ、我が靈を接けよ、乃、膝を屈め、大なる聲を以て呼びて曰へり、主よ、是の即を彼等に歸する勿れ。此を言ひて、斃れり。

第八章 サウルは彼の殺されしことを可きせり。當日大なる騒ぎはイエルサリムに在る教會に及び、使徒の外は皆イウアヤとサマリヤとの各地に散じたり。敬虔なる人々ステアソンを擲り、之が爲に大なる痛哭を爲せり。サウルは教會を殘害し、家々に入り、男女を曳きて、獄に付せり。時に散じたる者は、徧く行きて、音を編音せり。リブはサマリヤの邑に下りて、彼等にハリストスを傳へたり。民はリブが行ひし休微を聞き、且見て、心を一にして、聽みて、其言ふ所を聽けり。盜汚鬼は大なる聲を以て叫びて、之に怒らるゝ、多くの者より出で、亦多くの癩癩及び跛の者は愈されたり。

八其邑の中に大なる喜ありき。爰に一人、シモンと名づくる者あり、素邑に於て魔術
 を行ひ、サマリヤの民を駭かし、己を大なる者と爲せり。一〇小より大に至るまで皆
 みて彼に聽きて曰へり、此の人は神の大なる能なり。二一聽みて彼に聽きしは、其久し
 く魔術を以て彼等を駭かし、故なり。二二然れども、彼等は神の國及びイエススハリ
 ストスの名の事を福音するスルに及びて、男女共に洗を受けたり。二三シ
 モン自も亦倍じて洗を受け、常にスルに在りて行はれたる大なる異能と休
 徴を見えて駭けり。二四イエエルサリムに在る使徒は、サマリヤが神の言を受けたりと
 聞きて、ペトル及びイオアンを彼等に遣せり。二五二人下りて、彼等が聖神を受けん爲
 に祈れり。二六蓋聖神は、未だ彼等の一人にも降らざりき、彼等は第主イエススの名
 に因りて洗を受けしのみ。二七其時使徒彼等に手を按せられたれば、彼等聖神を受けたり。
 二八シモンは、使徒の手の按するに因りて、聖神の授けらるゝを見て、之に金を描へ至
 りて、二九曰へり、我にも此の權を與へよ、我が手を按せんとする者の聖神を受けん爲
 なり。三〇然れども、ペトル彼に謂へり、爾の銀は爾と偕に亡ぶべし、蓋爾は金を以て

神の賜を獲んと意へり。二 爾には此の事に於て分なく聞なし、盜用の心は神の前に正からず。三 故に此の爾の惡を悔改して、神に歸れ、或は爾が心の念は爾に赦されん。四 盜我爾が苦き體に在り及び不義の弊に在るを見る。五 シモン答へて曰へり、爾等我の爲に主に歸りて、爾等が言ひしことの我に及ぶなからしめよ。六 彼等主の言を證し、且宣べて、イエルサリムに返り途にサマリヤの多くの村に福音を傳へたり。七 主の使スルプに告げて曰へり、起ちて南に向ひて、イエルサリムよりガザに下る路に適げ、其路は野なり。八 彼起ちて往けり、視よ、エスオビヤの人、エスオビヤの女王、カンダキヤの寺人にして、大臣其悉くの財寶を用る者は、禮拜の爲にイエルサリムに來りて、九 返り、其車に乗りて、預言者イサイヤを讀めり。一〇 神スルプに誦へり、前みて、此の車に就け。一一 スルプ趨り就きて、彼が預言者イサイヤを讀むを聞きて曰へり、爾讀む所を曉るか。一二 彼曰へり、若し我を導く者なくば、我焉ぞ曉るを得ん、乃スルプに升りて共に坐せんことを請へり。一三 其讀める聖書の文は左の如し、彼は羊の如く居られん爲に牽かれたり、羔が其毛を剪る者の前に在りて、聲なきが如く、彼は

此くの若く其口を啓かず。三三 其卑賤に居る時彼に於ける裁判は行はれたり。然れども其來歴は孰か能く之を解かん蓋彼の生命は地より取らるる也。三四 寺人スラプは預言者ヘリ、預言者預言者の此を言ふは誰を指す己を指すか抑他人を指すか。三五 其口を啓き此の書より始めて彼にイエスを福音せり。三六 路を行く時彼等は水の有る處に來れり、寺人曰へり、親よ、水あり、我が洗を受くるに何の礙あるか。三七 彼に預言者ヘリ、爾若し全き心を以て信せば、可なり。彼答へて曰へり、我イエススハリストスが神の子たるを信す。三八 乃命じて車を止めしめ、スラプと寺人と共に水に下り、スラプは彼に洗を授けたり。三九 彼等が水より上りし時、聖神は寺人に降り、主の使スラプを擧げて去り、寺人復之を見ざりき、乃喜びて其路を行けり。四〇 斯ラプはアソトに見れ、踏色を経て福音を宣べ、ケサリヤに至るに及べり。

四一 サウルは猶主の門徒に向ひて、怒鳴り殺氣を吐き、司祭長に就きて、其ダマスクの諸會黨に寄する書を求め得たり、若し斯の道に従ふ者に遇はば、男女を論ぜず之を縛りて、イエルサリムに曳かん爲なり。四二 彼往きて、ダマスクに近づける時、候

天より光ありて彼を覆り照せり。彼地に仆れて、彼に言ふ聲を聞けり、曰く、サウル、サウル、何ぞ我を逐送する。五、彼曰へり、主よ、爾は誰たる。主曰へり、我は爾が逐送するイイスラスなり。爾を踏むは難し。六、彼戦き懼れて曰へり、主よ、我が何を爲さんことを欲するか。主彼に謂へり、起ちて城に入れ、彼處に於て爾が行ふべき事を爾に告げられん。七、彼と傍に行ける人々驚きて立ち、聲を聞きて誰をも見ざりき。八、サウル地より起きて、目啓きたれども、見る所なかりき。彼等其手を援きて、ゲマスケに入れたり。九、彼は三日の間見るこそなく、亦食ひ飲むこそなかりき。一〇、ゲマスケに一人の門徒、アナニヤと名づくる者あり、主は異象の中に彼に謂へり、アナニヤ、彼曰へり、主よ、我此に在り。一一、主彼に謂へり、起ちて直と名づくる街に往き、イウダの家に、タルスの人、名はサウルと云ふ者を訪へ、彼を縛る。一二、而して異象の中に、アナニヤと名づくる人入りて、見るを得しめん爲に、彼に手を按するを見たり。一三、アナニヤ對へて曰へり、主よ、我多くの者より此の人の事を聞きしに、彼はイエルサリムに於て爾の聖徒に害を加へしこと如何ばかりぞ。一四、此に於ても、彼は凡そ爾の名を讃ぶ者を縛らん爲に、司祭路長より得

たる櫛けんを有もてり。一五一然しかれども主しゅは彼かれに朋いへり、往ゆけ益けだ斯しの人ひとは我わがが選えらびたる器うつはにし
 て、我われの名なを異い邦ほう民みんと、諸しよ王わうと、イズライリの諸しよ子しとの前まへに擗しかんとする者ものなり。一六二我
 は彼かれに、其その我わがが名なの爲ために、如何いかばかりか苦くるを受うくべきを示しめさん。一七三アナニヤ往ゆきて家
 に入り手てを彼かれに按のせて曰いへり、兄弟けいていサウルルよ爾なんぢが來きたる途みちに爾なんぢに現あらはれたる主しゅイイス
 スは我われを遣つかはせり、爾なんぢが見みるを得え、且かつ聖せい神しんに跪ひてられん爲ためなり。一八四忽たち彼の目めより鱗うろこの
 如ごとき者もの脱だつちて、彼かれ直ちに見みるを得え、乃すなはち起たちて洗せんを受うけ。一九五既すでに食たくして力ちからを獲えたり。サウ
 ル數すう日じつ門もん徒とと偕ごにダマスククに在あり、二〇六直ちに諸しよ會くわい堂だうに於おて、イイススを擧あげて、其その神
 の子こたるを宣のべたり。二一七聞きく者もの皆みな駭おそきて曰いへり、此この人ひとは、イエルサリムムに於おて、斯この
 名なを顧かへぶ者ものを殘ざん害がいせしに非あらずや、且かつ此こに來きたりしも、彼かれ等らを縛しばりて、司し祭さい諸しよ長ちやうに曳ひかん爲ため
 に非あらずや。二三八然しかれどもサウルル益ますます堅けん固こにして、此こは即すなはちハリストススなりと證しょうして、ダ
 マスククに居をるイウテヤ人じんを辯べん折せつせり。二四九日ひを歴ふること久ひさしくして、イウテヤ人じん彼かれを
 殺ころさんと謀はかれり。二五一〇此この謀はかりはサウルルに知しられたり、彼かれ等ら晝ちゆう夜や色しきの門もんに伺うかがひて彼かれを殺ころ
 さんとせしに、二六一一門もん徒と夜や彼かれを取とり、篋かを以もつて牀とこより縛つり下おろせり。二六一二サウルルはイエル

サリムに來り勉めて門徒に交を納れんとしたれども皆其門徒たるを信ぜずして彼
 を懼れたり。二七 ヲルナヲ彼を援きて使徒に擧へ至り彼等に其如何に途中に主を見
 し事及び主が彼に言ひし事又如何に彼がダマスクに於て毅然としてイエスの名
 を傳へし事を述べたり。二八 彼はイエルサリムに在りて彼等と偕に出入し毅然とし
 て主イエスの名に由りて教を宣べたり。二九 又「ヨリニスト」と語り及び辯論せり彼
 等は之を殺さんと圖れり。三〇 兄弟此の事を知りて彼をケサリヤに送りてタルスに
 遣したり。三一 當時全イウデアヤガリレヤサマリヤの諸教會平安にして成立し主を畏
 れて事を行ひ聖神の慰を得て數愈増せり。三二 ベトル編く諸方を行きて、ヨダに居
 る聖徒にも語りしことあり。三三 彼處に於て彼は一人名はエチイ瘡癩を患ひて八年
 間床に臥せる者に遇へり。三四 ベトル彼に謂へり、エチイよ、イエスハリスト爾を
 愈す起きて爾の床を治め、彼直に起きたり。三五 ヲダ及びサロンに居る者は皆彼を
 見て、主に歸せり。三六 イオヒヤに一の女徒名はタワス、歸すれば鹿と云ふ者あり彼は
 廣く善事を行ひ施濟を爲せり。三七 適其日に病みて死せり。彼を洗ひて椀に置きた

三八 ルグはイオビヤに近きに因り、門徒はペトル彼處に在りき聞きて、二人を彼に遣して、其週はらすして彼等に来らんことを求めたり。三九 ペトル起ちて之を偕に往けり至るに及びて彼を引きて樓に登らせ、發聲皆哭きて彼の側に立ち、鹿の彼等と偕に在りし時に作りたる上衣下衣を示せり。四〇 ペトル彼等を悉く外に出し、膝を屈めて跪れり而して死に向ひて曰へり、タラス、起きよ。彼其目を啓き、ペトルを見て坐せり。四一 ペトル之に手を授けて、之を起し、聖徒及び發聲を召して、之を活ける者として其前に立てたり。四二 此の事全イオビヤの知る所と爲りて、多くの者主を信ぜり。四三 ペトル日久しくイオビヤに留りて、或皮工シモンの家に居たり。

第四章

一 クサリヤに或人名はコルニリイ、イタリヤ隊と稱ふる隊の百夫長、敬虔にして其全家と偕に神を畏れ、民に多くの施濟を爲し、恒に神に請れる者あり。三の約第九時に彼は異象の中に明に神の使を見たり彼に入りて曰へり、コルニリイよ。四 彼は之に目を注ぎて懼れて曰へり、主よ、何事ぞ。彼に酬へり、爾の祈禱と爾の施濟とは升りて神の前に記念せられたり。五 今人をイオビヤに遣して、シモン稱してペトル

と云ふ者を呼べ。彼は或る皮工シモンに寓れり其家は海濱に在り彼は爾及び爾の
全家に救を得しむべき言を爾に語らん。セコルニリイに詔れる天使の去りし後彼は
其僕二人及び彼に侍する兵卒の一人の敬虔なる者を召して、八ことく之を告げて彼
等をイオビヤに遣せり。明日彼等行きて城に近づける時ペトル屋上に升りて騰れ
り。時約六時なり。一。飢を覺て彼食はんを欲せり。人の之を具ふる時彼の神象外に
遊べり。二。彼は天開けて、一の器の其前に降るを見る。大なる布の如し四角を繋ぎて、
地に縋り下さる。三。其中に凡そ地の四足の牲畜野獸昆蟲及び天空の鳥あり。四。且
聲ありて彼に謂ふ、ペトルよ、起ちて、居りて食へ。然れどもペトル曰へり、主よ、然ら
ず。蓋我未だ曾て穢らはしき物、或は深からざる物を食はざりき。五。聲、再、彼に謂ふ、
神の深めたる者は、爾穢らはしき爲す勿れ。六。三次是くの如くして、器復天に上げ
られたり。七。ペトル見し所の異象は何の意ぞと自ら異める時、視よ、コルニリイより
遣されたる人、人シモンの家を探れ得て其門の前に立ち、八。呼びて聞へり、シモン、稱
してペトルと云ふ者は、此に寓れるか。九。ペトル尙異象の事を思ひ居りしに、聖神彼

に謂へり、彼よ、三人爾を尋ね、二〇 起ちて下り路も疑はずして彼等と與に往け、蓋我
彼等を遣せり、二一 ベトルはコルニリイより彼に遣されし人人に下り就きて曰へり、
視よ、我は爾等が尋ねる者なり、爾等何の故ありて來りしか。二三 彼等曰へり、百夫長
コルニリイ、我にして神を畏れ、全イウテヤ民に隨せらるゝ者は聖なる天使より爾を
其家に招きて、爾の言を聽かんことこの示を受けたり。二三 ベトル彼等を延きて館らし
め、明日起ちて彼等と偕に往き、イホヒヤの兄弟數人も之と偕に行けり。二四 次日彼
等クサリヤに入りたるに、コルニリイは已に其親族と親友とを集めて彼等を候てり、
二五 ベトルの入る時、コルニリイ彼を迎へて其足下に伏して拜せり。二六 ベトル彼を
起して曰へり、起て、我も人なり。二七 乃彼と與に歸りて入り、多くの集れる者を見て、
二八 彼等に謂へり、イウテヤ人が異邦人と交り、或は近づくことこの法に合はざるは爾
等の知る所なり、然れども神は我に、何人もも秘らばしき者、或は深からざる者、云ふ
べからざるを示せり。二九 故に我招かれて、辭せずして來れり。今爾等、爾等の我を招き
しは、何の爲ぞ。三〇 コルニリイ曰へり、四日前に、我發して此の時に至り、第九時に我

が家に歸りしに、忽ち光れる衣を衣たる人我が前に立ちて、
 爾の新婦は聞かれ、爾の施測は、爾の前に記念せられたり、
 して、シモン稱してペトルと云ふ者を呼べ、彼は皮工シモンの家に海濱に寓れり、
 來りて爾に語らん。故に我直に爾に遣せり、爾の來れるは善し、
 に立つ、凡そ爾より爾に命ぜられん事を聞かん爲なり、
 今我、孰に知れり、所は孰を以て人を取らず、
 を行ふ者は、後に納れらるゝを、
 せり、イイススハリストスに因りてなり、是れ萬有の主なり、
 監の後に、ガリラヤより始まりて、全イウテヤに行はれし事は、
 ナサレトより出でたるイイススは、如何に、
 く行りて善事を行ひ、凡そ惡魔に制せらるゝ名を醫し、
 き。我等は、其凡そイウテヤの地及びイエルサリムに行ひし事、
 懸けて殺し、事を證する者なり、
 爾は、彼を第三日に復活せしめ、
 曰へり、コルネリイよ、
 故にイオビヤに人を遣
 の家に海濱に寓れり、彼
 シモンの家に海濱に寓れり、彼
 我直に爾に遣せり、爾の來れるは善し、
 今我等皆、
 誰に知れり、所は孰を以て人を取らず、
 彼はイスラエルの諸子に言を遣して、和平を福音
 我直に爾に遣せり、爾の來れるは善し、
 今我等皆、
 誰に知れり、所は孰を以て人を取らず、
 彼はイスラエルの諸子に言を遣して、和平を福音

民に非ず、乃神が預め選びし證者たる我等、其死より復活せし後、彼さ借に食飲せし者に、現れしめたり。 彼は我等に命じて、人人に教を傳へ、又彼が神より定められし生者死者の審判者たるを證せしむ。 彼の事に就きて、悉くの預言者は、凡そ彼を信する者が、其名に因りて罪の赦を得んことを證す。 彼トルの尙此を語れる時、聖神は凡そ言を聽く者に降れり。 彼トルさ借に來りし割禮を受けたる信者は、聖神の賜の異邦人等にも注がれし事を駭けり。 蓋彼等が方言を言ひ、神を讚美するを聞けり。 其時、彼トル曰へり、我等の如く聖靈を受けたる者には、孰か能く水を以て洗を受くるを禁ぜん。 乃、我等にイイススハリストスの名に因りて洗を受くるを命ぜり。 其後、我等は、彼トルに數日間留らんことを請へり。

一 イウデアヤに在る使徒及び兄弟、異邦人等も神の言を受けたり。 聞けり。 二、彼トルがイエエルサリムに上りし時、割禮を受けたる者、彼を詰りて、 曰へり、爾は割禮を受けざる者の中に入りて、彼等と共に食へり。 彼トル始より次第に、彼等に述べ、 曰へり、 我イホビヤの邑に祈禱せし時、神象外に遊びて、異象を見たり。 一の器

も與へしならば、我何人ぞ能く神を阻まん。一八 彼等之を聞きて對ふる所なく神を畏
 榮して曰へり、然らば神は異邦人にも悔改を與へて、生命を得しむるなり。一九 ステ
 ンの時に起りし窘逐に因りて散じたる者は、往きて、スニキヤ、キブル、アンテオヒヤに
 まで至りしが、イウテヤ人の外何人にも言を傳へざりき。二〇 然れども彼等の中にキ
 ブル及びキリヤの人人あり、アンテオヒヤに入りて、主イエスを福音して、モリ
 人に傳へたり。二一 主の手彼等と偕に在り、多數の人信じて、主に歸せり。二二 此の事
 聲聞イエルサリムに在る教會の耳に及びたれば、バルナバを遣して、アンテオヒヤに
 至らしめたり。二三 彼來りて、神の恩寵を見て喜び、凡衆人に、心を堅くして、主に従ふ
 ことを勧めたり。二四 蓋彼は善人にして、聖神と信に満てられたる者なり。是に於て許
 多の民は主に就けり。二五 其後バルナバはタルスに往きて、サウルを尋ね、之に遇ひて、
 アンテオヒヤに攜へ至れり。二六 彼等一年間教會に集りて、許多の民を歸へたり。門徒
 が「ハリス、ステアニン」を稱せらるゝこと、アンテオヒヤより始まれり。二七 當日預言者數
 人、イエルサリムよりアンテオヒヤに下れり。二八 其一人、アガフと名づくる者起ちて、

聖神に藉りて、普天下に大なる饑饉あらんことを示せり、クラウダイクサリの時に果して之ありき。其時門徒各其有てる所に隨ひて、イウサヤに居る兄弟に扶助を饒らんことを定めたり。遂に之を行ひて、マルナワ及びサウルの手に託して、長老等に寄せたり。

其時イロド王手を舉げて、教會の中の數人に害を加へ、劍を以てイオアンの兄弟イアコフを殺せり。イウサヤ人の之を喜ぶを見て、次ぎて又ヘトルを執へたり、時に除酵節の日なり。既に執へて彼を獄に下し、班毎に四人の兵卒四班に彼を守るを命じて、逾越節の後に彼を民の前に曳き出さん欲せり。是を以てヘトルは獄に守られ、教會は彼の爲に熱切なる祈禱を神に獻じたり。イロドが彼を曳き出さん欲せし時、其夜ベトル二の鐵索に繋がれて、二人の兵卒の間に懸れ守る者は門の前に在りて、獄を守れり。親よ、主の天使前に立ち、光は獄室に輝けり。彼ベトルの脅を衝きて之を醒まして曰へり、速に起きよ。鐵索は其手より脱ちたり。天使彼に解へり帶を束れて履を著けよ。彼斯く行へり。又彼に解ふ爾の袍を身に纏ひて、我に

從へ。九。ペトル出で、之に從ひしが、天使の爲す所の眞なるを知らずして、異象を見
さ。一〇。守る者の第一所及び第二所を過ぎて、彼等城に入る所の鐵の門に來り
しに、門自ら彼等の爲に啓けたり、出で、一の衝を過ぎたるに、天使忽彼より離れ
たり。一一。ペトル悟りて曰へり、今、我誠に主が其使を遣して、我をイロドの手及び凡
そイウテヤ民の望める所より拯ひしを知れり。一二。乃同願して、イオアン稱してマ
ルコ云ふ者の母なるマリヤの家に來れり。彼處には多くの者集りて祈禱せり。一三
ペトル外門を叩く時、婢、ロタと名づくる者就きて之を聽き、一四。ペトルの聲を識り
て、喜に因りて門を啓かず、乃趨り入りて、ペトルが門の前に立てることを告げたり。
一五。彼等は之に叩へり、爾狂へるか、女斯くありと言ひ張りたれば、彼等曰へり、是
れ即彼の天使なり。一六。ペトル猶叩きて息めず。彼等啓きし時、彼を見て駭けり。一七
ペトル手を搖かして、言ふこと勿らしめて、彼等に主が如何に彼を獄より引き出し
を述べたり、又曰へり、此の事をイアコフ及び兄弟に報ぜよ。遂に出で、他の處に往け
り。一八。且に及びて、ペトルは如何に成りしかと、兵卒の中に懸授少からざりき。一九。イ

ロド彼を辱れたれども獲ざれば守る者を糺して之を死に處せんことを命ぜり。厥後
イウテヤを離れ、ケサリヤに往きて居りき。二〇 イロド甚しくアル及びシドン
の民を怒りたれば、彼等は心を合せて之に就き、王の内室の臣ウラストの親を得て、和を乞
へり。蓋彼等の地は王の國より糧を得たり。二二 定めたる日に於て、イロドは王の衣を
衣、其位に坐し、彼等に向ひて問れり。二三 民呼びて曰へり、此れ神の聲なり、人の聲に
非ず。二四 忽ち主の使彼を撃てり、光榮を神に歸せざりし故なり、彼處に噬まれて氣
絶むたり。二五 時に神の言は増長じて廣まれり。二六 アルナワ及びサウルは其任
務を終へて、イオアン稱してマルコと云ふ者を擡へて、イエルサリムよりアンタオヒ
ナに返れり。

一 アンタオヒヤに在る教會に數人の預言者及び教師あり、即アルナワ、
シメオン稱してニグルと云ふ者、キリヤの人ルキイ、分封の君イロドと僭に養はれ
しマナイル、及びサウルなり。二 彼等が主に奉事して、禁食する時、聖神曰へり、我が爲に
アルナワ及びサウルを別ちて、我が彼等を召して任ぜしむる職を行はしめよ。三 是に

於て禁食所終し手を其上に按せて、彼等を往かしめたり。斯く彼等は聖神に遣され
 て、セレウキヤに下り、彼處よりキブルに航れり。五 サラミンに在りて、イウテヤの諸會
 堂に神の言を傳へたり、イオアンは其後者たりき。彼等島を経て、メフに至り、一人の
 魔術者にして、僞預言者なるイウテヤ人名はブルイイスに遇へり、彼は方伯セル
 ギイマルと云ふ智なる人と偕に在り。方伯はマルナラ及びサウルを召して、神の言
 を聽かんことを望めり。然れども、エリマ(蓋此の名を譯すれば魔術者なり)彼等に
 敵して、方伯をして信ぜざらしめんことを欲せり。九 サウル又の名はマル、聖神に據てら
 れて、彼に目を注ぎて、一〇 曰へり、噫凡の詭譎と奸惡とを盈つる者、惡魔の子、凡の義の
 敵よ、爾は主の直き道を枉げて已めざらんか。一二 今觀よ、主の手爾に在り、爾等と爲り
 て、暫く日を見ざらん。忽其目瞽み暗みて、彼旋りて、相者を尋れたり。一二 其時方伯行は
 れし所を見て、主の教を奇として信ぜり。一三 マウル及び之と偕にせし者は、メフより
 舟行して、バムスリヤのヘルギヤに至り、イオアンは彼等に別れて、イエルサリムに歸
 れり。一四 彼等ヘルギヤを経て、ピシテヤのアンテオヒヤに來り、安息の日に會堂に入

りて坐せり。一五律法を誇預言者を讀みて後會黨の率等使して彼等に謂へり兄弟よ若し爾等に民に勸むる言あらば言へ。一六バブル起ちて手を掲かして曰へりイスラエリの人人及び神を畏る者よ之を聽け。一七此の民の神は我が先祖を選びて民を其エギベトの地に居る時に高うし又手を舉げて彼等を彼處より引き出し、一八約四十年間彼等を野に養ひ、一九ハナアンの地に於て七の民を滅し其地を分ちて彼等に嗣がしめたり。二〇後約四百五十年間彼等に密官を興へて預言者サムイルに至れり。二一厥後彼等王を求めたれば神は彼等にキスの子サウル、ニアミンの支派の人を興へて四十年を歴たり。二二既に彼を廢し、ダワードを興して彼等の王と爲し且彼の爲に置して曰へり我はイモセイの子ダワード、我が心に合ふ人を獲たり彼は悉く我が言を行はん。二三此の人の裔より神は其許約に違ひて、イスラエリの爲に救主イエスを興せり。二四其來らんとする時、イオアンはイスラエリの爲に救主イオアンを傳へたり。二五イオアン其職を卒ふるに臨みて曰へり爾等我を誰なりと意ふか我は彼に非ず然れども視よ、我に後れて來る者あり我其足の履を解くにも堪へず。二

兄弟よ、アウラアムの族の諸子及び爾等の中に神を畏る者よ、此の救の言は爾等に遺されたり。二七、蓋しイエルサリムに居る者及び其有司等は、彼を敵らして、彼を罪に定めて、安息日毎に讀む所の預言者の言を應はせ、二八、一も死に當る故を獲ずして、ピラトに彼を殺さんことを求めたり。二九、一切彼を指して録されし事を卒へて、後、彼を木より下して、墓に置けり。三〇、然れども神は彼を死より復活せしめたり。三一、彼は多日の間、彼と偕にガリレヤよりイエルサリムに上りし者に現れたり、彼等は今日民の前に彼を證する者なり。三二、我等も爾等に福音して云ふ、我が先祖に賜はりし許約は神之をイエスを復活せしめしを以て、其子孫なる我等に應はしめたり。三三、第二の聖詠にも録されしが、如し云く、爾は我の子、我今日爾を生めり。三四、又彼を死より復活せしめで、朽壞に歸せざらしめんとする事に至りては、斯く曰へり、我ガワドに約せし神聖にして信實なる恵を爾等に與へん。三五、故に他の章にも云ふ、爾の聖者に朽つるを見ざらしめん。三六、蓋しガワドは其世代中神の旨に役事して後廢り、其先祖と偕に置かれて朽つるを見たり。三七、然れども神の復活せしめし者は、朽つるを見

ざりき。三八故に兄弟よ爾等知るべし彼に由りて罪の赦は爾等に傳へられ。三九且爾等が凡そモイセイの律法に由りて義とせらるゝを得ざりし事は凡の信する者彼に由りて義とせらるゝなり。四〇然らば慎みて、諸預言者の言ひし事の爾等に臨むを免れよ。四一曰く、視る者よ、視て驚き且亡びよ蓋我爾等の日に於て一の事を行ふ人之な爾等に告ぐとも爾等信ぜざらん。四二彼等がイウテヤの會堂より出づる時、異邦人は彼等に次の安息日に此等の言を誦らんことを求めたり。四三會既に散じて來くの時、イウテヤ人及び敬虔なる進歩者は、バワルセワルナツに從へり、二使徒彼等に誦りて、恒に神の恩寵に居らんことを勧めたり。四四次の安息日に、邑の人幾と皆神の言を聽かん爲に集れり。四五然れどもイウテヤ人は、民を見て嫉に滿てられ、逆らひ且誦りて、バワルの言ふ所を拒めり。四六其時バワル及びワルナツ毅然として曰へり、神の言は先づ爾等に傳へらるべし、然れども爾等之を棄て、自ら己を永遠の生命に當らざる者と爲すに由りて、視よ、我等は轉じて、異邦人に向ふ。四七蓋主は是くの如く我等に命ぜり云く、我爾を立て、異邦人の光と爲せり、爾が教と爲りて、地の極に至らん爲な

り。異邦人此を聞きて喜び、主の言を讚美し、永遠の生命に定められし者は皆信
じたり。是に於て主の言は偏く是の地に廣まれり。然れどもイウテヤ人は敬
虔なる貴き婦及び邑の尊者を唆して、パウロとバルナバを逐逐し、之を其境より逐
ひ出せり。二人彼等に對して其足の塵を拂ひ去りて、イコニヤに來れり。時に
門徒は喜と聖神さに滿てられたり。

第四章

彼等イコニヤに於て共にイウテヤの會堂に入り、教を宣べて、イウテヤ

人及びエリソンの大衆を信ぜしむるに至れり。然れども信ぜざるイウテヤ人は
異邦人の心を動かし、兄弟を惡ましめたり。彼等は日久しく彼處に留り、主に頼り
て毅然として教を傳へ、主は其恩寵の言を證して、彼等の手を以て休徵と奇蹟とを
行へり。時に邑の民分れて、或者はイウテヤ人に與し、或者は使徒に與せり。異邦人
及びイウテヤ人は、其有司等と與に、彼等を辱しめ、石を以て撃たんとして、擁し集る時
彼等此を知りて、リカチニヤの邑リストラテルワヤ及び其近傍に逃れ、彼處に於
て福音を傳へたり。リストラに一の足弱き者坐せり、母の胎より跛にして、未だ曾

て歩まさりき。彼はバアルの踊るを聴きしが、バアル彼に目を注ぎて、其愈さるべき
信あるを見て、一〇大なる聲を以て曰へり、主イエススハリストスの名に因りて爾に
言ふ、爾の足にて正しく立て、彼忽ち踊り起ちて歩めり。二二民はバアルの行ひし事を
見て、聲を擧げて、ヨカチニヤの首を以て曰へり、諸神は人の形に藉りて、我等に降り
一三乃バアルナワを稱して、予イと爲し、バアルをエルミイと爲せり、彼言に長じたれ
ばなり。一四其邑の前に在る予イの廟の祭司は、牛を牽き、花冠を擧げて門に至り、民
と偕に彼等に祭を獻げんと欲せり。一五使徒バアルナワ及びバアル之を聞きて、己の衣
を脱ぎ、躍りて民の中に入り、呼びて曰へり、一六人人よ、何ぞ此を行ふ、我等も爾等と同
情の人なり、今爾等に福音するは、爾等をして此の虚しき者より活ける神に轉せしめ
ん爲なり、即ち天地海及び其中の萬物を造りし神、一七過ぎし世には諸民に各、其道
を行くを容したれども、一八己を證するを已めずして、諸恩を施し、我等に天より雨
を降し、豐作の時を與へ、穀と樂とを以て我等の心を盈たしめし神なり。一九此を言
ひて、漸く民を止め、彼等に祭を獻げずして、各其家に歸らしめたり。彼等此に在りて

教を傳へたり。一、適イウテヤの數人アンテオヒヤ及びイコニヤより來り、使徒が
 毅然として教を宣ぶる時、民に彼等を驅れんことを勸めて曰へり、彼等が言ふ所は、
 も實なし、皆誑なり、乃、民を唆して石を以てバアルを撃たしめ、其已に死せり、
 意ひて、邑の外に曳き出せり。二、然れども門徒の彼を環りて立てる時、彼起きて、邑に
 入り、明日ワルナブと偕にデルマヤに往けり。三、使徒是の邑に福音を傳へて、多く
 の門徒を獲て、復りストラ、イコニヤ、アンテオヒヤに返りて、四、門徒の靈を堅め、恒
 に信に居らんことを勸め、且我等が多くの艱難を歴て神の國に入るべきことを教へ
 たり。五、又彼等の爲に教會毎に長老を按手し、禁食祈禱して、彼等を其信ぜし所
 の主に託せり。六、既にヒシヤヤを経て、バムフリヤに來り、七、主の言をヘルギヤに
 傳へて、アマリヤに下り、八、彼處より海に航して、アンテオヒヤに往けり、即、彼等が、
 今終へし職を行はん爲に替て神の恩寵に託せられし所なり。九、至るに及び教會を
 集めて、凡そ神が彼等を用つて行ひし事、若何にして、異邦人の爲に信の門を開きし事
 を告げたり。一〇、後、彼等は門徒と偕に彼處に久しく居たり。

一或人々イウテヤより下りて、兄弟に教へて曰へり、若しモイセイの例に依りて割禮を受けずば、救はるゝを得ず。二バブル及びワルナアが彼等と大に争ひ、且辯論せし時衆兄弟はバブルナルナア及び彼等の中の他の數人が、此の疑問の爲に、イエルサリムに上りて、諸使徒と長老等とに遇はんことを定めたり。三故に彼等は教會に送られて、スニヤヤ及びサマリヤを経、異邦人の歸正の事を述べて、衆兄弟を大に喜ばしめたり。四イエルサリムに至るに及びて、彼等は教會、諸使徒、長老等に接けられて、凡そ神が彼等を用つて行ひし事、若何にして、異邦人の爲に信の門を開きし事を告げたり。五時にスリセイの宗派の信せし者數人起ちて曰へり、彼等に割禮を行ひ、モイセイの律法を守るを命すべし。六諸使徒及び長老等は、此の事を議らん爲に集れり。七辯論既に久じくして、ペトル起ちて、彼等に開へり、兄弟よ爾等此を知る、神は初の日より我等の中に於て我を選べり、異邦人に我が口より福音の言を聞き、信せしめん爲なり。八人の心を鑿る神は、彼等に證を作して、聖神を彼等に與へたり、我等にも與へしが如し、又我等と彼等との間に一も別を立てずして、信を以て彼等

の心を潔めたり。一〇今爾等は何ぞ神を試みて、我が先祖も我等も負ふ能はざりし、
を門徒の頭に置かんぞ欲する。一一然れども我等は、主イエイススハリストスの恩寵に
頼りて救を獲んこと、彼等の如くなるを信ず。一二時に會衆皆黙然たり、而してワ
ナワ及びパウルが神の彼等を以て異邦人の中に若何なる休徵と奇蹟とを行ひし事
を述ぶるを聽けり。一三彼等が言ひ畢りし後、オアコフ應へて曰へり、兄弟よ、我に聽け、
一四シモンは已に神が初めて異邦民を眷みて、其中より己の名を奉ずる民を取りし
ことを述べたり。一五踏預言者の言も此と合へり。一六練して云へるが如し、是の後我
轉じて壞れたるゲワ下の幕を起し、其破れたる處を起して之を立てん。一七餘の人人
及び凡の異邦民、我が名を聞くを得る者が、主を尋ねん爲なり、此の諸事を行ふ主は此
を言ふこと。一八神は永世より其一切行ふ所を知るなり。一九故に我意ふ、異邦人の中
より神に歸する者を累はず可からず。二〇惟書を彼等に遺りて、偶像に汚れたる物と、
淫行と、勒死したる物と、血とを戒め、且凡そ己の欲せざる所を人に行ふ勿らしむべし。
二一蓋もイセイの書は、古代より邑毎に之を宣ぶる者あり、安息日毎に諸會堂に讀

まるゝなり。二二 其時諸使徒及び長老等は、全教會を偕に己の中より選ばれたる人を、バブルミワルナワを偕にアンテオヒヤに遣さんことを定めたり、即イワタ稱してワルサワと云ふ者及びシラ共に兄弟中の長者なる者なり。二三 書を彼等の手に託して曰へり使徒長老兄弟等はアンテオヒヤ、シリヤ、キリキヤに居る異邦中の諸兄弟に安を問ふ。二四 我等は或者が我等の中より出で、言を以て爾等を援し、爾等の靈を惑はして、勸諭を受け、律法を守るべき事、即我等が彼等に命ぜさりし所を言ふを、阻きしに由りて。二五 我等心を一にして集りて、選ばれたる人を我等の愛する所のワルサワ及びバブル、二六 即我が主イエススハリストスの名の爲に己の命を致さんと思ふ者、偕に爾等に遣さんことを定めたり。二七 故に我等はイワタ及びシラを遣せり、彼等又口づから是の事を爾等に述べん。二八 蓋し聖神及び我等は左の所要なる事の、外何の任をも爾等に預はしめざらんことを定めたり。二九 即偶像に獻げし物と、血と、勒死したる物と、淫行とを戒むる事、是なり、且凡そ己の欲せざる所を人に行ふ勿れ、爾等之を守らば善し、願はくば爾等平安なれ。三〇 是に於て彼等遣さ

れて、アンテオギヒヤに來り、衆人を集めて、書を授けたり。衆人之を讀みて其詞を喜べり。三二 イウダ及びシラは亦預言者たるに因りて多くの書を以て兄弟を誨へて之を堅めたり。三三 暫く彼處に在りて後、彼等は兄弟より平安にして使徒等に往くを容されたり。三四 然れどもシラは彼處に止らんことを定め、イウダは獨ニエルサリムに歸れり。三五 マワム及びワルナワはアンテオギヒヤに居り、他の多くの者と偕に教を傳へ、主の言を福音せり。三六 日を歴て後、マワムはワルナワに謂へり、我等復往きて、嘗て主の言を傳へし諸邑に在る我が兄弟の何如を顧みるべし。三七 ワルナワはイオアン稱してマルコと云ふ者を共に攜へんと欲せり。三八 然れどもマワムは嘗てマムオリヤに於て彼等に離れて、彼等が遣されし職の爲に往かざりし者を共に攜ふるは、宜しからずと思へり。三九 是に於て彼等の間に劇論起りて相別るに至れり、ワルナワはマルコを攜へて、キブルに舟行し。四〇 マワムはシラを選びて、兄弟より神の恩寵に託せられて往き、四一 シリヤ及びキリキヤを経て、諸會を堅めたり。

四二

一既にして彼はテルワヤ及びリストラに至れり。親よ、彼處に一人の門徒、

オモスイミ名づくる者あり信じたるイウテヤの婦とマリヤ人との子にして、ニリス
トラ及びイコニヤに在る兄弟に証せられし者なり。ママルは彼を擧へて往かん
欲し其處に居るイウテヤ人の爲の故に彼に割禮を行へり、蓋し其父のマリヤ人だ
るをな知れり。諸邑を經る時彼等ハイエルサレムに在る諸使徒及び長老等の定め
たる規程を授けて之を守らしめたり。是に於て諸教會の信益堅く其數日に増
せり。フリギヤトガラサの地を總て彼等は聖神よりアシヤに言を傳へんこと
を止められ、ミシヤに來りて、ニスニヤに往かんこと試みたれども神之を許さざりき。
乃ミシヤを過ぎて、トロアタに下れり。是に於て夜異象はママルに現れたり、一
のマクドニヤ人立ちて彼に求めて曰へり、マクドニヤに涉りて、我等を助けよ。一
斯の異象の後我等は主の我等を召して、彼等に福音せしむるを悟りて、速にマクド
ニヤに往かんこと定めたり。故にトロアタより舟行して直にサモフラキヤに至り、
次の日子アボリに往き、二三彼處よりスルビに至れり。是はマクドニヤの一分の第一
の色にして、殖民地なり。我等は此の色に數日間留れり。安息の日に我等は邑の外

に河の邊なる常に祈禱する所に出で、坐して集れる婦に語りしに、
 一の婦名はリ
 ヤヤ、オアネラの邑の者にして、紫布の商人神を敬ぶ者は聴けり、主は其心を啓きて、
 パワルの陷る所に惚はしめたり。 彼其家族と共に洗を受けし後、我等に求めて曰
 へり、爾等若し我を親て主に忠なりせば、入りて我が家に居れ、遂に強ひて我等を留
 めたり。 一日我等が祈禱の所に適きし時、ト意の鬼に憑らる、一の婦我等に遇へ
 り、ト意を以て其主に多くの利を得しめたる者なり。 彼はパワル及び我等に従ひ
 て呼びて曰へり、此の人人は至上なる神の諸僕にして、我等に救の道を傳ふる者なり。
 一八の日久し之を行ひしに、パワル遂に之を厭ひ、顧みて鬼に謂へり、我オイススハリ
 ストスの名を以て爾に彼より出づるを命ず。鬼忽ち出でたり。 婢の主は其利の望
 の空しくなりたるを見て、パワルとシラミを執へて、市に有司等の前に曳けり。 二〇の既
 に上官に曳き來りて曰へり、此の人人はイウテヤ人にして、我等の邑を擾し、 二一の我等
 ロマ人に受くべからず行ふべからざる例を傳ふ。 二三の民も亦齊しく起ちて、我等を攻
 め、上官は彼等の衣を覗き、命じて彼等を杖うたしめたり。 二三の多く杖うちて後獄に下

し獄吏に聞く彼等を守らんことを命ぜり。二四 獄吏是くの如き命を受けて彼等を内
獄に下し其足に楯を加へたり。二五 夜半の頃、パワル及びシラ所請して神を讃誦せ
り囚者之を開けり。二六 俄に大なる地震ありて獄の基動き諸門皆忽啓け各人の械
は解けたり。二七 獄吏醒めて獄の諸門の啓けたるを見て囚者逃げたりと忽ひ刀を抜
きて自殺せんと欲せり。二八 然れどもパワル大なる聲を以て呼びて曰へり自ら我ふ
勿れ蓋我等皆此に在り。二九 彼火を求めて躍り入り戦きてパワル及びシラの前に俯
伏し。三〇 彼等を外に導き出して曰へり君よ我何を爲して救を得べきか。三一 彼等曰
へり主イエスハリストスを信ぜよ然らば爾及び爾の全家救を得ん。三二 乃主の
言を彼及び凡そ其家に在る者に傳へたり。三三 彼は夜の時時に彼等を取りて其傷を
濯ひ直に自ら其家族と洗を受けたり。三四 遂に彼等を引きて己の家に入れ食膳を
具へ全家と偕に神を信ぜし事を喜べり。三五 明くるに及びて上官は吏役を遣して曰
へり彼の人人を釋せ。三六 獄吏は此の言をパワルに告げて曰へり上官使して爾等
を釋す故に今出でて安然として往け。三七 然れどもパワルは彼等に謂へり我等羅馬

人たる者ものを罪つみを定めずして、公おおほけに打ちて、獄ごくに下くだせり、而しかうして今私いまひそかに我等われらを出いだす可べからず、乃すなはち自ら來きたりて、我等われらを引ひき出いだすべし。三八しやうやくこ 吏役しやく此この書きを上あ官くわんに告つげたれば、上官じやうくわん其そのローマ人じんなるを聞ききて懼おそれ、三九さんじゅう 來きたりて、彼等かれらに謝しやし之これを引ひき出いだして、邑まちより出いづるを請こへり。四〇しやうやく 彼等かれら獄ごくを出いでて、リヤヤの家いへに來きたり、兄弟けいていを見みて之これを驚おどへて去されり。

四一しやうやく 彼等かれらアムスボリ及びアボロニヤを経て、フサロニカに來きたれり、此處こゝにイウテヤ人の會堂くわいどうあり。ニパマル常つねの如ごとく彼等かれらの中うちに入りて、三たびの安息日あんしじつに、聖書せいしよに本もとづきて、彼等かれらと辯論べんろんして、三九さんじゅう ハリストスはは苦くるしみを受け、死しより復活ふくわつすべく、又また我が爾等なんぢらに傳つたふる所ところのイイススは、即すなはちハリストスはなりと解こきて、之これを證しやうせり。四二しやうやく 彼等かれらの中うちの數人たふじん信しんじて、パマル及びシラしに從したがへり、又また敬虔けいけんなるエリシ人じん甚おほくあり、賣うき婦めも少すくからざりき。四三しやうやく 然しかれども信しんびざるイウテヤ人じんは、妬ねたみて、市いちの匪類ゐるいを集あつめて、罰ばつを成なし、邑まちを亂みだし、イアソンの家いへに逼せまりて、彼等かれらを民たみの前に曳ひき出いださんと欲ほつしたれども、彼等かれらに遇あはずして、イアソン及び數兄弟あまなを邑まちに曳ひきて呼よべり、彼の天下てんかを亂みだし、者ものは此こゝにも來きたれり、セ、イアソンは彼等かれらを接あうたり、彼等かれら皆みなケサリの命いのちに逼せまひて、他の王わうイイススありと

言ふ。八十はこれ乃之を聞く民及び邑宰の心を動かせり。然れども彼等はイアツシ及び其餘の者より保護を取りて之を釋せり。兄弟直に夜に乘じて、バウル及びシラをムリヤに往かしめたり。彼等彼處に來りて、イウテヤの會堂に入れり。此の處の人人はスサロニカに在る者より善良にして、熱切に言を受け、日日聖書に就きて是れ果して此くの如きかき究めたり。故に其中の多くの者は信ぜり又クリシンの費き婦及び男も少からざりき。然れどもスサロニカのイウテヤ人は神の言のバウルに由りて、ムリヤにも傳へられしを知りて、彼處にも來り、民を動かして之を擧せり。其時兄弟直にバウルを海の方に適かしめたり、シラ及びアモスイは尙彼處に留れり。一五バウルを送りし者は彼を擧げてアネニ至り而して其シラ及びアモスイに遠に彼に來るべしとの命を受けて返れり。一六バウルはアネニ在りて、彼等を待てる時此の邑に偶像の滿ちたるを見て、其心傷みたり。故に會堂に於て、イウテヤ人及び敬虔の者又毎日市に於て遇ふ所の者と辯論せり。一七「エビクリアシ」及び「ストイク」の理學者數人彼と爭論せり。或者曰へり此の聖明者は何を言はんぞ欲する

か。他の者曰へり、彼は他邦の鬼神を傳ふる者の如し。蓋しパウロは彼等に「イスス及び復活を福音せり。一九」途に彼を取り、「アレサバケ」に引き至りて曰へり、爾が語る所の新しき教の何なるを、我等知るを得べきや。二〇「蓋し爾は奇怪の事を我が耳に入る、故に我等は其何事なるかを知らんと欲す。二一」蓋し凡の「アス」人及び彼處に居る旅人は、他の務に違あらずして、惟新しき事を言ひ、或は聽くのみ。二三「パウロ」アレサバケ」の中に立ちて曰へり、アス二人よ、我觀るに、爾等皆甚敬虔なるに似たり。二四「蓋し」我行きて、爾等の禮拜する所を巡り觀る時、一の壇にも過へり、番して獻らざる神に獻す。二五「斯の」爾等が識らずして敬ふ者は、我之を爾等に傳ふ。二六「世界及び其中の」萬有を造りし神は、天地の主にして、手にて造られたる殿に居らず。二七「又」諸むる所ある者の如くに、人の手の奉事を要せず、自ら生命を呼吸と萬物を以て衆に與ふ。二八「彼は一の」血より、悉くの人類を造りて之を地の全面に居らしめ、其預期の時、其住居の界を定めたり。二九「彼等皆」神を拜れん爲なり、或は彼を擯り、彼を得ん。然れども、彼は我等各人に遠からざるなり。三〇「蓋し」我等は彼に頼りて生き、且助き、且存す。爾

等の詩人も言へるあるが如し云く我等は其族なり。既に我等神の族たらば神
體を以て金若しくは銀若しくは石人の工と機巧に由りて殊みたる者に似たりと意ふ
べからず。故に神は蒙昧の時を問はずして今は悉くの人に何處に於ても悔改す
るを命す。蓋彼日に日を定め其立てし所の人を以て義に由りて全地を審判せん。
衆に之を信すべき証を與へて彼を死より復活せしめたり。死者の復活の事を知
きて或者は嘲り他の者は曰へり此の事復甦に聽かん。是に於てパウロ彼等の中
より出でたり。然れども或者は彼に附きて信ぜり其中に云ナニシイアレンタバギ
ト及びタマリと名づくる婦あり又他の者は彼等と信にせり。

新の後パウロアスニを離れてコリントに來れり。ニポントに生れし一
のイウテヤ人名はアキラヘクラカガイ悉くのイウテヤ人にロマを離るゝを命ぜし
に因りて近ごろイタリヤより來りし者及び其妻プリスキラに遇ひて彼等に就き
其衆の同じきを以て彼等と信に居りて工を作せり蓋彼等は幕を裂るを樂ませし者
なり。安息日毎に彼會堂に於て辯論しイウテヤ人とコリント人を勧めたり。五シラ

及びテモズイガマケドニヤより來りし時、パウロ心甚切迫して、イウテヤ人にイイススのハリストスたるを證せり。然れども彼等敵し且詰りたれば、パウロ衣を拂ひて、彼等に闘へり、爾等の血は爾等の首に歸せん、我は尤なし、今より異邦民に往く。乃、彼處を去りて、神を敬ふ一人イウストと名づくる者の家に来れり、其家は會堂に鄰れり。ハ、會堂の宰クリスプ、其全家と偕に、主を信じたり、又コリント人の中多くの者聞きて信じ及び洗を受けたり。主は夜間異象の中にパウロに闘へり、懼る勿れ、語りて、黙す勿れ、一、我爾と偕にし、人爾に書を爲さざらん、我に此の邑に多くの民あればなり。二、彼は彼處に居ること一年六月にして、彼等に神の言を教へたり。三、ガリチンがアハイヤの方伯たる時、イウテヤ人心を合せて、パウロを攻め、彼を曳きて、審判座の前に來りて、一、曰へり、彼は人人に律法に違ひて神を敬ふことを勤む。二、パウロが口を啓かんとする時、ガリチンはイウテヤ人に闘へり、イウテヤ人よ、若し不義或は奸惡の事ならば、我爾等に聽く理あり。三、然れども若し言詔及び名字及び爾等の律法に關する論ならば、爾等自ら之を理めよ、我は斯る事の審官たるを欲せず。

一六 乃 彼等を密刑座の前より逐へり。衆 若し人々は會堂の密刑座を執へて之を密刑座の前に拵てり、ガリサンは更に此の事を爲さざりき。一八 彼等も彼等にせり、ケンフレイに在りて彼等を斬れり、誓願ありし故なり。一九 エズスに至りて二人を彼處に留め、自ら會堂に入りて、イウテヤ人と辯論せり。二〇 彼等は之に久しく偕に居らんことを請ひたれども、肯はずして、彼等に別を告げて曰へり、我は還つぐる節筈を、必しイエルサリムに守るべし、若し辨欲せば、復爾等に返らん、乃舟に乗りてエズスを去れり。(アキラ及ビプリスキラはエズスに留れり。) 二三 ケサリヤに着きて、彼イエルサリムに上り、教會に安を問ひて後、アンカセヤに下れり。二四 暫く此處に留りて後、出て、次を逐ひて、ガラサヤ及ビフリギヤの地を経て、衆門徒を堅めたり。二五 アレキサンドリヤに生れしイウテヤ人、アボロスと名づくる人、辯才あり、且聖書に達したる者は、エズスに來れり。二六 此の人は主の道の端緒を聞き、心熱して、主の事を詳に言ひ、且歸へたり、然れども、惟しイオアンの洗禮を知れるのみ。二七 彼

會堂に於て殺然として都れり。アキラ及びプリスキラは聞きて後彼を延きて尙詳に彼に主の道を説き明せり。ニセカレアハイヤに往かんことを欲せし時兄弟は門徒に書を送りて彼を接けんことを勧めたり。彼は彼處に來りて恩寵に頼りて信ぜし者を多く助けたり。ニハリスとスたるを辨明せり。

第二十章

一 アボロスのコリンフに居る時マウル上地を経てエラスに來り或門徒等に遇ひて、ニ之に謂へり爾等は信ぜし後聖神を受けしか。彼等曰へり我等は聖神の有ることをだに聞かざりき。彼曰へり然らば爾等は何に因りて洗を受けしか。彼等曰へり、イオアンの洗禮に因りてなり。マウル曰へり、イオアンは悔改の洗を授けて人に彼に後れて來る者、即ハリストスイイススを信すべきことを言へり。彼等之を聞きて、主イイススの名に因りて洗を受けたり。マウルが彼等に手を按ずるに追ひて、聖神彼等に降り、彼等異方の言を言ひ且預言せり。其數約十二人なりき。ハウル會堂に入りて殺然として言ひ、三月間神の國の事を論じ且勧めたり。然れども

或人剛愎にして信ぜず、主の道を民の前に低りしに因りて、彼は之を離れ門徒を
 別けて、日日ヲランシ云ふ者の學校に辯論せり。一、是くの如きこと二年にして、ア
 ヲに居る者、イウテヤ人、エリン人に論なく、皆主イエスの言を聞くに至れり。一、
 はパウルの手を以て、希有の異能を行ひ、其身より手巾、或は襦衣を取りて、病者
 に加ふれば、病退き、悪鬼出づるに至れり。一、イウテヤ人の中の巡りて、醫成を爲す
 或者も、悪鬼に憑らるゝ者に對して、主イエスの名を用ゐる事、爲れり、曰く、パウ
 ルが傳ふる所のイエスを、以て爾に醫はしむ。一、或イウテヤの司祭長、スツラミ云
 ふ者の七人の子は、是を行へり。一、然れども、悪鬼答へて曰へり、我イエスを、知り亦
 パウルを、識れり、惟爾等は、識ぞ。一、乃、悪鬼に憑らるゝ人、躍り攻めて、之に勝ち、之を
 服し、彼等裸にし、傷つけられて、其家より逃ぐるに至れり。一、是の事、エスに居る凡
 てのイウテヤ人及びエリン人に知られたれば、彼等、皆懼を懐き、主イエスの名に
 崇められたり。一、信ぜし者多く來りて、其期を認め、行ひし事を、訴へたり。一、邪術を
 行ひし多くの者は、其書を集めて、衆人の前に焚けり、其價を合せて、銀五萬なるを、知れ

リ。二〇 主の言は盛に長じて力を獲たること此くの如し。二一 是等の事既に成りて、
ワムはマケドニヤ及びアハイヤを経て、イエルサリムに往かんことを意に定めて曰
へり、我彼處に往きて後、ロマをも觀るべし。二二 乃彼に事ふる者の中、モス、イ及び
モラズトの二人をマケドニヤに遣して自ら暫くアシヤに留れり。二三 其時主の道に
對して騒動大に起れり。二四 蓋一の銀工名は、テミトリイアルテマダの銀の商
を作りて、工人に少からざる業を得しめし者は、二五 彼等及び他の同業の職工を
集めて曰へり、友よ、我等が此の業に頼りて利を獲るは、爾等の知る所なり。二六 亦此の
バワルが人の手にて作れる者は、神に非ずと言ひて、第エムスのみならず、幾ど全アシ
ヤに於て多くの民を勤めて惑はしむるは、爾等が見る所聞く所なり。二七 是れ唯我
等の業の輕んぜられん危あるのみならず、即大なる女神アルテミダの殿も、
にせられ、アシヤ及び全地の琛む者の威嚴は滅されん。二八 彼等此を聞きて、烈しく怒
りて呼びて曰へり、大なる哉エムス人のアルテミダよ。二九 邑擧りて大に騒ぎ、バワル
の同行者マケドニヤの人ガイ及びアリスタルフを執へて、心を合せて劇場に擁し入

れり。三〇 巴アル民の中に入らんと欲せしに門徒之を許さざりき。 又アシヤの上
官の中に彼と親しき者等ありて、人を彼に遺して、自ら劇場に投ぜざらんことを勸
めたり。 三二 時に或人は此の事を曉び或人は彼の事を曉べり、蓋會衆亂れて大半
は何の爲に集れるかを知らざりき。 三三 イウテヤ人の勅に由りて、民の中よりアレキ
サンドルは呼び出されたり。アレキサンドル手を揃かして、民に言はんと欲せしが、
其イウテヤ人たるを知りて皆聲を同じくして約二時間呼びて曰へり、大なる故エ
スス人のアルテミダよ。 三四 邑の書記官は民を撫めて曰へり、エススの人人よ、何人が
エススの邑が大なる女神アルテミダ及びテラペトの奉事者たるを知らざらん。 三五
此の事既に駁す能はざれば、爾等墳になりて、輿率に事を行ふ可からず。 三六 爾等は
此の人人を曳き来れり、然れども彼等は未だ曾て殿の物を竊まず、爾等の女神を臨ら
ず。 三七 若しテラペトリイ及び彼等隣にする工人、人を訟ふるこそあらば、裁判所あり
方伯あり互に訟ふ可し。 三八 若し他の事に就きて求むる所あらば、法に合ふ會に於て
之を鑑定せられん。 三九 蓋我等は今日行はれし事に就きて騷亂の爲に即せらる

あり。戻あり此の紛れたる衆を解くべき辭もなければなり。言ひ畢りて會を散じたり。

第三十章

一 亂の増まりし後、パウロ門徒を召して之を教訓し之に別を告げ出で、

マクドニヤに往けり。其路地を経て多くの言を以て信者を教訓して、ネラダに來れり。三月にして、シリヤに航らんを欲せし時、イウテヤ人彼を害せんを謀りたれば、マクドニヤを過ぎて反らんを定めたり。彼を送りてアシヤに至りし者は、ピルの子マリヤの人ソシメトル、スサロニカの人アリスタルフ及びセクンド、デルマヤの人ガイ及びモスイア、シヤの人カヒク及びトロスマなり。此の家は先づ往きて我等をトロアダに俟てり。我等は除節の後に、ネラビより舟行し五日にして彼等にトロアダに至り、七日間其處に留れり。七日の首の日門徒が餅を擧ぐ爲に集りし時、パウロ次の日に行かんを欲して、彼等に請談し言を擧げて夜半に至れり。ハ我等の集れる機に多くの燈ありき。パウロの長く請談する時一の少年名はエウテフ、廊の上に坐して熟睡し睡に困りて、身傾きて三層樓より下に墜ちたり之を扶くれ

ば已に死せり。一〇 ペワル 下りて其上に伏し彼を抱きて曰へり悦つる勿れ、蓋其靈は猶其中に存せり。一一 また のは復上りて餅を擧きて食ひ、飽ること久しくして夜の明くるに至り、遂に行けり。一二 かれら 少年を攜へ、其生くるを見て、甚慰めたり。一三 われら 舟に乗り先だちてアリンに往けり、彼處に於てペワル を接けん爲なり、蓋彼自ら歩行せんことを欲して、斯く我等に命じたり。一四 かれ アリンに於て我等に會ひたれば、我等彼を接けて、ミオリナに來れり。一五 かれ 彼處より舟を出して、次の日ホサス の對面に至り、又次の日サモスに着き、トロギリヤ に泊りて、明日ミリト に至れり。一六 かれ ペワル は舟行して、エヌを過ぎんと定めたり、アシャに久しく留らざらん爲なり、彼能すべくば、五旬節の日、イエエルサリム に在らんと欲したればなり。一七 かれ 彼はミリト よりエヌ に人を遣して、教會の長老等を召したり。一八 かれら 彼等が來りし時之に餅へり、爾等は我がアシャに來りし初の日より、恒に爾等と偕にせしことの如何を知れり。一九 われ は謙遜を竭し、多くの涙を流して、イサテヤ 人の惡謀に由りて我に及びし艱難の中に、主に事へ、二〇 お 凡そ益ある所は、一も漏さずして、爾等に宣べ、衆人の前にも衆家にも教へて、二一 イサテ

ヤ人及びユリヤン人に、神の前に悔改して、我が主イエスマスハリストスを信すべきを勧めたり。
 二三 今觀よ、我神に縛られて、イエエルサリムに往く彼に於て若何なる事に遇はんと知らず。
 二四 惟聖神色毎に證して、練練と患難とは我を俟つと云ふ。
 二五 然れども我之を意き爲さず、又我が生命を費しませず、但願はくは祈びて、我が行く程及び主イエスマスより受けし職、即神の恩寵の福音を證することを盡さん。
 二六 今觀よ、我知る、爾等我が案巡りて神の國を傳へし所の者は、皆復我が面を覩ざらん。
 二七 故に我今日爾等に證す、我は衆の血に與るなし。
 二八 蓋我は神の旨を滿さずして、悉く爾等に傳へたり。
 二九 故に爾等自ら慎み、亦全群を愼め、乃聖神爾等を其中に立て、監督を爲し、主神が己の血を以て獲たる教會を牧せしむ。
 三〇 蓋我知る、我が去りし後、殘忍なる狼群を惜まざる者は、爾等の中に入らん。
 三一 爾等の中より、人人起りて門徒を誘ひ、己に従はしめん爲に、理に悖る事を語らん。
 三二 故に徹醒して、我が三年間晝夜斷せず、涙を以て爾等各人を導へしを憶へ。
 三三 兄弟よ、今我爾等を神及び其恩寵の首、爾等を建て、爾等に凡の聖せられし者の中に、鬪衆を與ふるを能する者に託す。
 三四 人の金銀

衣服は、我未だ之を食らざりき。用等自ら知る此の我が手は我及び我を借に在りし者の需に供せしを。凡の事に於て我附等に斯く勞して柔弱者を扶け、且主イイススの言を憶ふ可きを示せり、蓋彼自ら云へり、興ふるは受くるよりも更に禍なりと。言ひ竟りて彼膝を屈めて家と借に結れり。彼等皆大に哭き、バアルの頸に俯して、彼に接吻し、其復我が面を眼ざらんと言ひし言に因りて、殊に憂ひたり。遂に彼を舟に送れり。

我等は彼等に別れて、舟行して、復にコスに至り、次の日ロドスに至り、彼よりバタリに過ぎ、ニスニキヤに濟るべき舟に遇ひて、之に登りて行けり。ニキブルを望み見て、之を左に追し、シリナに航り、アルに着けり、蓋舟は彼に於て載を卸すべかりしなり。我等門徒に遇ひて、此に居りしこと七日、彼等神に因りて、バアルにイエルサリムに上る勿らんことを言へり。七日を越えて、我等出で、往き、彼等其妻子と借に我等を送りて、色の外に至り、岸に在りて我等皆膝を屈めて結れり。互に別を告げて後、我等は舟に登り、彼等は家に歸れり。我等アルよりプロレマイダに航りて、舟

行を終へたり。彼處に兄弟に安を問ひて、一日輿に居りき。次の日、バワル及び我等、彼
と偕にせし者は出で、ケサリヤに來り、福音者スルブ、即七人の役事の一の家に入
りて、共に留れり。彼に四人の女あり、處女にして、預言する者なり。一、我等が多くの
日彼處に居る時、イサテヤより一の預言者ヤサフと名づくる者下り、一、我等に來り
て、バワルの帶を取り、己の手足を縛りて曰へり、聖神斯く云ふ、イサテヤ人はイエルサ
リムに於て此の帶の主を此くの如く縛りて、異邦人の手に付さん。二三、之を聞きて、
我等も此の地の者も彼にイエルサリムに上らざらんことを勧めたり。二三、然れども
バワル答へて曰へり、爾等胡爲れぞ哭きて我が心を描く、蓋我主イエスの名の爲
には、第に縛らるゝのみならず、イエルサリムに死するも亦甘ずる所なり。一、彼が我
等の勸を受けざるを見て、止みて曰へり、主の旨成るべし。一、此の日の後、我等旅裝し
て、イエルサリムに上れり。一、ケサリヤの門徒數人亦我等と偕に行きて、我等を一の
菴き門徒、キブルの人ムナソンの許に送り、我等を其家に寓らしめん爲なり。一、我
等がイエメサリムに至りし時、兄弟欣びて我等を接けたり。一、次の日、バワル我等と

僭にイアコフに詣り長老も皆來れり。一ル、バワル彼等の安を問ひて、一一辨が彼の職を以て異邦民の中に行ひし事を述べたり。二〇、彼等此を聞きて、神を讚榮し又彼に謂へり、兄弟、爾は僭せしイウテヤ人の幾萬なるを見る、皆律法に熱心なる者なり。二一、而して彼等は爾の事に付きて、爾は異邦の中に居る悉くのイウテヤ人に、モイセイに背くを致へて、其子に割禮を行ふ可からず、先祖の例に従ふ可からざることを言ふと聞きり。二三、然らば若何せん、蓋民は爾の來りしを聞きて、必、集らん。二四、我等が爾に言ふ所を爲せ、我等に醫願の者四人あり、二五、爾彼等を擡へて、之を僭に潔まれ代りて、其費を贖ひ、彼等に髮を剃るを得しめ、然らば皆爾に付きて聞きし事の虚しくして、爾自も仍律法を守れるを知らん。二六、僭せし異邦人に至りては、我等已に書を遺りて、彼等が此くの若き事を守らず、惟偶像に獻げし物と、血と、勒死したる物と、淫行とを戒む可きを定めたり。二七、是に於て、バワル彼の人人を擡へ、次の日、彼等と僭に潔まりて、殿に入り、潔の日の盛期、即彼等各人の爲に獻物を獻すべき時を告げたり。二七、七日の竟らんとする時、アシヤより來りしイウテヤ人、彼が殿に在るを見て、衆民を騒が

し、手を彼に措きて、二八五 呼べり、イスライリ人よ助けよ、此の人は四方に衆人に斯の民と律法と此の所に敵するを教ふ、且エリソン人を引きて殿に入れ、此の聖なる所を汚せり。二八六 蓋彼等は前にエスス人トロスムが彼を借に城に在るを見て、パワル彼を殿に引き入れたりと意へり。二八七 是に於て城穿りて躍ち、民は趨せ集り、パワルを執へて、殿の外に曳き出だせり、其門直に閉されたり。二八八 彼等が之を殺さんと謀れる時、イエルサリム舉りて亂れたりとの報隊の千夫長に至りたれば、二八九 彼直に兵卒と百夫長とを率ゑ越せて彼等に就き、彼等は千夫長と兵卒とを見て、パワルを拵つことを止めたり。二九〇 千夫長近づきて、パワルを取り、二の鐵索を以て繋がんことを命じ、其離たり。二九一 又何事を爲し、かを問へり。二九二 民の中或人は此の事を嘘ひ、或人は彼の事を嘘べり。千夫長は騷擾に因りて實情を知る能はずして、彼を曳きて兵營に入れんことを命ぜり。二九三 パワル階に在りし時、民の擁るに因りて、兵卒彼を負ふに至れり。二九四 盜多く、民は圍ひて彼を殺せと呼べり。二九五 兵營に入らんとする時、パワル千夫長に謂へり、我爾に言ふ所あり、之を言ふを得べきか。彼曰へり、爾アレサヤの言を知れるか。二九六 然

らば爾は彼のエギプト人は是より先に亂を作し四千人の賊を誅めて野に出でし者に非ずや。三元バズル曰へり我はイウテヤ人の産キリキヤの名邑の住民なり。踏ふ我に民に向ひて言ふを許せ。彼許したればバズル踏に立ちて民に向ひて手を搖かし大に静黙するに及びてエウレいの言を以て語りて言へり。

第三章

兄弟及び路父よ。踏ふ我が今爾等の前に自ら厥ふる所を認け。彼

等は其エウレいの言を以て語るを聞きて愈靜まれり。バズル曰へり我はイウテヤ人にしてキリキヤのタルスに生れ此の城のガマリイルの足下に養はれ繼に先祖の律法を教へられ神の爲に熱心なること今日爾等衆の如く然り。我曾て死に至るまで斯の道を發遂して男女に論なく縛りて獄に解せり。司祭長及び衆長老の我が爲に證を爲すが如し蓋我は彼等より兄弟に遠る害を受けてバマスクに往けり。彼處に居る者を縛りてイエルサリムに曳き來りて刑を受けしめん爲なり。我往きてバマスクに近づける時約日中候天より大なる光ありて我を覆り照せり。我地に仆れて我に言ふ聲を聞けり曰くサウルサウル何ぞ我を發遂する。我對へて曰

へり、主よ、爾は誰たる。彼我に謂へり、我は爾が警逐するイエイススナブレイなり。我は
備に在りし者は光を見て懼れたり、然れども我に語る聲を聞かざりき。二〇我曰へり、
主よ、我何を爲すべきか。主は我に謂へり、起ちてダマスクに往け、彼に於て、凡そ爾の行
はん爲に定められし事を爾に告げられん。二一其光の輝に縁りて、我見るを得ざり
し故に、我は備に在りし者に手を援がれて、ダマスクに至れり。二三アナニヤと名づく
る者律法に備ひて敬虔なる人にして、凡そダマスクに居るイウテヤ人に稱せらるゝ
者は、二三我に來り、旁に立ちて、我に謂へり、兄弟サウルよ、見るを得よ、我即時に彼を仰
ぎ見たり。二四彼我に謂へり、我が先祖の神は爾が其旨を知り、義者を見、其口より聲を
聞かん爲に、爾め爾を選べり。二五爾は見し所聞きし所を彼の爲に、衆人の前に證
する者さ爲らん。二六今何ぞ緩うする起ちて、主イエイススの名を顧びて、洗を受け、爾の
罪を洗へ。二七我イエエルサリムに反りて、殿に歸る時、城外に遊びて、二八我は主の
我に謂ふを見たり、云く、急ぎて速にイエエルサリムより出でよ、蓋此には爾が我の爲に
する證を納れざらん。一九我曰へり、主よ、彼等知る、我嘗て爾を信する者を獄に入れ、且

諸會黨に打ち、又爾の匿者ステフンの血の流されし時、我彼處に立ちて之を殺すを可きし之を殺す者の衣を守りしを。二主は我に謂へり、往け、我爾を遠く異邦民に遣さん。二三彼等聽きて、此の言に至れり、是に於て聲を擧げて曰へり、此くの如き者を地より去れ、彼生く可からざればなり。二三彼等號び、衣を擧ち、塵を空中に揚ぐる時、千夫長はバアルを曳きて、兵營に入る、命を懸ちて之を訊すべしと言へり、何の故に彼に向ひて、斯く號べるを知らん爲なり。二三革帯を以てバアルを繋ぎし時、彼傍に立てる百夫長に謂へり、羅馬の人、且其罪を定めずして、懸つば可なるか。二六百夫長此を聞き、往きて、千夫長に告げて曰へり、爾の爲さんとする所を愼め、蓋此の人は、羅馬人なり。二七千夫長就きて、彼に謂へり、我に告げ、爾は羅馬人なるか。彼曰へり、然り。二八千夫長答へて曰へり、我多くの金を以て此の民籍を得たり。バアル曰へり、我は生ながらにして然り。二九是に於て彼を訊さんとする者直に退けり。千夫長は其羅馬人たるを知りて、彼を縛りしことを懼れたり。三〇明日、イリテヤ人が彼を訟ふる故を確に知らんことを欲して、其縛を解き、司祭諸長と全公會とに集らんことを命じ、バ

ワルを燃へ出で、彼等の前に立たしめたり。

一 パウル公會に目を注ぎて曰へり、兄弟よ、我良心を盡し、神の前に生
を度りて、今日に至れり。二 司祭長アナニヤは側かたはらに立てる者に命じて、其口を撃たしめ
たり。三 其時パウル彼に附へり、紛争の壁かべよ、神は爾を撃たん、爾は法に依りて我を審か
ん爲に坐するに、法に違ひて我を撃つを命ず。四 側かたはらに立てる者曰へり、爾神の司祭長
を語るか。五 パウル曰へり、兄弟よ、我其司祭長たるを知らざりき、益縁けだしせるあり、爾の民
の有司を辨る勿れき。六 パウル其半はサドカイ等半はフリセイ等なるを知りて、會中
に呼びて曰へり、兄弟よ、我はフリセイにして、フリセイの子なり、死者の復活を認むに
因りて、我今審を受く。七 彼が此を言ひし後、サドカイ等も神もなしと言ひ、フリセ
リて、會衆相分れたり。八 蓋サドカイ等は復活なく、天使も神もなしと言ひ、フリセ
イ等は皆之れ有りと認む。九 遂に大なる競起れり、フリセイ黨の學士等起ちて、争ひて
曰へり、我等此の人に、一も恐あるを見ず。若し神或は天使の彼に言ひしことあらば、我
等神に敵す可からざるなり。一〇 争益劇はげしきに因りて、千夫長はパウルが彼等に

裂かれんことを恐れて、兵卒に命じて下りて彼を其中より奪ひ兵營に引き入れしめたり。二 次の夜、主は彼に現れて曰へり、バワルよ、勇め、蓋爾、我の事をイエエルサリムに隠せし如く、是くの如くロバにも隠すべし。三 且に及びて、或イウテヤ人は、我等を結び、共に醫ひて、バワルを殺すに至るまで食はず飲まずと曰へり。四 此の醫を爲し、者は四十人餘なり。五 彼等は司祭諸長及び長老等に就きて曰へり、我等はバワルを殺すに至るまで何を食はず醫を發せり。六 故に爾等今、公會と與に彼の事を尙詳に訊さんと欲する状を爲して、千夫長に告げて、明日彼を爾等の前に引き下らしめよ、我等は其未だ近づかさる前に彼を殺す備を爲せり。七 巴ワルの姉妹の子此の陰謀を聞き、來り兵營に入りて、バワルに告げたり。八 巴ワル一の百夫長を呼びて曰へり、此の少者を千夫長に擧へ、往け、此の者彼に告ぐべき事あればなり。九 彼は之を擧へて、千夫長に至りて曰へり、囚者バワル、我を呼びて、此の少者を爾に擧へ、往かんことを請へり、彼爾に言ふべき事あり。一〇 千夫長其手を授きて、僻處に退きて問へり、爾は我に何の告ぐる所あるか。一一 彼曰へり、イウテヤ人は尙、詳にバワルの事を

問はんと欲する状を爲して、甬に明日彼を公會の前に引き下さんことを請はんと相約せり。二 甬彼等に従ふ勿れ、盜其中の四十人餘は、陰に彼を謀りて彼を殺すに至るまで食はず飲まずと誓へり、今彼等備を爲して甬の許を俟つ。三 千夫長は少者を戒めて甬斯の事を我に告げたりと、何人にも語る勿れと言ひて之を去らしめたり。四 乃百夫長二人を召して曰へり、兵卒二百人騎兵七十人、賊を持つ者二百人を備へよ。今夜第三時よりクサリヤに往かん爲なり。五 又者を備へよ、バワルを衆せて方伯スリクスに送らん爲なり。六 且書を致せり左の如し、七 クラサヲイリシヤは尊憲なる方伯スリクスの安を問ふ。八 此の人イウテヤ人に執れば、將ニ殺されんとせしを我其羅馬人たるを知りて、兵卒を率ゐ越きて之を拯ひたり。九 彼等が之を訟ふる故を知らんことを欲して、之を引きて、其公會に至りしに、十 彼が訟へらるゝは、惟彼等の律法の論究に因るのみにして、十一 死或は縲纒に當る罪あるを見ざりき。十二 然れどもイウテヤ人が此の人を害せんことを謀ることの我に示されしに因りて、我直に彼を甬に送り訟ふる者にも、甬の前に彼を訟へんことを命じたり。願はくは平安なれ。十三 是に

於て兵卒は命に遊び、パワルを取りて夜アンネマトリダに引き至れり。三、明日騎兵をして之を送らしめ、其餘は兵營に歸れり。三、騎兵はクサリヤに來り、吾を方伯に呈して、パワルを其前に立てたり。四、方伯吾を讀み、擧りて彼が何の經に屬するかを問ひ、其キリヤヤの人たるを知りて、五、曰へり、爾を訟ふる者の來らん時、我爾に聽かん、乃命じて彼をイロドの公廟に守らしめたり。

第二十四章

一、五日の後、司祭長アナニヤは長老等及び一の辯士タルトルと與に

下りて、パワルを方伯に訟へたり。二、パワルが召されし時、タルトル訟へて曰へり、三、尊嚴なるスリクスよ、我等が爾に由りて太平を獲、且此の民が爾の賢慮に藉りて善く治めらるゝことは、我等時に隨ひ、處に隨ひ、感謝に堪へずして、之を承け、認む。然れども我多く爾を煩はさずして、爾の寛宥を以て、我等の片言を聽かんを求む。四、我等は此の人を見て、疫病の如き者、天下に居る悉くのイッテヤ人の中に、亂を作す者、ナザレトの異端の首たる者、殿を汚すことをも、試みし者と爲して、彼を執へ、我が律法に依りて審かんことを欲せり。然れども、千夫長リシヤ來りて、甚しく強ひて、彼を我等の手より奪

ひて、爾に遺し、我等彼を認ふる者にも爾に往くを命ぜり。爾自ら彼を訊さば我等が彼を認ふる諸端を知るを得ん。九 イウテヤ人も之を確めて、此等の事誠に然り云へり。一〇 方伯首を以て示して、マツルに言はしめられたれば、彼答へて曰へり、我等が多年此の民に公義の審判者たるを知れるが故に更に喜びて我が事情を辯せん。一二 爾知るを得べし、我禮拜の爲にイエルサリムに上りしより十二日を論ぜず、一三 而して我等は我が殿に於ても會堂に於ても城に於ても人と爭論し、或は民を亂すを見ざりき。一四 亦今我を認ふる事を確證するを得ず。一五 我惟此の事を爾の前に承け認め、即我は彼等が異端と名づくる道に徧ひて、我が先祖の神に事へ、凡そ律法と諸預言者とに録されし事を信じ、一六 神に頼りて我及び不義なる死者の復活のあらんことを認む。彼等も亦認む所の如し。一七 故に我自らも勵みて、恒に神の前及び人の前に貴なき真心を保たんことを勉む。一八 多年を歴て後、我は施濟を我が民に爲し、又禮物を獻じん爲に來れり。一九 之を行ふ際、我已に潔まりて民と僭に在らず、騷擾の中に在らざる者を殿に見たる人あり。二〇 此れ即アシヤより來りし鼓イウテヤ人なり、彼等若し

我に對して言ふべきことあらば今爾の前に在りて我を訟ふべかりじなり。二〇抑
茲に在る者は、我が公會の前に立てる時、我に何の不義あるを見しかば之を言ふべし。二
一或は此の一言が即我は彼等の中に立ちて呼びて、我死者の復活の教の爲に今日爾
等より審を受くこと曰ひしことなり。二二
スリクス聞き覺りて更に詳に斯の道を知
りて彼等の事を延ばして曰へり、千夫長リシヤの來らん時、我爾等の訟を定めん。二三
是に於て百夫長に命じて、パワルを守らしめ、而して之を殺やかにし、其近親の何人に
も彼に事へ或は彼に來るを禁ぜざらしめたり。二四
數日の後、スリクスは其妻、イウテ
ヤの女ドルツラと與に來り、パワルを召して、其ハリストス、イイススを信する道を講
するを聽けり。二五
彼公義と節制と將來の審判とを講するに、スリクス漸く懼れて答
へて曰へり、今退け、我暇を得ば爾を召さん。二六
且彼はパワルが釋を得ん爲に、彼に金
を與へんことを望めり、故に屢之を召して共に歸れり。二七
然れども二年を越えて、州
ルチイスストはスリクスに代りて其職を承けたり。スリクス悦をイウテヤ人に得ん
と欲して、パワルを遣して、仍其罪を釋かさりき。

第二十五章 一 ストは任地に蒞みて三日の後、クサリヤよりイエルサリムに上
 れり。二 時に司祭長とイウテヤの房者とはパワルを彼に駈へ、且彼に勅めて、三 恩を賜
 ひて之をイエルサリムに召し出さんことを求めたり。猶に之を途に殺さん謀れる
 なり。四 然れどもスト答へて曰へり、パワルは護られてクサリヤに在り、我も速に彼處
 に赴かん。五 故に爾等の中の有能なる者我と偕に下りて、若し此の人に何の不義があ
 らば之を訟ふべし。六 彼等の中に居ること十日を過ぎずして、クサリヤに下り、明日審
 判座に坐し、命じて、パワルを引き至らしめたり。七 既に至れば、イエルサリムより下り
 しイウテヤ人環り立ちて、多くの重き罪をパワルに負はしめたり。八 其罪を擧ぐる
 能はざりき。九 彼辯じて曰へり、我はイウテヤの律法或は殿或はクサリに對して一も
 罪を犯し、事なし。一〇 ストはイウテヤ人の税を得んと欲して、パワルに答へて曰へ
 り、爾イエルサリムに上りて、彼處に此の事に付きて、我より審判を受けんことを望む
 か。一一 パワル曰へり、我はクサリの審判の堂に立つ、我此の處に於て審判を受けるは
 當然なり。我一もイウテヤ人に不義を爲し、ことなし。爾も善く知る所の如し。一二 蓋

若し我不義を爲して死に當る事を犯し、ならば我死を辭せず、然れども若し彼等が我を訟ふる所一も我に有らずば、誰も我を彼等に付す能はず。我ケサリに上告す。二三其時、ムストハ驛官と相隨りて答へて曰へり、爾ケサリに上告すと言へり、然らばケサリに往かん。一三、數日を越えて、アケルバ王及びワレニカはケサリヤに來りて、ムストの安を問へり。一四、彼處に居ること日久しきに因りて、ムストは、マワルの事を王に告げて曰へり、此にスリクスの遺し、一人の囚あり、一五、我イエルサリムに在りし時、司祭節長とイリテヤの長老等と之を訟へて、即ち定めんことを請へり。一六、我彼等に答へて曰へり、訟へらるゝ者が己を訟ふる者の面前に於て其訟ふる所を辨解すべき機を未だ得ざる先に、之を死に付すは、ローマ人の例に非ず。一七、故に彼等が此に來りし時、我暫くも延ばさずして、次の日審判座に坐し、命じて、其人を引き至らしめたり。一八、訟ふる者彼を執り立ちて、一も我が逆め料りし罪を擧げざりき。一九、彼等唯己の宗敎の事及び死せし一人のイエス、マワルか其生くさ云ふ者の事に付きて争論せり。二〇、我此くの若き疑問を決するに惑ひて、彼にイエルザリムに往きて、彼處に此の事の爲

に審判を受けんことを怒むがごとく曰へり。二一 然れどもメワルは留められてプクグストの審問を俟たんと欲せしに因りて我彼をケサリに遣すに至るまで護らんことを命じり。二三 アケルメはフストに請へり我も此の人に懸かんことを怒む。彼曰へり明日爾彼に聴かん。二三 明日アケルメ及びワレニカが大に威儀を設けて來り諸千夫長色の尊者と偕に審判堂に入りし時フストの命に因りてメワルは引き出されたり。二四 フスト曰へりアケルメ王及び凡そ我等と共に在る人と爾等が見る所の者は即イウテヤ人の大衆がイエルサリムにも此處にも我を解へて彼は是より生くべからずと呼びし者なり。二五 然れども我之を糺して其一も死に當る事を爲さざりしを知れり而して彼自らアウグストに上告すと言ひしに由りて彼を送らんことを定めたり。二六 我は彼に就きて君主に上書すべき實情を得ず故に彼を爾等特に爾アケルメ王の前に引き出せり豫審の後に我が上書すべき事を得ん爲なり。二七 蓋我は囚人を送りて其罪案を具へざるを理に合はずと意へり。

第二十六章

一 アケルメはメワルに請へり爾に己の爲に陳ぶるを許されたり。是

に於て、イエル手を伸べて辯じて曰へり、「アケルバ王よ、我がイリテヤ人に訟へられし事を、今日悉く爾の前に辨解するを得るは、我幸なりとす。殊に幸なるは、爾がイリテヤ人の盛くの例と争論の節端とを知るに因る。故に爾に求む、我に聽かんことを。始めて我が民の中にイエルサリムに送りたる我が生命は、我が幼より、イリテヤ人昔之を知る。彼等若し證を作さんと欲せば、素より我が嘗て我等の宗教の中に尤、嚴しき派に属ひ、アリセイとして生を度りしを知る。今も我が立ちて審判を受くるは、解より我が先祖に賜ひし許約の爲なり。是れ我が十二支派が日夜熱心に奉事して成就するを見ん、茲む所なり。アケルバ王よ、此の爲に我、イリテヤ人に訟へられたり。何ぞや、解が死者を復活せしむるを爾等信じ、聽しとするか。我も嘗て多方を以て、イイススナソレイの名に敵すべしと意へり。一〇、イエルサリムに於て我果して是を行へり、司祭師長より權を受けて、我多くの聖徒を獄に閉し、彼等の殺さるゝ時、我之を懇請し、一一、諸會堂に於て、爾等等を苦めて、強ひてイイススを毀らしめ、彼等に敵して甚しく狂ひ、外邑にまで彼等を廢迷せり。一二、是が爲に、司祭師長より

權と委任とを受けて、ダマスクに往く時、一三王よ、我正午途中に於て天より光あるを見たり、日の光より、一四耀きて、我及び共に行く者を環り照せり。我等密地に仆れ、我はエウレイの言を以て我に言ふ聲を聞けり、曰く、サウル、サウル、何ぞ我を容逐する。爾を踏むは難し。一五我曰へり、主よ、爾は誰たる。彼曰へり、我は爾が容逐するイエススなり。一六然れども起きて、爾の足にて立て、蓋我が特に爾に現れしは、爾を立て、役者と爲し、爾が見し事及び我が爾に示さんとする事の証者と爲さん爲なり。一七我爾をイウテヤ民及び異邦人より拯はん。今爾を彼等に遣して、一八其目を啓かしむ、彼等が暗より光に轉じ、サタナの權より神に歸し、我を信するに因りて、罪の赦及び聖せられし者と偕に榮を獲ん爲なりと。一九故にアゲルバ王よ、我天の顯現に逆はざりき。二〇乃先づダマスク及びイエルサリムの人に、次きてイウテヤの全地及び諸異邦人に、彼等が悔改し、且神に歸して、悔改に合ふ行を爲すべき事を傳へたり。二一此が爲にイウテヤ人我を殿に執へて、裂き殺さんと欲せり。二二然れども我は神より佑を蒙りて、今日に至るまで立ちて、小き者にも大なる者にも証を作し、諸預言者及びモイセイが

必成らんと言ひし事の外に、一も言ふ所なし。二五すなはち。即ハリストスは苦を受けし者の復活の始と爲りて、此の民及び異邦人に光を傳ふべかりしこと是なり。二四彼が斯く辯ずる時、エスト大なる聲を以て言へり、パウロよ、爾は狂へり、博學は爾を狂はしむ。二五彼曰へり、摩訶なるエストよ、我は狂へるに非ず、乃眞實にして正愆なる言を陳ぶるなり。二六我が毅然として踏るを聞く王は、此等の事を知る。蓋我は此等の一も彼に隠されしを信ぜず、此れ僻隅に行はれし事に非ざればなり。二七アガルバ王よ、爾は諸預言者を信ずるか、我爾が信ずるを知る。二八アガルバはパウロに謂へり、爾を勵めて「ハリストス、オア、ニン」たらしめざるこそ少しのみ。二九パウロ曰へり、神に誇らば、少しくも多くも爾のみならず、乃凡そ今日我に聽く者は、此の捕繋の外、我に同じき者も爲らん。三〇彼が此を言ひて、後王と方伯と、及及び共に坐する者は起ち、三十一退きて相語りて曰へり、此の人は一も死或は械繋に當る事を行はず。三二アガルバはエストに謂へり、此の人若しケサリに上告すと言はざりしならば、釋さるべき者なり。是を以て方伯は彼をケサリに送らんことを定めたり。

第三十章

我等已にイタリヤに航らんことを定められたれば、パウル及び他の或囚者等を、プツグストの隊の百夫長ユリイミ名づくる者に付せり。我等はプシヤの諸所を經んとするアドラミトの舟に登りて行けり。マケドニヤのヌサロニカの入アリスタルフ我等を借にせり。次の日シドンに着けり。ユリイミは替くパウルを待ひて、彼に親友に往きて、其愛顧を受くるを許せり。既に彼處を發し、風の逆ふに因りて、キブルに沿ひて過ぎ、キリキヤ及びバムスリヤに對へる海を渡りて、リキヤのミラに至れり。彼處に在りて、百夫長はイタリヤに往くアレキサンドリヤの舟に遇ひて、我等を之に乗せたり。多日の風舟の行くこと遅く、僅にクニドの對面に至り、風の逆ひて、我等を阻むに因りて、クリトの下を行きて、サルモンを經、僅に之を過ぎて、佳澳と名づくる處に至れり。其近傍にラセヤの邑あり。時を歴ること久しく、船の期も過ぎたれば、航海已に危険なるに因りて、パウル彼等を諒めて、二日ヘリ、人人よ、我等るに航海は困難にして、損害多からん。勇戦貨と舟とのみならず、我等の生命にも及ばん。一然れども、百夫長は舵師と舟長とを信ぜしむ。こゝに、パウルの言ふ所に過ぎたり。

二此の澳は冬を過すに便ならざれば、多くの者は彼處を離れて、或は能すべくば、三ニ
カに至りて、彼處に冬を過さんことを勸めたり、是れクリトの澳にして、西南と西北と
の風を避くる處なり。一三南風徐に吹きたれば、彼等志を得たりと意ひ、錨を擧げ
て、クリトに傍ひて行けり。一四然るに、幾ならずして、「エウロクリドン」と名づくる狂
風驟に起りて、之に逆へり。一五舟は風に勝へずして、駛き去られ、我等其瀾ふに任せ
り。一六クラウダと名づくる小島の下に駛せて、我等僅に小艇を收むるを得たり。一七
之を擧げて後多方を以て舟を擱りて、之を細り、且淺灘に乗り上げんことを恐れて、帆
を下して蕩へり。一八風の甚狂へるに因りて、次の日戦貨を棄て、一九三日に及び
て、我等手づから舟具を擱てり。二〇多日の間日も星も現れず、烈しき風息まざるに因
りて、我等の救はるゝ望竟に絶へたり。二一彼等久しく食はざるに因りて、バウル其中
に立ちて曰へり、人人よ、爾等曾て我に聽きて、クリトを離れずして、此の困難と損害と
を免るべかりしなり。二三今も我爾等に心を安んずるを勸む、蓋爾等の中一人し生命
を失はず、惟舟を失はん。二四蓋我が屬する所、我が奉事する所の神の使は、是の夜我に

現れて 二四 曰へり、パワルよ懼るゝ勿れ、用ケサリの前に立つべし、親よ神は爾を憐に航海する者を悉く爾に賜へり。故に人人よ心を安んぜよ、蓋我神を信ず、其我に語りし如く斯く成らん。我等必一の島に擲たるべし。第十四夜に至りて、我等アドリヤの海に飄はさるゝ時、約夜半に、舟人は海岸に近づく意へり。深を測りて、二十切を得たり、少しく進みて、又測りたれば、十五切を得たり。石のある處に擲たれんことを恐れて、舟尾より四の錨を投して、天の明くるを俟てり。舟人は舟より逃れんことを欲し、錨を舟首より投さんとする状を爲して、小艇を海に下ぐる時、二パワルは百夫長と兵卒とに謂へり、此の人人舟に留らざれば、爾等救はるゝ能はず。兵卒即小舟の索を断ちて、其墜つるに任せたり。天明けんとする時、パワル衆人に糧を取らんことを勸めて曰へり、爾等食はずして飢ゑて俟つこと、今日に十四日なり。故に我爾等に糧を取らんことを勸む、是れ爾等の救の助と爲らん、蓋爾等の一人にも鹽一糶だに首より限らざらん。言ひ竟りて、餅を取りて、衆人の前に神に感謝し、擧きて先づ食へり。是に於て衆人心を安んじて、亦糧を取れり。我等舟

に在りし者は共に二百七十六人なりき。既に食ひて飽き、海に棄て、舟を懸くせり。天明けて、其地を説らざりき、然れども一の海灣の登るべき岸あるを見て、能すべくば、彼處に舟を着けんを欲れり。乃、鐵を擧げ、舵の轆を懸へ、小き帆を掲げ、風に順ひ、岸を望みて進めり。二水の交り流るゝ處に至りて、舟を洲に乗り上げ、舟首は膠く着きて、動かす舟尾は浪の勁きに困りて破れたり。兵卒は囚人を殺さんぞ欲れり、其潤ぎて逃るゝ者なからん爲なり。然れども百夫長は、バワルを救はんぞ欲して、其難る所を阻み、能く潤ぐ者に先づ水に投じて岸に登り、其餘の者に、或は板に乗り、或は舟の他物に藉らんことを命じたり、是くの如く皆救はれて岸に登れり。

第三十八回

一、バワルを借に在りし者は既に舟より救はれて、島のメリトと名づくるを知れり。土人は少からざる恵を以て我等を待へり、蓋雨ふり且寒きに困りて、彼等火を蒸きて、我等衆人を納れたり。バワルが多く、衆を集めて、火に置きし時、煖熱の爲に出で、其手に焼へり。土人は蛇の其手に懸るを見て、相語りて曰へり、此の

人は必殺人者ならん海より救はれたれども我は其生くるを容さず。然れども彼は蛇を火に拂ひて、毒も害を受けざりき。彼等は其腫れんか、或は怒介れて死なんか、さ俟ちたりしに、久しく俟ちたれども、彼に毒も害の及ばざるを見て、意を轉じて、彼は神なりと謂へり。此の處に近く島の長ブブレイと名づくる者の田地あり、彼は我等を接けて、三日間懇懇に待へり。ハブブレイの父熱と痲病とを患ひて臥したるに、パズル彼に入りて、觸り手を其上に按せて、彼を愈せり。是の事ありし後、島の中の他の病者も來りて醫さるゝを得たり。一〇すなはて、禮を優にして、我等を敬ひ別るゝに、隨みて醫むる所の者を贈れり。二三月の後、我等は此の島に冬を過し、「オチスクリ」と號するアレキサンドリヤの舟に乗りて發せり。二シラクワに着きて、三日間止り、一三彼處より續り行きて、リギヤに至り、一日を越えて、南風起りたれば、次の日ブテチリに至り、一四此に兄弟に遇ひ、其路に任せて七日間、彼等と偕に居り、遂にロマに往けり。一五彼處の兄弟は我等の事を聞きて、アピイの市及び三の旅館まで出で、我等を迎へたり。一六又ル彼等を見所に感謝して、心勇みたり。一七ロマに來りし時、百夫長は囚人等を將

軍に交せり然れどもバブルは之を守る一の兵卒を借に別に居るを許されたり。二七
三日を越えてバブルはイウテヤの諸長者を招けり彼等の集りし時之に謂へり兄弟
よ我は一も民或は先祖の例に倅る事を爲さざりしに、イエルサリムより囚を爲りて、
羅馬人の手に付されたり。一八彼等我を審べて一も死罪なきが故に我を釋さん欲
せり。一九惟イウテヤ人が之を拒みしに因りて我曰むを得ずしてケサリに上告す然
れども我が民を駈へん爲に非ず。二〇是の故に我爾等を見爾等と謂らんことを請へ
り蓋我はイブライリの望の爲に此の鐵索に繋がれたり。二一彼等之に謂へり我等は
爾の事に於てイウテヤより番を受くることもなく又來れる兄弟の中に爾の事を告
げ或は何の悪しき事を語る者もなかりき。二三然れども我等は爾が意ふ所の若何な
聞かん欲す蓋我等は何處に於ても此の宗派に就きて争論あるを知る。二三すなはち
を定めて多數の人彼に旅館に來れり彼は朝より暮に至るまで彼等に神の國の教を
宣べ、モイセイの律法及び諸預言者より証を引きて彼等にイイススを信するを勧め
たり。二四或者は其言ふ所を信じ、或者は信ぜざりき。二五互に相合はずして散する時

パワル一言を發して曰へり、聖神が預言者イサイヤを以て我が先祖に言ひし事は誠に善し。云く斯の民に往きて曰へ、爾等耳にて聽けども悟らず、目にて視れども見ざらん。蓋此の民の心は頑になれり、耳は聽くに儲く、目は自ら閉ぢたり、恐らくは目にて視、耳にて聞き、心にて悟り、轉じて我が彼等を醫さん。故に爾等知るべし、神の救は異邦人に遺されたり、彼等は則聽かん。彼が之を言ひし後、イサヤ人多く相論じて歸れり。パワルは滿二年自ら借りたる家に居り、凡そ彼に來る者を接け、毅然として妨なく、神の國を傳へ、主イエススハリストスの事を教へたり。